
不死騎

槇原勇一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不死騎

【Nコード】

N0774K

【作者名】

槇原勇一郎

【あらすじ】

十年前、ルワーズ公国を舞台に近隣二カ国が衝突した戦争が終結したのは、伝染性吸血病の流行が原因であった。両軍が撤退した後、公国には病が蔓延し、その状況は医学博士ヨアヒム・カイパーとその弟子たちの登場まで続いたのである。

ヤン・エッシャーは伝染性吸血病の病理を明らかにしたカイパー博士の愛弟子であり、患者である吸血鬼の掃討作戦の指揮を取った、ウィレム・ファン・バステン將軍の実弟であった。

ステーン湖畔のケテル村で診療所を営んでいたヤンは、国境地域における伝染性吸血病が原因と思われる集団失踪事件と、カイパー博士、兄弟子のマウリッツ・スタンジエの失踪を知る。兄からの依頼を受けたヤンは兄の部下である剣士シモン・コールハース共に、吸血鬼を使った大いなる陰謀に戦いを挑むこととなった。

誰もいない村

それはとても奇妙なことであった。

夜、とは言ってもまだそれほど遅くはない。外は暗闇であつても、家々の窓には明かりが漏れていていい時間であつた。にもかかわらず、村落はほとんど完全な闇に包まれている。厚い雲に覆われた空には月も星も見えてはいない。ただ、バタバタと耳障りな音を立てる無数の蝙蝠の目だけが怪しく光っていた。

村落は小さなものではあるが、それでも百数十名が暮らしている。十年前の戦争の頃には一帯が焼け野原になつたが、戻ってきた村人たちは、荒らされた畑を再び耕し、焼け落ちた家を建て直し、一から自分たちの生活を取り戻したのである。略奪された物資も、奪われた娘も、徴用されたり殺された若者たちも帰つてこなかつたが、それでも、自分たちの力で取り戻せるものは、すべて取り戻すことができた。

元々、さして自慢になるものもない、素朴な村人が住むだけの小さな村だつた。それは戦前も戦後もほとんど変わらない。しいて言うなら、戦乱の後、村の復興に一役買った、兵士の死体から剥ぎ取られた甲冑や武器が今でも若干残つていて、帰らぬ兵士の遺品を求めて遠方から訪ねてくる遺族がいるということぐらいしか、変わったことなどありはしない。

ただし、それもこの夜までのことだ。

カシヤツ・・・

カシヤツ・・・

カシヤツ・・・

一寸先も見えぬ暗闇の中で、古びた甲冑を着た者たちの歩く音が聞こえてくる。見ている者がいれば、苛立ちを覚えるぐらいゆっくりと、だが、機械のように正確に、全員が同じリズムで歩いている。行進ぐらいしか仕事がないと言われる、宮廷騎士団の騎士達であっても、これほどに整然とした行進を出来るものではないだろう。

ただし、この村には彼らのその行進を見物できる者は既に一人もいなかった。

兵士たちは全員が無言のまま、村の広場抜け、村の西側へ伸びる道を黙々と進み、去っていった。その後には、耳障りな蝙蝠たちの羽音も鳴き声も聞こえなくなり、吹き抜ける風の音だけが残っていた。

医者

「もう少しだけ、お酒は我慢できませんか？マルコさん・・・」

ヤン・エツシャーは困った顔をしながら、患者の口の中を覗き込んだ。

「先生や・・・酒が呑めなくなったら、わしなんて生きている意味もないよ・・・。戦でかみさんも息子も死んでしまったし、他にたいたした楽しみもないんだもの。後生だから酒だけは許しておくれよ・・・」

哀れな声を出している老人はまだ元気そうだった。ステーン湖で鱒漁をして生計を立てている。大して長生きなどしたくないといいながら、一番マメに通ってくる患者なのだ。

「マルコさん。何も一切呑むなんて言ってますんよ。でも、元気に鱒を取り続けて、好きなお酒を長く楽しむためには、量は少し抑えるように気をつけてください。できれば、五日に一日ぐらいは、呑まない日を作るようにしてください。それだけでずいぶん違うんですよ」

ヤンはそう言いながら、手早く処方箋を書いて、横にいる紅顔の医生に手渡した。ヤンは三十前、医生はまだ十代半ばだろう。若さと幼さの違いがわかる好対照である。紅顔の若者は、必要もないに小走りに部屋を出て行った。

「最近是一回漁にでるだけで、わんさか鱒がとれるもんじゃから、毎日出る必要もないんで、三日に一回漁に出る以外は暇なんじゃ。」

酒を呑むぐらいしか暇のつぶし方も知らんし……。なにやら対岸の連中がさっぱり漁に出てこないんじゃよ」

ステーン湖の対岸は外国である。ヤンやマルコの住むケテル村はルフーズ公国、その対岸はフリップ王国の領土である。ステーン湖の漁業権をめぐって何度か争いになったこともあるが、現在はさほど険悪になることはない。国同士はともかく住民にとってはただの隣人だった。

「はい。帰りにカスペルから薬を受け取ってください。ちゃんと飲んでくださいね。気をつけていれば、まだまだ何十年もお酒と美味しい食事が楽しめるんですから」

マルコと呼ばれた老人はしびしびと言った感じで、ヤンに薬を忘れずに飲むことと、できれば酒量減らすことを約束して帰っていった。

「カスペル！ 昼食にしよう！」

カルテを整理して、少し時間がたってからヤンは叫んだ。カスペルとは若い紅顔の医師の名前である。

「………？」

普段であれば、すぐに飛んで来るのに返事がない。ふと、耳を澄ますと、玄関先から話し声が聞こえた。誰か来客があったようだ。ヤンは玄関に向かった。

「ですから、次の診察は午後からになります。急患でもない限りお

通できません。」

カスペルにしては、ややいらだっている様子で少し声を荒げている。

「我々は診察をしてもらいに來たわけではない。エツシャー先生に重大なご相談があるのだ。診察が始まってはじっくり話すこともできないだろう・・・？」

「どうぞ中にお入りください。ちょうど昼食を取るところですので、よろしかったら御一緒にいかがですか？」

カスペルが話している相手は、初老で身なりのこぎれいな騎士と思しき人物である。なにやら身分の高そうだ。マントを止めているブローチをよく見れば、護国騎士団の紋章が付いていた。後ろには荷物を持った背の高い若い男が一人控えている。騎士の従者であろう。

「エツシャー先生でございますか。私は護国騎士団第三部隊長、カレル・パルケレンネと申します。突然の來訪、誠に恐れ入りますが、国公陛下直々の要件でございますれば御容赦いただきたい」

一町医者、それも若造に対して、慇懃すぎるようにも思われる態度だった。

カスペルはバツの悪そうな顔をしている。カスペルは元々貴族の家の生まれだが、そこを飛び出して、ヤンの診察所に転がり込んできたため、身分の高い人物を毛嫌いしているところがある。今は実家でもカスペルが医術の道を進むことを了承しているのだが、貴族嫌いの性分は変わっていない。

「なるほど。このようなところで立ち話もなんですし、お入りください。カスペル！食事を三人分用意してくれ！」

「いや、我々は結構。済ませておりますので」

「そうですね。私は午後からすぐに診察の予約がありますので、失礼ですが、食べながらにさせていただきます。カスペル！食事は一人分でいいからコーヒーを入れてくれ！」

騎士と従者はヤンに導かれて、屋敷の中に入っていた。

胸中、あまり良い予感はない。老騎士の深刻な表情を盗み見ながら、応接間に二人を案内した。「国公陛下直々」などと言われて、楽しい話などあったためしはないのだ。

行方不明

ヤンはできるだけガツガツしないように、しかし、少々急いで昼食を口に運んだ。忙しい中で食べるので、いつも軽めのメニューになる。ライ麦パン、チーズ、鱒の燻製、野菜の入ったスープ。毎朝近所のおかみさんが作ってくれたものを、カスペルが切り分けたり、温めなおしたりしたものだ。

カスペルは自室で食事を取っているが、ヤンは食べながら客の話を聞くことになった。

「あらためて名乗らせていただきます。私は護国騎士団第三部隊長、カレル・パルケレンネ、こちらは副隊長シモン・コールハースです。我が隊は目下のところ、ゼーラント州で発生した失踪事件の捜査を担当しております」

「・・・地方の事件の捜査は保安兵団の担当ではありませんか？」

ヤンはあわてて口に詰め込んだ食事を飲み込んでから、尋ねた。

戦争中は主力部隊として最前線で戦うのが護国騎士団の役割であるが、平時はまた別の任務を負っている。しかし、護国騎士団の担当は国を揺るがすような大規模な反乱を未然に防ぐことと、外国に関する情報の収集や工作活動である。国内の治安維持、犯罪捜査などは保安兵団の仕事だ。

騎士団は元々騎士階級以上の身分の者を中心に、五千人程度で編成され、千名程度の部隊に分かれている。対して兵団は主に平民の志願者によって編成されているが、1万人前後と騎士団の倍近い規模となる。保安兵団は公国全土に支部を持つ、国内でも最大の兵団で

ある。

「今回の事件につきましては、国家の存続に関わると言う判断から、我々が担当することとなりました」

「存続に関わる・・・穏やかではありませんね・・・」

「はい。穏やかではありません。そこで、エッシャー先生のご協力を仰ぎたいのです」

丁寧な物腰と言葉遣いが、話の深刻さを演出しているように思えた。ヤンには、わざわざ僻地まで犯罪捜査への協力要請に自分を訪ねてくるとすれば、理由は予想が付く。それは、確かに国家の存続に関わる話なのだ。協力を拒むことなどもとより不可能だが、それほどやる気を見せてやる気もしない。

「あの病がまた流行始めたと言うことですか・・・」

カレルと名乗る騎士の反応は意外なものだった。

「それがまだわからないのです」

「・・・どういう事ですか？わからないとは・・・」

「患者の目撃証言がないのです」

「それでは事件にもならないのでは・・・」

少しだけ、苛立ちながらも、口をつぐんだ。いちいち突っかかっていては話が進まない。まずは、十分に説明を聞くことにしなければ。

「順をおって説明させて頂きます」

そう行っただのはカレルではなく、シモンと紹介された副隊長の方だった。

「一ヶ月ほど前、ゼーラント州ドレンテ村の全住民数百名あまりが忽然と姿を消しました」

ゼーラント州はケテル村のあるドルテレヒト州の隣だが、ドレンテ村はドルテレヒト州の逆側の端にあり、陸路で直接フリップ王国に隣接する国境の村だ。ケテル村と違い、十年前の戦場と近かったこともあって、甚大な被害を受けたが、その後は村人の努力によって、どうにか戦前に近い水準まで復興したとヤンは聞いていた。

「たまたま通りかかったメディサラ国のキャラバンが不審に思い、州都ノールトの保安兵団支部に届け出たのです。生活の跡もそのままだ、すべての村人が忽然と消え去っていたとのことでした」

一息ついてからまた説明が続く。

「保安兵団はすぐさま調査官を派遣しましたが、まさしく人っ子一人いない状況だったとのこと。ただ、一つ一つの家屋を調べると、争った跡や納屋や物置に隠れた者がいた形跡があり、村人が全員が自らの意思で行方を絶つたとは考えられません。同時期に我々護国騎士団はステーン湖対岸、フリップ王国側での異変について調査を進めているところでした。フリップ王国領内の複数の村で同様に村人全員が忽然と姿を消すと言う事件が発生していたのです」

「つまり、ルワーズ公国とフリップ王国の国境地帯において、数百名単位の集団失踪事件が発生しているということですか・・・」

「既に二千名を越しております」

「ここに来られたと言うことは、わからないとおっしゃっても私の専門に関連することが原因と推測されているのだと思いますが、その根拠は？」

ヤン・エツシャーは若くして十年前の戦争末期に流行したある病の権威である。一般に知られてはいないが、片田舎の村で小さな診療所を営む境遇であっても、公国政府からの呼び出しが年に数回はある。だが、直接騎士団の隊長クラスが尋ねてくるといのは珍しい事態であった。いつもは軍隊ではなく医局から呼び出しがほとんどである。

「はつきりしたものではありません。ただ、最初の方に失踪事件があった村では、大量の蝙蝠の糞が発見されています。公国中央医局長の分析の結果、病原であるドルテレヒト蝙蝠のものであるという確証を得ております」

「マウリッツ・スタンジエの分析なら間違いないでしょうね」

「兄弟弟子でしたな。スタンジエ局長とは」

そう受けたのはカレルの方である。

「もう一つ、どういう関係があるかはわかっておりませんが、村の中にはまるで軍隊が行軍したかのような、整然と並んだ大量の足跡が発見されており。また、戦地であった地域の村々からは、戦没者遺品として保管されていた武器や鎧が大量になくなっておりました」

「確かに、よくわかりませんね。しかし、マウリッツが既に関わっているのならば、わざわざ私を訪ねてくる必要もないと思いますか？」

兄弟子であるマウリッツ・スタンジエとはしばらく会ってはいないが、ドルテレヒト蝙蝠を感染源とする病の専門家としては、自分にまったく劣るものではない。地位の高さから行っても、まず、彼が問題に対応するのが当然であった。

「スタンジエ局長は行方不明です」

「えっ……？」

「ドルテレヒト蝙蝠の糞を分析され、報告書を提出された直後から行方がわからないのです。スタンジエ局長だけではありません。ヨアヒム・カイパー博士の行方もわからないのです」

「博士まで……」

ヨアヒム・カイパーはルワーズ公国医学会の重鎮で、ヤンとマウリッツの師にあたる。変わり者で、戦後の大流行に際し、その対策に尽力した後、公国中央医局長への就任を依頼されたものの、一番弟子のマウリッツを推薦し、自分は公国首都アメルダムで一町医者として生計を立てながら、独自の研究にのめり込んでいた。

「しかし、マウリッツはともかく、カイパー博士が行方をくまらますことなど日常茶飯事です。マウリッツもまあ地位の重要性を考えれば無責任この上ないでしょうが、博士に無理やり研究につき合わされているのかもしれない」

「確かにそういうこともあるかもしれませんが。しかし、今は緊急ですので……」

ヤンは少し考えてからしぶしぶと言ったていで結論を出した。

「わかりました。とりあえず何が出来るかはわかりませんが、博士がマウリッツが現れるまではご協力させていただきます。中央医局からこの地域の代理の医師は派遣して頂けますね？」

「ありがとうございます。代理の医師は明日にも到着することになります。夕方にお迎えにあがります。詳しい状況の説明はアメルダムまでの移動中にお話いたします」

ヤンは近隣で唯一の正式な資格を持つ医師である。診療所はヤンが個人で営んでいるが、この地域全体の医療に責任を持つ立場にあり、中央医局からの支援も受けている。他の過疎地域では、居住する医師がいない場合、中央医局から若い医師が派遣されることになっているので、ヤンは中央医局の仕事を委託されていると言う形になる。自分が中央医局と関連した仕事で留守にするのなら、代理を派遣してくれるのが当たり前だった。

「ずいぶん急な話ですね。が、了解いたしました。・・・カスペルっ！」

隣室から医師が現れる。口元に食べかすが付いているのに自分で気付き、あわててハンカチで口元を拭いた。

「しばらく留守にする。アメルダムまで行くから、旅の支度を手伝ってくれ。代理の先生は明日中には到着するそうだから、いつもどおり患者の引継ぎと助手を頼む」

これほど緊急ではないにしろ、中央医局からの呼び出しは年に何度かあるので、カスペルは慣れていた。返事をしたあと、すぐに旅行用カバンを取りに部屋を走り出す。

それを見送ってから、カレルは席を立って述べた。

「それでは、一度失礼いたします。私は一足早くアメルダムに戻りますが、シモンが同行することになりますので、質問などがございましたら、道中でお聞きください」

そう言い残し、挨拶もそこそこに二人の騎士は辞去していった。ヤンは小さくため息をついてから、旅の準備をするために自室に向か

っていった。

「いやな予感は良くあたるが・・・まだまだ序の口の気もするな・・・」

口の中で罵りながら苦笑い浮かべていた。

伝染病

用意されたのは護国騎士団の仕官用の馬車だった。中央局の医官ならともかく、田舎の診療所の医者風情にはないことで、若干居心地の悪さを感じる。実を言えば、ヤンにはこうした待遇を受ける十分な理由があるのに、できるだけ避けてきたのだ。特権を行使することに対する嫌悪感は弟子のカスペルと共通したものである。

同乗しているのは、副隊長と紹介されたシモンである。おそらく自分と同年輩、三十歳前程度だろうとヤンは見ている。そもそも隊長と副隊長が二人で自分を訪ねてくること自体、過剰な待遇だが、目つきや振る舞いから、この同年輩の人物が相当な剣士であることは見て取れた。ヤン自身、医者ではあるが、武術についても目利きではある。自分の護衛を兼ねて同行しているのではないかと思われた。しばしの沈黙の後、口を開いたのはシモンの方だった。

「エツシャー先生・・・」

「ヤンで結構。改まる必要ありませんよ」

「それではヤンさん、恥ずかしながら私は例の病については一般に知られている程度にしか詳しくありません。もしよろしければ、時間もあることですし、少し説明していただけないでしょうか？」

「いいでしょう。その後で、もう少し、今回の事件について説明してください」

好意を持つとまでは行かなくとも、シモンの印象はそれほど悪くない。

護国騎士団の副隊長クラスとなれば多くは高位の貴族の子弟だが、おそらくこの男は平民の出ではないかと思った。剣士として実力が

認められてのことだろう。ルワーズ公国では近年、貴族の出身であっても姓の上に「ファン」をつけて名乗ることが減ってきてはいるが、それも軍隊の内部においては、古い慣習に従う場合が多い。シモンにしろカレルにしろ「ファン」を省いて名乗っているところを見ると、平民かせいぜい位の低い騎士階級程度の家柄であろう。騎士階級以上の者が中心であっても、実力があれば、家名に関係なく重要な地位に着くことがあるのは、戦後の護国騎士団の特徴である。

「十年前の戦争が終結した切っ掛けが、伝染病の大流行であったことは御存知でしょうか？」

十年前の戦争では、戦場のほとんどはルワーズ公国内であったが、戦っていたのはフリップ王国と逆側の隣国インテグラ王国の軍隊であった。そもそもがルワーズ公家は双方の国王から封ぜられており、両王家の血が入っている。戦争の原因は、以前から対立を濃くしていた両王家が妥協的に即位させた先代の国公の死に始まる、後継者を決める上での争いからであった。

「両国の遠征軍において、爆発的に病が伝染し、軍隊組織が瓦解したわけです。それによって、両軍は撤退せざるを得なくなりましたが、その後始末は我が国が自力で行わなければなりませんでしたが、この病気は季節性ものと言っわけではありません。大流行が起こった理由は戦争そのものがありました」

ヤンは他の医者に比べ、患者への説明を丁寧にする方である。日ごろから近隣の村人たちを診療しているため、世間話もよくしているが、治療内容についてよく納得してもらおうことを信条としている。相手は患者ではないが、同年輩の騎士に対しても、わかりやすく説明をしようと言う気になっていた。

「昼間のお話にもでしたが、この病の病原はドルテレヒト蝙蝠になります。吸血種であるドルテレヒト蝙蝠にかまれることで感染するのですが、通常であれば決して感染率は高くありません。最初に感染したのは負傷して身動きが取れなくなった兵士でした。夜戦の結果、大量の出血を伴う重症を負った上に、その場に放置された兵士が最初の被害者になりました。ドルテレヒト州内で夜戦の舞台となった平原での出来事です。その症状は極めて特殊なものでした」

「特殊と言つと?」

このあたりのことは、おそらくはシモンも知らないわけではないだろう。だが、より深く理解するためには、よく知れていることもおさらいしておく必要があった。

「まず、皮膚が非常に弱くなり、日光の光を浴びるだけで大きなダメージを受けます。短時間でも火傷を負ったようなケロイド状になり、長時間強い日差し浴び続けた場合には、焼けただれ、蝟燭を溶かしたように皮膚が溶けて垂れ下がったような状態になります・・・」

馬車が石に乗り上げたのか、大きく揺れたために一度話を区切った。

「次に痛覚が鈍くなります。この病は神経に異常を起こします。その結果、痛覚が著しく鈍くなります。先ほどの皮膚へのダメージについても、本人はよほどの重症になるまで気付くことすら出来ないことがあります。ですが、このあたりの症状はこの病の本当の恐ろしさではありません」

「精神異常ですか・・・」

「そうです。神経への侵食は脳にも及びます。ほとんどの患者は感染すると、理性を失い、まるで獣のような、あるいは十分にしつけを受けていない乱暴な子供のような行動を取ります」

シモンはいちいちうなずきながら話を聞いている。ほとんどはすでに知っている話であるだろうが、そうすることで、自分の中の知識を整理しているようであった。

「子供のようなど言いましたが、もちろんそのようにかわいいものではありません。もう一つの特徴すべき症状として、すさまじい勢いで患者の筋力が異常発達します。牛や馬などの家畜に起こる疫病で良く似たものがありますが、筋肉が継続的に増大し続け、どんなにひ弱な体型だった患者も、僅かな期間に筋骨隆々というよりも、非人間的なレベルの筋力を得ることになります。そのため、患者が暴れば、大人数でも押さえつけることはかなり困難になりますし、何よりも、より恐ろしい行動を取るために、極めて危険が伴います」

「吸血行動ですね・・・」

「はい。患者はこの筋肉の肥大化に伴い、体内の栄養分を著しく消費します。それを補うために、獣の本能によってでしょうが、近くにいる人間の血液を奪おうとするわけです。多くは首筋などに噛み付いて吸血することになりますが、蝙蝠と同様、この吸血が感染の原因となります。そして、蝙蝠の場合と違い、血液を大量に失うことで、高い確率で感染するのです」

「伝染性吸血病と呼ばれる所以ですね」

シモンの適度な相打ちはヤンにとってモテンポよく話しやすい雰囲気を作り出していた。うまく情報を引き出すすべにも長けているのではないかと思われた。

「はい。吸血病と言う病はありますが、あくまで精神面の病です。タバコや酒に依存するのと同様に、心理的な要因で血液をすすする異常行動を繰り返すものですが、伝染性吸血病の場合は、それが病原

体によって感染していきます。そして、この病は医者としては苦しいことですが、決して治癒することはありません。感染後、短時間で病毒が全身に回り、言うなれば生物としてのあり方が変わってしまうのです。仮に体内の病毒をすべて取り除くことが出来たとしても、変わってしまった体質は治しようがありません。暴れる、と言うよりも血液を求めて襲い掛かってくる彼らを殺すことでしか感染を防ぐことができないのです。しかし、それも簡単なことではありませんので・・・」

「患者の持つ戦闘力の高さですか・・・」

「はい。増大した筋力は人間の範疇を超えたものです。また、痛覚が鈍くなっておりますので、多少の負傷ではひるむことはありません。何より、血液の成分に異常が発生し、例えば、腕を切り落としたりとしても、患部は瞬く間に止血されます。確実に患者の行動を制するためには、首を切り落とすか、心臓を潰すか・・・武術の達人でもない限り難しいことです。また、痛覚とは逆に嗅覚、聴覚、視力は著しく向上します。例えば、闇にまぎれて隠れるなどしても、すぐに察知されてしまうのです。理性を失っているとは言いましたが、極めて動物的ではあるものの、血液を得るための行動には肉食獣のような知能を発揮します。二足歩行の獣と戦うと言うのが一番感覚に近いでしょう」

ゴクリ・・・とシモンが喉を鳴らした。ヤンの表現はそれほど独創性には富んでいないが、伝染性吸血病の恐ろしさを伝えるだけの迫力がこめられている。

「十年前の戦争では、戦場で倒れた兵士たちの中から、せいぜい一人か二人が蝙蝠による吸血によって感染し、その後は、周囲の兵士たちの血を奪うことで、次々と患者を増やしていったのだと思われます。瀕死であったはずの者が、動き回れるようにはなりません。それは既に死んでいると考えるべきことでした。本当の意味で血に

飢えた彼らが、両軍の本陣を襲い、軍組織が瓦解することで、戦争が終わったのです。詳しいところは一般には知られていない、国家機密の扱いではありますが、うわさはみな知っていることでしょう」

ヤンはここで一息ついてから、話を転じて続けた。

「今回の集団失踪事件が伝染性吸血病を原因とするものである可能性は高いと思います。しかし、村丸ごとという形で頻発し、なおかつその痕跡を残していない点と、発生している地域からすると、いくつかの疑問が出てきます。まるで、人為的に流行させたような、不自然な点があるのです」

言葉には出さず、シモンがうなずいた瞬間、突然馬がいなくなき、馬車が止まった。

外は既に暗くなっている。御者の前に吊り下げたランプの光に照らされて、数人の人影が見えた。

次の瞬間・・・御者は襟を引っ張られ、客室に引きずり込まれた。意外な腕力を見せたのはヤンである。

同時に、ダンツ！と言う音とともに、馬車が大きく揺れた。

御者がいた席の上に一人の男が立っていた。口を大きくあけ、歯をむき出しにしている。農夫の服装をしているが、目の光が常人のものではない。その男が尋常ではない勢いで客席の中にいるヤンにかみかかろうと飛び掛かってきた。

ヤンは驚きも恐れもせず、冷静に構えていた。その眼前で男の咽下には剣の切っ先が刺さり、後頭部から突き抜けている。僅かに全身

を痙攣させた後、絶命したようだった。とつさに剣を鞘走らせ、強烈な突きを見舞ったのはシモンだった。

シモンはこの事態よりもむしろヤンの冷静さに驚いている。この異常事態にあつて、まったく取り乱すこともなく、それどころか、自分よりも早く事態に気付き、御者を救ったのである。

そのシモンもまるで決まりごとでもあつたかのように、客席の後ろにたれていた紐を強く引つ張った。馬車の上部から空に向けて、ヒューッという音と共に火矢が放たれる。護国騎士団の仕官用の馬車であるため、非常時に備えた信号装置が仕込まれているのだ。アメルダムにはまだ遠いが、程近いところに護国騎士団の支部もあるドルテレヒト州の州都、ザーンがある。今日はそこで一泊する予定だった。

ヤンは無言で客席の上に掛かつていた短槍を手に取った。シモンが止める間もなく、馬車から駆け出す。

左右から同時に、先ほどの男と同じような表情の男たちが飛び掛る。異常な跳躍力であつたが、二人とも目的を果たすことはなかった。馬車から降りた瞬間、彼らの意図に気付いたヤンは、右の男に向かって地を這うような低い姿勢で駆けていた。飛び上がった男の口の中に正確な槍先が送り込まれる。槍は頭蓋を貫いて、あたりに体液を撒き散らした。次の瞬間、左から飛び掛かり、ヤンが一瞬前までいた場所に着地した男の上に頭蓋を破壊された死体が降ってくる。なす術もなく転倒した次の瞬間にはシモンの剣によって首を切断されていた。

戦いは一分以内の僅かな時間の間にあっけなく終結していた。

「どこでそのような武術を？」

呆れたようにシモンが聞いた。

「好きで覚えたんじゃないやありませんがね。この病気に関わるようになってからは、有意義には思えるようになりましたよ」

解答になってはいないが、シモンは話題を転じた。

「やはり、人為的なものようですね」

「それしかありえませんが。我々を待ち伏せていたとしか思えませんが、相手側はあなた方が私と接触することを知っていたのでしょう。いや、あなた方もこうした事態は予測していたのではないですか？わざわざ腕利きの副隊長を私に同行させるくらいですから」

厭味のない笑みを浮かべながら、確認するようにシモンを見ている。

「お見通しですね。マウリッツ局長、カイパー博士のお二人が立て続けに行方を絶ったとなれば、次はあなたが襲われる番だと考えました。先の二人を除けば、この病と闘う知識を持つのはあなただけですからね」

「二人のどちらかが現れるまで、適当にやり過ごして、とっと引き上げるつもりでしたが、こうなるとそうも行きませんね。最悪、二度と師匠と兄弟子には会うことができなにかもしれない・・・」

そこまで言いかけて、ヤンは突然口をつぐんだ、前方から数十の馬蹄の音が聞こえてくる。血にぬれた武器を拭い、腰を抜かした御者を助け起こし、それが近づいてくるのを待ちながら口調を変えて、独り言のように呟いた。

「ま、そうそう簡単に死ぬような人ではありませんがね。二人とも」

兄弟

「ファン・バステン將軍！なぜこちらに・・・」

五十騎ほどの騎馬隊の先頭にいた人物に向かってそう言ったのはシモンであった。ルワーズ公国において、將軍とは騎士団長の地位にある人物に与えられる称号である。国軍において最高位にあたるのは、軍務府の長ですべての騎士団と兵団に対する命令権を与えられた公国元帥であるが、護国騎士団の騎士団長はそれに次ぐ格式で、必要に応じて公国元帥代理の肩書きを持つ。事実上のナンバーツーである。

ファン・バステンと呼ばれた人物は四十歳前後の偉丈夫で、形のよい口ひげを生やしていた。ウイレム・ファン・バステン。十年前の戦争時、護国騎士団第一部隊長の地位にあつて、戦後の吸血病患者、吸血鬼の掃討作戦を指揮して功績を挙げた人物である。ファン・バステン家は公国でも有数の武門の家であつた。

そのファン・バステンがシモンの問いには答えずに、襲撃してきた吸血鬼の死体を見ながらヤンに話しかけた。

「腕は鈍っていないようだ。軍隊に入ることは嫌つていても鍛錬だけは続けているらしい」

そう問われてヤンは嫌な顔をした。シモンはさらに驚きの表情をしている。

「体を鍛えておかないと、いざと言う時に体力のない医者なんて役には立ちませんよ。他に体の動かし方を知らないだけです」

「そうか。軍略も錆付いてはいないと思いたいね。久々の兄弟の再会だ。そう嫌な顔はするな。別に無理やり騎士団に引き込んだりはないさ。今回用があるのは、天才軍師ヤン・ファン・バステンではなく、伝染性吸血病の権威、ヤン・エツシャー医師の方だ」

わけがわからないシモンが思わず質問をした。

「將軍・・・失礼ですが、エツシャー先生のことをご存知なのか？」

「ご存知も何も・・・腹違いだが俺の弟だ。母親の姓を名乗っているがね。そして、本来俺以上に護国騎士団長の地位にふさわしい男だ。十年前の吸血鬼掃討戦など、指揮を執ったのは俺だが、策を考え出したのはほとんどこいつなのだよ。見てのとおり、武技も騎士団で一、二を争うお前にも引けをとらない。余計な気を回して退転するようながなければ、今頃は俺がヤンの部下になっていたことだろう。俺はそれでかまわなかったんだがな」

「そんな面倒な仕事をしたくなかったただけですよ」

ヤンはむっつりと言った。

「まあ、今回もかなり面倒なことだがな。医者としても面倒は避けたくて田舎の診療所に引ッ込んだらどう？だが、さすがにこれだけのことだ。逃げられては困るのでね。悪いが働いてもらっぞ。マウリッツもいなくなる前に、お前を呼ぶべきだと書状を送ってきた」

ウィレム・ファン・バステンとマウリッツ・スタンジエが同い年の親友であることは、護国騎士団内でも有名であった。

「実の兄も、兄弟子も二人して私に面倒を押し付けるんですね」

「違っただろう。お前が普段から兄と兄弟子に面倒を押し付けている

から、こういう時だけは働いてもらわないと困るだけだ。普段ならともかく、緊急事態に才能の出し惜しみをするのは、怠慢としか言い様がないと思うがね」

「別に協力しないつもりはありませんよ。ここまで来ましたし、どうやら私しかいないようですからね。で、いつまでここにいますか？敵の援軍が来るかもしれない。理性の失った吸血鬼が待ち伏せなんて出来るわけないんだから、首謀者は近くに潜んでいたはずです。今度は大人数かもしれない」

「そうだな。そういう事態も想定してこれだけの人数を連れてきた。俺はしばらくザーンに対策本部を置いて直接指揮を執ることになったが、お前にはこのままアメルダムに向かってもらう。カイパー博士とマウリッツの残した資料を調べてもらわねばならん。先にカレルが行っている。シモンと二十名ほどの護衛をつけるが、今日はとりあえずザーンに泊まってもらおう。大したもてなしは出来んがね。そら、急ぐぞ！」

最後の一言はシモンと背後にいる騎士たちに向けたものだった。騎士たちのうち二名が未だに腰を抜かしたままの御者を馬車の客席に寄せ、一人が手綱を握った。空いた二頭の馬にシモンとヤンがまたがる。

吸血鬼の遺体はその場で油をかけて火がつけられた。遺族が生きていたとしても、返還できるような死体ではない。死体から感染することはないが、伝染性吸血病患者の死体は腐敗が早いし、事情を知らない者が見れば惨殺されたと思えない傷を負っている。放置しておいていいものでもないし、土中に埋める時間もないので致し方ない措置であった。

ウィレムを先頭に、ヤンとシモンがそれに続いて全員がそれに従った。程近いところにあるザーンに向う。

「ヤンの母親はファン・バステン家のメイドだった。死んだ親父殿は保安兵団長を務めた武人だったが、女にはだらしなくてね。俺のお袋がまだ元気なうちに、メイドをはらませちまってな。よくある話ではあるが、お袋がヒステリーを起こすのを恐れて、大金を握らせて出て行かせてしまったんだ」

ザーンにある、護国騎士団支部内の応接間。まだ日付が変わるまで数時間ある。騎士たちも鎧を脱ぎ、くつろいだ様子でワインを片手に雑談とも打ち合わせともつかない会話が始まっていた。遅い夕食を済ませた後である。国軍ナンバーツーとはいえ、ウィレム・ファン・バステンは気取った態度を取ることが嫌이었다。危険な状況でなければ、歓楽街の居酒屋で部下と共に乱痴気騒ぎをしていたことだろう。

部屋の中だけでなく、ザーンの街中にニンクやハーブなどのキットイにおいが立ち込めている。十年前にヤンが考案した吸血鬼対策である。常人よりもはるかに嗅覚の敏感な吸血鬼にとって、強力な臭気を浴びることは大変な苦痛となる。理性の崩壊した彼らがこれに耐えながら侵入してくることは困難であった。他にも、甲高く常人であっても耳鳴りがするような大きな音を出すラツパや、ランプを改造し鏡やガラス製のレンズを用いて強力な光を浴びせる道具など、数多くの対吸血鬼用の武器が開発されたが、そのほとんどはヤンとマウリッツの考案である。

ウィレムは話を続けた。

「で、俺のお袋は俺が二十二、ヤンが十二の時に流行り病で逝った。親父は安心して、ヤンと元メイドを屋敷に迎えようとしたんだが、その時にはヤンは孤児院にいた。一、二年前にはヤンの母親も同じ病で亡くなっていたらしい。ヤンだけを屋敷に迎えて、親父は軍人にするつもりだったんだが、まあ、ひねくれるのは仕方ない。二年で屋敷を飛び出して、気づいたときにはマウリッツの弟弟子になっていたと言う訳だ」

実際にはウィレムはヤンが九歳で孤児になったときから、両親に隠れてひそかな援助をヤンと孤児院に送っていた。屋敷を飛び出して医師を志した時にも、カイパー博士の内弟子になれるよう、親友であるマウリッツに依頼したのは彼だった。ヤン自身もそのことには気づいている。態度とは裏腹に、ウィレムには感謝しているのだが、改めてそんなことを口にするのも妙な関係なので、ついそっけない態度で応じてしまうのだ。

「吸血鬼掃討戦の時は驚いたよ。医者としてはまだ経験不足だったが、それでも、十二分に診療も施術も行えた。伝染性吸血病の病理はカイパー博士とマウリッツが明らかにしたことだが、対抗手段を考え出したのは、ほとんどヤンだ。俺はその提案にしたがって軍を動かただけでね。まあ、軍隊に入りたがらないのは致し方ない。せめて中央医局の吸血鬼対策室長ぐらいにはついてほしかったんだがね。マウリッツも医局長との兼任でんでこ舞いだった」

「今回は十年前のようにはいかないかもしれませんが」

やはり、むっつりとヤンが言った。

「確かに事情はだいぶ違うな。人為的に吸血病を流行させ、患者を使ってテロ行為に及んでいるのだからな。こちらの対策にも対抗手

段が講じられている可能性がある。こうなると、カイパー博士とマリッツの消息がつかめないのは不安だが、お前がいなければ、もっと絶望的な状況だったろうよ。お前さえいれば、新しい対抗手段もテロリストを壊滅させる軍略も、いずれは出てくるわけだからな」

「しかし、理性を失って獣のような吸血鬼を兵士として飼いなすことなど出来るのでしょうか？」

疑問を口にしたのは、護国騎士団第二部隊長のヘンドレック・ファン・オールトである。五十過ぎの歴戦の兵で、数々の武功をあげているのだが、短気が災いして騎士団長や兵団長への昇進を逃している男だ。

「はつきりとしたことは言えませんが、吸血鬼は感染した直後は、大量の血を失っているのです、まさしく血に飢えた獣です。しかし、それを十分に満たすと急に大人しくなります。たちの悪い酔っ払いのようところがありません、最初は乱暴で凶暴な態度をとりますが、十分以上に血を呑むと、大人しくなり、眠るように動かなくなったりします」

「俺のことじゃないだろうな」

ウィレムの言葉に全員が多少は遠慮がちに笑った。彼は酒豪としても有名なのだが、痛飲した際には暴れることがあるので、アメルダムのいくつかの酒場では軍務府に「護国騎士団員入店禁止」を願い出てきた店もあるのだ。

ヤンはさりげなく（とは言いがたいが）無視して話を続けた。

「が、もちろん人間には大人しくなったからといって彼らに命令することなど不可能です。大人しくなったといっても、人間が近づけば噛み付いてくる可能性があります」

「では、どうやって・・・」

これはシモンである。つい先ほどの襲撃は明らかに待ち伏せ、それも三名が打ち合わせたように連携していた。誰かの指示で動いているだけでなく、訓練されていることすら考えられるのだ。

「一つの可能性として・・・これはマウリッツが研究していたことですが、一部の吸血鬼の中には理性を失わない者が出ることがあります。先天的な何らかの因子を持つものだと考えられるのですが、血の飢えや他の吸血病の諸症状が出るものの、脳神経への作用が他の患者と違い、理性を奪うまでには至らない場合があるのです。十年前の戦場ではそうした患者は、そのまま死を選んだものがほとんどです。周囲が獣になっていくことを尻目に、自ら心臓に刃を立てた死体が稀に発見されました。筋肉量を見れば明らかに吸血鬼でした。まともな人間であればそのような状況は耐えられるものではないでしょう」

「つまり、そうした理性の残った吸血鬼の中に、何か良からぬことを企んで今回のことを仕掛けてきた者がいるということか」

ウィレムは腕を組んで考えた。

「人為的に伝染性吸血病を流行させる目的があるとしたら、やはりテロ、というよりもこれはもう内乱と言えるレベルだろう。やつらは言うなれば吸血鬼の軍隊を編成しようとしているわけだ。にしても・・・兵士は村々を襲うことで増やすことは出来ても、指揮官になれるやつは早々現れることはないわけだろうか？」

「そうですね。そういう吸血鬼のことをマウリッツは不死鬼と呼んでいました。通常の吸血鬼は理性がなく、適切な状況判断が出来ないので、三日と持ちません。日の光を浴びて気づきもしないうちに

皮膚が垂れ下がり、四肢に癒着して身動きが取れなくなり、新たに血を得ることなく死んでいくことがほとんどです。しかし、不死鬼については、理性が働くので、自ら命を絶とうとしない限りは、どうにか生命をつなぐことができます。十年前もごく少数ですが、山中などに逃げ込み、長期に渡って周辺の村で浮浪児などを攫って命をつないでいた者がいました」

「意図的に、その不死鬼を増やす方法は？」

「それはマウリッツの研究が進展していればわかるかもしれませんが」

全員が軽いため息をついた。ウィレムは深刻ぶるのが嫌いな性質なので、出来るだけ、軽い口調で話をするが、内容はあまりにも重大すぎる。マウリッツ・スタンジエの失踪は大きな不安材料であった。

「なるほど。まずはヤンにその辺の状況を調査してもらおうしかないな。とりあえず、ヤンが以前作成した緊急対策の手順に従って、ドルテレヒト、ゼーラント、クラーメルの三州のすべての都市、町、村でこのことと同じような臭い結界を張るように通達を出した」

「フリップ王国側の国境地帯については？」

「向こうが無視する可能性はあるが、一応対抗手段は知らせてやった」

「まあ、無視することもないでしょう。彼らも伝染性吸血病の恐ろしさは十分にわかってはいるはずですから」

「そうだな」

応じたあと、ウィレムはグラスに半分ほど残っていたワインを一気に飲み干した。

「当面、護国騎士団は第一、第二部隊がここザーンを拠点として、三州の主要街道を監視する。第三部隊はヤンに協力して、首謀者の特定と捜査をしてもらう」

「私に犯人探しをしると？」
「この国をひっくり返そうって奴は、まあ、戦後十年程度ならいくらでもいるだろう。国内だけじゃなく、インテグラ王国の連中だってそうだ。だが、今回のような手段でやれるやつらはそうはいない。少なくとも伝染性吸血病について、カイパー博士やマウリッツと同等の知識を持っていないといけないわけだ。そんな奴との知恵比べができるのは、俺の知る限りヤン・エツシャーしかないな。ヤン・ファン・バステンはやりたがらんだろうしな」

後半は厭味だった。

「ヤン・エツシャーだって本当はやりたくありませんよ。しかし、医者には患者を見殺しにはできません」

「そうさ。だから、面倒なこともやってもらおう。明日は早めに出て、夕方までにはアメルダムに着いて貰いたい。ご苦労だが、すぐにカイパー博士とマウリッツの研究室を調べてみてくれ。俺などでは、ああいうところにある資料だの実験道具など、いったい何なのか検討もつかないので、なんの手がかりにもならん」

「わかりました。いたし方ありません。早く終わらせて、元の田舎暮らしに戻りたいですね」

「ああ、終わったなら勝手にしてかまわん」

ほとんどが兄弟の間で交わされた会話であった。周囲の部隊長級の騎士たちは呆れたように見守っていた。これだけ深刻な事態であるにもかかわらず、二人からは悲壮感も緊張感も感じられない。ウィレムはともかく、ヤンもなんと肝の据わっていることか。

若く、軍籍にすらない医者指揮を受けることに反発を感じていた者も、感心せざるを得ないだろう。確かに、軍に属していれば、騎士団長にまで上っただけでおかしくない人物だ。

「さあ、明日は早い。大暴れして、大人しくなる手前で酒はやめておくとしよう」

全員が残りのワインを一息に飲み干し、挨拶をして居室に引き取っていった。

医師たちの仕掛け

「ずいぶん荒らされていますね。やはり吸血鬼に襲われたのでしようか……」

アメルダムのヨアヒム・カイパーの部屋は雑然と散らかっていた。足の踏み場もないほど、書物が床にばら撒かれ、書きかけのメモなどがクシャクシャになって散乱していた。シモンがそう思ったもの無理もない。

「いや、師匠はとてまづぼらな人でしてね。彼の研究室などはいつもこんな感じですよ。医者がずぼらだと患者に不安を与えると、マウリッツと私はいつも言っていたのですがね」

机の上のやはり雑然と積み重なっているメモを確認しながらヤンは言った。質問をしたシモンはどうしていいものか、本や紙片を踏まないよう爪先立ちになりながら立ち尽くしている。

「ふむ、少なくともこの部屋から自分の意思で出て行ったということはありませんね」

「なぜですか？」

「この研究日記です。博士は肌身離さず持っていました。トイレに行くときでさえ持ち歩いていたものです。十三日前で記録が終わっています……大したことは書いていませんね……」

資料から目を離さずにシモンの質問に答えたヤンは軽く咳払いをした。部屋には煙のように埃が舞っている。

「なるほど。博士は最近、吸血鬼が長期的に生存するために必要な

血液の量と彼らの生命を支える成分を研究していたようです」

「なぜそんなことを？」

「博士も変わり者とは言え医者ですから。可能であれば伝染性吸血病患者にも周囲に害悪を与えずに生きてほしいと考えているのですよ。仮に現実的に確保可能な量、健康的な生活に影響のない範囲で健康者から血液を摂取し、それによって生きながらえることができるとしたら、それを可能にする仕組みを医局に作ればいいわけです。必要な成分がわかればあるいは、家畜の血液などからそれを生成できるかもしれない。理性が残っている不死鬼に限ってのことですが……」

「答えはでていたのでしょいか？」

「日記には書いてませんね。ですが、最後の日の記述ではもう少しでわかるようなことが書いてあります。吸血鬼の軍隊を作ろうとしている敵には喉から手が出るほどほしい情報でしょうね。ふむ……ほう……」

何かに気づいたようだが、それ以上は何も言わない。

「やはり、吸血鬼に襲われたのでしょいか？」

シモンは先ほどの質問を繰り返した。

「いえ、その可能性は低いでしょう。アメルダムのような都市部には夜間であっても、吸血鬼を連れ込むのは困難です。なにより、敵が意図を持って博士を狙うなら、殺害したり吸血鬼にになってしまう理由はありません。連れ去って、情報を得ようとするでしょうね」

「理性のある不死鬼であればそんなことも可能ですか？」

「いや、おそらく、博士が誘拐されたとすれば、実行犯は普通の人間です。理性ある不死鬼であっても、目立ちすぎます。昼間は外にまったく出られませんからね」

「つまり・・・不死鬼だけでなく、普通の人間も一味に加わっていると・・・」

「そうでしょうね。何より、不死鬼になったような者が、国家転覆なんてことを自分で考えたりすることは考えづらい。普通に考えてそんな余裕はないはず。日々、血液を求めて行動しなければなりませんから。何らかの方法で、潤沢に血液を提供する方法持つ者が黒幕でしょう」

シモンは感心しきりだった。ヤンは医師としても武術家としても一角の人物であることはわかっていたが、推理力もたいしたものだ。頭の出来がそもそも違っただろう。保安兵団の捜査隊にでも入れば、いくらでも手柄を立てられるのではないだろうか。

「さて、博士は一人暮らしですし、診療所を開いていると言っても、アメルダムでは中央医局や民間の財団が格安の診療所を設けているので、ほとんど患者が来ることはありません。まあ、元々町医者なんてまともにやる気はなかったですからね。中央医局で面倒な仕事に関わらずに研究に打ち込むための口実でしかなかったわけ。民衆のための医療に携わりたいなんてのは。人嫌いなので、近所づきあいもないでしょう。聞き取り調査をしても意味はないですね。ここではこれ以上何もできません。この日記だけ借りていきましよう。これさえあれば博士が何を考えていたかはほぼわかります。その辺に散らばったメモなどの書物などを調べてもくたびれるだけです」

次に向かったのはマウリッツ・スタンジエの居館であった。すでに日は落ちていく。そして、花の都といわれるこのアメルダムでも、

ニンニクと香草の強い香りが立ち込めていた。明日には中央医局に向かう予定で、スタンジエ家を調査した後は護国騎士団の本部に泊まる予定だった。主不在のファン・バステン家の屋敷に泊まることもできるが、ヤンにその気はない。兄嫁のシルヴィアは喜んで迎えてくれるだろうが、それが返ってわずらわしく思えるのだ。

「サスキアさん。スタンジエ医局長がいなくなる前の状況を教えてくださいませんか？」

サスキアと呼ばれたメイドは、二十歳を超えたばかりだろうか、幾分顔立ちには幼さの残るが見た目よりは年上なのではないかと思われた。丁寧な口調で質問しているのはシモンである。中央医局長になつてからのマウリッツとは直接会つたことはないので、ヤンはこの美しいメイドとは面識がなかった。

「マウリッツ様は夜遅くにご帰宅なさいました。遅くまで分析作業をされていたとか。いつもは、夕食をとられた後の数時間を地下の研究室で過ごされるのですが、その日に限っては疲れたとおっしゃつて、少しお酒を召してからすぐにご就寝なさいました。その翌日、朝食の準備が出来たことをお知らせに参つた時には、寝室にはいらつしやらなかつたのです・・・」

サスキアと呼ばれたメイドはなかなかしつかり者のようで口調もはつきりとしているが、寝不足なのか、目の下にクマが出ている。主が失踪して不安な毎日を送っているのだろうか。

「その晩に何か気づいたことはありませんか？どんな小さなことでもいいのですが・・・」

「さあ、特に・・・」

そこで沈黙し、うつむいてしまった。

「サスキアさん。私はスタンジエ医局長の弟弟子に当たるヤンと申します」

「あ、はい・・・ええ、マウリッツ様から伺ったことがございます。大変優秀な方だと」

一瞬口ごもってからの返答だった。

「それは、恐れ入ります。悪い噂が含まれてなければいいですが。ところで・・・」

ここでヤンは間をおいて、サスキアが顔を上げるのを待った。相手の目を覗き込みながら言う。

「マウリッツの事が好きなんですね」

さっと、サスキアは顔を赤らめた。

「そ、そんな・・・私なんて・・・、そ、尊敬申し上げておりますけど・・・」

しどろもどろになる娘に向かって畳み掛けるように続ける。

「マウリッツはもう四十前ですが、未だに独身。実家や周囲からは良家の令嬢との見合い話が持ちかけられていると聞いています。それをすべて無視しているとも。私は数年兄弟弟子というよりも、師弟に近い関係でありましたが、彼の気持ちはだいたいわかるつもりです。あなたがいるから、彼は結婚を断り続けているのでしょうかね」

「ヤンさん・・・？」

シモンはこの状況で兄弟子のゴシップを話題にする意味がわからなかった。不信に思いながら、何か考えがあるのだろうかと思ひ、それ以上は何も言わない。

「彼はあなたを信頼している。誰が来ても本当のことは言わないだろうとね。でも、先ほどお話したように私は彼の弟子です。また私の兄、ウィレム・ファン・バステンは彼の親友です。悪いようにはいたしません。本当のことを教えていただけませんか？」

「……………」

サスキアは沈黙してしまつた。どうしていいかわからずに混乱しているのか、他に理由があるのかはわからない。

「彼には危険が迫っています。だからこそ姿を消したのだと思いますが、私は彼を助けたいのです。私を信用していただけませんか？ 失踪する直前、マウリッツは私の兄に、私をアメルダムまで呼ぶようにとの手紙を出していました。彼は私に用があるはずなんです」

子供あやすようにやさしい、それでいて拒絶を許さない口調であつた。またもシモンは感心した。医師として多くの患者と向き合ってきたからであるうか。このような説得の仕方は無骨な自分にはできそうもない。

「…………マウリッツ様は…………ご自分から姿を隠しておられます。あの晩のお仕事の結果で、自分が危険にさらされることを確信されたとおっしゃってました。自分は恐れはしませんが、私にも危険が及ぶからもしれないと…………どこに行かれたかは聞いておりません。本当です…………」

口の中で呟くような小さな声だった。目に涙をためてはいるが、泣き崩れはしない。なるほど、なかなか気丈な女性であった。

「マウリッツならそうでしょう。あなたがそこまで知ってしまえば、やはり、危険が及ぶこともあります。いや、やはり、今の時点でもこの屋敷にいることは危険があります。護国騎士団に保護してもらいましょう。マウリッツも賛成するはずですよ」

ヤンがちらりとシモンを見ると無言でうなずき返した。

「では、サスキアさん。地下にあるという研究室に案内してください。おそらくあなたでさえ入ったことはないと思いますが」

「でも、鍵がありませんわ。誰も立ち入れないように、マウリッツ様だけが鍵をお持ちでしたの。どこにしまっただけあるのか……」

サスキアも落ち着きを取り戻したようだ。

「ふむ。いえ、なんとかあります。とりあえず、入り口まで案内してください」

不信な表情を浮かべながらサスキアは二人を地下室に案内した。

「こちらになります。頑丈な金属製の扉ですし、壊すことも難しいと思うのですけれど……」

とサスキアが言い掛けたときには、ヤンは手にメスを持っていた。

「な、何を……」

言いかけたのはシモンを無視して、ヤンは近づいてしゃがみこんだ。

ドアノブに巻きついている牛皮を手術でもするような正確な手つきで切り開き、さらに細かくメスを動かした。

カシャンッ！

突然扉があき、生臭いにおいが漂ってくる。

「私とマウリッツが昔よくやった遊びですよ。筒の中に何本かの糸を通し、他の糸を切らないように、一番奥にあるものだけを切るのです。ノブの中にそれを使った仕掛けがありました。私だけが入れるように作った仕掛けですね」

ヤン以外は二人とも言葉も出てこない。シモンは医者というのはいったいどういう人種なのかと疑いたい気分だった。ヤンだけが入れるようにしたいなら、他にもいくらでも方法があったはずである。これでは、まるで子供の遊びだった。

「ところで、気付きませんか？」

「え？」

シモンが素っ頓狂な声を上げる。ヤンと一緒にいるとどうも自分が間抜けに思えてくる。

「このドアノブについていた牛皮です。強い力で握られて、無理に引っ張ったのでしょうか。内側が金属にこすれて傷んでいる。それから、暗くてよくわからないかもしれませんが、扉が少し部屋の中に向かってへこんでいます」

「まさか・・・侵入しようとしたものがあると」

「間違いないでしょう。が、吸血鬼であればこの程度のへこみ具合ではすみません。その気になれば完全に扉を破壊することもできる

はずです。やはり敵には普通の人間もいるということですよ。サスキアさんに一切気づかせずにここまで来たとなれば、普通とは言いがたいかもしれませんがね」

三人は口と鼻を手で押さえながら部屋に入った。

「これは、仮に吸血鬼であったとしてもここには入れそうにありませんね。私たちでも耐え難い臭気です。」

眉間に皺を寄せながらシモンが苦情めかしく言う。

「ところが、吸血鬼はこの手の匂いには拒否反応を示しません。彼らの嗅覚は確かに敏感ですが、こういう匂いは気にならないようです。さて・・・」

研究室の中には、ネズミや蝙蝠が解剖され、アルコール付けにされたものが並べられていた。匂いの元は、解剖を行う作業台の上からである。複数の腹を割かれたネズミの死骸があった。

「十三日前からならばまあ仕方ないでしょう。たぶん、伝染性吸血病に感染したネズミです。人間と違って数時間で確実に死んでしまいますがね。ほっつておいたと言うことは、よほど急いでいたのでしょう。で、問題はこれです。あまり長居をするわけにもいけませんから、すぐに持ち出しましょう」

そうやって指し示したのは、ワインを保存するのに使う樽である。酒瓶五本分程度の容量のものだ。その上には一枚の紙が張られているが、シモンにはそれが読めない。

「奇妙な文字ですね。暗号か何かですか？」

「いえ、カイパー博士が考案した速記文字です。医者は患者を診察しながらすばやく記録をとらねばならないので。それに、患者の目前で書いている文章には本人には読んでほしくないものもありますから。不治の病の疑いがある場合とか」

「なるほど、そこまで気を使うものなのですか・・・」

と言い掛けて、シモンは樽を持ち上げながら、サスキアを見た。さすがに気丈な彼女もこの部屋の臭気と風景には耐え難いものがあるようで、入り口からあまり中まで入ってこない。

「なるほど。このメモによれば、どうやらマウリッツは吸血鬼を人為的に不死鬼にする方法を解明したみたいですね。この樽がその成果です」

「では、まさか・・・スタンジエ局長が不死鬼を・・・」

「マウリッツ様はそんなことはしませんっ!」

そう叫んでから、サスキアは自分の出した声の大きさに驚いたようだった。部屋中に反響する。小さくため息をついてから、ヤンは説明した。

「先ほどもお話したとおり、医者は伝染性吸血病患者であっても出れば救いたいと考えています。理性を失った吸血鬼であればどうしようもありませんが、不死鬼となつて理性を取り戻すことができれば、生き続けることもできなくはありません。これに、カイパー博士の研究成果をあわせれば、被害者を出さずに彼らを生かすことができます」

「しかし、日の光は浴びることができませんし、まとも人間として生活することは難しいですよ・・・」

「そうですね、それはまた次の研究になります。私の研究も本来は

吸血鬼を倒すことではなく、彼らの筋肉の異常発達を止めることにありますから。そうすれば、彼らの血の飢えも和らげることが出来ます。それから、皮膚炎や痛覚の喪失を治療する方法も探っています・・・と、話はそれでしたが、マウリッツが姿を消したのはカイパー博士の失踪の翌日、その頃にはすでに両国の国境付近の村が襲われています。数百名は吸血鬼になっていたとは思われませんので、この時点で何名もの不死鬼がいないといけません。一人の不死鬼でせいぜい百名が限界でしょう。行動を制御できるのは、自然に不死鬼が発生する確率を考えると、マウリッツと同じか、何らかの別の方法を敵は発見していないければなりません・・・！」

言い掛けた瞬間、ヤンは急にその場を飛びのいた。

カンッ！

ヤンがいた場所に、ナイフが飛びタイルの床に跳ね返った。

「なるほど。マウリッツ・スタンジエが安心して逃げるわけだ。あんたみたいな弟弟子がいるんなら、自分が無理をする必要はどこにもない」

いつの間にか、全身黒尽くめの男がサスキアの背後に立ち、ナイフを喉元に突きつけていた。

「吸血鬼の一味か。が、どうやら人間のようだな」

ヤンの言葉に男は意外そうな顔をした。

「ずいぶんと落ち着いているじゃないか。医者つてのは意外と肝が据わっているんだな。だが、こっちには人質がいる。別に攫ったり

するつもりもないが、その樽をこっちにもらいたいね」

これはシモンに向かっての言葉である。シモンはちらりとヤンを見た。目が合った瞬間、お互いにうなずく。

シモンはヤンと男の中間の位置に樽をそつと置いた。

「女、重いだろうがそれを持って。外まで運んだら開放してやる。」

そう言つて、ナイフを背中当てて、サスキアを前に歩かせた。サスキアが樽を持ち上げようとした瞬間・・・

カシャンッ！

突然、男の背後のドアが閉じた。男が最初に投げたナイフをヤンが拾い、正確に先ほどとは反対側のドアノブに向かって投げたのである。牛皮を貫通し、中に通された糸を切断することで、扉の仕掛けを作動させたのだ。

「な、何しやがった！くそっ！あかねえっ！」

男は焦った。事態の急展開についていけず、人質から離れて扉を開けようとしてしまったのだ。

ガンッ！

後ろからシモンが男に体当たりを食らわせた。鉄の扉に全身を激突したのち、瞬く間に羽交い絞めにされる。

「ふむ。予想外の収穫だ。サスキアさんにはずいぶん怖い目にあわ

せて申し訳ありません」

「いえ。大丈夫です。ヤンさんを信じてましたから」

「私ではなく、私を信用したマウリッツをでしょう?」

ニヤリとしながらヤンは男に近づぐ。

「さて、こんな臭うところには長居はしたくないんだが、どうせ簡単にには出られないし、外からも入ってこれないので時間はたっぷりある。いろいろ聞かせてもらいましょう」

ヤンはシモンと一緒に男をわざわざ解剖用の作業台に寝かせて縛り付けた。ネズミや蝙蝠の死体はそのまま、背中にはべったりと体液がつく。顔の横には腹をかつさばかれた死骸がそのままにある。

「さて、まあ、名前なんて無駄なものは聞かないよ。雇い主の名前もどうせ言わないだろうね」

「何か答えるとしても、お、思ったか?」

引きつった笑みを浮かべながら、余裕を見せようとして失敗し、震える声で言う。どうも吸血鬼まで使って反逆を企てる連中が放ったにしては底の浅い男だ。

「何、言わないならいろいろ考えはあるさ。まず、お前の組織の目的、それから、ヨアヒム・カイパーの消息についてだ」

「知らん・・・!?!?」

そう言った次の瞬間男の顔がこわばった。ヤンは立ち上がり、ナイフを手に行っている。

「殺すなら殺せ!」

「私は医者だ。そんなことはしないよ。だが、しゃべるべきことをしゃべらない口には別の役割がある。どうせ腹が減っているだろう。ご馳走してあげるよ」

そう言つて、男の顔のすぐ横にあるドルテレヒト蝙蝠にナイフを突き刺し、持ち上げて見せた。さらに空いている方の手を男の顎に当て、口をあけさせようとする。

「や、やめろっ！ドルテレヒト蝙蝠なんて食ったら吸血鬼になつちまうだろうがっ！や、やめてくれっ！殺された方がましだ・・・」
「なるほど。吸血鬼を使つて反乱を企てるような連中でも自分が吸血鬼になるのは嫌か。と言つても、こいつは下っ端もいいところだな。たぶん何も知らないでしょう。ドルテレヒト蝙蝠を食べたところで、感染したりはしないと云つことすら知らないんだから。まあ、腐敗も進んでいるし、激烈な腹痛にはなるでしょうがね」
後半はシモンに向かつての言葉である。

「私たちが地下室の扉を開けられるかどうかを確認して、可能ならこの樽を奪えという指示を受けたただけだな」

男は力なくうなずいた。

「たぶん、金をつかまされて動いたコソ泥かなんかだろう。相手もずいぶんせこい手を使う。いや、私を甘く見たか、小手調べをしてみただけかな」

相変わらずシモンは感心しきりである。めまぐるしい状況の変化に対応しながら、まったく動じることもない。言葉や態度一つで正体不明の男を追い詰め、わかる程度の情報はつきりと言わせること

もなく引き出してしまった。

「さて、シモンさん、サスキアさん、ここはもう出ましょう。この男は一応収獲です。そろそろ外には騎士団本部から迎えの馬車が来ているはず。人を呼んでこいつを運ばせましょう」

「でも・・・扉がふさがってしまいましたわ・・・」

サスキアの言葉聞いて、シモンはハツとした。扉がふさがっていることに気づいたからではない。

「他に出口があるんですね。ヤンさん」

「そのとおりですよ。マウリッツだって、こんな重い扉、間違っただがちり閉じてしまったら外に出られません。そういうところは抜け目のない男なんですよ。いや、あんまり悪口はサスキアさんの手前言わない方がいいかな？」

そう言つて、作業題の横にある壁に掛けられた牡鹿の頭部の剥製の角を掴んで下に引つ張った。この鹿の剥製だけがこの研究室には不似合いなオブジェだった。鹿の角は根元から下に傾き、壁の一部が突然音を立てて、下に落ち込む。

「外からは開けられないが中からは開けられる出口を作っておく。秘密の研究室を作るなら常套手段です。サスキアさん、申し訳ないが外にいる連中に事情を説明して呼んできてください。たぶん、ここから庭の物置に出ることができると思いますが」

「は、はい！」

程なくして、数名の騎士が現れた。樽と作業台からおろされた男を

運び出す。彼らの後ろを歩きながらシモンはヤンに小声で話しかける。

「ところで、ヤンさん。どうして、あのサスキアと言うメイドとスタンジエ局長の関係がわかったんですか？」

「いや、当てずっぽうですよ。と言つても、本来、金で雇われているだけのメイドがあそこまで真剣に秘密を守つたりするなら、主従以外の感情が働いているんじゃないかと思っただけです。マウリッツの好みもだいたいわかりますしね」

「あの・・・ヤンさん・・・誤解されたままなので、はっきりと訂正させていたただきたいんですけど」

シモンはぎよつとした。後ろを歩いていたはずのサスキアが急に追いついてきて、横からヤンの顔を覗き込んでいる。

「誤解・・・ですか？」

さすがのヤンも怪訝な表情で聞き返した。

「私とマウリッツ様の関係です。まだ周囲には伝えられてませんが、マウリッツ様はご婚約されております。私の姉、カリス・クリステルとです。私はマウリッツ様の義妹になります」

「ぎ、義妹？」

ヤンともあるう者が阿呆のように鸚鵡返しに聞き返すことしか出来ない。シモンは妙な愉悦を覚えながら、成り行きを見守っている。

「はい。私ははじめからヤンさんが来たら地下室にお通しするようにな、マウリッツ様から指示されてました。その後は護国騎士団に保護していただくことも」

「じゃあ・・・なんで初めから教えていただけなかったんです？」
わけがわからないと言うふうには、すっかり狼狽している。これはなかなかみられないことだろうとシモンは思い。ニヤニヤし始めた。

「本当にお分かりにならないんですか？」

「ええ・・・さっぱり・・・」

一瞬、サスキアの顔が陰しくなるが、すぐに表情を消した。ただ、幾分すねたような口調になった。

「若くして医学界の権威、世に隠れた天才軍師、公国一の知恵者とも呼ばれるお方でも、僅か十数年前の記憶すら呼び戻せないこともありなのです。もう、思い出していただけかなくても結構ですけど！」

ぷいっ、と顔を背け、さっさと縄梯子を上って外にでてしまった。その後は馬車の中でもまったく口を聞こうとしない。

「ヤンさん・・・本当に覚えておられないのですか？まあ、なんとなくいいですか、知り合いの中央医局の精神科医が言っていました。何年も人の心理について研究してきたが、女性の気持ちだけはさっぱりわからないってね。理屈ですまないこともあるんですよ。あんまりひねくれてしまつと後が面倒です」

シモンは心配していると言うより興味津々と言った具合で、ヤンにささやく。

「十・・・数年・・・」

「そう、十数年前と言っていましたね。孤児院に入っておられた頃と

か・・・幼馴染とかではありませんか？」

「あ・・・あつ・・・あああつ！」

急に大きな声を上げて、他の騎士たちを驚かせた。

「サスキア・・・サスキア・ウテワールか・・・、いや、だって、まだ、私が十か十一で、彼女はまだ七歳だったはず・・・。マウリツツの婚約者であるとか言うお姉さんの姓も違うし・・・」

「私は、あなたがファン・バステン家に引き取られてまもなく、クリステル家に引き取られたんです。そりゃあ、子供の頃ですから、姿形は変わっております。思い出せないのはいたし方ありませんけど・・・」

また、サスキアが横から話に入り込んできた。くちを尖らせたままだが、目は笑っている。シモンがくっくと笑いながらからかうように口を挟んだ。

「いやあ、大いなる知患者ヤン・エツシャー先生。猿も木から落ちると言う東方の諺がありますが、滅多にないミスが致命的なことだったみたいですね」

ヤンはきよとんとしている。まだわからないのかと見かねてシモンが耳打ちした。

「スタンジエ医局長と恋仲だなんて決め付けられたのが気に食わなかったんですよ」

「え・・・な、なぜですか・・・」

シモンはぎよっとした。頭は切れるのに、こんなに鈍い男だったと

は。わざと大きなため息を付いた。誰も知らないことを知り、誰にも解けない問題を解くヤン・エツシャーにも、誰にでも明らかなくことを理解できないことがあるらしい。

「ええと・・・サスキアさん・・・いや、思い出してしまうと、改まった言い方をするのもなんか妙な感じだけど・・・マウリッツとのことを妙に勘繰ったのは申し訳ない。その・・・機嫌を直してくれないかな・・・。いや・・・どうして怒らせたかもよくわからないのだけど・・・不快にさせたのなら謝るから・・・」

が、今度はサスキアがクツクツと笑い出してしまった。

「本当に、子供の頃と変わってないのですね。勉強も喧嘩も誰にも負けないし、なんでもよく知っているのに、自分にわからないことがあったときには、まったくごまかすことも出来ないところ。素直と言うか人がいいと言うか・・・。それに他人のことばかりいろいろ勘繰って、自分のことは何にもわかっていないことも。変わってないことに免じて許して差し上げますわ」

今度は馬車の中にいる数名の騎士全員が耐え切れずに笑い出してしまった。

「アメルダムに滞在されている間は身のお世話をさせていただきます。これもマウリッツ様とウィレム様、それにシルヴィア様からのご指示です。医師の方も一人ではちゃんと生活できるかどうか、いつも心配だと手紙でおっしゃってましたから」

「カ、カスペルが？って、どうして彼のことを・・・あ・・・」

どうやら、ヤンは周囲の人間に計られていたことによく気付いた。マウリッツ、その奥方になると言うカリス・クリステル、おそ

らくはウィレムや兄嫁のシルヴィア、カスペルまでが共謀して、ヤンを驚かせようとしたらしい。そういえば、カリス・クリステルと言うサスキアの姉の名には聞き覚えがあった。兄嫁のシルヴィアの親友で、優秀な女医だったはずだ。

「ウィレム様がおっしゃってました。ヤンは何でもよく知っているから、鼻を明かすにはこれぐらいの人数でこっそりやらないと無理だろうって。マウリッツ様が姉との婚約を決めた二月前から皆さん連絡を取り合っておいででしたわ。狼狽する姿を見ることができないのは、皆さん残念でしょうけど」

シモンはもうはばかりもなく爆笑している。なるほど、これほど頭の切れる人物であれば、悪意はなくとも一度ぐらい慌てさせてみたとは思っだろう。マウリッツのことを四十前で未婚であるなどと言っていたが、医師と言う安定した地位にあるにも関わらず、三十前で結婚していないヤンだって他人のことは言えないのだ。良家の令嬢だの、女優だの敷居の高い娘が言い寄ってきてても興味を示さない男に、幼馴染を会わせてみようと言うのは、なかなか粋な方法といえるかもしれない。

何より、シモン自身も、決して鼻にかけることはないにしろ、ヤンの明哲さには若干の苛立ちを感じることはあるので、身内の悪巧みの動機は十分に理解できた。

「よろしく願いますわね」

サスキアも多少人の悪い笑みを浮かべている。

「まったく、この非常時に私の周りには下らない陰謀をめぐらす連中ばかりだなんて・・・」

「あら、まじめに陰謀をめぐらすのは敵に回っている方々でしょうし、それに対抗するのはヤン・エッシャーなんですから、他の方はこれくらいがよろしいんじゃないやありませんか」

頭を抱えるヤンを見て、馬車の中に爆笑が沸き起こった。

侵入者

「さて、状況を整理しましょう」

話を仕切り始めたのは一足先にアメルダムに戻っていたカレル・パレルケレンネである。現在、アメルダムにいる護国騎士隊の幹部では最高位で、本部での責任者となっている。

ヤンとシモンはアメルダムについた足で護国騎士隊本部に訪れ、すぐにカイパー博士とマウリッツの居館の調査に向かい、戻ってきたばかりだった。ウィレムの悪名高い方針で、夜半に行われる会議はワインを片手に行われることが通例となっていた。この時もそのしきたりに従っている。良い考えを出すには酒が必要と言うのが持論であった。

「まず、フリッブ側国境周辺三州の状況ですが・・・」

「第一第二部隊がザーンを中心に展開し、主要な街道を監視しております。今日の正午までには配置は完了しているかと思われます。ファン・バステン将軍が自ら指揮を執っておりますので、心配はないかと」

カレルの言葉にシモンが答えた。

「次に、伝書鳩を使い各州の主要都市に臭気結界を張るように通達しております。周辺地域の町や村も含め、保安兵団の指示で実施に移されているはずす」

「ただ、フリッブ側国境周辺については、気休めにしかならないかもしれませんね」

口を挟んだのはヤンである。

「どういうことでしょうか？」

カレルが聞き返した。

「敵側の戦力は今や吸血鬼や不死鬼だけではないかもしれませんが、もちろん、警戒を強めているわけですから、夜盗と変わらないような武装集団が村を襲ったところで成功はしないでしょうが、吸血鬼との組み合わせで襲撃すれば話が変わります。人間の工作部隊が事前に臭気結界を無効にする、たとえば家々に火を放つとか、奇襲をかけて香炉を破壊してしまうとかした後に吸血鬼部隊に襲撃されれば防ぐ手立てはありません」

「では、どうすればよいと思われませんか？」

「防御策を講じることは必要ですが、それだけでは駄目だということとです。敵がそうした手段で村を襲い、力を蓄える前にこちらから仕掛け、状況をこちらの主導で作ることが必要です」

「ふむ。それには現状をよく把握する必要がありますな。まず、わかっていることをもう少し整理してから、対抗手段を検討するところでしょう」

グラスのワインを回し、ランプの光を反射する様を楽しみながら、カレルが言った。老練の上、頑固で生真面目と言われる初老の騎士も、どうやら若年の上司に人格的影響を受けてしまっているらしい。昔からのお堅い名門出の騎士であれば目くじらを立てそうな風景であるが、現在の護国騎士団にとっては当たり前のものであった。

「カイパー博士の居館での調査では、博士の消息はつかめませんでした。エッシャー先生によれば、何者かに連れ去れた可能性が高いとのことですよ」

「いえ、あの時はそう考えましたが、今はそう思っていないません。博

士が自分の意思で姿を消した可能性が高くなりました。ほぼ間違いないでしょう」

シモンの言葉をヤンが否定した。シモンは今回は驚かなかった。ヤンとはまだ丸一日しか付き合っていないが、この男の頭の回転の速さにはずいぶん慣れてきたようだ。前言を撤回することにもまったく躊躇がない。その時点で得られた情報から推測できることを口にしているだけなのだ。

「これは、博士の部屋に置いてあった彼の日記です。普段は肌身離さず持ち歩いていたものですので、これを置いていったのなら、自分の意思ではないと考えていたのですが・・・」

「何か見つけたのですか？」

「十三日前、日記が書かれている最後のページの・・・ここです。」

ヤンが開いて指し示したのは、日記の最後の一文の後に打たれたピリオドである。

「よく見ると、ここだ他の文字と色が違うのがわかると思います。他は黒ですが、このピリオドだけよく見ると紫です」

そう言いながら、ヤンは懐に手をつ込み、手のひらサイズの小さな丸いビンと、傷の治療などに使う医療用の綿を取り出した。

「これはこの、ピリオドに使われている液体と同じものです。これを綿に付けて・・・最後の次のページを軽く湿らせると・・・」

ヤンが話しながらそのとおりにすると、何も書かれていないページが薄い紫色に染まる。紫色の中に他の部分よりも若干赤みが強く濃い部分が現れ、それが次第に文字になっていった。

「透明の液体であっても、ある薬品と混ぜることで、発色することがあります。これはそれを利用したトリックですね。つまり、博士は私が部屋に来ることを予想して置手紙をしていったのです。やはり文字は博士が考案した速記文字ですので、私が読み上げましょう」
そう言つて、ワインで口を湿らせてから読み始めた。

「我が愛弟子ヤン・エツシャーへ。研究はすでに完成した。その成果をここに示す。任務に役立てるように。これも良い修行だと思いなさい・・・この後は、吸血鬼が必要とする血の量と、牛血から人に代わるものを生成する方法が記されています」
「では、攫われたわけではないのですね」

シモンもワインを口に運びながら言う。

「はい。それどころか、どうやら私に宿題を出してどこかに行ってしまったようです。マウリッツといい私に苦勞を押し付けるのが大好きな人ですから・・・」
「まあ、エツシャー先生に苦勞していただくことに関しては異論はありませんがね」

ニヤリとしながらカレル。ヤンはいつもの嫌な顔をしてみせた。

「で、医局長のお屋敷はいかがでしたか？」

一瞬、シモンがクスリと笑いかけた。普段は生真面目で謹直な若者なのだが、アルコールの力と思い出されたエピソードの滑稽さから忍び笑いがもれてしまったようだ。

「マウリッツも自分から姿を消していました。これは彼のメイドの証言と置手紙から明らかです。そして、やはり私に宿題を残していききました。こちらはちゃんと答えも用意されていましたが。吸血鬼を不死鬼に変えるための薬品の処方と、薬品そのものが置き土産です。また、それを奪うために現れた敵方の間抜けな密偵が最大の収穫ですね」

「最大の・・・ですかね？」

人の悪い笑みを浮かべて、シモンが言う。不謹慎とは程遠い男なので、カレルはやや驚いているが、酒をたしなみながらの打ち合わせなので、口うるさいことは言わない。

「最大の、です。他に何かありましたか？」

ヤンはシモンの笑みの意味をわかっていない。何かをわかっていないと言うこと自体が珍しい男なので、こういうやり取りにシモンは味を締めてしまったようだ。

トントントンッ！

「どつぞ」

ノックに答えたのはカレルである。

「失礼いたします。ワインのお代わりに、おつまみをお持ちしました」

盆に追加のワインとチーズや干し肉を乗せて入ってきたのはサスキ

アであつた。

「いやあ、サスキアさん。そんなことをさせてしまつて申し訳ありません」

口元のいやらしい笑みを残したまま、シモンが愛想良く言う。これもきわめて珍しい。およそ社交性というものに掛け、パーティなどに連れて行くと、むつつりとした態度で年長の上司をハラハラさせるタイプの男なのだ。同年代のヤンと関わることで、人当たりが良くなつたのならカレルには喜ばしいことであつた。

「お気になさらないくださいませ。マウリッツ様からエツシャー先生のお世話を言いつかつてますし、騎士団本部は殿方ばかりですもの。お世話になる以上はこれぐらいのことはさせていただきますよ。あ、宿直の方の制服もお洗濯させていただきましたし、明日にはお部屋の掃除もしたいのですけれど。立ち入つてはいけませんところもあるでしょうから、教えていただけませんか？」

「ああ、それでは、明日の朝食後にも手の空いているものに案内させます」

「ありがとうございます。お二方も今日はこちらにお泊りですか？朝食も用意させていただきますので。嫌いなものがございましたらおっしゃってください」

「これはこれは大変気の利いたお嬢さんですな。良い嫁さんになることでしょう。何分、男所帯で食事などいつも店屋物を買出しにいかせていたので、大変うれしいことです」

『嫁さん』のところで、シモンはニヤリとわらい、ヤンは危うくワインを吐き出しかけた。会釈をしてサスキアが部屋を出した後、カレルがぼつりと言う。

「なるほど。最大の収穫は別にあつたみたいですね」

ヤンは咳払いをしてから、話を元に戻した。

「博士は吸血鬼に必要な、言うなれば糧食の量と製造方法、マウリツツは吸血鬼を人為的に不死鬼とするための処方と薬品を残してきました。これによって、吸血鬼を使う不逞の輩に対抗せよということでしょう。二人が今はどこにいるかはわかりませんが、まさか私にすべてを押し付けて逃げているだけと言うことはないかと思いません。考えがあつて、何か敵を手玉に取るための行動をとっていることでしょうかね」

「まあ、エツシャー先生を手玉に取る余裕もありなわけですからね。スタンジエ局長には」

ヤンは茶化してばかりのシモンをジロリと見てから話を続けた。

「マウリツツの屋敷で捕らえた男ですが、敵の一味とは言え下つ端と言うよりも、金を掴ませて、こちら側の小手調べに使われただけでしよう。それでも、多少は手がかりになる情報を引き出せるかもしれないですね」

「そうですね。まあ、拷問に掛ける必要もなさそうですね。なにやらすっかり降参している様子でしたから。エツシャー先生が何かされたのですかな？」

「お近づきの印に奢ってやっただけです。遠慮されてしまいましたたがね。それで気を良くしたようで」

シモンは先ほどとは幾分違った笑みを浮かべた。

「さて、寝る前にその男の顔を見ておきましょうか。まずは敵の目的を確認する必要があります」

ヤン、カレル、シモンの三人が地下牢に現れたとき、スタンジエ邸に忍び込んだ男は食事を終えたところだった。護国騎士団本部の地下牢は滅多に使われることはない。国家転覆を狙う反逆者など早々現れるものではないし、外国の間者などもそうだ。せいぜい、隊内で問題を起こした者への懲罰に使われるぐらいである。そのため、囚人用の食事も臨時で用意したので、近所の市場から買ってきた店屋物である。囚人の食事としてはずいぶんまともであるし、ヤンたちの夕食に出たサシキアの料理に比べればずいぶんみすばらしい。牢の前で見張りをしていた騎士に食器を下げさせて、ヤンが話しかける。

「ふむ。俺のご馳走は断つたのにな・・・」

ヤンの言葉にシモンがクツクツとわらう。男はそっぽを向いて何もしゃべらない。

「が、そろそろ正直に話す気になったんじゃないか？ここは保安兵団ではない。護国騎士団だ。身柄を拘束した者に対する処置は超法規的に行うことができる。とりあえず、言いたくなければいいが、不便なんで名前を聞いておこうか。偽名でもこの際かまわんよ」

「ロビー・マルダー」

「ロビー・・・亡霊ファントム・ロビー？」

「そう呼ばれることもある」

「カレルさん。ご存知なんですか？」

「ええ。保安兵団がやっきになって追っている盗賊ですよ」

「ほう・・・」

ヤンが感心したように言う。サスキアが一人でいただけとは言え、マウリッツの屋敷におそらく数度にわたって侵入してきたのは中々の腕である。マウリッツは医術以外にカラクリの趣味があるから、玄関から案内を請わずに入ろうと思えば、さまざまな防犯装置の相手をせねばならない。名づての盗賊と言つのなら納得がいく。

「変わった男でしてね。大貴族や、文武の高官、高位の聖職者の屋敷ばかりを狙うんですよ。それもいくらでも盗むものはあるのに、せいぜい宝石を一つか二つだけ。なのにわざわざ置手紙を置いていくわけですな。警備の不備をわざわざ教えるような」

「ふん！身分が高いくせにトンマな警備兵を配置しただけで、万全とかタカをくくっているお偉いさんを見ると、ついつい忠告してやりたくなるのさ！」

「わざわざ痕跡は残すが、警備の隙をどうしてか完全に把握できているようで、一度も発見されたことがないですよ。おそらく、置手紙がなければ、盗まれたことにも気付かないでしょうな。痕跡はいくらでもあるのに姿が見えないというので、保安兵をずいぶん悩ましているそうです」

「それで、亡霊か……。で、亡霊が吸血鬼の手先になったわけだ。マウリッツの家はトンマな警備兵はいないが、いろいろと仕掛けがあつて、侵入するのは大変だったろう？」

「手先になつたわけじゃねえ。今回だけの臨時雇いさ」

「では、なぜ、今回に限つて他人の命令で動き、ポリシーを捨てて、マウリッツの家に忍び込んだ？警備に不備のある屋敷に入り込むのがお前の趣味だろう？」

ロビーは突然服をめくつて腹を見せた。わき腹に縫合された傷跡がある。

「ちゃんとした医者が縫合したあとだな。素人ではこう綺麗にはい

かない」

「原因はこれだ」

「説明してもらおうか」

ロビーは椅子に足を組んでリラックスした姿勢になってから話し始めた。腹をくくった様だ。

「一月ほど前のことだ。俺はこの街のはずれにあるファン・ダルファア家の屋敷に忍び込んだ」

「ファン・ダルファア侯の邸宅に？公国筆頭侯爵家にか！」

驚いたのはカレルである。テオ・ファン・ダルファアは十年前の戦争時に公国政府の首班たる国務卿の地位にあつた人物である。伝染性吸血病の大流行に対し、なんら有効な手立てを打てず、ヨアヒム・カイパーが宮廷に解決策を持ち込むまで何もできなかったことから、その責任を取って退いた人物である。だが、今でも公国随一の資産と権力を持つ最大の貴族であることには変わらない。

「ふんっ！何度も入ったことがあるが、警備はちつとも改善されないぜ。あんまりにもみつともないんで、俺が置手紙を置いても内密にしているんだろうな。他にもいくらでもいるぜ。大貴族だろうと政府の高官だろうと将軍だろうと、間抜けなやつは学習能力がないのさ」

「ま、そのへんはわかるが、とりあえず先に進めてくれ」

「ああ。仕事は相変わらず楽だった。前回とまったく同じ経路で侵入できたからな。ところが、屋敷の外に出たところで急に腹が痛くなった。もう、耐え切れないような激痛で、思わずそこにうずくまっちゃった。そこに通りかかった医者に、誰のものは知らんが、ファン・ダルファア邸よりは小さい屋敷に運び込まれた」

「なるほど。あの辺りは名家の屋敷が密集しているからな」

「ああ、それでそのなにやら偉そうな医者が俺を見てくれた。メガネを掛けて、本人が一番不健康そうに見えるひよる長くやせた男だった。名前は名乗らなかつたな」

ルーズでは医者ほどのような事情であっても、名前を名乗ってから治療を行うのが慣習である。誰によって治療されるのかを事前に知る権利が患者にはあると言いつことになっているからだ。

「で、そいつが、俺は盲腸炎ですぐに手術が必要だと言った。確かに激的な腹痛だったんで、手術には了承した。麻酔で眠らされ、二、三時間ほど寝て起きたときにはこうなっていた」

わき腹の傷を指して言う。

「眼が覚めたときにはさっきの医者はもういなかった。妙に色つばいねえちゃんが一人居ただけだ。一応看護人の服装をしていたが、まあ、まったくらしくなかったね。目つきがちよつと妙だった。なんていうか、感情がないと言つか、無愛想つてのとはちよつと違うな。まあ、ともかくその女が言いやがった。俺の体に毒が入っていると。毒の入った袋が破けるまでに取り除けば助かるが、それをしほしければ、言うことを聞けとね。マウリツツ・スタンジエの屋敷に忍び込んで、その研究成果を盗んでこいつで命令だったわけだ。隠匿している吸血鬼に関する研究成果を盗め、成功すれば大金を渡すとも」

「なんでそんなものをほしがるのか、理由は聞かなかつたのか？」
「知らんね。まあ、やつらは医局長が伝染性吸血病の治療方法を公開せずに隠匿していて、それによって利益を得ようとしているとか何とか言ってたが。そんなもの信じるほど俺も馬鹿じゃないさ。ところで、こつちの先生はそんな命令に従わなくても、手術してくれらんだろ？」

「ふむ。まあ、先に手術を受けた屋敷の位置を教えてください」

カレルがファン・ダルファー家周辺の詳細な地図を持ってこさせて確認させた。

「空家だな。元々は・・・たしか、国務卿ファン・レオニー閣下のお住まいじゃなかったかな？就任後は公館に移られたが、確かこの屋敷に住んでいたはずだ」

国務卿ベルト・ファン・レオニーはテオ・ファン・ダルファーの後任としてその任に当たっている人物である。戦争と伝染病の流行から国家を立て直すのに手堅い功績を挙げている。

「うーん・・・ファン・レオニー閣下が敵の一味というのはちよつと考えずらいですね・・・。元の屋敷で今は無人なのならなおさらです。ファン・ダルファー候についてはどうですか？」

ヤンがたずねた。護国騎士団の任務には国内の不満分子の動性を把握することが含まれる。国務卿を退いたいきさつからすれば、逆恨みをしていてもおかしくはない。が、国政の頂点にいたほどの人物が、これほどの暴挙に出るといふのは想像しがたい。

「まあ、確かに現在の境遇に納得されているかどうかと言えば微妙でしょうが、だからと言ってこんな暴力的な陰謀を巡らす方でもないですね。やるなら、もっと政治家らしいやり方でやるでしょう。特別妙な動きをしている様子はありませんな」

カレルが答えると同時に一人の騎士が牢に入ってきた。顔が完全に隠れるフルヘルムを被っている。これは一見異様なことではあるが、護国騎士団本部全体に緊急体制が敷かれているので、警備担当者の

一部は完全武装になっている。特に不信には思わなかった。

「何かあったか？」

シモンが問いただした瞬間、騎士がロビーのわき腹、ちょうど縫合された傷の辺りを拳で強く殴った。アバラが折れる音が聞こえるほど強烈な一撃である。

「ぐっ……！」

「な、何をするっ！？」

ロビーのうめき声とカレルの叫び声が重なった。さらにそれと同時にシモンが腰の剣を抜いて切りかかった。カレルはそのことにも驚き、啞然として身動きもできない。

ガッ！

シモンの横殴りの一撃がフルヘルムを直撃し、その勢いで騎士の頭から吹っ飛び、石の壁に当たってけたたましい音を立てる。

兜が脱げた騎士は奇妙な顔をしていた。いや、顔は見えていない。大きな色つきのメガネのようなものを付け、顔の下半分は布で覆われている。呼吸に合わせて、口を覆う布の一部が膨らんだり縮んだりを繰り返していた。

「不死鬼だな！？」

ヤンはそう言いながら身構えた。今は丸腰である。ヤンは剣は学ばず、短槍を使う武術に長けているが、多少は素手での格闘術も心得ている。しかし、相手が不死鬼となれば、通用するかどうか自信は

ない。

「・・・」

シモンとヤンが男の前に立ちはだかった。いや、女かもしれない。顔が完全に隠れており、体は鎧を着ているので、性別の判別すらできないのだ。異形の敵はシモンの力任せの一撃をまともに受けたにも関わらず、まったくダメージを受けた様子がない。普通の人間ならありえないことであった。

敵はチラリとロビーの様子を見た。口から少量の血を吐き出し、ビクビクと痙攣している。それを確認すると、鎧をきいているにも関わらず驚異的な速さでヤンに襲い掛かった。どちらも武器は持っていない。力任せに爪で引っかくように手を振り下ろしてきた。

ドオオッ！

ヤンは僅かに横に動いて一撃を交わしたのだが、勢いあまつた一撃が石畳の床を叩き、何枚かを破壊した。人間離れた力であることは疑いない。次の瞬間、ヤンは床にたたきつけられた腕を捕まえ、体の向きをすばやく変えて相手を投げ飛ばした。

タンッ！

壁に向かって投げつけたはずが、空中で姿勢を変え、壁に足をついて衝撃を吸収する。床に下りた瞬間、体制を崩したヤンに見せかけの攻撃を浴びせた。カレルやシモンが反応できないでいるうちに兜を拾い、牢の外へ駆け出していった。一瞬後には窓の割れる音が聞こえ、罵声が響き渡った。

「そいつを追え！」

「追ってはいけません！」

カレルの指示をヤンが取り消した。

「こちらに備えのない以上、並みの騎士では何人いようと被害者が増えるだけです。顔に付けていたマスクはおそらく臭気結界の影響を受けなかったためのもの。理性のある、それにおそらくは何らかの戦闘訓練を受けている不死鬼の職員です。怪我人ならまだしも、吸血鬼が増やされては、対応のしようがありません」

ヤンの額から血が流れていた。最初の一撃を避け切れていなかったのだ。

「至急、現在本部内にいる人間をすべて一箇所に集めてください」「わかりました・・・」

答えたカレルはすぐに指示を出しに行こうとしかけて、すぐに足を止めた。ロビーを介抱しようとしているシモンの様子が気にかかったのだ。

「ヤンさん・・・これは・・・」

「ちっ・・・やはりか・・・。すぐにマウリッツの残した薬と私の道具箱を持ってきてください！」

倒れて動けなくなっていたロビーが、奇妙な動きでのたうち始めた。アバラが確実に折れているのだから、そのような動きをすれば激痛がはしるはずである。だが動きにはまったくそうした様子はない。獣のようなうめき声をあげる。

「いや、敵は我々があの薬を取りに行くところをつけて、持ち去ろうとする可能性がある。シモンさん、お願いします。何名かをつれて、樽ごと持ってきてください。決して隙をみせないように」
「わかりました」

シモンは抜き身の剣を持ったまま部屋を出て行った。カレルも屋敷の者全員を大広間に集めるために出て行った。唇を噛み、爪が食い込むほど硬く拳を握りながら、獣に変わろうとしているロビー・マルダーをじっと見て、独り言を言った。

「うかつだった。結界を張るだけで安心していたのは私だ……。相手が臭気対策をしてくる可能性に対応してなかったなんて……」

焦燥と前進

シモンは焦ってはいなかったが、ヤンと同様に自分を責めていた。敵のことを舐めていたとは言わないが、甘く見ていた部分があったのは確かであった。ヤン・エツシャーの明哲さと実績に安心しきっていたのだ。相手は十年前の獣の群れ同然の哀れな吸血鬼共とは違うということわかっていなかった。

十名ほどの部下を伴い、急ぎ足でヤンが宿泊するのに使う部屋に向かった。全員、抜剣させている。

ガシャンッ！

「キヤーツ！」

部屋までの最後の角を曲がった時に、窓の割れる音と、女性の悲鳴が聞こえてきた。サスキアの声である。

「なぜ、サスキアさんがっ!？」

シモンは乱暴にドアを開け、飛び込むように部屋に入った。

奇妙な光景だった。部屋にはサスキアと先ほどの侵入者がいる。シモンたちの向かう部屋に先回りしていたのだ。だが、その侵入者は耳を押さえてうずくまっていた。サスキアがきよとした表情でこちらを見ている。

一瞬、シモンもあっけに取られながら、すばやくサスキアと侵入者

の間に回りこんだ。マウリッツの薬やカイパー博士の日記は彼女の背後にある。

「く……こ、小娘……」

侵入者が発した声は女性のものだった。それも驚くべきことではあったが、なぜこの女が倒れているのかわからない。

「わ、私、エツシャー先生のお荷物を整理しようと思って……もしたら、窓を割ってこの人が入ってきたんです……思わず悲鳴を上げたら……」

シモンは理解した。不死鬼の戦闘力に圧倒され忘れていたのだ。たとえ不死鬼であつても吸血鬼の変種ではない。道具を使えばその弱点を補えるが、想定していない攻撃には対応できないのだ。

「少々、不快なことをしますが、お許してください」

シモンは、自分の剣を窓に向けた。そして、そつと切っ先をガラスに触れさせ、軽く引つかくように動かした。

キーキーッ！

寒気がするような不快な音を立てる。サスキアも部下の騎士たちも思わず耳を押さえて、肩をすくめた。だが、侵入者の反応はもっと極端だった。狂ったようにもがき苦しみだしたのだ。まさしく発狂寸前で、頭を抑えて、強烈な頭痛に耐えるような様子であった。

吸血鬼は視覚、聴覚、嗅覚が常人よりも遥かに優れている。暗闇でも不自由なく行動でき、隠れ潜んでいる人間を迷うことなく発見し

て餌食にすることができた。しかし、人間の視力や聴力がそこまで強くないことには実は意味があるのだ。人間の体の構造では、それ以上、それらの感覚が発達したとしても不都合なのであった。臭気結界だけではない。こうした甲高い音も人間にとっては不快なだけでなく、彼らにとっては、神経に直接ダメージを与えることになる。部屋に飛び込んだ瞬間に、侵入者が倒れこんでいたのは、サスキアの甲高い悲鳴がやはりダメージになったのである。至近で聴いたのならなおさらであろう。

数名の騎士が剣を構えて侵入者に近づいた。その瞬間、女は弾かれるように立ち上がり、シモンの部下何名かを突き飛ばして、割れた窓から外に飛び出した。三階から飛び降り、庭を数回跳ねるように移動して、塀を一息に飛び越した。そのまま闇にまぎれて消える。

「サスキアさん。お手柄ですね。あなたは声一つで強力な不死鬼を撃退してしまった」

「え？」

「吸血鬼は甲高い大きな音を聴くのが耐え難い苦痛なのです」

「はあ・・・え、あの・・・それは存じておりますけど・・・」

「あなたのおかげで勇気がわいてきましたよ。どんな強力な不死鬼とでも戦えるからね」

「ええ、あの・・・勇気がわいてきたとおっしゃるのならいいんですけど・・・。」

シモンは深刻な気持ちから脱することができた。もちろん、サスキアは不死鬼に襲い掛かれ、恐怖から思わず悲鳴を上げたに過ぎないが、そんなことでも不死鬼に計算違いを起こさせたのだ。不死鬼が危険極まりない、理性を保った吸血鬼で、どす黒い悪意を持っていたとしても、猛獣の体に人間の頭が乗っているだけに過ぎない。人間同様に考えることができるだけなのだ。ミスもするし、計算違

いもある。

「あの、ヤン・・・いえ、エッシャー先生は？まさか今の人に・・・」

ファーストネームで呼んでしまったのは、まだ若干動揺しているためであろう。心情的には、親しい幼馴染のままなのを、ケジメをつけて『先生』と呼んでいるだけなのだ。

「いえ、先生は・・・軽症を負われましたが大丈夫です。あ、それより急がないと！スタンジエ局長の家で捕らえた男が、今の女のせいで吸血鬼化しようとしています。エッシャー先生の指示で道具と薬を取りに来たのです」

「私も行きます」

「え？だめです！完全に吸血鬼化するようなことがあれば襲ってくるかもしれない！危険です！」

「危険というならここも危険です。さっきの人がまた戻ってこない保障がありますか？私はマウリッツ様のお屋敷に参る前は、義姉が営む診療所で看護婦をしておりました。伝染性吸血病であろうと患者の治療をするのであれば、それをお手伝いすることはできます」

シモンは少し考えたが何せ時間がない。何より、彼女の言うことはもつともで、ある意味では一緒に来るのが一番安全と言える。とりあえず、承諾して部下たちに荷物を持たせ、急いで地下牢に向かうことにした。

「本部庁舎内にいる者は大広間に集合するよう通達を出しました。」

まもなく全員がそろつはずです」

「現在本部にいる者だけでなく、近隣にいて集まれる者はすべて集めてください。もう一つ、念のため完全武装している者も全員兜を取って顔を出させてください。見知らぬ顔の者がいたらすぐに声を上げさせるのです。他にも庁舎内に潜んでいる者がいない保障はありません。さあつ、早く！」

「はつ、承知しました」

ヤンの迫力に僅かに怯みを覚えながら、カレルはもう一度地下牢の外に向かつて走り出した。まるで戦場にいるときのウィレムである。腹違いとは言え血筋というものだろうか。

「道具と薬を持ってきました！」

「すぐ回りに並べてください。それから熱湯を沸かして！急いで！手遅れになる！」

いつもとはまったく違う雰囲気のヤンにシモンもあつけにとられた。それは部下たちも同様で、彼らはすくみあがってしまった。だが、そうはならない者が一人だけいる。

「私は道具を消毒します！シモンさんは先生に白衣を着せてください。他の方はベッドを部屋の中央に運んで、患者をそこに寝かせましょう。大丈夫。この方にはまだ精神異常の兆候は出てはいません。血液を大量に失う吸血からの感染でないなら、症状が出るのに時間が掛かるはずです。暴れたりはいしないでしようから、慎重にお願いします」

テキパキと騎士たちを仕切り始める。サスキアは伝染性吸血病患者を見るのは初めてだが、文献ではいくらでも読んだことがあった。マウリッツの講義も受けており、並みの医者よりもずっと詳しいの

だ。

「サスキア！何故ここに！いや、シモンさん！なぜ連れて来たのです！」

「貴方の部屋を片付けておられたのです。私が部屋に入ったときには、さっきの不死鬼が薬を狙って襲撃してきました。なんとか撃退できましたが」

「それはいいですが、なんでここまでサスキアを！危険じゃないかっ！」

誰もがこの物腰の柔らかい男が、これほどの剣幕でものを言うとは思っていなかった。シモンでさえ言葉に詰まる。が、いきり立つヤンの口に戻るから不意にマスクをつけさせた者がいる。サスキアであった。

「私が自分でここに来たのです。あなたのお手伝いをさせてもらうために。お話ししてませんが、私の義姉カリス・クリステルはアメルダムで診療所を営んでおります。マウリッツ様のお屋敷に入る前は私もそこで看護婦として手伝っていたのです。何より私はマウリッツ様にエッシャー先生、あなたを頼むと言われています。少しでもお役に立てることがあるなら、いやと言われてもさせていただきますわ」

つい先ほどまで、怒気をみなぎらせていたヤンも、シモンや他の騎士たち同様に、ぼかんと口開けて呆けてしまった。サスキアは手術用に消毒された手袋を、突っ立って動かないヤンに手際よくつけさせ、白衣に腕を通させながら、シモンたちには聞こえない小さな声で耳元にささやく。

「ヤン、自分を責めるのも八つ当たりもおやめなさい。誰にだって

失敗はあるし、まだやるべきことがあるのよ。患者を目の前にしたら、助けることだけを考えるのが本当の医師じゃなかったの？私はそういうあなたを手伝うために、ずっとこの日を待っていたのよ」「まるで子供をあやす母親のように、やさしい、しかし力のある声であった。

一つの記憶がある。病で母親を失ったヤンはその時から医師を志していた。往診に来た医者には臨終を間近にした母を診察しながら、ヤンに向かって治療代の話をはじめたのである。母親はすでに手遅れではあったが、最善を尽くしたとも言いがたかった。その話を、孤児院で一緒になったサスキアだけには何度か話したことがある。いつも、この話をした後、サスキアは無神経な医師の態度については何も言わず、ヤンが医師になるなら自分は看護婦になって手伝うと言い、うれしそうに笑顔を浮かべていたのだ。母親を診た医師への恨みではなく、あるべき医師の姿を目指して前向きに生きることができたのは、サスキアのその笑顔のおかげであったかもしれない。

蘇って来た記憶によって、ヤンの中の焦りと苛立ちがどこかに消えていった。

「シモンさん。患者をベッドに載せて部屋の中央に運んでください。それから君は明かりをもつと持ってきて患者を照らすように。そっちの君は氷を持ってくるように。あとは、若くて健康な三人を選んで、このビーカー一杯分の血液をいただきます。採血は・・・できるかい？」

最後の一言は、背伸びをしてヤンの額の傷を処置しているサスキアに向けてのものだった。

「はい。瀉血針の扱いは大丈夫です。その方と、あなたは少し顔色が悪いでの無理ですね。そちらのお二方にお願ひします」

シモンと部下たちも動き始めた。この状況にあつて気丈なサスキアの態度と、ヤンの落ち着いた指示よつて、騎士たちも落ち着きを取り戻した。

「・・・せ、先生・・・俺は・・・獣になるのか？吸血鬼に・・・」
「自然発生的な不死鬼は感染の時点で、常人には耐えられないほどの苦痛を感じる。君はそこまで苦しんでいない。進行が遅いだけで、通常の吸血鬼なる時の経過だ」

聞き取りづらい声で話すロビーにヤンは答えた。

「だが、まだ諦めるのは早い。さつき君が盗もうとした薬がある。理性も思考も失わせたりはしない」

「そうか・・・せめて頭の中だけは人間でいられるってことか・・・」

「カイパー博士が残してくれた研究成果もある。人間の血を吸わなくても、必要なエネルギーを補給できる。私が研究した筋力増大を抑える薬もあるから、血の飢えもそうそう頻繁には来ない。他の症状も抑える方法を必ず見つけてみせる。諦めるな！」

「・・・先生・・・あ、あんた・・・すげえ・・・」

「悪いが麻酔している暇がない。痛覚は鈍り始めているとは思うが、まだ痛むかもしれない。我慢してくれよ」

「ああ・・・い、痛いのがらいは・・・我慢す、するさ・・・」

ヤンはまず注射器を使って、ロビーの首筋から体内にマウリツツの

薬を注入した。呼吸が安定し始め、声帯を制御しきれず聞き取りづらかったロビーの声が元に戻り始める。次に両腕と両足にヤンがケテル村から持ってきた薬を注射した。吸血鬼の筋力増大を抑え、エネルギーの制限ない消費を止める効果がある。そうしておいてから、以前の手術で縫合された痕のの近くをメスで切り開いた。

ヤンの額に浮かんだ汗をサスキアがハンカチでぬぐう。

ヤンは切り開いたところから、ピンセットを突っ込んで、豚の腸のような素材で作られた小さな袋を取り出した。一部が破けて中のものが漏れている。腹腔内を塩水で洗浄して残っていた液体を洗い流し、折れてずれたアバラをつなぎ直してから、傷を縫合、石膏を使ったギブスでわき腹を覆った。包帯を巻いたところで手術は終わる。

「まだ血の飢えは来てないと思うがこれを飲んでくれ。エネルギーが補給されて、数日は新たに摂取する必要はなくなるはずだ。その間にカイパー博士の処方から、君の食事になる薬物を用意しておくから」

ヤンは若い騎士三名から採決した血の入ったビーカーをサスキアに渡した。慎重にロビーの口に血液を流し込む。今や不死鬼となってしまう盗賊の目に涙がこぼれた。

「過剰なエネルギー摂取のせいで、眠くなるはずだ。ここで寝てほしい。地下から出れば、臭気結界で苦しむことになる」

「わかった。とりあえず、眠らせてもらおう……。普通に目覚めることはできるかな・・・」

「諦めるな！きつと直してみせる！」

「・・・あなた・・・いい医者だな・・・」

ヤンの付けている血のついた手袋を取るのを手伝いながら、サスキアがうなずいてみせた。

だが、ヤンの仕事は終わりではない。これから集まっている騎士たちに説明しなければいけないことがある。監視のために四名の騎士を残し、他の者は集合場所に向かった。その途中の廊下で、サスキアと並んで歩きながら、他の者には聞こえない声で話しかける。

「サスキア……さつきはすまない。いや、ありがとう。君のおかげだ……」

「ヤン、何でも一人で抱え込んではいけません。カイパー先生も、マウリツツ様も必ずあなたの力になるために、どこかで闘っていらつしやるに違いないわ。お二人のいない間は、できることは少ないけど、私があるの力になります。嫌がっても、絶対ついていくんだから」

「いや、君はすごいよ。その……これからもよろしく……」

サスキアが十数年前の少女のころと同じ笑顔を見せた。

声を低めていても、背後の声に集中していたシモンには会話の内容がわかった。最後の一言のところだけ、一瞬噴出しそうになる。もうちょっと気の利いたことは言えないものか。しかし、この不死鬼との戦いにおいて、サスキアが果たす役割は実に大きいのではないかと思われた。要であるヤン・エッシャーの精神的負担を和らげることができるのは、この女性の存在だけだろうと思われたし、深刻になりがちな護国騎士団員にとっても心の支えとなるであろう。

「すでに聞いていることと思うが、この護国騎士団本部に不死鬼の
工作員が現れた。一名、先に捕らえていた敵の工作員がその者の手
によって吸血化させられたが、エツシャー先生の処置により、理性
を保ち、吸血への渴望も抑えることに成功している。これから不死
鬼対策を先生から説明してもらおうからよく聞くように！」

カレルが緊張した口調で訓示した。手術から戻ったヤンの様子が変
わっていることを不思議に思ったが、シモンに耳打ちされて納得す
る。サスキアと言う女性の強さに感心した様子であった。

「まず、全員通常装備の剣以外に、対吸血鬼用に用意されたラツパ
を持ち歩くことを義務付ける。今回は臭気結界を破られたが、音に
よる攻撃で撃退できた。これにもいずれ対策を練ってくることだろ
うが、今はまだ有効なはずだ」

全員、引き締まった顔で背筋を伸ばして聞いている。医者
の指示で動くなどというのは、本来不名誉に思う者も多いはずだが、ヤンの
声はまるで將軍たるウイレムの声に等しく聞こえた。ヤンがウイレ
ムの実弟であることを知らない者も、優れた資質を持つ指揮官とし
てヤンのことを認めたのである。

広間に集まっているのは、護国騎士団第三部隊の千名に加え、本部
付で本来ウイレムの直轄である騎士団長親衛隊千名、それに保安兵
団から出向してきている千名の兵士で合計三千を数える。当直以外
の者もすぐ近くの独身寮か、近所の既婚者向け官舎に住んでいる者
が多いので、ほぼ全員を集めることができた。元々緊急配備で、多
くの者が宿直していたのだ。広間には入りきらないので庁舎前の広
い屋外練兵場に集結している。

「これから、今晚のうちにファン・ダルファー邸、旧ファン・レオ

二一邸、公国中央医局庁舎の三箇所を制圧する。一時間後までに編成を終え、朝までには三箇所を完全に掌握せよ！」

どよめきが起こった。法的根拠があまりにも薄い暴挙である。無人で持ち主のいない旧ファン・レオ二一邸はともかくとして、筆頭侯爵家たるファン・ダルファアの邸宅や公国政府直轄機関の一つである中央医局に乗り込もうというのは、あまりにも大胆すぎる話であった。

「エツシャー先生、それは無理というものです！許可が取れません！」

カレルが必死の説得を始めた。ウイレムの責任が問われ、部隊長クラスマで全員の辞表が必要になってもおかしくない話である。

「カレルさん。受身になっては相手に対抗できません。これまでは相手を待ち受ける形でしたが、有利に事を運ぶためには、こちら側が状況をリードする必要があります。躊躇している暇はありません。ファン・ダルファア侯は反乱に加担している可能性が高くなりました。有力者の支援なくして、護国騎士団本部に潜入するなどという大胆な工作は不可能でしょう。本部庁舎の見取り図も手に入れてなければ、地下牢のありかだってわかりません。ファン・ダルファア侯こそがその後援者の最有力候補になります。中央医局にもここ同様、工員が潜入している可能性があります。マウリッツが姿を消した理由もおそらくそれでしょう。マウリッツの立場では密偵が誰かを調査している間に暗殺や拉致をされる可能性を考えて逃げることしかできませんでしたが、護国騎士団の実戦力があれば十分それが可能です」

カレルは沈黙するしかなかった。言っている事は筋が通っているが、

あまりにもことが大きすぎる。

「もう一点、お願いがあります」

ヤンはカレル以外の者には聞こえないように耳打ちをした。さらにカレルは驚愕する。

「護国騎士団を解散させるおつもりですか!？」

あまりのことに声を荒げてしまった。

「責任は私と・・・ファン・バステン家ですべて負います。兄は私にアメルダムにおける全権を委託しました。この決断も是とするはずです。それに、明日の朝には、国公陛下の前に私自身が説明にあらります。事は急を要するのです。事後承諾で動くしかありません」

先ほどとは違った迫力を持ってヤンはカレルを説得した。抗しがたい強い意志がそこには籠められていた。

「・・・わかりました。仰せのとおりにしましょう。部隊の編成はお任せください。各隊の指揮官はどうしますか？」

「旧ファン・レオニー邸はカレルさんをお願いします。ファン・ダルフアー邸はシモンさん。中央医局は私が行きます。それから、本部庁舎には地下のロビー・マルダー氏を守る数名以外一人も残さないでください。あの地下であれば、内側から鍵を掛け、扉を徹底的にふさげば、不死鬼と言えども簡単に進入することはできません。庁舎全体はがら空きになりますから、守りようがありませんので、サスキアも連れて行きます」

「さ、サスキアさんも？」

「一緒に行くのが一番安全です。戦闘になる可能性が一番低い中央

医局の制圧部隊に同行してもらいます。マウリッツの薬やカイパー博士の日記などの資料もすべて持っていきます」

驚くべき作戦であった。全戦力を敵方の三つの拠点に差し向け、本城をがら空きに見せるのである。護国騎士団本部に工作員を潜入させた理由は、騎士団に混乱を起こすことと、ロビーを吸血鬼化させることで口をふさぐ事、そして、カイパー一門の伝染性吸血病研究の成果を盗むことにあった。ロビーの件をのぞけばすべて失敗に終わっている。そのロビーも、薬のお陰で不死鬼となれたから、口止めにはならなかった。護国騎士団はそう簡単に崩れないことを理解しただろうが、研究資料の奪取は諦めていないかもしれない。だが、それすら残っていない本部には用はないはずであった。何より自分たちの本拠地を制圧されては、本部に潜入したところで何にもならない。

「静まれ！責任はファン・バステン家が取る！私の本名はヤン・ファン・バステン。ウイレム・ファン・バステン將軍の実弟である。兄は私にアメルダムにおける指揮権を委託した！私の言葉をウイレムの言葉と思つて聞け！」

ウイレムは相当型破りな人物であり、彼の突飛な行動には皆慣れている。ヤンの発言はまさしくウイレムと同じ迫力を持ったものであり、この異常な命令を実行する抵抗感が薄まっていくことを感じ始めた。

「よく言った！ヤン、成長したじゃないの！」

「義姉上！」

「お姉さま！」

ヤンとサスキアが同時に驚きの声を上げた。

突然、練武上に響き渡った女の声に対してである。本部敷地の門の前に、数名の騎士と共に二人の女性が立っていた。一人は法務官の制服を着た、大柄で気品を漂わせる美女で、ウイレムの妻、ヤンの義姉にあたるシルヴィア・ファン・バステン。もう一人は、ヤンは初対面だが、マウリッツの婚約者でサスキアの義姉であるカリス・クリステルである。カリスはブロンドの髪を後ろで一つにまとめ、女医が白衣の下に着る男装に近い動きやすい服装をしていた。こちらにも長身で知性の高さが伺える、シルヴィアとは幾分違うタイプの美女である。

よく通る声で叫んだのはシルヴィアの方だった。騎士たちの大部分はこの騎士団長夫人のことをよく知っている。彼らにとって、彼女はウイレム本人と同様の存在であった。

「みんな！ヤンをウイレムと同じに考えなさい！型破りなことでも必ずいい結果に結びつける人です！仮に何かあっても、ファン・バステン家が所領や爵位、財産も返上してでも責任を取ります！」

騎士団長夫人の言葉に、練武場にいる全員が奮い立ち、誰の号令もなしに敬礼をした。これで話は決まりである。

「義姉上、何故ここに？」

「何故つて、そのシモン君から使いが来たのよ。状況がこうなれば、あなたたち、不死鬼との戦いの中心にいる者は本人だけで出なく身内にも危険が迫る可能性がある。一箇所に集まっていた方が警護にも都合もいいからつてね。無骨に見えてなかなか気がつくじゃない」

ヤンに向かって、シモンが片目をつむってみせた。これで体制は整

った。ヤンが考えていた以上に理想的な形である。

攻勢と逆撃

カレル・パルケレンネは保安兵団から護国騎士団への応援の人員を中心とした千名をひいきて旧ファン・レオニー邸の制圧に向かった。シモンが護国騎士団第三部隊の千名を率いて向かったファン・ダルファー邸とは程近い位置にある。何事もなければすぐに応援に出向いて合流する手はずとなっていた。

だが、カレルとしては、何かいてくれないと困るのである。現在は使われてないとは言え、所有者は國務卿ベルト・ファン・レオニーのままの屋敷だ。何もなければ大問題となり強制捜査の言い訳のしようもない。ヤンとシルヴィアがファン・バステン家で全責任を負うといっても、そんなことをさせるわけにはいかなかった。いざとなれば、自分がすべてを被って、死を持って責任を取る覚悟を決めている。鎧の中には遺書が隠してあった。部隊を編成する一時間程度の作業の合間にひそかに書き記したものだ。

旧ファン・レオニー邸は不幸にも不死鬼となった亡霊ファントムロビーことロビー・マルダーが手術を受けた場所である。先ほどの侵入者が女性であったとのシモンの証言を考えれば、ロビーに対してマウリッツ・スタンジエの研究成果を奪うことを指示した看護婦と同一人物である可能性が高い。不死鬼の女が護国騎士団本部から逃亡してからすでに二時間半が経っているから、この建物が拠点だったとしても、すでに引き払っている可能性もある。しかし、ヤンによれば不死鬼が長期的に都市部で生存するためには、多くの薬品や設備が必要で、それらすべてを処分している時間まではなかったはずであった。

建物はファン・ダルファー邸に比べればかなり小さい。ファン・レオニー伯爵家も公国の名門ではあるが、資産はそれほどもなく、

国務卿就任前にはそれほど大きな居館を維持する財力はなかった。建物の中には対吸血鬼装備で固めた精鋭三百名をカレル自らが率いて突入し、残りの人員は周辺を包囲させていた。

先行させていた二十人ほどの騎士たちが、対吸血鬼用のラツパを吹き鳴らす音が聞こえた時には、緊張するとともに幾分ほつとした。これで、少なくとも旧ファン・レオニー邸に関しては、制圧作戦を正当化できる。

対吸血鬼用のラツパは通常のものよりも高音で、すさまじいほど大きな音をだす。普通の人間でも苦痛が伴うもので、地位の高い者が多く住むこの地域で近所迷惑この上ないことではあるが、そんなことを考える余裕はないかった。

カレルは急いで先行していた騎士たちに追いついた。そこには、五人ほどの吸血鬼の死体があった。

「突然、廊下脇のドアから現れてきましたが、動きが緩慢で、ラツパの一吹きで昏倒してしまいました。エッシャー先生の指示通り、首を落としてあります」

ロビーのように吸血鬼化の本格的な兆候が出る前ならともかく、完全に吸血鬼になってしまった者は今のところ治療の方法がない。首を落とすか心臓をつぶすかして、確実な死を与えることで、伝染性吸血病の蔓延を防ぐことしかできないのである。死体を良く見るとロビーと同じような手術痕があった。敵は吸血以外の方法で感染される方法をもっているということだ。体内の血液を大量に失った状態ではなく、十分にエネルギーを蓄えたままで人を吸血鬼化させることができるなら、血液を浪費する必要がなくなる。吸血鬼を兵士として使うためには有効な手立てであろう。

吸血鬼たちの動きが緩慢であったことは、彼らが血液を摂取したばかりで、十分すぎる栄養を得たばかりであったことを意味する。血液を十分にとった吸血鬼は半分眠ったような状態になり、場合によっては他人の指示に従順な態度を示す。敵はその状態を利用して、吸血鬼たちを制御しているものと思われた。

「不死鬼がいる可能性もある。気を引き締めて先を進め！」

だが、旧ファン・レオニー邸にはそれ以上の敵はいなかった。ロビー・マルダーを手術したと思われる部屋が発見され、そこには血液と思われる液体の入った小さな袋が多数遺棄されていた。ロビーの腹の中に入れられていたのと同じものだろう。先ほどの吸血鬼もここで手術を受けたのではなからうか。

カレルは詳細な捜査を進めるために二百名の人員を残し、残り八百名を率いて、近くにあるファン・ダルファー邸に向かった。

シモンはヤンが自分をファン・ダルファー邸に向かわせた理由を理解していた。彼はシモンのことをカレル以上に信頼していたのである。不死鬼たちの拠点である可能性がある二箇所のうち、こちらの方を本命とヤンは考えていたに違いない。空き家である旧ファン・レオニー邸の方が都合が良いようにも思われるが、夜間の空き家から物音が聞こえれば近隣から不審に思われても当然である。ファン・ダルファー邸であれば、名門への遠慮から多少の不信感があっても誰もそれを口にすることはない。

ヤンは練武場でのカレルとのやり取りの中で、敵が護国騎士団本部

に潜入するという大胆な工作に出てきたことから、テオ・ファン・ダルファーが関与している可能性が高いと確信したと言っていた。が、実際に確信を得たのは、侵入者が着ていたのが本当の護国騎士団の新しい鎧兜であったからだ。

護国騎士団の装備品は三日前に新しいデザインのを導入する予定だった。それが、吸血鬼騒ぎの対応で支給が遅れていたのである。同じものは騎士団の外部で手に入れることはきわめて難しい。兵員の編成作業中に全ての在庫を確認したが、紛失したものは一つもなかった。この鎧兜の製造元が、テオ・ファン・ダルファーの出資で運営される武器職人組合だったのである。

何よりシモンの勘が、この建物に不死鬼が潜伏していることを告げていた。シモンは無骨な騎士で、たいした教養もないが、動物的とも言える勘の鋭さを持っている。護国騎士団でも随一と言われる剣技と共に、その鋭敏な危機察知能力はウィレム・ファン・バステン將軍にも認められ、若くして第三部隊副隊長に抜擢されたのである。兵士に扮装した不死鬼にいち早く気づき、すぐさま攻撃に出ることができたのもこの能力のおかげであった。

シモンは旧ファン・レオニー邸でのカレルよりもさらに慎重な作戦を取った。第三部隊の騎士たち千名のうち、五百名で邸宅の周囲を包囲し、三百名はあらゆる入り口と出入り可能と思われる窓の前に配備した。二百名がシモンの指揮で突入を行う。突入と同時に入り口と窓にいる騎士たちが、内部にニンクと香草の臭気を送り込み、さらに対吸血鬼用ラッパを同時に吹き鳴らした。無防備な吸血鬼であればこれだけで、殺すことができる。

しかし、相手は理性と思考を維持したままの不死鬼である。臭気結界への対抗手段を持っていることはすでにわかっているし、ラッパ

での攻撃もどこまで有効かはわからない。ただ、出発前にヤンは、仮に耳栓などをしていても、ある程度の効果は期待できると話していた。耳栓は鼓膜に空気の振動を伝えることを遮断するが、耳は空気の振動だけを感じするわけではない。全身、特に頭部の骨を伝わってくる振動も音として感知することができる。もちろん、耳栓がない場合と比べれば遥かに鈍感にはあるが、相手は必ず抜けた聴覚神経を持つ吸血鬼である。音量以上に高音であることが吸血鬼のダメージを大きくすることも、シモンがガラスを引つかいた際の不死鬼の反応からもわかった。昏倒させたり、行動不能にすることはできなくとも、なんらかの影響はあるはずだった。

けたたましい音が鳴り響く中、邸内に突入したシモンと騎士たちはすぐに異常に気づいた。テム・ファン・ダルファーは七年前に妻を失い、十年前の戦争で息子も失っている。公爵家の名籍を残すために、親類から養子を取ることを公国政府からも薦められていた。だが、だからと言ってこの建物に彼が一人で住んでいるわけではない。使用人もいるし、ロビー・マルダーにトンマといわれた警備兵たちもいるはずである。それが、人の気配がまったくないのだ。使用人たちがいればこの音と煙に驚いて出てくるであろうし、警備兵はそもそも屋敷が包囲された時点で気づくはずである。

ファン・ダルファー邸は屋敷というよりも、やや小規模の城と言ってもいい建物で、中央部には屋根から突き出た高い見張り塔が付いている。実は地上から進入可能な窓も数えるほどしかない。筆頭公爵家たる格式から、私邸であっても、有事の際には出兵の拠点として、または籠城に耐えうるような設計になっている。多数の不死鬼たちがここに立てこもって応戦するようなことがあれば、制圧することは困難であつたらう。

シモンは建物のほぼ全体の捜査を終えた時点で、初めてこの塔の上

ることにした。螺旋階段は幅が狭く、大人数で上ることは難しいため、敵がいた場合には危険が伴う。十名の精鋭を選び出し、シモンが先頭になって階段を上り始めた。

ヤンが向かった公国中央医局本庁の場合は他の二箇所とは目的が違った。不死鬼たちの拠点であるというわけではないし、そもそも吸血鬼の専門家が多数在籍する建物内に、不死鬼が潜入すると言う危険を冒すとは思われなかった。いるとすれば、普通の人間の密偵である。

中央医局も護国騎士団同様、緊急体制をとっていたため、深夜であっても多くの職員が庁舎内にいた。医師や看護婦も多いが、役所であるので多数の事務員もいる。騎士団長親衛隊の騎士達を引き連れて乗り込んだヤンは、建物周辺を包囲した上で、庁舎内の全員を大講堂に集めた。数百名の職員全員の点呼と本人であることの確認を行う。出勤しているはずの事務員三名が出てこず、庁内を搜索したところ、二名が薬品庫で服毒自殺しているのが見つかり、一名は裏門から逃亡を図ったうえ、親衛隊の騎士に発見され、追い詰められたところで舌を嚙んでやはり自殺した。

職員の調査と並行し、主に親衛隊の調査部のメンバーによって、資料室での調査が行われた。同行したシルヴィア、カリス、サスキアもこの作業に加わる。全員ロビーの脇腹の手術痕をデッサンした紙を手に持っている。中央医局では登録されている医師の行った手術の全記録を保管している。手術痕のデッサンはもつとも重要な資料であった。身元不明の死体が見つかったときなどにも使われる。

ロビーのものと同じ癖を持つ手術痕の絵を見つけたのはカリスであ

った。彼女はアメルダムで診療所を営んでいるが、同時に公国中央医局の非常勤参事官でもあり、マウリッツと知り合ったのもこの関係からであった。自身が医師であるので、手術痕から見て取れる執刀医の癖などはすぐに判別できる。

「執刀医は、フィンセント・ファン・クラツペ。38歳。手術をした時は、医局直轄の診療所の所長だったが、今はたしか検死室長に異動していたはずだわ」

検死室は保安兵団や護国騎士団に協力して身元の不明の死体を鑑定したり、変死体の死因を確認するのが仕事の部署である。検死室長はあまりなりがたがる者のいない役職ではあるが、職務の性質上、優れた観察能力を持つ者でなければならず、解剖の技術も必要なことから、十分な経験が要する。ファン・クラツペはマウリッツと同年代だが、マウリッツに引けをとらない腕を持つと噂されるほどの男である。人事部の資料に含まれていた似顔絵も、ロビーの証言を元に護国騎士団で作成したものとよく似ており、この男がロビーの体に吸血鬼の血液を仕掛けたと見てほぼ間違いなかった。

「診療所の所長になる前は伝染性吸血病対策室の研究員だったから、吸血鬼には詳しいはずよ。個人的に研究も続けていたかもしれない。とくに亡くなっているけど、両親はかなりの資産家だったはずだし、資金は十分にあったんじゃないかしら？ファン・ダルファー候がスポンサーなら、なおさらね。ああ、候とは遠縁だったかも・・・。ここまで大それたことをする人とは思わなかったけど、陰険な奴ではあったわね」

「カリスさんはこの男をご存知なんですか？」

「私がこの会議に出席したときにね。食事に行きませんかって誘われたことがあるのよ」

「はあ・・・、それで？」

だ甲斐がありました。時間をかければ、潜伏していた密偵たちに、資料を処分されていたかもしれない」

「そうね。いい判断だったわ」

シルヴィアは護国騎士団長の夫人であるというだけでなく、女性でありながら国務府と司法府の特別顧問を勤めている。稀代の才女であり、社交界でも名づての女性で、公国政府の要人や大貴族、さらには外国の王族などにも広い人脈を持ち、国公陛下も一目を置く実力者である。男に生まれていれば、今頃は国務卿に就任していたのではないかと言われ、実際、開明派の優勢なルワーズ公国でも初めての女性の国務卿に推す者も声もあつた。こういう作業一つとっても、資料調査に慣れた騎士団長親衛隊調査部の連中よりも遙かに要領がいい。事実上、この資料室の中のリーダーは彼女であつた。

サスキアもテキパキと資料をチェックしている。

「エツシャー先生！」

二人にしか聞こえない会話をする時以外は、相変わらず他人行儀なままであつた。シモンが感じたとおり、人前ではケジメを付けなければと考えているようだが、実際にはただの照れ隠しかもしれない。

「おかしいですわ。その、ファン・クラツペという方。休暇中なのに十三日前に出張辞令が出ています。行き先は……ドルテレヒト州ケテル村。唯一の診療所でその医師が不在になる間の代理として。診療所の医師は……あら？ヤン・エツシャーって……」

「……つまり、エツシャー先生の代理にファン・クラツペ医師がケテル村に行っているってこと？いえ、そもそも休暇中で復帰届もないのに、出張事例が出ていること自体おかしいわ。手続きとしてありえない。彼が吸血鬼事件の首謀者であるなら、休暇さえ取れ

ばその後は余計な手続きをしなくても行動の自由は得られるはずよ．．．」

口を挟んだのはカリスである。中央医局内の手続きに精通しているのは彼女だけだった。

「サスキア、その辞令の写しをちょっと見せて。」

「あ、はい。どうぞ．．．」

ヤンとサスキアの会話はなんとなくぎこちない。二人それぞれの義姉たちは、密かに笑いをかみ殺した。

「この癖の悪い字．．．カリスさん！これはマウリッツの筆跡では？」

カリスは驚いてヤンから資料をひったくった。

「間違いないわ！十三日前って言ったら、マウリッツがちょうどいなくなつたころよ。私たちには吸血鬼事件に対応するために姿を隠すだけ事前に話してはいてくれたけれど．．．。」

「なるほど．．．マウリッツは私と入れ違いにケテル村に向かつていたんですね。それがわざわざわかるように、こんな手の込んだヒントを残してくれたわけだ．．．。」

「でも．．．なぜケテル村に？」

「それは後で考えましょう。そろそろ夜が明けます。有益な情報は得ることができました。警備に二百名を残して、われわれは撤退しましょう。皆さんには百名の護衛をつけますので先に戻っててください。私は念のため残りの兵力を連れて、ファン・ダルファー邸に向かいます。シモンさんからもカレルさんからも連絡がありません。様子が気になります」

「わかったわ。気をつけるのよ」

そう言っつて、資料室の騎士たちに撤収の準備の指示し始めたのはシルヴィアである。自分も目の前の資料をまとめて、資料棚に戻そうとしたところで、手が止まった。

「あの、エッシャー先生。お気を付けて・・・」

「あ、ああ、先に戻って休んでてくれ」

「いえ、朝食を用意してお待ちしますわ」

「わかった。よろしく頼む」

妙に硬い雰囲気のヤンとサスキアの会話を聞いて、カリスとシルヴィアは肩をすくめて首を振った。

ヤンはいやな予感がしていた。おそらくはカレルかシモンのどちらかはすでに作戦を終えている。先に終えたほうが、残った方の応援に向かう手はずになっていたのだ。心配なのはカレルである。事後承諾を前提に強引に進めたこの作戦について思いつめていたし、護国騎士団本部の地下牢の戦闘では明らかに不死鬼の動きに対応できていなかった。歴戦の騎士と言えど年齢には勝てない。若いヤンやシモンのように自体の急激な変化に判断力が追いついていないのだ。二つの邸宅のうち、中央医局庁舎からの道順で先に着くのはファン・ダルファー邸であった。屋敷の前にはすでにカレルの率いていた部隊の騎士たちがいる。

「エッシャー先生！カレル隊長もシモン副隊長も中央の見張り塔に

登って帰ってこないのです。階段が狭くて数名しか送り込めないと
ころなのですが・・・」

ヤンは塔に急いで向かった。階段にたどり着き、螺旋階段を駆け上
がる。手には短槍を握っていた。

塔の頂上には、やや広い部屋があった。そこにたどり着いた時、床
には十名の騎士が転がっていた。シモンが率いて入った精鋭五名で
ある。カレルは肩ひざを突いて動けなくなっていた。脇腹を抑えて
苦悶の表情を浮かべている。アバラを折られたのだと思われた。

唯一シモンだけが剣を振るい戦っていた。不死鬼と思われる敵は三
名。全員先刻の作業員と同様、色つきのメガネと奇妙なマスクをし
ている。おそらくは耳栓もしているものと思われた。階下で聞いた
シモンの作戦からすれば、耳栓なしでは確実に昏倒しているはずで
ある。

シモンが戦っているのは、長身の男であった。剣さばきにもったく
の間がない。不死鬼の筋力に頼った力任せの剣技ではないが、かと
いって、通常のものとも違う。それは、異常発達した筋力を前提と
して練り直された不死鬼独自の技術体系であった。シモンはよく善
戦しているといえる。押され気味ではあるが、この状態ですでに数
十分は戦っているはずであった。

シモンと戦っている男以外に、先刻護衛騎士団本部で潜入してきた
女の不死鬼と、もう一人、ガッチリと鎧を着込んだ不死鬼もいた。
二人はシモンと不死鬼の剣士が戦っているのを他人事のように見物
していたが、ヤンを見つけた瞬間、女の不死鬼が襲い掛かって来る。

今度は女の不死鬼は武器を持っていた。鎖の先に分銅を付けたフレ

イルといわれる武器である。女の操る鎖がまるで蛇のようにヤンに襲い掛かる。だが、ヤンはその鎖を無視するかのように別の方向に向けて槍を構え、投擲した。もう一人の鎧を着た不死鬼に向けてである。

その瞬間、女の不死鬼はフレイルの動きを変化させ、標的に届く前にヤンの短槍を叩き落した。

「なかなか味なマネをしてくれるじゃないか。ヤン・エツシャー先生」

「見ればわかる。君はこの男の部下だ。上司を守ることを優先するのはすぐわかったからな。ここで戦ったからといって、君らには大した意味がないはずだ。逃げる時間もあつたらうに、何故残っていた？」

激烈な撃ち合いを演じていた、シモンと長身の男が離れた。勝負が付かないために仕切り直しである。絶大な筋力を誇る不死鬼と単独で互角に渡り合えるのは、護国騎士団の中でもシモンと、あとは、ウイレム・ファン・バステンぐらいのものだろう。シモンはかなり消耗しているが、相手の不死鬼の消耗はそれ以上だった。異常発達した筋肉はエネルギーを過剰に消費する。激しい戦いが長引けば普通の人間より先に体力がなくなるのは自明である。だがシモンと戦っていた不死鬼は消耗してはいるものの、力をセーブしていたのか、力尽きるほどではない。戦いは激烈に見えて、お互い探りあいではなかったのかもしれない。

「不死鬼の強さをお前たちに見せ付けておこうと思ってな。そのボウヤは別として、その辺の騎士などいくら集まったところで無力であることを思い知らせただけだよ」

ヤンの質問に答えたのは、鎧の男だった。シモンと戦っていた男は何もしゃべらない。

「この程度で護国騎士団の騎士たちが怯むとも思うたか！」

「そんなことは知らん。われわれは自分たちの実力を見せたかっただけだ。そのうち戦場で合間見えよう」

三人は窓から飛び降りた。かなりの高さがあるが、不死鬼の異常発達した筋肉のバネは五階相当の高さから飛び降りても、その衝撃を吸収できた。屋敷の屋根に飛び降りた彼らは、さらに驚異的な跳躍力で包囲していた騎士たちの頭上を飛び越えて逃亡に成功した。

ヤンは倒れている十人の騎士たちを見た。不死鬼たちは無闇に吸血鬼を増やすつもりはないのか、手に持った武器で彼らを倒している。だが、全員すでに息を引き取っていた。

カレルの応急手当をしながら、シモンに話しかけた。

「よくご無事で」

「あの、長身の男。筋力の異常発達がなかったとしても相当な使い手でした。多少はラツパでの音響攻撃に効果があったのか、平衡感覚が多少狂っている様子で、それでどうにか戦えたのです。残り二人はずっと私と長身の男との戦いには手を出しませんでした、私の部下をこともなげに倒し、あとから応援に来たカレル隊長も女のフレイルの一撃を喰らいました」

「そうですか……。犠牲者が出たことは残念ですが、一味をアメルダムから追い出すことには成功したはずですよ。他にもアメルダムにアジトはあるかもしれませんが、こちら側の動向を知る手段を失ったはずですので、留まることはしないでしょう。今日のところはこちらが有利になったと考えていいはずですよ。奴等がここに残って、

戦闘力を誇示してあのような発言をして見せたのは、こちら側の動揺を誘うためです。逆に彼らはこちらの強引な強攻策に狼狽していたのだと思います。精神的優位に立つためにこの戦闘が必要だったのです」

十人の死体を運び出し、二千五百名の騎士たちと共に本部に撤退を開始した。百名は警備と詳細な捜査のためにここに残る。

作戦は成功ではあったが、明るい気分にはなれない。不死鬼たちの恐ろしさを改めて知ってしまったのである。ヤンやシモンではなく、他の騎士たちがだ。特に第三部隊長カレルの負傷は部下たちの不安をあおるかもしれない。彼は歴戦のつわももので、負けたとなれば敵の手ごわさが十分に知れるからだ。鎧を着た不死鬼の目論見は十分成功したと言えた。

才女たち

三箇所に警備と現場検証のために残した以外の兵力と共にヤンは護国騎士団本部に戻ってきた。騎士たちを統率しているのはシモンである。第二部隊長カレルは負傷しており、馬車で運ばれている。

馬を並べて進む二人の表情は深刻であった。今や護国騎士団の大半の騎士たちは動揺を隠し切れないでいる。カレル・パルケレンネの負傷が主たる要因だが、腕利きの騎士十名がまともに戦うこともなく殺されたこと、わずか三名の不死鬼に眼前で逃亡されたことが、彼らの気を重くしていた。自分たちの力で、強力な戦闘訓練を受けた不死鬼たちと戦うことが無謀なことに思えてきたのだ。

三人の不死鬼のおそらく首領格と思われる鎧の男の目論見は成功していた。ヤンの電光石火の判断で行った拠点への襲撃は、アメルダムにおける不死鬼一党の活動を壊滅せしめたはずであり、状況をリードするという目的は果たせたのだが、その犠牲はあまりにも大きかった。死人が出たことではなく、騎士たちの精神に暗い影を落とすこととなってしまうことがだ。

「ヤンさん……まずいです。これでは今後騎士たちが十分に戦えるかどうか……」

本来、護国騎士団の騎士たちは騎士団長たるウィレム・ファン・バステンの影響を受け、危機に際しても不謹慎なほど明るい表情を失わない連中であった。死人ができれば、葬儀の間はちゃんと喪に服すが、それが終わると、「死者の霊を弔う儀式」と称して、アメルダムの歓楽街に繰り出し、街ごと占領したような体で丸一晩のみ騒ぐのが慣例であった。

今回は作戦中でのことで戦死扱いであるため、喪に服することもないのだが、騎士たちはすっかり意気消沈していた。

ヤンもシモンも疲労困憊している。全員が丸一晚一睡もしていない。しかもこの二人の場合は、前日の朝にザーンを出発し、途中で昼食を取る以外は夕刻までほとんど止まることなく馬をせかしていた。アメルダムに到着した後も、ヨアヒム・カイパーとマウリッツ・スタンジエの居館を探索、吸血鬼化の罠に嵌ったロビー・マルダーの手術をし、そこからさらに制圧作戦を実施したのである。その間には数回の戦闘が含まれている。二人とも騎士たちの動揺を抑える手立てを考える余裕はなかった。

葬列のような二千人以上の集団が騎士団本部にたどり着くと、なにやら香ばしいにおいが立ち込めていた。吸血鬼対策の臭気結界のにおいではない。確かに、ニンニクの香りはするが、ちゃんと調理した食欲をそそるものだった。

「さあ、みんな！お疲れ様でした。犠牲者がでたことは聞いています。残念なことだけど、作戦自体は成功よ。食事とワインも用意したわ！これはファン・バステン家からのおごり！酒の一滴は血の一滴！私たちは吸血鬼と違って血は飲まないけれどもワインを飲んで力をつけるのよ！それこそが護国騎士団の死者への弔い方ですよー！」

貴婦人の割にはやたらと威勢のいい声を上げたのはシルヴィアである。練武場にはいくつもの大なべが用意され、さまざまな食材の入ったごった煮のようなスープが湯気を立てていた。それ以外にも子

牛の丸焼きや豚の腸詰などの肉類を主体とした料理が大量に用意されている。それらに囲まれたスペースには野戦の際に陣地を築くに使う大きな板と杭を使って作ったテーブルが並べられていた。先にシルヴィアたちと共に引き上げて来た騎士団長親衛隊の兵士たちが準備したものである。

だが、騎士たちの反応は鈍かった。同僚の死や指揮官の負傷以上に彼らの気持ちを静めているのは、不死鬼たちの恐るべき戦闘力の高さである。戦死を恐れるような臆病者は護国騎士団にはいないが、なすすべもなく死を迎えるかもしれないと思うと、いつものように宴会に興じる気分にはなれなかったのだ……。

「義姉上……ありがとうございます。しかし……」

パシッ！

乾いた音が突然鳴り響いた。

「おお痛い……」

シルヴィアが大げさに眉を寄せる。おもむろにヤンに近づいたサスキアが思いつきり背中をひっぱっていたのである。ヤンはいつも白衣の下に着ている服装のままで鎧はつけていない。ヒリヒリとするほどの強い平手打ちであった。

「さあ、どんどん飲んで食べてください。次の手立てや作戦はいくらでも先生の頭の中におありでしょうけど、それを話す前に別のことに口を使ってくださいませ。先生がお好きと伺って、鱒のチーズ焼きもたくさん用意しました。ステーン湖で取られたものを仕入れしてきたのですよ。さあ、眠そうな顔したってだめですよ！せっかく

こんなに作っただんですから、しっかりと食べてから休んでくださいね」

わずかに騎士たちの表情が変わった。サスキアが『次の手立てや作戦はいくらでも先生の頭の中に』と口にした瞬間である。サスキアの信頼しきった台詞が騎士たちにあることを気付かせた。

「そつだ・・・我々にはヤン・エツシャー先生がいるのだ！不死鬼の力など恐れる必要はない！戦い方などいくらでも先生が考えてくださる！心配なんか要らないぞ！とりあえず、今は死んだ者の分まで飲んで食えっ！本格的な戦いの前の景気づけだ！」

騎士たちの反応を正確に見取ったシモンの一言で、練武場の雰囲気が一気に変わった。ヤンがいれば戦える。不死鬼は強敵ではあるが、十年前もヤンの頭脳から発せられた作戦で、大量発生した吸血鬼を殲滅できたことを古株の騎士たちはみな知っていた。その男が自分たちの指揮官なのだ。

騎士たちは次々と皿とグラスを受け取り、料理とワイン樽の周りに群がり始めた。なにも心配はない。戦い方はヤンが教えてくれる、それに従っていればきつと勝てる。説明不可能な想念が全員の心のうちに生まれたのである。

だが、そのヤン自身は疲労困憊な上に沈んだままだった。

「あら、サスキアさん。ヤン先生は飲み食いには口は使いたくないんですってよ。あなたが別のことに使って差し上げたら？」

「・・・？」

「え、なんですか？」

シルヴィアが妙な笑みを浮かべながら言った言葉の意味は、サスキ

アにもヤンにもわからなかった。

「お姫様のキスで、王子様の疲れを吹き飛ばしてさしあげてはいかがかしら？」

これはカリスの言葉である。

「な、なにをおっしゃるんですかっ!」

赤面をしてあわてる二人の周囲に哄笑が沸き起こった。

「何ならヤン先生の変わりに俺が!」

「俺も食欲がないから、是非、そっちの方で!」

「いやいや俺が!」

野卑な声が騎士たちの間から飛び交い、大騒ぎとなった。

「ほら!突っ立てたら收拾が付かなくなるわよ!とつとと食べることに口を使いなさい。やるっていうなら、みんなの前で接吻披露したっていいけどね」

シルヴィアは言いながらワイングラスと鱒のチーズ焼きの皿を手渡した。ヤンは目を瞑って下を向き、少したってから顔を上げて言った。

「わかりました。まずは空っぽの腹を一杯にしてからにしましょう」

やっとヤンの表情に明るさが戻った。羞恥の赤みは差したままである。疲れて寝不足の頭で深刻に考えても意味はない。やっとそれに気づいたのであった。

「あら、惜しかったわねえ、サスキア。キスよりワインと料理の方がいいって」

「お姉さまっ！」

こちらも耳まで真つ赤にしたままのサスキアが声を荒げる。再び周囲に笑いが広がった。空が明るくなり始めた屋外で、大人数の奇妙な宴会が始まる。

「サスキアが言い出したのよ。みんな疲れているだろうし、何かねぎらうことはできないかって。カレル隊長が伝令を先行させて事情を知らせてくれたから、何があつたかも知っているわ。指揮官がへこたれててどうするの。飲んで食べて力をつけなさい。そうすれば、あなたならいくらでも戦えるわ」

ヤンは担架で馬車から下ろされて運ばれているカレルを見た。カレルはニヤリと笑ってうなずいて見せた。自分の負傷によって士気が低下することを悟り、その影響を抑える方法をとっさに考えて手をつたのだ。シルヴィアにさえ知らせれば、方法は考えてくれると計算してのことである。戦闘においては無力だった古強者は、負傷しながらも事後処理で失点を補つたのだ。

ヤンはグラスのワインを一気に飲み干し、鱒のチーズ焼きにかぶりついた。すぐにサスキアが新しいワインをグラスに注ぐ。目が合った瞬間、顔を赤らめながらサスキアは笑顔でうなずいた。

「サスキア・・・君には助けられてばかりだ。再会してまだ一日もたっていないのに・・・」

「そのために待ってたって言ったじゃありませんか。私に出来ることなら何でもしますわ」

「ありがとう」

サスキアが照れたように笑い、空いたワインのビンを取替えにその場を離れようとしたところで、突然目の前にシモンが現れた。疲労と寝不足のせいか、まだ始まったばかりなのにすでに出来上がっている。足元が怪しい。

「ひつく・・・お二人さん・・・何でまたこんな隅っこに？こ、こつそり食べる以外のことには口を使おうつたつてだめですよ・・・ほら、するならみんなの見えるところまで！」

「シモンさん酔いすぎですよ！」

「まだ一杯しか飲んでませんよ」

「一杯だけでそんなに？」

「景気付けに部下の前で・・・ビンごと一気いただけですよ・・・ひつく・・・それより、さあ、みんなの見えるところで・・・」

そう言えば手に持っているのはグラスではなく、空き瓶である。ろれつの回らない口調で話していたのが、急にコテンと倒れていびきをかき始めてしまった。シモンは長身の不死鬼と激烈な戦いを演じたばかりだ。ずっとヤンと行動を共にしていたのもあり、その疲労は尋常ではない。

「おい・・・シモンさん？ああ・・・寝てしまった・・・」

「ふ、ふふふつ・・・」

「は、はは、ははは・・・」

二人は顔を見合わせて笑い出した。

朝方の宴会は一時間ほどで終了してしまった。すさまじい勢いで料理と酒が消費されたこともあるが、全員疲労困憊だったのだ。徹夜した者たちが起き始めたのは正午になってからである。

「おはようございます。」

騎士団本部の応接室に入ってきたシモンは、シルヴィアとカリスがすでに起きていたのを見て挨拶をした。結局ビン一本を一气飲みしただけなので、二日酔いにはならなかった。頭は妙にすっきりしている。特別長くはなかったが、深い眠りについて心身の疲労はきれいに拭い去られたようだ。

昨晩のサスキアの一言で、護国騎士団は普段の不謹慎なまでの余裕を取り戻していた。ロビー・マルダーの手術直後にシモンが感じた予感は正しかったのだ。サスキアだけでなく、シルヴィアとカリスの存在も大きい。男共がだらしなないときは、彼女たちが尻をひっぱたいてくれることだろう。

「あら、シモン君。おはよう」

シルヴィアはテーブルの上で何か手紙のようなものを書いていた。すぐ横に立っていた、ファン・バステン家の執事にそれを手渡す。執事はそれを持ってそそくさと部屋から出て行った。

「さて、シモン君には確認しておきたいことがあるんだけど？」

「はあ。シルヴィア様。なんでしょうか？」

「あの二人、再会してからどんな感じだったのかしら？」

「あの二人と言いますと・・・」

「ヤンとサスキアよ」

「はあ・・・」

気のないような返事をしたのは、まだ頭が完全には覚えてなかったからである。少し間をおいて、聞かれた内容のことを理解すると、シモンは例のいやらしい笑みを浮かべ、シルヴィアとカリスにマウリッツ・スタンジエの居館での出来事や、ロビーの手術前後の二人の会話の内容を話した。

「あらら・・・うーん・・・サスキアも照れ屋だからなあ。まあ、二人にしては上出来かしら」

「あら、カリス、二人はあなたとスタンジエ先生とは違って、もう十年以上前から知り合いだったのよ。久々の再会だったって、もうちよっと親密な雰囲気でもいいんじゃないかしら？今の話じゃまるで十代の子供の恋愛じゃないの」

二人の年長の女性は、ヤンとサスキアの二人のゴシップを話し始めた。女の長話に付き合うのも大変なので、シモンは会釈をして、その場を離れようとする。

「あ、お待ちなさい。シモン君。大事なお話があります」

「は。なんでしょうか」

「今の話、ちよっとおかしくないかしら？」

「・・・はあ、どこがでしょう・・・？」

シルヴィアはちらりとカリスを見た。

「シモンさん。サスキアは生真面目な娘で人前で殿方と親しげに話すなんてことはしないわ。他人には聞こえないところでしか敬語を使わずに話したりはしないはずよ。つまり・・・」

「あなた、盗み聞きしてたわね！」

どーんと、音が聞こえてきそうな迫力でシルヴィアがシモンの胸あたりを指差した。

「うっ！」

「う、じゃないわよ。長年剣が恋人だなんて言っていたけど、欲求不満が募って、知人の恋愛事情に聞き耳を立てているようじゃ情けないわよ」

「知り合いの精神科医が言っていたわ。異常性愛の源は性欲求の過剰な抑圧にあるってね」

「ああ・・・、副隊長が性犯罪なんて犯したら護国騎士団の名誉も丸つぶれだわ。どうしましょう・・・」

今度は標的が自分に代わったようである。たじたじになって後ずさるシモンに急にまじめな顔になってシルヴィアが話を続けた。

「まあ、冗談はさておき、あなたもそろそろいい加減結婚でも考えたら？ヤンの精神的負担と医師の仕事についてはサスキアさんが補うわ。あなたはヤンの指揮官としての務めを補佐しなければならぬのよ。でも、あなたの精神的負担はいつたい誰が補うのかしら？」

「じ、自分は大丈夫です！」

「大丈夫だったって、男なんてみんな追い詰められると赤ん坊より無力なものなのよ。ウイレムだってすっかり甘えん坊になっちゃうんだから。でも、重大な責任を負う人にはそういうことも必要なのよ」

『甘えん坊』のところで一瞬、例のいやらしい笑みを浮かべかけたのが、問題はそんなことではない。なにやら話が怪しい方向に進みだした。

「というわけで、私がいい娘を見繕ってあげるから、安心して待ってなさい」

「え、いや、シルヴィア様が？」

「そう。私が。これでも社交界では縁結びで有名なんだから。大貴族から一騎士まで、娘の婚期の遅れを心配するかわいそうな父親たちから、しょっちゅう相談をうけているのよ」

「はあ・・・いや、ありがとうございます」

気のない返事を返しながら、部屋を出るタイミングを逸してしまつたことに気付いた。特に急ぎの仕事もないのだが、年長の女性たちの会話の中に身を置く危険にいまさらながらに気付いたのである。これ以上妙なことを言われないうちに、出来るだけ早く遠ざかりたいのだがそうも行かない。

「さて、しかしまあ、タイプの違う美女が三人もいるって言うのに、すっかり最年少に人気が集まっちゃったわね。やっぱり若さには勝てないのかしら？」

「あら、奥様。年齢よりも人妻と近日中に人妻となる女では、乙女のサスキアとはハンデがありすぎですよ。いたしかたないですね」

実は朝方の宴会の席での出来事で、サスキアはすっかり騎士団員たちの憧れの的になってしまった。酒の勢いもあってであろうか、いつの間にか『サスキア嬢防衛隊』なる有志の集まりまで結成され、騎士団内において犯罪者などの似顔絵を作成する部署の者が、サスキアの顔をデッサンして、入隊者に配っていたりするのだ。曰く『男だけの地獄に舞い降りた清らかな天使を不実な男からお守りすることを聖なる使命とする』のだそうだ。この部屋に来るまでに兵士たちからこの話を聞いたシモンも一瞬入隊することを考えた。こうした度を越した悪ふざけの雰囲気こそ、護国騎士団長ウイレム・ファン・バステンの人格的影響の最もたるものであった。今朝の沈滞した雰囲気から、騎士団員たちの精神が復活を遂げたことが良くわ

かる。

「といつても、サスキアさんだつて、あなたほど直近でなくても人妻予定者のようなものよ」

「どうかしらね。サスキアの生真面目と照れ屋は筋金入りよ？エツシャー先生だつてかなりのものよね。ホントに十代の医生ぐらいにしか見えないわ。サスキアと二人の時は」

話が再びヤンとサスキアに移ってきたので、ほつとしながら、自身も含め、この三名の女性たちの力でどれだけ勇気付けられたかと言うことを考え始めた。シルヴィアとカリスは開明派が優勢で女性の権利の強いルーズ公国にあつても異色の才女である。その気になれば政界で実権を握れると言われるほどの実力者シルヴィア・ファン・バステン、女性ながら医師であり、中央医局参事官の職にあるカリス・クリステル。二人ともこの国を代表する人材であると言える。

サスキアも含め、女性たちは不死鬼たちとのこの戦いをまつたく恐れることはなかった。それぞれが、その力を信じて疑わない人物がいるからである。今はヤン・エツシャー一人しかアメルダムにいないが、彼女たちが信頼する、ウイレム・ファン・バステン、マウリッツ・スタンジエの二人が合流すれば、本当に不死鬼など恐れる必要はないのかとすら思われてきた。

「それにしても、マウリッツってホントにやさしいのよね」

「あら、婚約者ののろけ？」

「自分だけ結婚して幸せになるのは気が引けるからって、弟弟子の世話までしちゃうんだから。私の義妹がエツシャー先生の幼馴染だつて聞いたらすぐに」

独身主義者のシモンは頭なの中で今の話のマウリッツの本音に翻訳してみた。

『自分だけが結婚と言う人生の牢獄に捕らえられるのは癪だから、弟弟子を道連れにしよう』

だが、このことは口には出さなかった。

「ところで、クリステル先生もサスキアさんも美人ですが、あまり似ておられませんね」

「あら、ありがとう。そりゃあ、血のつながりはないもの」

「カリスの亡くなったお父様はアメルダムでも有数の実業家だったけど、慈善家としてもその名が知られていたわ。理髪なサスキアを孤児院で見つけて引き取ったのよね」

「私が妹がほしってせがんだのもあるんだけどね。サスキアは頭もいいし器用だったから、父は私同様、公国医学院に入れて医者にしようとしてたんだけど、本人がどうしても看護婦の方がいいって言って聞かなかったのよね。あの子の頭の中には十年以上、ずっとエッシャー先生の手伝いをする事しかなかったみたいよ」

「なるほど。いやあ、エッシャー先生がですね、さつきお話したように、スタンジエ医局長とサスキアさんの仲を誤解した時に、医局長の女性の好みはわかるって言ってたんですがね」

「ぶっ！誰の好みだか。美人姉妹とか言われることはあるけれども、私とサスキアじゃだいぶ違うわよね」

深刻な事態を脱したわけではないが、この女性たちがいるとずいぶんと気持ちに余裕が出てくるようであった。

ヤンはもう起きているはずだが、この部屋には現れていない。廊下にあった兵士によれば、地下のロビー・マルダーの様子を見に行った

ようであった。サスキアは誰よりも早くに目を覚まし、廊下で出会った騎士に案内を請いながら、本部庁舎の掃除を始めている。

肋骨を折っているカレルは、庁舎で本格的な治療を受けた後、シルヴィアの許可で自宅療養することとなった。

シルヴィアはカリスとくだらない話に花を咲かせながら、しきりに何枚もの手紙を書いている。この夫人は意味のないことはしない。戦略と医療はヤンの範疇だが、政界への工作などは彼女一人の才覚に掛かっていた。

特別辞令

「気分はどうだい？」

「ああ、それほど悪くない。脇腹がたまに痛むけどな」

「そうか。緊急だったので、人間には投与したことの無い試薬を使った。動物実験では効果がでていたがね。筋力の異常発達を抑制する目的のものだが、どうやら、痛覚の鈍化も同じ原因だったみたいだな」

「結果オーライでいいさ。おかげで意外と人間らしい気分で見られる」

ヤンとロビーの会話である。ロビーは脇腹の骨折が治っていないので、ギブスを当ててまだ寝ていた。最初に捕らえられていた地下牢の中だ。ヤンが診察に向かうのも見つけてついてきたサスキアもいる。

「血の飢えって言うのはいつごろ来るんだい？」

「君の場合、本来吸血鬼であればあるはずの、過剰な新陳代謝はない。だから、一日一回ワイングラスに半分程度の血液を飲んでいれば問題ないだろう。のどが渴くと思っただけに言ってくれ。体調のいい若い騎士から少しずつ血液を分けてもらう。血液は保存が利かないが、カイパー博士が長期保存可能な血液に代わる製剤を開発していたから、そのうちそちらに代えよう」

「味はいいのかい？」

冗談を言う程度の余裕はあるようだった。不死鬼として正気を保った伝染性吸血病患者は正気であるがゆえに、人外の獣と化した自分を嫌悪し、自殺を図るものが大半である。ロビー・マルダーはそうした意味で、強い精神力を持つ男のようだった。

「さあね。原材料は牛血だ。試したら感想を聞かせてもらおう。それから、筋力の異常発達を止める薬はさっき言ったようにまだ試薬だ。効果は長くはない。昨晩は全身五箇所に注射したが、普段はこっちの錠剤を持ち歩いて、二時間に一回は飲むように」

「持ち歩く？」

「ああ、昼間は皮膚へのダメージがあるからやめておいた方がいいだろうが、日が落ちてからなら本部庁舎内は出歩いててもかまわんよ。監視はつけさせてもらうがね。アバラの調子がいい時は少しは歩いた方がいいだろう」

ロビーは驚いた。

「臭気結界があるんじゃないのか？」

「痛覚の鈍化が起きてないのなら、嗅覚の異常発達もないさ。たぶんね。出てみて気分が悪くなったらすぐに戻ってくればいい」

「俺が逃亡するとか思わないのか？監視したところで、俺は亡霊フアントム口ビーだぜ。いくらでも逃げ出せるチャンスはある」

「監視は急激な症状の悪化に備えてものさ。逃げ出したりして困るのは君だろう？」

「そりゃあそうだが。」

ロビーはサスキアの方を見ながら言った。

「お嬢さん、あんたは俺が怖くないのかい？俺はこの先生のおかげで正気は保っているが、吸血鬼なんだぜ？それがなくなつて、その吸血鬼どもの手先になつて、あんたを人質にとつたりもした」

「医者も看護婦も患者を恐れたりはしません。ただ、助けたいと思うだけですわ」

「・・・」

サスキアは暖かい笑顔を向けて、昨晚ヤンに言ったのと似たようなことを口にした。

「あなたが私を人質にとつたり、不死鬼たちの手先になったのも、敵の策略にかかったからですわ」

「だが・・・そもそも俺は盗賊だ。犯罪者の治療だの看護だの、恐ろしくはないのかい？」

「犯罪者と言うのも一種の病気かもしれない。体ではなく、心の・・・あるいは人生のと言った方がいいかもしれませんわ？ロビ―さん、ご家族は？」

「盗賊に家族なんているかよ。物心気付いたときから一人だ。天涯孤独ってやつさ」

「私も先生も孤児院にいたことがあります。先生は事情があつて生まれてすぐに、ファン・バステン家を出た後、お母様が亡くなって孤児となりました。私はあなたと同じく、両親の顔も知りません」

「私はその後再び実家であるファン・バステン家に引き取られたが、サスキアは縁あつてクリステル家に引き取られた」

ヤンが口を挟む。サスキアが何を言いたいかはだいたいわかつていた。

「私も先生もそうした幸運なければ、いえ、そもそも、、私は先生と会っていないければ、どんなふうになっていたかはわかりません。人生にとって、人との出会いは栄養のようなものかもしれません。栄養を取らなければ病気になってしまいます。あなたは今までそれが得られなかっただけ。でも、今はもう、先生も私も、それに護国騎士団の方々もいます。伝染性吸血病だけでなく、あなたの人生の病も、きっと治してみませますわ」

『私が先生と』のところで若干顔を赤らめる。ヤンも少し照れて、軽く咳払いをした。

「……すごいことをいう女だな。あんたは……」

護国騎士団の連中も敵方の密偵であったロビーのことを敵視していない。畏に嵌って伝染性吸血病に感染させられたという事実を知り、義憤に燃える者ばかりだった。これもウイレムの影響であろうか。『敵』と言う概念が他の騎士団や兵団とは意味を異にするのだ。

「先生……」

「なんだい？」

「筋力の異常発達を抑える薬はまだ試薬だっただけでいっていただけな？俺を実験台にして、完成させてくれよ。そうすりゃ、伝染性吸血病患者の治療にも貢献できるんだろ？俺のことも治せるようになるだろうし……頼む」

「わかった。せっかくの申し出だ。だが、何かをするときは事前に必ず説明させてもらう。君が納得したときだけ、新しい試薬を使わせてもらうぞ」

「ああ、わかった」

ロビーの目に涙があふれていた。

ヤンがシルヴィアたちのいる応接室にサスキアと共に入ると、カリスが驚いたような顔をした。ただし、妙にニヤニヤしている。

「あら、逢引？」

「違いますっ！」

二人が赤面しながら声をそろえて叫ぶ。

「ロビー・マルダー氏の様子を見てきただけです」

「へえ……二人でね」

これはシルヴィアである。二人は義姉たちには齒が立たない。

「さて、ヤン。夕方には宮廷に行つて、事の顛末を説明しないと行かないわ。そろそろ國務卿閣下も公国元帥閣下も痺れを切らしているはずよ。何事が起こつたかも把握できなくてね。国公陛下への謁見ではだいたい絞られるとは思つけど、ちゃんと根回しはしておくから大丈夫」

先刻執事に渡した手紙は、シルヴィアの実家、ファン・フェルメル伯爵家の党首で従兄弟にあたるアントン・ファン・フェルメールの元に届けられた。実を言えば、結婚前までは、シルヴィア自身がファン・フェルメル家の女当主であった。ファン・レオニー家とならぶ公国有数の伯爵家から、武門の誉れがあるとは言え男爵位しか持たないファン・バステン家に押しかけ女房同然に居座つた際に、相続権を放棄し従兄弟にゆだねたのである。

今回も従兄弟のアントンは快く宮廷工作を引き受けてくれた。現在司法卿の地位にあるアントンは今でもシルヴィアに忠実であった。

「わかりました。謁見へは私、義姉上、シモンさん、それにクリステル先生もご足労願います。私は中央医局の状況には詳しくないので」

「承知したわ」

謁見室には国公ジエローン・ルワーズ以外に二名の公国最高幹部が臨席していた。文官の最高位にして公国政府の首班たる國務卿ベルト・ファン・レオニー、武官の最高位にして軍務府の長たる公国元帥トーマス・ファン・ピケである。国公を含めた最高首脳部三名が列席している時点でこれは単なる謁見ではないことがわかる。ヤンを含めた謁見者三名に対する二人の閣下の視線は冷たい。

宮廷式部官が謁見者四名の肩書きと名前を読み上げる。

「護国騎士団長夫人にして國務府および司法府の顧問を兼ねるシルヴィア・ファン・バステン！」

礼法に従いシルヴィアが片膝をついて頭を下げる。

「護国騎士団第三部隊副隊長シモン・コールハース！」

「クリステル財団総合診療所所長にして公国中央医局非常勤参事官カリス・クリステル医師！」

二人ともシルヴィアと同じように礼を施す。三名とも公国政府と軍の関係者であるからだ。

「ドルテレヒト州ケテル村で診療所を営むヤン・エッシャー医師！」

ヤンだけは膝は付かず、右手を胸に当て、左足を後ろに伸ばす形の略礼で答えた。公職にないものが謁見の際に行うべき礼である。

「以上四名、本日未明アメルダム市内三箇所において、護国騎士団

が実施した強制捜査と戦闘に関する報告に参上したとのことでした」
「報告に来たというが、なぜこの者たちが説明するのだ。シモン副隊長、理由を述べよ！そもそもファン・バステン將軍が不在ならば、アメルダムにおける護国騎士団の指揮権は第三部隊長カレル・パルケレンネにあるはず！何故彼はこの場にいないのだ？」

こめかみをピクピクさせながら、ファン・ピケ元帥が質問をした。シモンは一步前にでて、再び片膝をつき、説明を始めた。

「カレル隊長はファン・ダルファー候の居館における戦闘中に負傷し、現在治療中でございます。命には別状はありませんが重傷です。なので、私が代理としてここに参りました」

「それはいいとしても、なぜ、護国騎士団の作戦の報告にこの二名が出てくる？！」

ファン・ピケが言っているのはヤンとカリスのことである。カレルの代理であるシモンと、護国騎士団長夫人であるシルヴィアはともかく、ヤンとカリスは公式には護国騎士団のメンバーではない。

「ファン・バステン將軍はご自分が不在の間、伝染性吸血病を原因とする集団失踪事件の捜査のため、アメルダムにおける第三部隊の指揮権をヤン・エッシャー医師に委託なさいました。本作戦にける騎士団長親衛隊および保安兵団からの支援部隊の出動については、騎士団長夫人の資格を持ってシルヴィア様が承諾されております。」

『騎士団長夫人』と言う肩書きは、単に騎士団長の配偶者と言う私的な意味だけでなく、臨時の場合、騎士団長本人に代わって、作戦行動を承諾するという公的な役割を持つ。

「クリステル医師は公国中央医局の内情に詳しく、本作戦の意義に

ついでご説明いただくためにご同行いただきました」

「ヤン・エツシャーとは何者か！そもそも軍籍にも公国政府の関係者でもない者になぜ指揮権が委託されたのか？！」

「ファン・ピケ元帥。騎士団内の人事権は特別な場合を除き、騎士団長が全権を持つているはず。民間人の登用は異例ではあるが法に反するものではない」

激発寸前のファン・ピケを制したのは、その半分の年齢にしか達していない、国公陛下たるジェローム・ルワーズであった。26歳と若い君主ではあるが、すでに近隣諸国では名君として知られる人物である。十年前の戦争と伝染性吸血病の大流行の後に即位し、二年目の十八歳から実質的な親政を開始している。法的にも最高権力を握る人物なのだ。

「この四名が報告者として参った理由はわかった。作戦の強行にいたった経緯を説明してもらおう。ファン・バステン夫人。あなたが一番うまく説明してくれそうだな」

君主の発言にベルト・ファン・レオニー伯爵が節度を保ちつつもいやな顔をする。ファン・レオニーはシルヴィアが苦手なのだ。国務府の会議でも幾度となく、国務卿の判断を覆す決議がシルヴィアの発言をきっかけに行われている。何より、数年前はファン・レオニーの秘書官であり、いろいろと不都合なことも知っている女なのだ。国務卿たる彼にとっても、シルヴィアは恐るべき政敵であった。

「は。御意を賜りまして、ご説明させていただきます。フリップ王国側の国境地域における集団失踪事件についてはすでにお耳に入っているかと存じます」

「うむ」

「夫、ウィレム・ファン・バステンはこれを人為的な伝染性吸血病

を利用した陰謀と判断し、その対策を検討しておりました。これは公国中央医局長マウリッツ・スタンジエ医師も同じ意見でございました」

「二人の親交が深いことも存じておる。協力して吸血鬼対策にあたっていたということだな」

国公は理解が早い。シルヴィアの要領の良い説明に適度な相槌を打って、テンポ良く進めさせる。

「はい。ご推察のとおりでございます。スタンジエ医師の分析により、失踪の現場である村に残留していた蝙蝠の糞が、病原たるドルテレヒト蝙蝠のものであることがわかり、人為的な感染事件である可能性が浮上してきました。失踪事件が発生した村々は、ドルテレヒト蝙蝠の住処であるナイメーヘンの森から遠い位置にありましたので。そこで、アメルダムにおける吸血鬼対策をスタンジエ医局長に依頼し、夫はフリッツ王国側国境三州での捜査を自ら行うため、拠点となるザーン市に第一第二部隊を率いて出動したのです。その直前、スタンジエ医局長が失踪したため、実弟に当たるヤン・エツシャー医師、事情があつて母方の姓を名乗っておりますが、本名ヤン・ファン・バステンに協力を仰ぎ、アメルダムにおける吸血鬼対策の陣頭指揮を依頼したのです」

「なるほど。本日未明の騒ぎは吸血鬼対策に関する作戦行動であつたというわけか。では、そこからはヤン・エツシャー医師に説明をしてもらおう。」

ジェロームとシルヴィアの間で会話が始めると、他の公国の幹部はほとんど口を挟めなかった。国公は意図的にそうしているのであり、シルヴィアもそれに倣っている事がわかる。このあたりは、事前の打ち合わせなどなくても、二人には簡単だった。シルヴィアはかつて、まだ十代のころの国公に、政治学と法学を教授していたこと

もある。

「御意を承り、兄嫁に代わって話を続けさせていただきます。」

「いや、全体的な事情はわかったが、君が何者かと言うことと、指揮を取り、このような大胆な作戦にいたった経緯を詳細に聞きたい。この事件に関わる場所から、話を始めてくれ」

「承知いたしました」

ヤンはカレルとシモンが自分の診療所を尋ねてきたところから、正味二日間の出来事を要領よく説明した。

「何故事前に許可を取らなかった！捜査された三箇所は私の所有する建物、筆頭公爵家たるファン・ダルファー侯の邸宅、政府機関たる公国中央医局だぞ。國務卿の裁可なしに捜査するには問題があるすぎる！」

ベルト・ファン・レオニーが叫んだのをジェロームが制した。

「國務卿。作戦前の状況からあなたが所有する屋敷が工作の現場に使われていることがわかっていた。護国騎士団は国内の治安維持に特別な権限を持ってある。あなたが陰謀の関係者であると考えるところも可能な状況だった。ファン・ダルファー侯についても同様。公国中央医局については、実際に反乱側の密偵が潜んでいた。どれも報告などすれば、反乱側に動きを察知されて強制捜査のタイミングを逸していたかもしれない」

若くして明哲な君主にいらまれ、ファン・レオニー伯は何もいえないくなった。さらに・・・

「ファン・ピケ元帥！私は集団失踪事件についてはそなたから聞い

だが、人為的なものである可能性については聞いていなかった。あなたは知っていたのか?!」

倍の年齢であるはずの、ファン・ピケがびくびくしながら返答した。

「ファン・バステン將軍より報告は受けておりましたが、何分、根拠の薄い話に思われましたので、お耳に入れるまでには・・・」

「根拠が薄いといいながら、作戦の結果はそれを証明してある。これはそなたの判断ミスだっ! その方らにはこの事態に対する対応力があるとは思われない。宮廷書記官! 特別辞令を発する! 私の言葉筆記し、正式な書面とせよ!」

すぐさま書記官たちが、国公のみが発行できる特別な用紙を取り出し、ペンを構えた。別々の者が発布するものと控えを同時に作成し、後ほど読み比べることで、間違いを防ぐことになっている。

「ファン・ピケ元帥より、吸血鬼事件の解決までの間、護国騎士団に対する命令権を剥奪する!」

決して大きな声ではないが、謁見室には雷光がきらめいたかのように思われた。

「ファン・レオニー國務卿より、吸血鬼事件の解決までの間、公国中央医局への命令権を剥奪する!」

元帥も國務卿も黙ってそれを聞いていた。頭を下げ、肩がわずかに震えている。

「インテグラ王国側国境地域の群盗討伐と、海岸沿いの治水事業の進捗も聞いていない。手間取っているのなら、そちらに集中せよ!

「この場は下がってよい」

元帥と国務卿、公国の最高幹部たる二人は敬礼をした後でとぼとぼと謁見室を辞去した。

「カリス・クリステル参事官。中央医局の職員であったそのファン・クラッペなる医師はどのような者か？」

頭を下げ、カリスが答える。

「手術と診察の見立ては一流でございました。スタンジエ医局長に比する腕を持つているとの評判もあります。伝染性吸血病や検死に関する研究成果もいくつか挙げており、優秀な医師であったことは疑いありません。しかし、医師としての人格が伴っていないとの評価もございました」

「医師としての人格とは？」

「患者に対する態度が冷たかったり、時に十分な説明をなしに患者に試薬を試すようなことがございました。また、局内では協調性を欠くことも多く、スタンジエ局長の頭痛の種であったようです」
「なるほど。伝染性吸血病に関する研究成果とは？」

カリスは言われて、書簡を取り出して式部官に手渡した。それを受け取って読んだジェロームは一瞬顔をしかめる。

「伝染性吸血病患者の血液からの新薬開発、それも兵士の筋力増大による軍事利用のための・・・確かに医師としての倫理観に問題がありそうな研究課題だな」

「は、スタンジエ医局長はこの論文を読んでファン・クラッペ医師に問題を感じ、中央医局直轄の診療所所長に左遷されたのです。遠縁に当たるファン・ダルファー侯の口ぞえがあったため、検死室長

として復帰させることになりましたが・・・」

「なるほど。ここでもテオ・ファン・ダルファーが関係してくるのか。彼が首謀者であった可能性も低くはないわけだな」

腕を組んでジエロームは考え始めた。

「医局で自殺を図ったという三人の事務員の身元は？」

「現在詳細に身边を調査中ですが、一人はファン・ダルファー侯の屋敷に出入りしていたことがわかっております。残り二人については、ここ半年以内に新規に入局した者たちです」

「なるほど。ファン・レオニー伯の旧居館に現れた吸血鬼たちの身元は・・・ああ、わからんか」

「は、何分吸血鬼の死体は腐敗が早く、身元特定に役立つようなものは・・・」

「ふむ」

これはヤンとの会話である。

一呼吸置いてから、国公は声を高めて宣言する。

「今回の件、事情からすれば、強攻策も是とせざるを得ない。その方らの越権行為については不問とする！」

さらに、再び宮廷書記官の方を見ながら続ける。

「特別辞令を發布する！」

先ほどと同じように書記官たちがあわただしく用紙を取り出す。

「ケテル村のヤン・エッシャー医師を臨時の公国中央医局長代理に任ずる！その職務は伝染性吸血病対策の関連部署への指揮に限定し、

他の件は現状どおり各部署の責任者に委任するものとする。これはマウリッツ・スタンジエ医局長の復帰までの期間の間、有効な人事とする！」

「護国騎士団長ウイレム・ファン・バステンの実弟、ヤン・ファン・バステンを臨時の護国騎士団長代理に任命する！騎士団長がアメルダムに不在のあいだ、護国騎士団本部の責任者として、吸血鬼対策の陣頭指揮を執れ！」

文官と武官の要職の兼任を妨げる法の制限があるための奇妙な辞令であった。記録上は、ヤン・エッシャーとヤン・ファン・バステンは別の人物として扱われるので、これで問題ないのである。あくまで体裁だけの話ではあるが。

「護国騎士団第三部隊副隊長シモン・コールハースを、部隊長カレル・パルケレンネの負傷に伴い、第三部隊隊長代理に任ずる！騎士団長代理を補佐し反乱軍に対応せよ！」

一息置いてからさらに続ける。

「公国中央医局非常勤参事官カリス・クリステル医師を、公国中央医局、伝染性吸血病対策室長に任ずる！ヤン・エッシャー医師と協力して、スタンジエ医局長不在の間、公国中央医局の運営に当たれ！」

三人が頭を下げて、拜命することを宣した。それを見てからジエロームはシルヴィアに向かって話しかける。

「ファン・バステン夫人は護国騎士団長夫人としての役割を引き続き果たしてもらいたい。これは命令ではないので正式な書面とはしない。御身を大切にせよ。あなた一人のものではなかるう？」

ヤンとシモンはぎよっとしたが、カリスは意外な顔をしなかった。

「国公陛下のお心遣い、誠に恐縮でございます。まだ、夫にも話していないことですが、親友であるカリス・クリステル医師がついておりますれば、順調にウィレム・ファン・バステンの世継ぎは育てております」

「うむ。何よりだ。それでは四人ともご苦労だった。下がってよい」

シルヴィアの懐妊の件も驚くべきことではあったが、それ以上に国公自らの特別人事は異例づくめのものであった。ファン・ピケやファン・レオニーが聞いていたらどれかけ反対したかわからない。順当なのはシモンの隊長代理への就任ぐらいのものである。国公自らが民間人へ、正式に護国騎士団長と公国中央医局長と言つ要職の代理となることを命じたのである。

カリスの件にしても、非常勤参事官、それも女性に最重要部署の一つである、吸血病対策室を任せるのであるからやはり異例であった。このあたりは、シルヴィアの依頼で動いたアントン・ファン・フェルメールの事前工作が生きている。短時間の間に国公と連絡をとり、こうした人事が下るように働きかけていたのだ。

「ついに肩書きがついちゃったわねえ。ヤン」

「義姉上、どちらも『臨時の代理』が付いていますよ。ことがすんだらケテル村に帰ります」

「ま、それはいいんだけどね。緊急事態の時以外は田舎にいてくれ。一向に構わないって、ウィレムもスタンジエ先生も言っていたわ。」

あなたほど宮仕えが似合わないのは、カイパー博士ぐらいだつて」「急いで、今後の体制を作らなとなりません。私とクリステル先生はこの足で中央医局に行きましょう。護国騎士団の方は今までとあまりかわりません。シモンさんは先に戻って、カレルさんに報告しておいてください。安心させてあげたい」

ヤンは兄嫁の話を一重に無視しながら、実務的なことに話を移した。

「承知しました。護国騎士団の方で先にやっておくことはございますか？」

「公国中央医局の伝染性吸血病対策室を護国騎士団本部の庁舎内に移します。ロビー氏の治療にも都合がいいですし、彼をケーススタディにして、治療法を確立できるかもしれない。それに対策本部が二つに分離しているのも面倒ですから」

「承知しました。地下牢の入り口に近いところに部屋を用意しておきます」

シモンは敬礼を施した。正式に護国騎士団長からの命令を受けるときの正式な形である。

「ヤン、それじゃ、中央医局の方で用が終わったら、牡鹿亭まで来て頂戴。お食事にお誘いしている方がいらっしゃるのよ」

「え？この忙しいときにですか？」

「今だから会わないといけない相手なのよ」

明哲なヤンにも良くわからないように話そうとするのは、シルヴィアの悪い癖だった。いや、長くヤンに関わっているものは、この男が珍しく困惑する姿を見て楽しむという悪趣味を持つようになる。

「はあ、わかりました。それでは医局から直接牡鹿亭に向かうよう

にします」

「そうしてちょうだい。サスキアさんの料理が食べられなくて残念でしょうけど」

ヤンは二人の年長の女性がこの手の話をやめないことがわかってるので、丁重に無視することに決めたようだ。

「ところで、義姉上、懐妊されていたなんてちっと気づきませんでした」

「ま、あれだけ余裕なく思いつめていたら無理もないわね。あなたも叔父さんよ。まあ、三十も近いのに、未だにお兄さんと呼ばれようとするのはずうずうしいけどね」

「あら、奥様。エツシャー先生も医師ですよ。余裕なんかなくたって気付いたっていいようなものですけど」

「と言うよりも、余裕のありなしに関わらず、ヤンが女の体の変化なんかに気付くはずないわね。産科の経験もないでしょうし」

「三十も近いのにちよつと心配な話ですわね。シモンさんみたいに妙な性癖が付いてなければいいけど。サスキアも苦労するわ」

「ク、クリステル先生！何をおっしゃるんですか……」

無視したところで、二人の話は止まらない。カリスは産科の経験が豊富である。クリステル財団の総合診療所では、珍しい女医が見てくれると言うので、アメルダム中の女性たちに大好評なのだ。老いも若きも身分の上下にも関わりなく、お産などの際には女同士の方が安心できる。一方で、サスキアがカリスを手伝っていた時には男の患者にも大人気であった。ただし、あまり質のいい患者ではない。女性の医者が診てくれると言うので、妙な期待を持った男たちがなだれ込んできたのだ。女医と看護婦の美人姉妹にそうした邪な欲望を持った男たちがあまりに多く集まってきたので、カリスは産科の専門医になることにした。

マウリッツとの交際が始まってからは、カリスとマウリッツの居館で同居を始める前に露払いをさせたいなどと言う理由で、サスキアをメイドとして送り込んでいる。どうせまともな生活状況ではないと踏んでのことであつた。男たちを信頼しているようで、その限界や問題もよく知っていると言うのが、この女医の真価であるかもしれない。

牡鹿亭はファン・バステン家がよく使う、アメルダムの老舗料理屋である。大身の貴族たちが使う洗練された高級店というわけではなく、一般的な市民であつても、月に一度ぐらいの贅沢として利用できる程度の店である。貴族らしくすることの嫌いなウィレムが会食するときによく使い、マウリッツもカリスとの食事はこの店を使うことが多かった。護国騎士団員たちが事あるごとに飲み騒ぐ歓楽街から程近く、あまりに暴飲暴食がひどくなつた夫を見かねたシルヴィアが、居酒屋から襟を引っ張つてこの店に連れ込み、朝まで説教をしたという由緒正しいエピソードもある。

中央医局での仕事は案外早く終わつてしまつた。これもカリスの力である。カリスは非常勤参事官でしかないが、局内でも絶大な人気があつた。看護婦や事務員の女性たちからも憧れのまなざしが注がれ、男性の間でも一目置かれる存在であつた。実を言えば、ファン・クラッペ医師がマウリッツとのスキャンダルをリークした際にも、ほとんど好意的な反応しなかつたのである。やはり、局内で絶大な人気と尊敬を集める医局長と、美貌の女性参事官の交際の知らせに皆思わず納得してしまつていた。業を煮やしたファン・クラッペは噂に『公私混同』と言うおまけを付けてさらに広げたが、まつた

く無駄であった。二人の交際が始まったのは、カリスが参事官に任命された一年以上後であったし、仮に『公私混同』があつたとしても、カリスの人望と見識は参事官としてふさわしいものだったので、何の不都合もないと言ふ意見が大半であつたのだ。

そのカリスがいるので、素性の怪しいヤン・エツシャーなる医師が指揮を執ると言われてもそれほど反発はなかつたのである。また、中にはヤン・エツシャーがマウリッツ・スタンジエの弟子で、若くして十年前の吸血鬼掃討戦で活躍したと言ふことを知っている者もいる。何より、カイパー派の医師であれば、それだけでブランドなのであつた。実際にはカイパー派の医師と言ふのは、カイパー博士本人と、マウリッツ、ヤンの三名しかいない。

カリスと別れ、牡鹿亭に入ったヤンは、先に来ていたシルヴィアをすぐに見つけた。隣には護国騎士団の制服を来てメガネを掛けた若い騎士がいる。若いというよりも幼く見えるが二十四歳で、護国騎士団の財政面を預かる主任主計官ピーテル・ブルーナであつた。ヤンとはアメルダムに来てからの一日の間に何度か顔を合わせてはいるが、話したことはなかつた。

「早かつたわね。そろそろ主賓がお見えになるけれど」

「ええ、クリステル先生のおかげで案外すんなりいきましたよ。各部署の責任者も皆協力的です。明日からは伝染性吸血病対策室が護国騎士団本部に移ります。その辺もクリステル先生がうまくやってくれそうです」

ふと見ると、ピーテル・ブルーナはカチコチに緊張している。物慣れない印象のある童顔の若者ではあるのだが、いったいどうしたことであろうか。

「ブルーナ主任主計官。そんなに緊張しなくてもいいわよ。ここは普通の料理店。誰が来たって普通にしていなと。返って困るわよ」

「は、は、はは、はい！」

「いったいどなたが来るんです？」

「まあ、ちようどいらっしやったわよ」

入ってきたのは、ピーテルと同世代に見える若い男性であった。ただし、ピーテルほどは幼くは見えない。これはピーテルが年齢ほどに大人に見えないからなのだが、妙に落ち着いた雰囲気にはヤンはなぜか既視感を覚えた。

「やあ、ファン・バステン夫人。お待たせしてしまったかな」

「いえいえ。陛下、今来たばかりですよ。まずはせっかくですからワインで乾杯といきましょう」

ヤンは仰天した。目の前の若者は数時間前に謁見したばかりの国公ジエローム・ルワーズその人である。ピーテルがやたらと硬くなっているのもわかる相手だ。

店の者が四人のグラスにワインを注いで回る。が、ピーテルは護国騎士団員には珍しく酒が苦手なため、シルヴィアは妊娠中の身であるため、それを断りオレンジの果汁を注文してそれが注がれた。すぐにテーブルの上一杯に料理が置かれる。話は食事が終わってからとなつて、まずは会話以外のことに口を使い始めた。ピーテルはまったく食欲がなさそうで、カタカタ震えながらスープをかき回すだけであった。ヤンは高貴な人物との食事には慣れてはいないが、こうしたことには動じない。シルヴィアなどはこうしている方が自然と言った人物である。

決してガツガツといった印象にはならないのだが、シルヴィアの食

欲は旺盛で、男たちよりも二割り増しの量を上品な口に納めて言った。

「子持ちの腹は二段腹と申します」

多少は恥ずかしそうにしているが、サスキアが恥らう姿とはだいぶ違った。

「ま、二人分を食べねばならないのだからね。そちらの方は全然進みませんか？大丈夫ですか？遠慮しなくてもいいですよ」

「え・・・い、いえ・・・」

「はは、お気になさらないくださいませ。ところで、ここのお料理はいかがでしたか？」

「ふむ。やはり街場の料理屋の味はいいね。普段食べている上品過ぎる料理には飽き飽きしていたところだ。久々に誘い出していただけたのでうれしかったよ」

「まあ、子供のころと違ってあまり頻繁に微行をされては、胃弱の侍従長がかわいそうですよ」

「まあ、仕方あるまい。侍従長の胃潰瘍はスタンジエ医局長でも手を焼くと言っていたからね。心因性というのかな？」

どうやら、シルヴィアは国公の教師であった時代から幾度となく、宮廷から抜け出すための手引きをしていたようだ。

「さて、食事が済んだところで本題に入ろう。謁見中には話せないこととは何かな？」

ヤンにはもうこの秘密の会談の目的がわかっていた。昨夜の出勤の前にヤンがカレルにだけ話した件である。カレルはその後シルヴィアだけには内密に報告していた。あまりにも大胆な策であるため、

何らかの方法で体裁を取り繕う必要があったのだが、そういったことにヤンは頭を使う余裕はなかった。

「こちらは、昨夜、強制捜査に出動する前に、夫、ファン・バステン將軍の名で公国全土に伝書鳩を使って発布した指令書になります」
ジェロームはそれを受け取り内容を読んだ。怒りこそしなかったが顔をしかめる。

「さすがにこれは大胆すぎるな。強制捜査はああしてどうにか法の範囲内に収まるようにこじつけることは出来たが、これはさすがに難しいぞ。独断でここまでの越権行為が行われれば、さすがに私にもかばいきれない」

指令書の内容は確かにウイレムが出したとしても越権行為に類する暴挙と言えた。

『公国全土の州卿および自治領主に命ず。』

担当領内の城塞都市に全ての周辺地域に住む住民を収容し、

対吸血鬼防御体制を敷いて備えよ。』

護国騎士団には、国家存続に関わる重大な犯罪捜査を行うための特別な権限は与えられているが、公国政府の直轄地を納める州卿および僅かしかない自治領を納める領主たちに対する命令権などは持ち合わせていない。それでも、吸血鬼への対応であれば、こうした指示を出すことはありうるが、公国元帥の承認すらなしにここまでやっていいものではない。

「はい。独断で行われたのであれば。ですので、独断ではなかったことにしていただきたいのです」

「と言うと？」

「三日前に遡って、密勅を出していただきとう存じます」

密勅とは、国公自らが公国政府には告げずに特定の臣下に対して指令を出すことである。実際に公国の歴史の中で公式に認められた密勅が出されたことはほとんどない。これは法的に存在するものではなく、君主たる国公の権威を示す慣例的な制度で、超法規的な意味を持つ。

「ふむ。閣僚達が反感を覚えることは間違いないだろうな」

「それも承知の上で、まげてお願いいたします。国家と国民のためにございませう」

「確かに・・・よかろう。だが、結果オーライという形にしてもらわねば困るぞ。この策が必要だった理由は何だ？」

シルヴィアではなく、ヤンを見て問いただした。

「昨夜の作戦でアメルダムからは反乱勢力を追い払うことに成功しました。しかし、彼らの根拠地はアメルダムにはございません。主力はフリップ王国側国境周辺三州か、もしくは国境の向こう側となります。つまり、彼らが本当に反乱をもくろんでいるとすれば、国内を横断してアメルダムまで進軍してくるようになります」

「まあ、それはそうだろう。それで？」

「吸血鬼を使った軍隊と言うのは実を言えば、とても扱いにくいものなのです。確かに戦闘力はきわめて高いわけですが、吸血鬼は兵士としてはどうしても従順さに欠けます。何よりも、補給がとても難しいのです」

「なるほど、人血は貯蔵することが難しいし、人口には限りがある

からな。まして、敵地での略奪のように無秩序に村々を襲うと、補給したようできて、吸血鬼が増えてしまう。返ってやぶ蛇になるということか」

「はい。そういうことになります。おそらく、そのような不安定な形で補給を実施しているわけではないでしょう」

「では、どうするのだ？」

ジェロームの質問に、一瞬ヤンは怯んだ。あまり口にしたくもない推測であるから。

「東方の騎馬民族の戦法に、軍隊の進軍と共に羊などの家畜を同行させるといふものがございます。遊牧民の知恵でしょう。占領地においても遊牧を行って、いくなれば補給拠点と一緒に移動し続けるのです」

「それを・・・人間でやると言うことが・・・家畜のように・・・」

ジェロームは拳を握り、それが小刻みに震えている。

「吸血鬼の軍隊を長期に維持し、進軍するならそれしか方法はありません。ですが、この方法にも一つの問題があります」

「何だ？」

「人間は羊ではありません。行く先々で牧草地を見つければ羊は育ちますが、人間にはちゃんとした食料が必要です。結局は通常の軍隊と同じような糧食の準備が必要になるのです」

「つまり、住民が食料と共に城塞都市に収容されることで、彼らはあまり言いたくはないが、家畜の飼料を失うと言うことか」

「そうです。新たにそれを得ることができなくなれば、そこから行えることは一つだけ、防御を十分に固めた城塞都市を攻撃することだけです」

城塞都市における対吸血鬼集団に対する防御については、十年前にヤンが考案したものをウイレムとマウリッツがさらに改良を加えている。それで万全とは言えなくとも、攻略するにはかなり苦勞するはずであった。何より攻城戦では、吸血鬼の戦闘力もそれほど有効には使えない。

「だが、フィリップ王国領土内ではそうはいかないだろう？」

当然の質問である。もちろん、そこからアメルダムに進軍することは困難にはなるが、反乱勢力を温存することは可能となる。

「はい。おそらく彼らの根拠地はフリップ王国側にあると考えております。あちらでは我々と違い有効な対抗策を講じることはできてないでしょうから、国境地域は放置されているはずですよ。王都側に吸血鬼が進軍でもしてこない限りは、何も手を打たないでしょう」「で、それに対応するには？」

「マウリッツ・スタンジエが現在ケテル村にいることがわかっています」「ほう、消息がつかめたのか」

「ケテル村からはステーン湖を越えることでフリップ王国に渡れます」

「つまり、そこは姿を隠したスタンジエ医局長に任せて大丈夫と言うことか」

「はい。方法はわかりませんが、彼は無駄なことはしません」

ジエロームは腕を組んで中空を眺めて少し考えた。

「作戦の意義は理解した。現実的にそれは可能なことか？公国全土の国民の食料はどうする？」

「今は刈り取りのあとです。住民達は十分な食料を有しております。」

それを持って入城するように伝えてあります」

「だが、持っていない者もいるだろう？」

「そ、それについて！」

突然、調子の外れた声でピーデルが口を挟んだ。

「城砦内に住民達が持ち込んだ食料は、一度公国政府が吸血鬼対策用にプールしていた基金の八割を用いて買い上げ、それを配給いたします」

「八割も使ってしまったのでは、戦闘のための費用が残らないではないか」

「買い上げた食料の半分は、メデイサラ国の商人を通じて、南方のスペルファ国に輸出します。彼の国は今年は大凶作で食料が高騰しております。その利益の一部で今度は海路で東方のラウラ国から大量に食料を購入するのです。こちらは今年は大豊作で、さまざまな食物が値崩れを起こしております。こう申し上げると、とても時間の掛かることのように思われますが、実際にはそんなことはありません。メデイサラ商人との信用取引によって、途中の過程はほとんど省略され、輸出と同時に輸入が行えます。この方式ですと、最終的な収支は対策基金の一割程度の持ち出しですみます」

「ほう……」

ジェロームはピーデルの顔をまじまじと見た。一騎士団の主計官にしておくには惜しいと考えたらしい。国際的な貿易網について知悉した上で、算術と商才に長けていなければこんなことは思いつかないであろう。

「名前を聞いておこうか」

「ひ、ピーデル・ブルーナー護国騎士団主任主計官で、いざい
ます」

「そのうち、財政府にでも移ってもらいたいね。こういう人材はとも貴重だ」

「ブルーナー主任主計官は武技はからつきしですので、そういう人事は大歓迎でしょう。今回に限ってはしっかり働いてもらわねば困りますが」

シルヴィアが口を挟む。このこともおそらくこの兄嫁思惑には含まれていたことであろう。

「よし、密勅を書く。紙とペンはあるか？」

密勅に形式などない。君主の実筆で指令と署名があればそれでいいのである。ジエロームはその場で勅書を書き上げ、シルヴィアに渡した。

「さて、そろそろ戻らねば。侍従長の胃に穴が開くことだろう。楽しい食事であった。苦勞をかけるがよろしく頼むぞ」

「は、承知いたしました」

三人がそろって座ったままの略式の敬礼をする。

「ああ、そうだ、ヤン・エッシャー殿、あなたは十年前からあえてアメルダムで公職に付くことを避けて来たと言うが、今回の件が終わった後もそうするつもりかね？」

「はい。お許しがいただけるならば」

「まあ、スタンジエ局長にも宮仕えの似合う男ではないと言われていたからな。非常時だけ出張ってきてくれればよしとするが、そろそろファン・バステン家には本格的に公国政府の中枢に入ってもらいたい。今日の謁見のとおり、そろそろ老貴族は役に立たなくなってきた。田舎に帰るにしても、働いてもらうことは増えると思

うがよろしく頼む」

ヤンの返事も聞かずにジェロームは店を後にした。シルヴィアがポツリと話す。

「これで私も國務卿就任を断れなくなりそうね。ウイレムの公国元帥への昇進もね。」

実はこの夫婦は二人とも国公からの内々の要請を断り続けていたのだ。大貴族達との政争を避けるためであったのだが、すでに実情がそうなることを求めている。ジェロームとしては、ファン・バステン家に加え、マウリッツ・スタンジェなど非貴族の優秀な実務家や、カリス・クリステルに代表される民間の組織で才覚を示した者も政府の中枢に据え、新しい政治機構を作り上げることと望んでいたのである。

だが、それも吸血鬼と不死鬼による反乱軍という、困難な敵を倒してからの話であった。

研究報告

公国中央医局の伝染性吸血病対策室は、三十名ほどの医学、生物学の研究者と武器や医療機器を開発する十名程度の技師、五名ほどの事務員から組織された研究機関である。それが、膨大な資料と設備ごと、護国騎士団本部に移ってきた。シモンは地下牢の入りに近い大きな部屋を三つほど用意していたのだが、機材などでだいぶスペースを取られてしまい、入りきらない分は急遽即席の物置を立てて対応せざるを得なかった。

新任の責任者はカリス・クリステルである。非常勤参事官から常勤で重要部門の責任者に抜擢された形である。本来のクリステル財団総合診療所所長の地位については、護国騎士団本部に警護の関係から住み込むことになった時点で休職の形を取っていた。

カリスはまず研究者たちを集め、それぞれの研究テーマと進捗を報告させた。

「患者が必要とする血液の量について研究しております。現在、およその量は検討がついておりますが、血液の成分比率によって代わる物ですので、エネルギーとなる成分の特定を進めております」

「その研究はヨアヒム・カイパー博士も進めていたはずよ。論文は読まなかったの？」

「医学会の論文誌にはありませんでしたが・・・」

「カイパー博士が医学会に論文を発表しないことは有名よ。でも、医局へ報告書は出ているはず。すぐに確認しなさい。それから、エツシャー先生がカイパー博士の最新の研究メモをお持ちです。博士はすでに成分を特定して、それを牛血から生成する方法まで発見しています。ロビー・マルダー氏の生存にも必要なものですから、急

いで製法を確立しなさい」

カリスよりも十歳は年上であろう研究員がビクビクしながら報告する。カリスは少し不機嫌であった。まったく、責任者であったマウリッツは何をやっていたのか。対策室の研究員たちは上司に頼りすぎで、自分たちの判断で研究を進めることができいなかつたのだ。マウリッツ・スタンジエと言う希代の研究者一人に数十名の助手がいただけという感じであった。それも、それぞれが何をやっているのか目が行き届いていない。婚約者が組織を運営するには甘すぎることには気付いていたが、これほどとは思わなかつた。

『ま、それぐらいの欠点があつたぐらいがかわいいけどね』

これは口に出していないが、鼻厘の引き倒しと言つものだろう。

「次！」

「私は患者の筋肉量の異常増大を抑える方法を研究しております。これができれば、エネルギーの消費を軽減させ、血の飢えの頻度を減らすことができます。また、その過程で痛覚の消失と筋肉量の増大に深い関係があることもわかつております」

医学院出のエリートらしい若手の研究員が幾分自慢げに話す。カリスは冷たい視線を投げかけた。

「エッシャー先生がすでに同様の研究を進めます。試薬ではありませんが、すでに筋力の異常発達と痛覚の喪失を抑える方法を発見されてました。ロビー氏はそれによって以前と変わらないレベルの筋力と痛覚を維持しています。エッシャー先生から研究資料を受け取り、ロビー氏の経過を観察しなさい」

「え……は、はっ」

「次の人！」

ほめられるものと思っていた若者はたじたじになる。公国最大の医療研究機関でもカイパー派の医師たち個人の研究能力にはまったく追いついていないのだ。

「え……えと……私は患者の皮膚の日光による損傷について研究しています……います。感染した場合、わずかな時間で皮膚の保水力が失われ、日光によって表皮から水分が蒸発し、結果として火傷のような状態になるというのがそのメ、メカニズムです」

やたらとおどおどしているのは、まだ二十代前半と思われる女性の研究員であった。ほとんど下を向いて、机の上の資料を読みながら話を聞いていたカリスが顔を上げる。

「それを抑える方法は？」

「完璧とはいいがたいですが、まず、一日数回の入浴を行い、皮膚に十分な水分を含ませるようにします。そしてそのたびに植物性の油を表皮に塗ることで水分の蒸発を妨げることが可能です」

「一日数回というのは結構不便ね。でも、今のところ一番の成果よ。名前は？」

「ま、マルガレータ・バレンツです。まだ研究助手ですが……」

「今日付けであなたは主任研究員に昇格です。先ほどの二人と一緒にロビー・マルダー氏の治療および臨床実験を行うチームを編成しなさい。あなたが責任者よ」

「え……でも、私……まだ二十四ですし……」

「年齢なんて関係ないわ。あなたが一番成果を出している。それ以外に理由は必要ありません。ロビー・マルダー氏についてはあくまでエッシャー先生が主治医です。治療の方針は彼に確認するように。それから、試薬の投与などは必ず事前に本人とエッシャー先生に説

明して承諾を得ること。エッシャー先生は忙しいからなかなかつかまらないわよ。今の話は簡潔に報告書にまとめて、説明に行くように。さ、すぐに始めなさい」

「は、はい！がんばります！」

「よろしい」

マルガレータは感激していた。何せ憧れのカリス・クリステル医師から直々にお褒めに預かったのだ。しかも、二十四歳の女性が助手からいきなり主任研究員である。年上の研究員を部下にするというのは、一体どうしていいか途方にくれてしまいそうだが、とにかく張り切って少し離れた会議卓で打ち合わせを始めた。

医師の研究担当者の次は生物学の研究者たちである。だが、こちらは彼女を失望させたというよりも怒らせた。

「馬に吸血鬼の血液を投与することで、強力な軍馬を作る研究をしております。馬の場合は人間などの場合よりも凶暴化しない不死鬼となる確率が高く、通常の馬同様に調教が可能です」

バンツ！

カリスが両手で机をたたいて立ち上がった。

「その研究についてスタンジェ医局長の許可はあったのっ？！」

「い、いえ、医局長はお忙しく……」

「では、誰の指示で？」

「ファン・クラツペ検死室長です。研究テーマが思いつかずにご相談しまして……」

カリスはめまいを覚えた。研究テーマを自分で考えられないと言う

のも酷いが、よりによって、ファン・クラツペに相談するとは・・・

「他にもファン・クラツペ医師の指示で研究していた者は名乗り出なさい！」

合計三名の研究者がおおずと出てきた。全員生物学の研究者である医学の研究者よりも、さらにマウリッツの目が届いていなかったことを突かれてたのだ。

「すでに聞いているとは思いますが、ファン・クラツペ医師は今回の人為的な伝染性吸血病流行の主犯格として、公国全土に指名手配されています。医師資格も昨日付けで停止となりました。医局長の許可を得ずに、彼の研究に手を貸していたあなたたちも、本来であれば処罰の対象となります。しかし、今は人手が足りません。あなたたちの研究は犯行グループに成果を利用されている可能性が極めて高いでしょう。自分たちの研究成果を整理し、それによって、どのように応用がなされる可能性があるかを検討したうえで報告所を提出しなさい。それから、応用されていたとして、それに対抗する手段を考えるのも貴方たちの責任です。その二人！ファン・クラツペ医師に支持されていた研究テーマはっ？！」

三人とも顔面蒼白だった。震えながら二人の研究者が報告を始める。

「わ、私は、不死鬼となった哺乳動物の行動特性について研究していました。観察を続けておりましたが、あまりはつきりとした成果はでておりません」

「わかりました。その研究は中止です。他の二人の作業を手伝うように」

あまり優秀には見えない中年の研究員が頭を下げた。

「私は不死鬼と吸血鬼の血液を混合したものを実験動物の脳に注射し、確実にその行動を制御するための研究を進めて参りました。吸血鬼が十分なエネルギーを取った直後のおとなしくなった状態とは少し違い、不死鬼の血液の影響で知的な活動は続くものの、自由意志はなく、調教されていれば機械のように指示されたままの行動を取るようになります」

カリスはいやな予感がした。何か引つかかるものを感じたのだ。

「それは人間に応用できる可能性はある？」

「実験するわけには行きませんが、しかとは・・・しかし、可能性は十分にあるかと」

確かに、人体実験をしないとわからないことである。だが、ファン・クラッペならやりかねないのではないかと思った。だとすれば、この研究を応用して彼は何をしようとしているのか・・・。

「すべての研究メモやデータを整理して報告書を提出しなさい。それを持って、私とエツシャー先生の前で説明してもらいます。急いで！」

「しよ、承知しました！」

この研究の意味するところは自分にはよくわからない。だが、ヤンならば何かわかる可能性もある。わからないことにくよくよしている余裕はないので、気になりつつも仕事の続きに戻った。午後には怪我を押しながら、対吸血鬼の戦術立案に責任を負うこととなった、カレルと共に対吸血鬼用の武器や治療器具を開発する技師たちからの報告を受けることになっている。彼女はとにかく多忙であったが、それでも、適切に一つ一つの問題に対処していった。

カリスは伝染性吸血病の専門家ではないが、マウリッツは他にたいした話題のある男ではないので、食事などに出かけたときの会話もそればかりであったし、サスキアが熱心に勉強していたのでそれに付き合ったりもしていた。だが、何よりもカリスの実務能力の高さが、専門家たちを使いこなすのに最大限に役立った。マウリッツは逆に自分自身があまりにも優れた専門家であったため、部下たちを使うと言うスタンスにはなかなかなれたかったのかもしれない。

国公との謁見の翌日はとにかく皆忙しかった。シモンはファン・ダルフアー邸の詳細な調査のために捜査部の担当者と共に出かけ、たし、ヤンは中央医局で自殺した事務員三名についての捜査の指揮を執らねばならなかった。シルヴィアにいたっては懐妊中の身であるので、無理はしないことにしてはいたが、大量の手紙を書いて、方々に根回しをしている。

こうなると、どうしてもサスキアは暇をもてあます事になった。看護婦ではあるが、医師や研究員ではないし、ヤンの身の回りの世話と言っても、それほどやるべきことはない。しかも、実を言えば中央医局に出かける前のヤンと軽い口論をして喧嘩になってしまったのだ。

「エツシャー先生、お疲れ様です。コーヒーでも入れましょうか？」

コーヒーは近年盛んになった海上交易によって大量に持ち込まれるようになったものである。最近では一般市民にも手の届くものがで

てきた。上流階級では午後のコーヒータイムは一般化し始めている。

「ああ。ありがとう。ところで、サスキア……」

実を言えば再会して以来、あまりにことが多すぎて、二人がゆっくり話すのはこの時が初めてだった。

「あの……二人でいる時ぐらいいは、ヤンでいいよ。人前でけじめをつけるのは大切だけどさ」

「え、あ……はい」

サスキアはうつむいて黙ってしまった。二十八歳と二十四歳、すでに十分大人の二人ではあるのだが、まるで離れ離れに過ごしていた思春期が今になって訪れたかのようだった。

「あの、エッシャ……ヤン……、私……」

「ん？」

「あ、いえ、ケテル村ってどんなところなの？アメルダムの外には出たことがないから……」

二人になると何をしゃべっていいのかもわからなくなったらしい。ぎこちなく話題を振る。

「ああ、ステーン湖畔の田舎の村だ。湖でとれる鱒は味がいいし、のどかなとてもいいところだよ。みんな優しい人たちばかりさ」

「やさしいって……女の人も？」

「ん？まあ、近所のおばさんたちはずいぶんと親切にしてくれるよ。あとは、ああ、カスペルのお姉さんがよく来るかな。近隣で唯一の貴婦人だね。診療所の運営費も寄付してくれているし」

ピクリ、とサスキアの眉が動いた。

「へえ、どんな人？きれい？」

「まあ、美人じゃないと言う人はいないと思うね。なぜかたいして悪くもないのによつちゆう診療所に来るんだ。風邪だの、転んだの、理由をつけてね。え、あれ？」

ヤンはサスキアの表情を見てびつくりした。目に涙を浮かべている。

「そ、そう。よかつたわね。綺麗なお姉さんのいる医生がいてくれて、大助かりでしょ」

「お、おい。何を怒ってるんだい？」

「いえ、失礼します。エツシャー先生」

そのまま何もいわずそそくさとヤンの執務室を出て行ってしまったのである。気になりはしたのだが、すぐに来客があつたので後を追うことはできなかつた。入れ違いに入ってきたのは、マルガレータ・バレンツである。同年代のサスキアが目には涙を溜めて出て行くのを不審げに見送つてから、ヤンの前で報告を始めた。

「クリステル先生よりロビー・マルダー氏の治療と臨床実験の責任者に任命されました。マルガレータ・バレンツ、研究じよ・・いえ、研究員です。」

本当はすでに主任研究員昇格の辞令を受け取っているのだが、なんとなくそう口にすることがはかれるような気がして、『主任』の二文字を省いていた。主任研究員も研究員には違いないので別におかしくはない。

「ああ、聞いている。論文も読ませてもらったよ。私やマウリッツ

とは違った視点のアプローチで面白い。年上の男共を使うのはなにかと面倒だろうが、がんばってくれ。クリステル先生みたいにはすぐには行かないだろうけど」

「は、はい。早速ロビー氏の容態を確認させていただきたいのですけれども・・・」

「いいだろう。警備兵に私の名前を出せば入れてくれる。それから、これが私とマウリッツ、カイパー博士の研究資料だ。目を通しておいてくれ」

「了解いたしました。ところで・・・今の方は・・・」

余計なことかもしれないと思いながら、思わず口に出してしまった。

「ん、あ、ああ・・・クリステル先生の義理の妹さんだ。サスキア・ウテワール。看護婦の資格を持っている。私とは幼馴染でね・・・」

「・・・泣いておられましたよ・・・」

「え・・・あ・・・そ、そうか・・・」

マルガレータは、やはり同年代で男性のピーテル・ブルーナと比するほどの童顔である。医学院の医師たちの中に混じっても最年少に見えるかもしれない。が、どうもこういいう話になると、童顔も表面上の幼さもあんまり関係ないらしい。

「さしでがましいとは思いますが、お忙しいからって多少は気を使ってあげた方がいいですよ。あんなかわいらしい方ですのに・・・」

「いや、ああ・・・まあ・・・。あ、よし、早速ロビー氏の様子を見てきてくれ。何せここには今までたいした機材もなかったから、ちゃんとした検査もそれほど出来ていないんだ。よろしく頼む」

そう言って、ヤンはコートを着込み始めた。そろそろ中央医局に行

く馬車の準備ができるころではあるが、まだ迎えの者は現れていない。

「はい。失礼します」

それ以上は余計なことは言わずに部屋の外に出てから、マルガレータはため息をついた。どれほど優秀な人でもわからないことはあるのだと思ったのである。

「そう。確かに気になるわね。人を機械のように操るための研究か・・・」

シルヴィアはカリスが口にした対策室での報告の内容を聞いて考え込んでしまった。二人は忙しい中でもわずかな休憩時間を作ってコーヒーを楽しんでいる。

「ええ。あのセクハラ常習者のヤブ医者、いったい何を考えていたのか・・・。それにしても、マウリッツもマウリッツよ。自分でなんでもやっちゃって、周りのことをちゃんと見ていないからこんなことになるのよ」

「スタンジエ先生はヤンもそうだけど天才だから。周りがついていけなくても、かまわずすすんでしまつところはあるわね。でも、よかつたじゃない?」

「何がかしら?」

「今ここにスタンジエ先生がいたら結婚直前に大喧嘩よ。似たような仕事で共働きは喧嘩になりやすいとは言つけどね」

「そ、そんなことないわよ」

「あら。まあ、喧嘩出来る程の余裕もないわよね。二人とも仕事の

虫だから」

いつもヤンとサスキアをからかう二人だが、やはり、既婚者で年齢も上のシルヴィアにはカリスでさえもかなわないようだった。

「ま、近くにいっても喧嘩どころか会話をする時間すら作れてない二人もいるけどね。あら？」

コーヒーを持ったまま庁舎の中庭側の窓に近づいたシルヴィアが急に驚いたような顔をした。

「どうしたの？」

「あそこにいるのは、我が護国騎士団の台所を預かる、ピーテル・ブルーナ主任主計官よ。あの童顔のピーテル君が女の子と歩いているわ。誰かしら・・・」

「あら、さっき話したロビー・マルダー氏の治療リーダになったマルガレータ・バレンツ主任研究員ね。っと・・・うーむ・・・いい雰囲気ねえ・・・」

コーヒーに口をつけてからシルヴィアはポツリと言った。

「あんなお子様みたいな二人でもうまくやっているのにな。」

今は護国騎士団全館で休憩時間となっている。特別急ぎの仕事がないものは、コーヒーを飲んだり、おしゃべりをしたりして、リラックスした時間を過ごしている。吸血鬼との戦いは長くなりそうなのでこうしたことも必要だった。これはシルヴィアの考えで実施に移されたことである。こういう気遣いは男たちにはないものだ。

「ピーテル。私、助手から一気に主任研究員に昇格よ！クリステル先生にもエツシャー先生にもほめられて・・・」

「すごいじゃないか！僕も実は・・・いや、誰かはいえないんだけど、とてもほめられてね。護国騎士団での仕事が落ち着いたら、財政府に移らないかって」

「うわあ。なんだか今回の事件で私たちぐんつと評価が上がったわよね。二人とも一人前になったら・・・約束・・・覚えてる？」

「うん。もちろんさ。へへ・・・」

「ふふふ・・・」

ぱつと見ればおままごとに見える二人のだが、実際にはよっぽどヤンとサスキアの方がおままごとだった。そこにそのサスキアが通りかかる。少し目が赤く腫れている。所在なさげにとぼとぼと中庭を歩いている。

「あ、ちょっと・・・ピーテル、ごめんね。ちょっとあの人と話してくる」

「あ、うん。僕も戻らなきゃ。じゃ、またあとで」

ピーテルを見送ってからマルガレータは、サスキアを追いかけて声をかけた。

「サスキアさん！」

「え、あ、はい。あなたは・・・」

「クリステル先生の部下のマルガレータって言います。さっき、エツシャー先生のお部屋の前でお見かけしたので・・・」

二人は同じ年である。二人とも年齢よりも若く見えるが、マルガレータの方がさらに童顔だった。しかし、会話はマルガレータの方が

リードしている。

「どうされたんですか？エツシャー先生と何か？」

「あ、いえ、その・・・気になさらないでください・・・」

サスキアの瞳からまた涙があふれ始めた。

マルガレータはハンカチを取り出して、拭いてやりながら、肩に手を乗せて壁際の人気のないところまでサスキアを誘った。

ヤンと再会してからはあまりにいろんなことがありすぎた。神経が張り詰めっぱなしだったサスキアも、ヤンとの喧嘩をきっかけに何かがぷつりと切れてしまったようだ。マルガレータに頭をなでられながら、子供のように泣きじゃくり、ヤンの部屋での出来事を話した。

「サスキアさん・・・私はよく話し合うことだと思っわ。あなたは十年以上ずっと先生のことを想っていたのでしょ。ちゃんと話し合わないといけないことはたくさんあるわ。こういう時だからなかなか時間はないけど、時間は作らなきゃ。少しでも二人で話せる時があれば、ちゃんと分かり合えることもあるわ」

ふと、休憩時間が終わったことに気づき、多少はあせりを感じながら、マルガレータは続けた。

「先生は今中央医局に出かけているし、戻ってきた後も打ち合わせとかいろいろあるでしょうけど、仲直りの方法なんていくらでもあるのよ。ほら、サスキアさんって料理はお得意？」

「え・・・ええ、ここに来る前はマウ・・・いえ、スタンジエ先生のところまでメイドをしていたから・・・」

「先生の好きな食べ物もわかるでしょ？あちこち出かけたりで、ち

やんとした食事を取ることも難しいはずだから、お弁当でも持たせてあげたらどうかしら？それに手紙でも忍ばせてしまえば・・・」

サスキアは赤面した。

「そ、そんな・・・お弁当は作って差し上げようとは思ってたけど、手紙なんて・・・恥ずかしい・・・」

「あらら、何言っているの。直接話す時間はそうそうないし、せっかくその機会があってもうまくしゃべれなくて喧嘩になっちゃったんでしょ？恥ずかしがっていたら、何も進まないわよ」

「で、でも・・・」

マルガレータと話しているうちに、サスキアはすっかりうちとけてしまった。自分よりもさらに子供に見えるマルガレータが、カリスとはまた違った意味で姉のように思われてきた。

「あ・・・ごめんなさい。もう打ち合わせにいかなきゃ・・・新米中間管理職も大変なの。年上のおじさん方に指示したりしないといけないから。私、だいたいはロビー・マルダー氏の地下牢か、その横の研究室にいるから、何かあったら訪ねてきて」

「あ、ありがとうございます。私は義姉の部屋の隣に寝泊りしているから・・・」

「ええ、またお話ししましょう。それじゃ・・・」

マルガレータは遅刻してしまったと口にしなから、転びそうな危なっかしい走り方でその場を離れていった。

「そう言えば・・・あの娘ったら同年代の友達って言うのもあんま

りいたことがなかったわ」

「ヤンもそうよね。今はシモン君とか、仕事の関係ではあるけど、ちよっと悪友っぽいのが増えていきそうだけどね」

忙しいはずなのだが、暇なことにシルヴィアとカリスはずっと窓からサスキアとマルガレータの様子を伺っていたのだ。

「バレンツ主任研究員も、見た目の割には結構しつかりしているわね。まあ、あんまり遅刻とかはしてほしくないけどなあ」

「あら、あなただつてそろそろ仕事に戻らないといけないんじゃないかしら？カレル隊長と一緒に技師たちの報告を聞くんじゃないかっ
たっけ？」

「あつ！大変・・・じゃ、行くわね」

「さて、私ももう十枚ほど手紙を書きますかね。大変大変・・・」

カリスを見送ったシルヴィアは、腰の辺りを軽く拳で叩きながら、窓辺に置いてあるライティングデスクに歩み寄る。ふと、窓の外を見るとシモンが捜査員たちと戻ってきたところだった。なにやら、血相を変えて門前の馬車から此方に向けて走ってくる。

「何があつたのかしら・・・まったく・・・ことが多すぎるわね。そつえばカイパー博士は何をされているのやら・・・」

操死鬼

ヤンの執務室に駆け込み、不在であることを確認したシモンは、シルヴィアが執務室代わりに使っている応接室に駆け込んだ。

「エツシャー先生は?!」

「ヤンなら中央医局よ」

「くそっ!」

シルヴィアの回答に苛立ちを隠せない。これほど血相をかいているシモンは珍しい。

「何があつたの?」

「ファン・ダルファー邸の地下に隠し部屋がありました。そこで・・・テオ・ファン・ダルファーの死体が・・・」

「えっ! ということ?」

「隠し部屋は実験室としての機能を備えていましたが、そこにおびただしい数の死体があつたのです。その中に、テオ・ファン・ダルファー本人の死体も・・・」

「他の死体は?」

「ファン・ダルファー家の使用人や警備兵、それから浮浪者や流れる者の旅人と思われるものも含まれます。そして全員・・・腐敗の状況から伝染性吸血病に感染していたものと思われれます。テオ本人も含めて・・・」

右手のこぶしを額に当て、シルヴィアは考えた。

「だめだわ。私ではその意味はわからない。捜査は続けているのね?」

「はっ！」

「テオが首謀者であれば話は簡単でした。でも、そうでないのなら、捜査は一からやり直し。でも、護国騎士団の捜査だけではどう考えても手が足りないわ。吸血鬼の軍隊と戦う準備も進めないといけないし。シモン君、すぐに書簡を用意するから保安兵団のピエト・ファン・サッセン兵団長のところに行つて！捜査をやり直すなら、護国騎士団だけじゃだめ。あとはヤンが戻ってきてからにしましょう」

シルヴィアは自分の判断を保留した。あまりにも情報がたりない。可能性としては主犯であつたテオを不死鬼たちが殺害すると言つ、犯行グループ内の抗争という可能性もある。しかし、それを確信できるものは何もないし、仮にそうであつたとしても、公国筆頭侯爵家の持つ経済力を切り捨てるには、別の後ろ盾が必要なはずである。ファン・クラツペ医師は技術面を掌握しているとしても、軍隊を支えるほどの経済力はない。

すぐに用意された書簡を持ってシモンは保安兵団本部に走つた。その背中を見送るシルヴィアの目には不安と正体不明の疑念が渦巻いていた。

「なるほど。集団失踪事件については聞いている。伝染性吸血病を人為的に流行させて反乱を企図しているものであるということも。首謀者の特定に協力を要請されて断る理由はないな」

シルヴィアからの依頼にピエト・ファン・サッセンは快く応対した。護国騎士団にも捜査部門はあるが、その規模は保安兵団に遥かに及ばない。護国騎士団はあくまで軍隊であつて、平時は情報機関としての機能を兼ねているだけに過ぎないが、保安兵団はそもそもが治

安維持を目的とした一種の司法組織だからだ。

四十歳になったばかりのピエトは元々護国騎士団第二部隊長であった男で、かつて第一部隊長であったウイレムと次期護国騎士団長の座を争っていたこともある。本人も過剰にウイレムを意識していたところもあつたのだが、今ではウイレムのことを認めている。

ピエトは執務机に備えられた伝声管の蓋を開けて、やや大きな声をだした。

「クリステイアン・ヨンキント本部長を呼んでくれ」

伝声管はここ数年、公国政府機関の各庁舎での採用が始まった設備である。各部屋から伝声室に金属製のパイプをつなげ、担当官が伝言を中継して、別の部屋に言葉を伝える。発案者はマウリッツであった。彼の趣味はさまざまな道具の発明にある。医療用に限らず、様々な道具を開発している。しかし、公国中央医局も護国騎士団も予算の都合上採用は見送られていた。

「クリステイアン・ヨンキント参りました」

程なくして現れたのは、三十代半ばの保安兵団アメルダム本部長だった。

「護国騎士団第三部隊長代理のシモン・コールハースです」

「ヨンキント本部長。護国騎士団が進めている吸血鬼による反乱事件の捜査に協力してほしい」

クリステイアンはあまり驚きはしなかった。

「ほう。もつと早く協力要請があると思っておりましたが・・・」
「実は護国騎士団ではテオ・ファン・ダルファー候を反乱の主犯格と考えておりました。そうであれば、後は捜査と言うよりも吸血鬼の軍隊と戦うことに集中できます。しかし、状況が変わったのです。反抗グループ内で何があつたのかはわかりませんが、テオ・ファン・ダルファー候は吸血鬼化した死体で発見されました」

これにはさすがにクリステイアンも驚いた。

「なるほど。捜査は振り出しに戻つたと言つことですか。ヤン・エツシャー氏による電光石火の強制捜査については聞いておりました。さすがファン・バステン將軍の弟君と思い、出番はなくなつたかもしれないと思つていたのですが・・・」

眉間にしわを寄せ手ながらクリステイアンは言った。しばしの沈黙の後、突然兵団長執務室のドアをノックする音が聞こえてきた。

「ピーター・レイン主任捜査官です」
「入れ」

ピーター・レインは三十代半ばに見える。蟹股で歩き、あまり上品には見えない男だが、人相から相手の人物を測るシモンはこの人物がかなり腕利きの捜査官であると感じられた。ピーターは一人ではなかつた。後ろに女性の捜査官が控えている。

「護国騎士団の方がお越しと聞きましたので、ファントム亡霊ロビーを拘束されておられるのか？」

「そのようだが、今はその話をしているときではないぞ。レイン主任。君がずっとロビーを追っていたのは知っているし、彼の逮捕に向けた情熱もわかるが・・・」

顔をしかめてクリスティアンが言う。

「はい。伝染性吸血病に感染したと言う話も聞いております」

シモンは驚いた。ロビーの捕縛についてはともかく、吸血鬼化については、中央医局や護国騎士団の関係者にも口止めをしている。この捜査官はおそらく自力でそうした情報を調査したのだ。

「実は、こちらのレベッカ・ローレンツ捜査助手は二ヶ月前からテオ・ファン・ダルファー侯爵の邸宅を調査していました。ロビーが狙っていると検討をつけていましたので。彼女が感じた異常についてご報告させていただければと思ひまして・・・」

「異常とは？」

これはシモンである。

「こちらは護国騎士団の第三部隊長代理になられたシモン・コールハース殿だ」

「はあ。ご高名はかねがね」

「何が異常に感じられたのですか？」

「使用人や警備兵たちの態度・・・と言うよりむしろ行動全般です。ところで、座ってもよろしいですか？」

ピエトに向かって言う。どうも自分たちの思惑通りに会話を進めるために、いろいろと考えてきているようだ。上司を利用したりすることに関しても、かなりの腕利きなのだろう。

「いいだろう。座りなさい」

「では、詳しいことはローレンツ助手から説明させます」

「私は三ヶ月ほど前からファン・ダルファー邸が亡霊ロビーの次のターゲットではないかと疑っております。あの邸宅は過去にも何度か被害にあっておりますので、できれば、保安兵団の警備隊を配置し、網を張って彼を捕らえたいと考えたのです」

「まあ、私としては難しいと考えておりましたがね。ロビーは事前を狙った屋敷の警備状況を綿密に調べます。こちらが網を張ったりしても、確実にそれを察知し、犯行をあきらめるでしょう。それでも、ファン・ダルファー候としては、自邸での盗難事件という不名誉を避けることが出来るので、許可したのです」

ピーターが付け加える。

「ところが、ファン・ダルファー候はそれを断りました。いえ、正確には候に会うことすら出来ませんでした。警備兵に門前払いを受けたのです。それも、まったく会話がかみ合いませんでした」

「どういうことですか？」

「私が何を話しても、候は誰ともお会いになりませんの一点張り。理由を聞いても答えないと言うのは、まあ、あることですが、挨拶をしても、世間話をして打ち解けてみようと考えても、同じことしか口にしないのです。気味が悪いくらいでした。無表情のまま抑揚のない声で」

「・・・」

シモンは何か引っかけた。一見どうでもいいことなのだが、彼の勘がそこに状況を把握する糸口があることを告げている。しかし、その意味はわからない。

「ピエト兵団長、クリティアン本部長、まず、ご協力の手始めにこのお二人を護国騎士団本部にお貸しいただくことはできませんか？」
「ああ、この二人は亡霊ロビーの専任捜査員だったから今は暇だ。」

レイン主任を協力チームの責任者にしよう。捜査員や兵員の増員も含めて彼に相談してくれ。できるだけの便宜は測る。次期国務卿候補と言われるファン・バステン夫人の依頼だ。断ることはできません」

実を言えば若いころのピエト・ファン・サッセンはシルヴィアにあらがれていたことがある。ファン・フェルメル伯爵家の女当主では高嶺の花過ぎると思っていたのが、家格も同程度で同じ護国騎士団の部隊長であったライバルのウイレムが彼女と結婚してしまったという過去を持つ。だが、ウイレムの器量が自分以上であることもよく理解しており、わだかまりはない。

「ありがとうございます。それでは、お二人はこのまま一緒に騎士団本部までご足労願います。私では判断できないことでもエツシャ先生ならわかることもあるでしょう。お二人の持つ情報が必要です」

ピーターはうなずいてから一つ自分の希望を述べる。

「わかりました。ところで、ロビーとは面会をさせていただけませんか？保安兵団では、彼の犯行とされている事案の中に模倣犯によるものが含まれていると考えています。彼の犯行ではないものを特定して捜査に役立てたい。それに・・・」

「レイン主任は保安兵団で唯一、ロビーを発見し、後一步まで追い詰めたことのある男でしてね。ロビーへの拘りも人一倍強いが、捜査官にはよくあることで、自分が追い続けている犯人にはどこか身内のような感情を持つことがある。相手の考えていることを常に読み続けておりますからな。恋人が親友のように錯覚されてくるのです。伝染性吸血病に感染したいきさつを聞いて、冷静な彼も憤慨したぐらいだ」

「恋人はないでしょう?」

クリスティアンの話にピーターは苦笑いする。

「わかりました。私の権限では許可できませんが、エッシャー先生はご理解くださることでしょう。彼が主治医ですので」

「騎士団長代理と中央医局長代理を兼ねているのにそんなことまで？いくら公国一の知恵者と言われる方でも負担がかかりすぎでは？」

「そうですね・・・どうも、あまりに優秀な方はなんでも自分でやるうとしてしまうようで。スタンジエ医局長もそういうところがあつたとか。そこを、ファン・クラツペ医師に突かれて、伝染性吸血病対策室の研究機能を敵に利用されてしまったようです・・・」

「ちよつと考えないといけないところですね」

ピエトが渋面で言う。若手の優秀な人物が陥りやすい問題であつた。

護国騎士団本部に戻るとヤンは戻ってきていた。すぐさま会議が開かれる。会議には技師たちとの打ち合わせを終えたカリスとカレルの姿もあつたが、みなが一様に驚いたのは、そこにロビー・マルダもいたことである。夕刻とは言えまだ日は出ている。

「まだ、晴れの日の昼間に外に出ることは難しいかもしれませんが、四時間ごとの入浴と、その後に植物性の油、今はオリーブの油を使っています。それで満たした浴槽に入り、顔や頭皮にいたるまで油分を行き渡らせる事でこのように行動可能となりました。若干、油のにおいが気になるかもしれませんが、それについては、適当な材料を検討中です」

マルガレータが報告する。

「まあ、そこまでは気を使わなくてもいいだろう？ 就任初日で早速成果が出たとはすばらしい」

「実際に試す機会がなかっただけです。これは伝染性吸血病患者が継続的に生存しいけるなら必要なことと思います。食料についても、カイパー博士の成果から栄養剤の製造を始めましたが、ロビ―氏に味見していただいて、味覚を満足させることが出来るものを作ろうと思います。人はパンのみに生きるのではありません。日々を楽しんで生きれるようになればいいと思います。食事や外出を楽しめないで、様々な精神的負担にかかる不死鬼の生活を長期に続ける苦痛なだけの人生ではいけないと思います」

ヤンの質問への回答に皆驚いた。マルガレータは単に吸血病患者を生かすことだけではなく、彼らができるだけ普通に生活し、人生を楽しむようになれることを目指している。そこまで頭が回っていたのは彼女だけだった。

「君の言うとおりだ。バレンツ主任。よく言ってくれた。引き続きがんばってくれ。ロビ―も協力を頼む。遠慮せず彼女の料理がまずければどんどん言ってやってくれ」

「体に塗る油に果物や花のにおいをつけるって言われた時は驚いたがね。あんまりそんな趣味はないからな。そこのお嬢ちゃんの少女趣味には付き合いきれないかも知れんが」

お嬢ちゃんと呼ばれて憤然となったマルガレータ以外の全員が笑った。これから、深刻な問題を議論しようと言ったときなのだが、全員に急に余裕のようなものが生まれた。

「さて、テオ・ファン・ダルファアの死体については報告を受けた。

ローレンツ助手の証言に加えて、ロビー・マルダー氏が屋敷に侵入したときの状況を改めて聞こう」

ヤンが議長を務める形で会議は始まった。

「前も言ったとおり、以前に入ったときとまったく変わらない警備だった。気持ち悪いぐらいに。まるで機械仕掛けみたいで、まったく同じ時間に同じ動きで見回りまでするんだ。あそこの連中は反省しないだけでなく、何も考えていないんじゃないかと思ったよ」

『機械仕掛け』と言う言葉にカリスがはっとした。

「本当に・・・何も考えられなくなっていたのかもしれませんが・・・」

「と言うと？」

「ファン・クラツペ医師が対策室の研究者を利用して試みていたことです。動物実験のみでしたが、吸血鬼と不死鬼の血を使って、思考力を奪い、思うままに機械のように他人の指示で動かそうというものです。担当していた研究者はそれを操死鬼と呼んでいます。自由意志はなく、自分からは何もできませんが、誰かから指示されたことは忠実に行うようになります」

「つまり・・・ファン・ダルファー邸は操死鬼だらけの屋敷になっていた可能性があると」

「はい。ファン・クラツペ医師が人体でのそれに成功していればの話ですが・・・」

全員言葉を失った。

「悪魔の所業だな・・・」

「ファン・ダルファー邸で発見された遺体にはかなり古いものがある

りました。主に浮浪者と思われる遺体です」

シモンの報告である。

「ファン・クラッペ医師はファン・ダルファー邸でそうした実験を繰り返し、最後には、屋敷の全員を操死鬼にして利用していたと言うことでしょう。確かに理論的にはわかる。吸血鬼の血液である程度脳の神経を殺し、しばらくしてから不死鬼の血液を入れて、神経破壊を抑える。神業的な腕がないとタイミングが難しいがね。ロビ―、以前に侵入したのはいつだ？」

「今から半年ほど前だ」

「シモンさん、ファン・ダルファー候はこの半年間どんな動きをしていたかわかりますか？」

「ほとんど公けには姿をあらわしていません。屋敷に訪れた彼の事業の関係者は皆一様に、屋敷の雰囲気がおかしかったとは思っていません。候に直接会ったという人物も、候はほとんど会話らしい会話をせずに、自分の言いたいことと、単純な返事だけしか口にしかかったと。その際、常にその隣に看護婦の服装をした女がいたことも共通しております」

「この前の不死鬼の女だな・・・」

ヤンは腕組をして考え始めた。

「しかし・・・不死鬼は昼間は活動できないはずでは？」

疑問を口にしたのは、ピーターである。

「いや、ファン・クラッペ医師は伝染性吸血病開発室の研究成果をすべて把握していた可能性があります。バレンツ主任の研究は半年前にはある程度の結論が出ていた。その後は、必要な入浴の頻度と

油の量を知る実験をしていただけ。そうだね？」

「はい。私はファン・クラツペ医師とはほとんど話したことはありませんが、彼はスタンジエ医局長の目を盗んで、頻繁に研究室に来ていました。私の報告書も見えていたかもしれません」

「あなたの報告書だけど、マウリッツのところには上がってないし、どこに行ったかもわからないの。上がっていれば、マウリッツだって注目したはずよ。ひよっとすると、ファン・クラツペがそれを盗み出して、マウリッツの目に留まらないようにしていたのかもしれない。自分がその研究を使うために・・・」

言った後で、カリスが唇を噛んだ。婚約者の迂闊さに苛立ちを覚えるが、一方で、何の力にもなれなかったのは自分なのだ。非常勤参事官である自分が、伝染性吸血病対策室の状況を抑えていればよかったのである。しかし、ファン・クラツペによるスキャンダルの一ク以来、目立った動きを医局内で行うことにははばかりがあったのだ。これがファン・クラツペの狙いだったのかもしれない。

「ファン・クラツペという男はただのセクハラ医師ではないな。陰険で底の浅い男に見えて、やっていることは相当に考え込まれている。なにより・・・医師と言うより、人間としての倫理観が完全に欠如しているかのようだ。こういうやつは恐ろしいことをしでかす」

長年犯罪者を見てきたピーターが言う。知能犯と言うのはそういう人物が多いが、彼はその極め付けであるように思われた。

「これで、主犯格の特定が遠のいたわね・・・」

シルヴィアが嘆息した・・・。

「いえ。私は元々テオは利用されているだけと考えていました。操死鬼にされていたとまでは思いませんでした」

「えっ!?!」

ヤンの言葉に会議室の全員が驚く。

「動機が弱すぎますし、彼はあれでもこの国の権力者です。自分自身で画策するなら、危険な不死鬼と共闘関係など結ばなくても、人間の兵を集めて反乱を起こせます」

「では、いったい誰が・・・」

シモンが当然の疑問を口にする。

「はつきりとしたことはいえませんが・・・この国の人間とは限りません。医局で自殺を図った三人の密偵にはフリップ王国の出身者が含まれていました。それに、敵が一枚岩で一人の首謀者を中心に動いていない可能性があります。ここまでの彼らの動きもあまり整合性が取れていない。ちょうど私も保安兵団にご協力を依頼したいと考えておりました。護国騎士団は彼らの攻勢に備えることで手一杯です。地道な捜査をお願いすることになりますが、よろしいですか?」

「もちろんです。私はそこにいるロビー・マルダーをずっと追っていました、あなたに捕らえられたせいですっかり暇ですからな」

冗談ともいえない声で言った。

「悪かったね。レインの旦那。俺は捕まるならあんたがいいと思っ
ていたさ」

「ふんっ!他人の手先になって動いてドジを踏み追って!」

ロビーとピーターは追われるものと追うものの関係だったはずで、それも一度しか接触したことはない。だが、二人はまるで親友同士のように見えた。長年お互いの心理を読みあつて動いていた二人とはそういうものらしい。

「まず、保安兵団はファン・ダルファー邸に過去一年間出入りしていた者全員を洗い出してください。ファン・クラッペと三名の不死鬼だけであそこを操死鬼の屋敷に出来たとは思えません。それから、医局で自殺していた密偵の方は私の方で調べます」

「待ちなさい！ヤン、医局の密偵の方も保安兵団に頼むべきよ」

シルヴィアが厳しい口調で言った。

「あなたは現場の陣頭指揮など執るべきじゃない。みんながもたらした状況を把握して方針を示せるのはあなたしかいないのよ。今は手足よりも頭を使うようにしなさい」

「しかし・・・」

「エツシャー先生、保安兵団の操作能力を舐めてもらっては困ります。両方の捜査をする十分な人員も用意できますし、先生はあまり動かないほうがいい。あなたがあちこちに出向いては、何かあったときの報告先にも困るのです」

ピーターが言う。シルヴィアやシモン、カリスも問題視していた点であった。

「と言って、執務室にこもっていたら、かわるがわるにみんな報告に来て、いちいち通達を出すって言う面倒なことになるだけね。護国騎士団本部には伝声管の設備もないし。よし、この建物の大広間に司令部を開設しましょう」

「司令部？」

「国公陛下より今回の人為的な吸血病の流行と反乱事件を、不死鬼軍事件と公称し、すべての公国政府機関を連携させて解決に当たれとの勅令が下りました。ヤン・エツシャーをその責任者とするともあなたは護国騎士団長の代理だけど、ウイレムは国境周辺を押さえないといけないから、アメルダムではあなたが総指揮官よ。すべての情報があなたに上がり、あなたの方針に従ってみんなが動くようにしないといけない」

「で、その司令部とは？」

シモンが口を挟む。

「広間の演壇にヤンの執務机を起きましよう。私たちはそこを取り囲むように席を作ります。私たちの指示で動く人員はその後ろに。伝令として動く要員は常に演壇の横のスペースに待機させましよう」

「なるほど。いちいち報告に執務室に行かなくてもいいですし、必要ならすぐに打ち合わせができますな」

ピーターが言う。護国騎士団ではあまりこういうことを考えたりはしないが、保安兵団は伝声管の採用にもわかるように、こうした事務処理や情報伝達の効率化への関心が高い。

シルヴィアの提案はすぐに実行にされ、ヤンは全員の視線にさらされる形になった。少々居心地が悪そうであったが、便利は便利である。何があってもすぐに状況を把握できるからだ。

だが、こうなるとますますサスキアと二人になる時間などはなくなってしまう。ヤン自身は忘れたとまでは言わないまでも、状況が状況だけにそんなことを考えている余裕はない。だが、サスキアは

ヤンの周りに人が集まることで、ますます暇になっていった。掃除や食事を用意する人員まで新たに増員されている。

会議の翌朝、サスキアは自室に徹夜明けのマルガレータを招いた。彼女は一晩中、ロビーの食事の製造方法を検討していたのだ。どうも彼女の部下は協力的ではない。今まで助手でしかなかった年下の女性がいきなり上司になったのだから無理もないが。

「お疲れ様。少しは寝たほうがいいわよ。なんだったら私のベッドを使って」

「ありがとう。もう、中間管理職も大変なのよね。正直年上のおじさんやエリートの医学院の先輩に細かいお願い事なんて出来ないし・・・」

まだ出会って一日しかたっていないのだが、二人はすでに何年も一緒にいた親友のように打ち解けていた。

「私は何にもすることがなくて・・・今のヤンには私なんて必要ないのかもしれないし・・・」

どうもサスキアは昨日の件から落ち込んでいた。マルガレータに話す時だけはヤンのことを名前と呼ぶが、話題は自分を責めるものばかりだった。再会したばかりの毅然とした彼女の姿はそこにはない。かなり無理をしていたのだろう。

「！」

眠い目をこすっていたマルガレータが急に顔を上げた。

「そうだ！サスキアって看護婦の資格ももっているんでしょ？伝染

性吸血病のことはわかる？」

ヤンとのことを思い出して、ふさぎこんでいたサスキアはびっくりして答えた。

「え、ええ、ヤンの役に立ちたいと思って勉強していたし、マウリツツ様にも少しは指導をうけたわ。あと、ロビーさんの手術は手伝ったし……」

「なら、クリステル先生にお願いして、私の仕事を手伝ってもらえないかしら？人手はぜんぜん足りないし、みんな協力的じゃないし、細かいこともお願いしづらいのよ。サスキアがきてくれれば、きつとぐつと楽になる！」

「え……でも……」

「いつまでもエツシャー先生のことできよくよしているぐらいだったら手伝ってよ。体でも動かせば少しは気も晴れるわ。泣き顔や落ち込んだ顔も甘える時はいいけど、忙しくしている男には実は負担にしかないものよ」

そこにノックもせずにかリスが突然部屋に入ってきた。

「あら、バレンツ主任。おはよう。なんだかすっかりサスキアと仲良くなっちゃったのね」

「あ、お邪魔しています。クリステル先生。あの、一つお願いが……」

「廊下まで聞こえていたわよ。いい考えだと思うわ。どうしたってあの二人はあなたに十分に協力するとは思えないし、たいして優秀でもないしね。他の人員もまわす余裕はないから……サスキアっ！どう？あなたは暇をもてあましたことなんかないから、どうしていいのかわからないんでしょ？」

「お姉さま……」

「ほら、しゃきつとしなさい。エッシャー先生といたい何があったの？」

何も言わないサスキアに代わってマルガレータが説明した。

「あつちやく・・・エッシャー先生も相当その辺はだめ男ね・・・きつと何がまずかったのかも気付いてないわよ。ああ、たぶん、その医師のお姉さんとやらが自分に気があるってこともわかってないわね。だから、そんなこと平気で言えるのよ」

「すごいですね。そこまでわかるなんて」

「え、あ、まあ、マウリッツだって似たようなものだからね・・・」

「あらら、クリステル先生も苦労なさったんですね」

「あなたとメガネの主計官みたいに何でも順調に行かないわよ」

「あら・・・」

マルガレータが赤面した。ピーテルのことは隠しているわけではないが、上司にまで知られているとは思っていなかったのである。

「まあ、女同士の会話はいつでもできるから、それぐらいにしておくとして、どう？サスキア。バレンツ主任のことを手伝ってあげて・・・はい」

サスキアは目をこすりながら言う。カリスはまだ心配だった。

「そうだ、バレンツ主任。今は自宅から通っているの？」

「ええと、一応そうなんですけど・・・遠いから通うのは大変で・・・遅くなっちゃったので昨晩は徹夜で仕事しました」

「あらら、体を壊されたら困るわ。女性用の宿直室なんてさすがに用意できないしね。いっそ、この部屋でサスキアと同居しない？」

「え？」

年少の二人がそろって驚く。

「ここは中央医局から少し距離があるから、あの近くに住んでいるなら通勤も大変でしょ？彼氏のうちに泊まるってわけにもいかないだろうしね。ピーテル君は独身寮だろうから」

「え．．．あ．．．あの．．．まあ．．．」

「サスキアはいいわよね？公私共にバレンツ研究員を助けてあげて責任ある身分になると女は男以上に大変なのよ」

「あ．．．はい．．．」

「いいかしら？バレンツ主任？」

「あ、はい。私はありがたいですから。じゃ、サスキア、よろしくね」

「夕方に一度帰って着替えや荷物を持ってきなさい。それぐらいの時間はあの二人に仕事させないと。ベッドなんかは．．．ああ、ピーテル君に言えば用意してくれると思うわ」

なんで、カリスがピーテルのことを君付けにしているのかよくわからないが、とにかくマルガレータはうれしかった。サスキアが優秀な看護婦であるらしいことはわかるし、気詰まりな年上の男たちだけの職場も楽しいものになる。本部内で安心して寝泊りできれば仕事にもっと集中できるのだ。何より、沈みがちなサスキアを元気付けてあげる時間が取れる。

「よし、じゃ、バレンツ主任、妹のことも頼むわ。世話のかかる娘だけだよろしくね。エッシャー先生のだめっぷりについては．．．まあ、急いだって始まらないわよ」

しゃべりながら、サスキアの朝食をつまみ食いし、忙しそうに部屋を出て行った。颯爽とした身のこなしはマルガレータがあこがれる

ところだが、どうもあのようにはうまくいかない。

「じゃ、サスキア。よろしくね。楽しみだわ。なんだか、学塾時代のお泊り会みたいで」

「あ、うん。マルガレータ・・・その・・・なんか・・・ありがとう」

「何言っているの。いろいろこれから私の方が手伝ってもらうんだから」

「うん。あたし・・・がんばるわ」

こうしてサスキアはカリスのはからいで、公国中央医局の臨時職員
の身分を得、ロビー・マルダー治療チームに席を得たのである。そ
のことを聞いたヤンは複雑な表情をして何も言わなかった。報告し
たカリスはその場では何も言わず、シルヴィアにそのことを話す。

「二人とも、離れ離れだった十年をお互いに知らないからでしょう
ね。探りあいが出るほど器用でもないし、そもそも経験不足なん
だわ」

「経験不足どころか、まったくくないんですよ。本当はお互い相手の
ことしか頭になかったから、経験値ゼロなのよ。ああ、もう、見て
られないわ」

頭をかきながら言うカリスにむかって、シルヴィアは皮肉な笑みを
浮かべる。

「そう言うあなたも、ちょっと前までは『鋼鉄の処女』とか言われ
ていたんだけどね」

「う・・・私は別に経験値ゼロってわけでもなかったわよ・・・」

「一ヶ月ともったことなかったでしょ？優秀すぎる女は難しいわよね。あなただとスタンジエ先生ぐらいじゃないと男が馬鹿に見えてしょうがなかったでしょうしね」

「あなたはとうだったのよ・・・」

「さあね。私は社交界の花つて呼ばれていたけど、あんまり爵位の高い貴族には興味なかったなあ・・・面白みがなくなつて」

「それで、面白いところ満載のファン・バステン將軍の押しかけ女房になつたのね」

「ま、そう言うこと」

二人はどんなに多忙になつても、一日一回以上のこうした会話を絶やすことはなかった。そして、そう言う気持ちの余裕を、不死鬼軍事件の対策にかかわる全員に持たせようと考えていたのである。不死鬼たちとの戦いはそれだけ、精神に負担をかけるものであることを、彼女たちは理解していた。

ケテル村から

ケテル村の診療所では、ヤンに変わって別の医師が村人たちの診療を行っていた。

「マルコさん、エッシャー先生の言いつけはちゃんと守っているみたいですね」

「ああ、本当に酒が飲めなくなったら困るからなあ。酒はグラス二杯まで、五日に一回は飲まない日を作っているよ。死ぬならばっくりがいいね。そうだろう？スタンジエ先生」

「はは、長生きしてください。カスペル君！いつもの薬を用意してマルコさんに渡して！」

「はい。かしこまりました」

カスペルが控え室横にある薬品庫に小走りで行って行く。

マウリッツはファン・クラッペの辞令を使ってケテル村にヤンの代理として来ていた。目的は別にあるが、とりあえず、代理の医師として働いている。カスペルはすべての事情を知っていた。

「次の方！どうぞ」

言われて入ってきたのは、しゃれた服を着てめかしこんだ美人であった。二十代半ば、サスキアよりは若干年上であろう。装飾は控えめだが、上質の素材で作られたセンスのいい服がよく似合う。昨今ではアメルダムでもなかなかお目にかかれない貴婦人らしい貴婦人である。

「姉さん！また来たの？」

「あら、カスペル、ずいぶんなこと言うじゃない。あら？」

「エツシャー先生ならアメルダムに出張中だよ。こちらは代理のスタンジエ先生」

「はじめまして。お嬢さん。カスペル君のお姉さんですか。どこがお加減でも？」

丁寧な対応でマウリッツは尋ねる。実を言えば中央医局長についてのからのマウリッツは、組織の長としての事務仕事や伝染性吸血病対策室での研究に追われ、医者らしく患者と向き合う機会はほとんどなかったのだが、だからと言って、いざ診察となれば、ヤン同様に温かみのある言葉で患者の気持ちを和ませることを怠ったりはしない。元々気さくな男なのだ。

「先生。姉はいつもエツシャー先生が目当てで、どこも悪くないのに理由をつけて診療に来るんですよ。相手にしなくていいんです」
「おやおや。まあ、今日はもう患者さんももういないし、コーヒーでもいかがですか？ええと、お名前は？」

「カレン・ファン・ハルスです。エツシャー先生が留守だなんて……」

「うーん、あの男、女っ気がないと思って心配していたんですが、あなたのような美しい方に慕われているとは……」

などと言っているが、実際にはカリスと出会うまでのマウリッツはヤンと大して変わるものではなかった。シルヴィアの手引きでカリスに強引に迫られるまでは、まともな恋愛の経験もなかったのである。四十を目の前にしてやっと得た伴侶であった。

「お姉のことをエツシャー先生はぜんぜん相手にしていないんですよ。どうも気付いてもいないみたいで……」

「あきれたやつだなあ……」

などと言いながら、マウリッツも実はカリスからのアプローチに長いことまったく気付いていなかった。シルヴィアの協力でやっと二人は付き合い始めるきっかけを得たのである。一方で、ヤンにサスキアを引き合わせることを考えたのもマウリッツであるから、多少はバツが悪い。カスペルは両方の事情を知っていたのだが、実はヤンは何度かサスキアの話のカスペルにしたことがあり、その時の表情からヤンの気持ちはほぼ理解していた。もっとも年少でありながら、最も熟知りなのはこの紅顔の医師である。

三人はカスペルが入れた薄めのコーヒーを飲みながら談笑し始めた。

「エッシャー先生はいつお戻りになるのかしら・・・」

「うーん、重大な仕事をしているのでね。ずいぶんかかると思いますがよ」

「いっそのこと・・・私もアメルダムに行っちゃおうかしら」

「えっ？」

カスペルとマウリッツは声をそろえて驚いた。

「実はね、ファン・レオニー國務卿閣下からファン・ハルス家に依頼があったのよ。國務府に出来たら家柄のいい貴族の令嬢に手伝いに来てほしいって。この辺で貴族の令嬢って言ったら私しかないじゃない」

ルワーズ公国では軍隊以外の国家機関の職員には一定以上の割合で女性を雇うことが義務付けられている。保守派のファン・レオニーはシルヴィアのこともあり、女性の採用には積極的ではないのだが、せめて、地方の名門貴族の令嬢を使うことで、貴族間の結びつきを強めることに利用しようと考えていたのだ。

ファン・ファルス家は辺境であるドルテレヒト州内の唯一の自治領主で、ケテル村もその勢力範囲に入っている。と言っても、ルワーズ公国では自治領主の権限は著しく制限されており、税率も勝手に決めることはできない。州卿に代わってささやかな領域の統治を代行していると言う程度ではあるが、辺境の自治領主ほど伝統があり、貿易や工業事業を営んでいることも多く巨大な資産を持っている場合が多い。ファン・ハルス家もアメルダムにステーン湖の水産物を運ぶ運輸業で大きな財産を得ている。

その時、診療所の外から声が聞こえた。カスペルが応対に出て行く。

「先生！大変です！来てください！」

カスペルの声にあわててカレンと共に玄関に出る。玄関に来ているのはザーンから来た州政府の役人であった。役人は丁寧な口調で話し始める。

「アメルダムからの緊急指令で、周辺地域のすべての住民をザーンの城壁内に収容することになりました。伝染性吸血病の流行のためだそうです。ここまでは来ていませんが、ゼーラント州ではいくつもの村が襲われたそうです」

「それは、どなたの名義の指令ですか？」

やはり、マウリッツは丁寧な口調で尋ねる。

「名義は護国騎士団のファン・バステン將軍ですが、將軍は今ザーンにいらっしやいます。実際に発令したのは、將軍の依頼で騎士団長の代理をされていると言うヤン・ファン・バステンという弟君です」

「え？ヤン先生が？」

いったのはカレンで、マウリッツとカスペルは事情は想像できている。

「あなたはファン・バステン將軍と話すことはできますか？」

「はあ、今はザーンの護国騎士団支部に発令所を設けておられますので……」

「では、伝えてください。マウリッツ・スタンジエはフリップ王国に渡り、国境の向こう側で吸血鬼対策に動く」と

「え？」

役人だけでなくカレンも驚く。

「私は公国中央医局長マウリッツ・スタンジエだ。わけあって特別の任務のためにここでフリップ王国に渡る準備をしていた。ヤンのことだからこういう大げさな指令を出すことも想像していたので、それを待つてステーン湖渡ろうと考えていたのです。ファン・バステン將軍には心配するなと伝えてください」

「は、はっ！」

「それから、こちらのお嬢さんはファン・ハルス家のご令嬢です。こちらは弟さんで、ここでヤン・エッシャーの医師をしているカスペル君。二人をアメルダムまで護衛つきでいけるように手配をお願いします」

「は！了解いたしました！」

急に改まって役人は卑屈な態度をとる。地方に巡回することのある軍関係者と違い、中央医局長などと言う政府機関の重要人物に会うことなど滅多にないからだ。

「先生！待ってください。私はフリップ王国に一緒にします！」

カスペルの言葉にその場の全員が驚いた。が、カレンだけは「またか」と言うように、ため息をついて、額に手を当てた。

「カスペル君、フリップ王国の国境地帯は今極めて危険な状態だ。

私が行くのは王都アキテーヌだが、危険地帯を横断することになる」「先生、先生はエッシャー先生と違って武術の訓練はされないですよ？私はエッシャー先生に稽古を受けています。エッシャー先生によると医術よりも筋がいいとか・・・」

マウリッツは驚いた。そんなことの前に医者として教えるべきことは山ほどあるというのに・・・。

「こいつはまた・・・とんでもない医者がいたものだが・・・。しかし、ヤンのところに行けばカスペル君だって彼を手伝えるだろう？」

「私なんて邪魔なんじゃないですかね？エッシャー先生には・・・ええと、サスキアさんがついておられるんでしょう？」

「さ・・・サスキアって・・・女の人の名前よね・・・」

一人違うことに関心が向かったカレンを無視して、カスペルはさらに説得を続ける。

「エッシャー先生には、いろんな人がついてますけど、スタンジエ先生には誰もいないじゃないですか。ルワーズ公国はエッシャー先生に任せてフリップ王国をお一人でどうにかされるつもりなんですよ？私一人ぐらいはお手伝いさせてください」

「しかし・・・」

「それに・・・あなたを一人でいかせてアメルダムに帰ったら、カ

リスさんになんと言えはいいのか・・・」

カスペルはカリスにもサスキアにも会ったことはない。マウリッツに会ったのも、ヤンの代理として来たつい先日が初めてである。だが、生活の様子は一度ケテル村に来たことのあるシルヴィアから伝えるように言われており、様々な事情もその筋の文通で知っていた。マウリッツの悪巧みに乗ったのもシルヴィアを通じてである。

「カレンさん。弟さんを止めてください」

たまりかねたように姉の方にとめることを依頼したのだが・・・

「さ・・・サスキアって誰です？」

目が据わっている。

「ええと、いえ、その話はあとで・・・」

「カスペルは一度言い出したら聞きませんわ。私、エッシャー先生からお聞きしたことがあります。医術はまだただけど、短槍と体術は護国騎士団の騎士の中に入っても負けないレベルかもしれない。稽古でも三回に一回は一本を取るそうですよ」

カスペルは胸をはって腰に手を当てた。まだ子供らしさの残る十七歳の医師は想像以上に頑固であった。また、マウリッツには武術の素養はないが、ヤンが医者でありながら、武術家としても一流以上の腕を持つことは知っている。そのヤンに三回に一回は一本を取れると言っのなら、カスペルの武技はかなりのものなのだろう。

しかたなく、マウリッツは折れることにした。

「・・・わかりました。では、カスペル君は一緒に行きましょう。生きて帰れるかわかりませんよ！」

「先生こそ、結婚を目の前にカリスさんを未亡人にする気ですか？ せめて僕ぐらいの護衛は必要ですよ」

「まったく・・・ヤンのやつはどういう教育をしているんだが・・・」

マウリッツは観念した。

「では、カレンさん。お手数ですが、すぐに手紙を書くのでアメルダムにお持ちいただけませんか？」

「ええ、よろしくてよ。どなたに宛てたものかしら？」

「一枚は、ヤンに。それから、私の婚約者のカリス・クリステル。おそらく彼女は中央医局でヤンを手伝っているはずですよ。それから君！」

マウリッツが呼んだのは、話が決まるのを待っていた役人である。

「ウィレムにも手紙を書くから、それは君に持って行ってほしい。

これは重要な書簡だ」

「はっ！了解いたしました！」

マウリッツはその場で三枚の手紙を書いて、カレンと役人に渡した。カスペルもヤン宛にマウリッツに同行する許可を求める手紙を書いた。

「それじゃ、姉さん。エツシャー先生に会ったらよろしく伝えてください。あんまり怒らないでくださいって」

「ま、あなたのことは先生はよくわかってらっしゃると思うわよ。

私のことはさっぱりわかってくださらないんだけど・・・で、サス

キアさんでどなたなんですか？」

マウリッツが少し悩んだ後で思い切って言うことにした。どうもこの姉弟が相手だと、いろいろと押し切られてしまうようだ。

「アメルダムの私の部屋でメイドをしている娘ですよ。私の婚約者の義理の妹でしょね」

「あら、でエツシャー先生とはどんなご関係なのかしら？」

「子供のころに同じ孤児院にいたことがあるとか。まあ、幼馴染ってやつですね」

「あら、そうですか。ただの幼馴染の方でらっしゃるんですね。じゃあ、仲良くなっているいろいろ先生のことを教えていただかないと」

『ただの』をやたらと強調して言う。マウリッツもカスペルも困ってしまったが、こんなことは本人がどうにかすることだと思い、何も言わないことにした。

三日後の早朝、マウリッツとカスペルは、漁師であるマルコの船でステーン湖の対岸に渡った。

「マルコさん。すぐに引き返してくださいね。村に戻ったら役人の指示に従ってザーンに避難してください」

「ああ、わかるとるよ。どうせ死ぬならぼっくりとは思うが、もうちよつとは酒を飲みたいからなあ」

「はは。本当に長生きしてください。ヤンの奴は鱒が好物だから、余計にあなたのことを大切に診ているんですよ」

「ああ。先生も気をつけてな」

対岸の人気のない浜辺でマルコと別れた二人は、慎重な足取りでフリップ王国内を進んでいった。

ザーンでは、ドルテレヒト州全体の全住民が収容されることになっている。辺境ではあるので、全体で二十万人程度にしかならないが、ザーンの元々の人口は四万人でしかない。ザーンの内部に親戚がいる者はそこに泊まるが、他の者たちは行政機関の建物や、裕福な商人の屋敷などに割り当てられ、それでも入りきらない者たちは、急遽空き地などに掘っ立て小屋を建てて住まうことになった。

もちろん、護国騎士団のザーン支部にも人がいっぱいであった。小さな子供や老人のいる家庭が優先的に政府機関の建物に入るので、ウイレムの執務室でも、赤ん坊の泣き声が隣の部屋からずっと聞こえている。

「こいつは大変だな・・・子供なんて作るもんじゃないな。金がかかる上に安眠まで妨げられる。しかし、ヤンのやつめ。ずいぶん面倒なことを考えてくれたものだ。」

ウイレムはそうぼやくが、ヤンの狙いは十分にわかっている。ピーター・ブルーナ主任主計官が全体的な計画面を担当することもわかっている、何も心配してはいなかった。

夜、執務室でワインを口にしていると、一人の役人と貴族の令嬢と思われる娘が現れた。ケテル村でマウリッツと話した役人とカレン・ファン・ハルスである。まず、役人がマウリッツからもらった手紙

を渡す。

「ほう・・・ま、ケテル村にいることは想像していたけどな。野郎一人でフリップ王国に乗り込むか・・・」

独り言であつたのだが、カレンはそれを聞いていた。

「一人ではありませんわ。私の弟がくつついていてしまいました」
ウィレムは驚いて顔を上げる。

「お嬢さんは？」

「カレン・ファン・ハルスと申します。弟はヤン先生の医生としてお世話になっておりますわ」

「ああ、確かカスペル君だね。そうか、あなたはそのお姉さんか。でマウリッツについていったと？」

「弟はエツシャー先生に医術だけでなく、短槍と体術も習っていました。私はよくわからないですけど、エツシャー先生によると医術よりも筋がいらしくて、先生でも三回に一回は稽古で一本を取られるとか。それで危険なフリップ王国に向かうスタンジェ先生の護衛をしたいと申し出まして・・・」

「ほう・・・まあ、ヤンから三回に一回一本をとるといふのは相当ですな。安心とは言いがたいですが、それでも十分頼りになる。何、心配ありません。マウリッツは武術はからきしですが、頭は下手するとヤン以上に切れる。ヤンほど無鉄砲なこともしないでしょう」

安心させるつもりでいったのだが、どうやらカレン自身、弟のことはそれほど心配していないようだった。医者としては半人前にもなっていないが、貴族の出の癖にどこでも生きていけそうな、そう言う若者なのだ。

「はい。実は私はそのこと以外に、一つ別にお願いがあってまいりました」

「なんででしょうか？私に出来ることならさせていただきますが」

「実はスタンジエ先生と弟から、アメルダムにいる方に宛てたお手紙を預かっております」

「誰宛でしょうか？」

「エッシャー先生と、もう一つはスタンジエ先生の婚約者の方です」

「ああ、カリス・クリステル先生ですな。彼の婚約者も医師なのでね」

「それと実は私は公国務府から職員にと招聘を受けております」

「なるほど。確か公国務府では女性職員の割合が規定より下回っていると聞いてますからな。国公陛下から叱責されたのかもしれない。ファン・レオニー伯は地方貴族と中央との結びつきを強化したいと考えておられますから、そういうことでしょうか」

別にファン・レオニーに含むところはない。むしろ、ウィレムは自分の妻に押さえつけられている国務卿に多少の同情はしていた。地方貴族と中央との結びつきを強めることも別に悪いことではない。身分にかかわらない採用をとは思うが、それもそれほど急ぐことではないはずであった。女性の採用について妥協しただけでも、ファン・レオニーを見直す気になっただぐらいである。

「うむ。いいでしょう。護国騎士団は毎日二回、アメルダムとの連絡に早馬を飛ばしています。ここ数日は警戒を強めて、人数を増やしていますが、彼らとアメルダムまで一緒に行ってもらいましょう。カレンさんは馬は大丈夫ですか？」

「はい。乗馬は得意ですわ」

「それなら大丈夫。駿馬を一頭用意するので、伝令隊と一緒にアメルダムまで行って下さい。明日の朝出れば、夕方までにはアメルダ

ムに着くことができます」
「ありがとうございます」

カレンは完璧な貴婦人としての礼をして見せた。女性の解放が進む中で礼儀も廃れ始めたから、これほど優雅に挨拶できる女性も珍しい。ウイレムはシルヴィアより年下では初めて見たように思われた。

「ところで・・・ファン・バステン將軍とエツシャー先生とはご兄弟と伺いましたが・・・」

「ええ。まあ、腹違いですがね」

「エツシャー先生は女性には興味をお持ちではないのでしょうか？」

ワイングラスに口をつけていたウイレムは、むせてワインを少し机にこぼしてしまった。

「ああ・・・ええ・・・そんなこともないでしょうがね。慣れてないのでガツガツしていないところはあるでしょうが・・・」

喜んで、もう一度礼をして部屋を出て行った後姿を見送りながら、口の中だけで独り言を言う。

『ヤンの野郎・・・これはもめるぞ・・・』

心配していると言うよりも、自分がアメルダムにいないために、騒ぎが起きても見れないことを残念に思っている様子であった。

その日はヤンが通達を伝書鳩で発した強制捜査の日から五日後であ

った。通達はその日のうちにザーンにも届いたが、住民の受け入れ態勢を作り、順に周囲の村に通達を出しているうちにそれだけかかったのである。

その間に護国騎士団本部ではある計画が立てられていた。協力して不死鬼軍事件に取り組むことになった、護国騎士団、公国中央医局、保安兵団の合同で大パーティを催すことになったのである。非常時に何をするのかと頭の固い閣僚たちは言ったものだが、それを聞いた国公ジェローン・ルワーズは賛成して、自分の資産から費用の大部分を負担したのである。

目的は協力機関同士の懇親と士気の高揚にあるのだが、実は隠れたもう一つの理由があった。ジェローンもそのことを考えて賛成したのである。女性の社会進出が進められているルワーズ公国内において、特に政府機関に勤める者の間では晩婚化が極端に進んでいた。シルヴィアはその問題を憂慮しており、また、困難な任務に挑み、命を懸けることになる護国騎士団員が一人でも恋人でも作って、自分の命をつなぐことに関心を持ってほしいと思ったのである。護国騎士団員は『死を賭して戦う』ことに美学を感じている武人氣質の若者が多いからだ。ウィレムはそんなことは奨励していないのだが、軍隊である以上そうした精神風土があることはいたしかたないことだった。

パーティは護国騎士団本部の敷地全体を使って行うことになった。総勢数千人が参加する大パーティである。最初にヤンが練武場の演題に立って挨拶をした。強制捜査前の勇ましい訓示とは違ってこういう席でのスピーチはあまり得意ではない。

「ここに集まった諸君は、これから困難な任務に挑まねならない。関係各所が協力していくためにも、ここでお互いに懇親を深め、固

い絆で結ばれることが、不死鬼軍との戦いに挑んでは大事なことがある！このパーティには国公陛下も・・・」

「パーンッ！」

突然ヤンの頭が思いつきり扇子で叩かれた。

「堅いわっ!！」

シルヴィアである。この席でヤンにこのようなことを出来るのは兄嫁たる彼女しかない。その場で代わりにスピーチを始めた。

「みなさん！堅いことは抜きにして、今日は楽しみましょう」

そして、護国騎士団ではおなじみの掛け声をかける。

「酒の一滴は血の一滴!！」

それに応えて護国騎士団員が全員で唱和する。

「一滴呑むたび、一敵屠らんっ!！」

その一声が乾杯の音頭となってパーティが始まった。護国騎士団員と保安兵団員はそれで盛り上がったが、中央医局のインテリ男性たちは多少引いている。逆に中央医局に多い女性たちはそう言う体育会系の男たちが珍しい。黄色い声をだして騒ぎ出した。

「なんだか、ああいうちょっと馬鹿っぽい感じの男ってかわいくない?！」

「あ、あっちの兵士さんちよっといいい男よ。あれはきつと護国騎士

団の方ね」

「ねえねえ、あっちの方も三人よ。一緒に呑もうよ。声かけてよう！」

キヤツキヤと騒ぎながら、護国騎士団の若い男たちに近づいていく。

少し離れたところでその様子を見ていたシルヴィアは狙い通りの雰囲気になっていことにニヤリとした。本人は妊娠中の身であるので、酒を飲むことを控えている。手には桃の果汁が注がれたグラスを持っていた。

「ふふ、みんな楽しんでいるみたいね」

カリスが近づいて来て言う。

「あら、婚約者が行方不明の方も楽しんでくださいな」

「女同士で楽しむことにしましてよ。旦那様がお出かけされている奥様とね」

「あら、ピーテル君の彼女とサスキアさんじゃない」

少しはなれたところから、こちらに向かってくる二人を見てシルヴィアが言う。

「ああ、マルガレータ・バレンツ主任ね。なんだかサスキアとすっかり仲良くなったみたいだね。サスキアも暇しているところくなこと考えないから、仕事も手伝わせているの。ああ、部屋に同居もしてもらっているわ」

「クリステル先生！エツシャー先生は・・・」

「ああ、ヤンはこういうパーティーで騒ぐのはあんまり得意じゃない

から、きつとどつか隅っこにいるわよ」

答えたのはシルヴィアである。

「あら、まだ、うじうじしているの？サスキアさん……」

「うじうじつて……お仕事は大変だけど楽しいですし、マルガレータも一緒にいてくれますから……」

「大事な問題の方はどうにもなっていないみたいね……」

「今はエッシャー先生のお仕事には直接私がお役に立てることはありませんから。マルガレータのお手伝いですががんばりますわ」

「つて、ちよつと、大事なのは仕事に役立つかどうかじゃないですよ？」

「え……？」

「あなた、ずっとヤンのこと好きなんでしょう？」

「え……そ……そんな……私……ずっとヤ……先生のお役に立ちたいつて……」

『こ……この娘はまた……』

シルヴィアはあきれた。ヤンもヤンだが、サスキアもサスキアでこれではそうそう進展しそうにもない。カリスも肩をすくめる。マルガレータもここ数日何度もこんな会話をしていたようで、諦めたように首を振っていた。

「でも、ほら、あなたがそうやってうじうじしているから、マルガレータはピーテル君に会いにいけないじゃない。エッシャー先生のところに行かないならここで呑みなさい」

カリスは、だんだん必要なとき意外はマルガレータを呼び捨てするようになった。面倒になってきたのである。なんだか、もう一人妹

が出来たような感じがするのだが、二人の妹のどちらが年下かと言うと微妙な感じがするのだ。

「そ・・・それが・・・クリステル先生・・・」

マルガレータは肩を落としてプルプルふるえながら、別の方向を指差した。その先にはなぜか男ばかりの人ばかりができています。

「さあさあ、保安兵団の諸君も中央医局の皆さんも。われわれ不死鬼軍事件に挑む男たちにとっての女神様！地獄に舞い降りた天使！サスキア・ウテワール様をお守りすると言う聖なる目的に賛同される方は、是非！サスキア嬢防衛隊にご参加ください！今なら我が護国騎士団の誇る画聖！このディック・ファン・ブルームバーゲンの筆によるサスキア嬢のデッサンを漏れなくプレゼント！」

叫んでいるのはなんとシモンである。その横には、この馬鹿らしい有志部隊を作り上げたファン・ブルームバーゲンがいる。彼は強制捜査後のささやかな宴会の間にこの会を作り上げたのだが、数日後に入会してきたシモンが第三部隊長代理に昇進したのを機に、彼に『サスキア嬢防衛隊』の隊長の座を譲ったのである。

さらにその近くで、入会者にサスキアのデッサンを配っている人物をマルガレータは指差していた。半分泣きべそをかいているピートル・ブルーナである。

そろそろとシモンに近寄った直後、シルヴィアの扇子が再び炸裂する。

パーンッ！！

「何をやっとするか！この変態男っ！」

「え、いや、サスキアさんに悪い虫がつかないように、花を愛でる気持ちで見守ると言う精神風土を保安兵団や中央医局のご面々にもお伝えしようと・・・」

「あなたのせいでも、せつかく女の子をカリスに連れてきてもらったのに、みんな引いちゃうでしょ！カレル隊長は休んでるんだから、あなたがここでは護国騎士団の最高位なのよ！それがまったく・・・」

ところが、そこから少し離れたところで、中央医局の女性たちがまた騒ぎ出した。

「くすっ！ちよつと馬鹿なことやる男の人ってホントにかわいいわね。面白いし」

「うちのインテリ男共なんて、つーんとすましててちつとも面白くないものね」

「ねえねえ、あのデッサンってあそこにいる騎士さんが書いているんだって。私たちも書いてもらわない？」

あれよあれよと言う間に、ディックの周りに人だかりができた。さらにピーテルの周りも女の子が集まりだす。

「この騎士さんかわいい！ねえねえ、一緒に飲もうよ！」

「きゃ、赤くなった！かーわーゆうーいっ！」

そこにマルガレータが走ってきて、ピーテルの襟首をつかんだ！

「ちよつとっ！ピーテル顔貸しなさい！」

その瞬間、ピーテルの周りに集まっていた娘たちは急に冷めたよう

に引いていった。彼女たちは看護技術室の看護婦たちで、珍しい女性研究員のマルガレータのことは知っていた。

「なーんだ。マルガレータ・バレンツ主任の彼氏みたいよ」

「でも、言われてみればあの二人すっごいお似合いね」

「なんだか、かわいらしいカップルよね。ちょっと応援しちゃいたくなる」

女性たちの会話はとどまることを知らない。そのうち、シモンの周りにいた男たちも、女性たちに声をかけられて去っていった。残ったのはシモンだけである。

「……」

「あんだ……ホント馬鹿ね……」

離れたところで傍観していたカリスがサスキアに向かって言う。

「マルガレータみたいに、首根っこひつつかまえてでも近くにいないと、誰かに持ってかれたって知らないわよ？」

「え……でも……お姉さまだって……」

「う……大丈夫！マウリッツは浮気なんて絶対しない！」

力強く言う割には、表情は不安げであった。

「すみません。ヤン・エッシャー先生はこちらですか？」

見慣れない服装の娘が話しかけてきた。中央医局の職員でも保安兵団の女性捜査員でもないので目立っていた。シルヴィアにはそれが国務府の臨時職員に与えられるものであることがわかる。

「ええと、どつかその辺の隅っこの方にいるんじゃないかと思いきすけど、あなたは？」

聞き返したのはカリスである。

「私はケテル村から参りました。カレン・ファン・ハルスと申します。この度、國務卿ファン・レオニー閣下より國務府からの特別監察官として、護国騎士団本部に派遣されました。実はケテル村からお手紙を預かって持ってまいりまして・・・」

「ああ、特別監察官のことは聞いているわ」

言ったのはシルヴィアである。政敵であるファン・レオニーの一種の嫌がらせととっていたのだが、カレンの印象は悪くない。これほど、貴婦人として洗練された振る舞いの出来る女性と言うのは珍しかった。

ファン・レオニーの嫌がらせは実は最初の時点で大失敗であった。國務府内にはシルヴィア派の職員が多いので、わざわざ辺境から貴族の女性を呼び寄せたのに、本人がよりによって、ヤン・エツシャーの味方になるつもり満々だったのだから。

「で、お手紙と言うのは誰から？」

「マウリッツ・スタンジエ医師と、私の弟でエツシャー先生の先生のカスペル・ファン・ハルスからです。あと、スタンジエ先生からはカリス・クリステル様宛のお手紙もお預かりしておりますわ」

「え？マウリッツっ！わ、私がカリス・クリステルです」

「あ、では、これが・・・」

カリスは言い終わる前にカレンの手からそれをひったくった。

「あらら・・・ごめんなさい。彼女、スタンジエ先生の婚約者なの。結婚直前に離れ離れで、消息すらはつきりしてなかったから。やっぱり、彼はヤンの診療所にいたのね」

シルヴィアが代わりに謝る。

「いえ。心中お察ししますわ。でも・・・」

「へ・・・え・・・マウリッツ・・・ふ・・・フリップ王国に？じやあ、しばらく帰ってこないじゃないの・・・いつになったら結婚できるのよ・・・」

カリスはがっかりしていた。

少しはなれたところで、サスキアは背中を向けて震えていた・・・。

『どうしよう・・・医師のカスペルさんのお姉さんて・・・』

ここ最近頼りきりだったマルガレータは近くにおらず、カリスは手紙で茫然自失なので、どうしていいかわからなくなったのだ。

「って言うか・・・中央医局はしばらく頼むって私に全部押し付けてるんじゃないの！あああっ！ファン・クラッペが怪しい動きしていたから気をつけるって・・・気付いていたならどうにかしなさいよっ！」

カリスは手紙を読み進めるたびに絶叫しているので、さすがに見かねたシルヴィアがサスキアに声をかけた。

「サスキアさん！ちょっとカリスがあんまり騒ぐと、さすがに下の者に示しが付かないわ。つぶれるまで呑むかも知れないけれど、と

りあえず、目立たないところに連れて行ってやって。目立つのはま
ずいわ。やっぱり」

「あ、はい!」

そうシルヴィアが言ってくれたことに感謝をしていたのだが、思わ
ぬところからさらに声がかかって来た。

「あら、あなたがサスキアさん?」

「っ!?え・・・あ、そうですが・・・」

「スタンジエ先生からエツシャー先生の幼馴染って伺って。よろし
くお願いしますわね」

「え、あ、はい。よろしく申し上げます」

「さ、お姉さんをどこかにお連れしましょう。お手伝いいたします
わ。お部屋にお連れした方がいいかしら?こちらにお泊りなの?」

「あ、ありがとうございます。こちらです」

まったく悪意のないカレンは親しげにサスキアに接する。サスキア
も決してカレンに悪い印象は持たなかったのだが、ヤンの話が頭を
掠めていた。

カリスはいつの間にかワインの瓶を持って一気飲みをはじめていた。
自棄酒である。サスキアとカレンが両側から支えて自室に連れて行
ったのだが、部屋に戻ってからも泣きながら呑み始めたので、とり
あえずほおっておいて会場に戻ることにした。

「エツシャー先生宛てにスタンジエ先生と弟からお手紙を預かって
いるんですけど、どこにいらっしゃるのかしら・・・」

「これだけたくさんの方がいらっしゃるので、見つけるのは大変で
すわ。明日にした方がよろしいかも知れませんよ。お酒も入ってお
られるでしょうし・・・」

「うーん、でも・・・」

サスキアが恐れいたことをカレンは口にした。

「わ、私、実は先生のことずっとお慕い申し上げてて・・・早くお会いしたいんですの。お願い！サスキアさん、一緒に先生のこと探して！」

「え・・・あ・・・は・・・はい・・・」

思わず返事をしてしまったサスキア。その時、廊下の正面から当のヤンが現れた。

「あ・・・サスキア・・・ん？あ、あれ？カレンさん？」

一瞬、カレンは抱きつきそうな勢いで走りよっていったが、思いとどまった。この辺は貴族の令嬢としての教育を近年では珍しいほどしっかり受けているので、節度は守る。

「お久しぶりですわ。エツシャー先生。私、國務卿閣下の招聘をお受けして、こちらに特別監察官としてお邪魔することになりましたの。ケテル村でスタンジエ先生とカスペルからお手紙を預かっておりますわ」

「マウリッツからっ！やはりケテル村でしたか。手紙と言うのは・・・」

「こちらです」

落ち着いた態度で、しかし、優雅に魅力的な笑みを浮かべながら手紙を手渡す。サスキアにはこんなまねはできない。

「なるほど。やはり、フリップ王国か。カスペルまで着いていくの

は、まあ、彼のことですから大丈夫でしょう。カスペルなら多少の危険には十分立ち向かえます。マウリッツは間違った判断をする男ではありませんから。心配ありませんよ」

「はい。私も心配しておりませんわ。ところで、先生に久々に大変お会いできてうれしいですわ。これから、しばらく私も護国騎士団本部にお世話になることになりますから、よろしくお願いしますわね」

「え、あ、そうですか・・・まあ、とりあえず今日はちょうどパーティですから楽しんでください」

「ええ、先生、ご一緒させていただいてよろしいかしら？」

「ええ。サスキア！君も・・・い、一緒にいかないか？」

先日のことを気まづく思いながら、ヤンとしては精一杯で誘ったのだが、サスキアの反応はよくなかった。

「いえ。私は・・・あ、姉の様子が気になりますので。お二人でいってらっしゃいますし。では・・・」

スタスタとカリスの部屋に向かって戻って行ってしまった。

パーティはまだまだ続けている。

騒乱夜会

「う……うう……マウリッツのバカアっ……あううう……」

カリスはすでに正体不明であった。会場から持ち帰った瓶だけでなく、自分の部屋においてあったものも含めて、もう何本も飲み干している。グラスにも注がず、ラツパ呑みで。

「お、お姉さま……」

「あ、う、さ、さくふ……きうあく……だつてさ、考えてもみてよ……フリッツ王国って、国境地帯は吸血鬼に占領されているみたいなものじゃない……わ、私……結婚前に未亡人になんてなりたくないよお……危ないことばかりしてえ……」

鼻水をたらしながら泣きじゃくる。颯爽とした仕事の出来る美女として視線を集めるカリス・クリステルのこんな姿をパーティーで公開しては、確かに、自立した女性の砦とも呼ばれる中央医局内の士気にかかわることだろう。

「……ううう……で、でもね……でもね……この手紙の……一番最後ね……」

「最後？」

サスキアは姉の涙とこぼしたワインでべちゃべちゃになっている手紙だったものを拾い上げて、滲んだ文字を解読してみる。手紙の最後には次の言葉があった。

『カリス、君がいるから医局を留守にできる。本当に申し訳ないと思っっている。だが、フリッツ王国への潜入は必要なことだ。必ず帰

つてくるから、そのときはすぐに式の準備を始めよう。体に気を付けて。みんなにもよろしく」

「そ、そうよ・・・帰って来るよねマウリッツ・・・そしたら結婚・・・その間は私が医局をつて・・・うう、うん。わだじ・・・が・・・がんばる！マウリッツが帰ってくるまでがんばるくらあつ！ちゃんと帰ってきてねえ・・・」

どうやら、もう自己解決したらしい。どんなに崩れても自分で立ち直ることが出来ると言つのも、この女医の真価であるかもしれない。急に立ち上がり、服を脱ぎ始める。あわててサスキアはあいていたカーテンを閉めた。カリスはそのまま怪しい足取りで、部屋の隅にある浴槽で冷水を頭からかぶった。

「つぶ・・・ふうううつ！キクわあ。もういっぱい」

再び冷水をかぶる。

「ふうつ！よし、すつきりした。御免ねサスキア。もう大丈夫よ」

「あ、そ、そう・・・よかったわ。お姉さま」

「私は立直りの速さが持ち味よ」

浴室から戻ってくる義姉にタオルを渡す。カリスはすばやく体を拭いて、元の服装に戻った。酔いが完全に抜けたわけではないだろうが、すでに平常の彼女を取り戻している。いっそ、潔い感じであった。

「ごめんね。サスキア。エッシャー先生は？」

「あ、あの・・・さっきお会いして、マウリッツ様のお手紙を持ってきた、カレンさんって方と・・・」

サスキアが目には涙を溜め始めた。多少は呑んでいたんで、涙腺が緩んでいたのかもしれない。

「あ・・・そうか・・・、弟さんがカスペル君って、この前の話の・・・で、サスキアはそこで引き下がってきちゃったの？」

「え・・・でも・・・私は・・・」

「あのねえ・・・エツシャー先生はああいう感じで、につぶい男だけど、それだけに強引に女から誘われた押し切られちゃうかもしれないのよ。あの、カレンさんって人も綺麗だし、シルヴィアに見劣りしない礼儀作法を身につけている貴婦人って言うのもめつたにいいわ」

「そんな方がいらっしやるなら・・・私・・・」

ぐいつ！とカリスはサスキアの頭の後ろから腕を回して肩をつかんだ。横から顔を覗き込んで強い口調で言う。

「馬鹿っ！あなた、ずっと想ってたんでしょ？エツシャー先生の力になりたいんだって、十年以上あなたは努力していた。私はあなたの姉よ。ずっとそれを見ていたわ。単にお仕事に役に立ちたいとか、そんなんじゃないでしょ。少しは素直になりなさいよ！」

そう言っつて、ほとんど空になって転がっているだけのワインの瓶の中から、半分くらい残っているモノを見つけて手に取った。

「ほらっ！景気付けに呑んでっ！普通にいけないなら酒の力を借りる！もう、押し倒そうが、裸で迫ろうが誰も責めないから、勢いつけてやって来いっ！」

「や、ちょ、ちよっとお姉さまっ！んぐっ・・・」

カリスは無理やり、サスキアの口にワインを注ぎ込んだ。結局そのままボトル半分ほどを一気飲みにしてしまった。

「・・・あ・・・うぷ・・・お姉さま・・・酷い・・・」

「酷いじゃない！さあ、いくよっ！エッシャー先生をモノにして来いっ！」

カリスはさらにもう一本の瓶を手に取り、強引にサスキアを部屋の外に連れ出した。そこにシルヴィアから話を聞いたらしいマルガレータが現れた。後ろには顔に平手打ちの跡を貼り付けたピーテル・ブルーナがいる。

「あら、先生！もう大丈夫なんですか？」

「私は大丈夫よ。大丈夫じゃないのはこっち！」

「サスキア・・・？」

サスキアは酒を飲めないわけではないが、進んで酔うまで呑むほうではない。数日同じ部屋で寝泊りしていても、酔っ払ったサスキアというのは始めてみた。

「うう・・・ま、まりゆ・・・ぐあ・・・れえたあ・・・ヤンに・・・

ヤンに・・・かれ・・・くあれんしゃん・・・私・・・」

「サスキア？あの、どうしちゃったんです？これ・・・」

先ほどのカリスと似たような状況なのだが、マルガレータはその場にいなかったので良くわからない。

「例のエッシャー先生の医生、カスペル君だっけ？彼のお姉さんが来ているのよ。国務府からの特別監察官になったとかで、しばらく護国騎士団本部に居座るみたいよ」

「え？じゃあ、エツシャー先生は・・・」

「もう、二人でどっかに行っているわ。手ごわいわよ。シルヴィアに負けない気品のある貴婦人なんて他に見たことないわ」

「ちよつと！サスキアっ！泣いている場合じゃないでしょっ！」

「そうよっ！だから今、酒飲ませて勢いつけて、もう、なりふり構わず迫らせようっ・・・」

「え？あの・・・先生？」

カリスが崩れたところを見てなかったマルガレータは初めてカリスが酔っていることに気付いた。実を言えば、カリスもマウリツツとの馴れ初めは『酔った勢いで押し切る』形だったのだ。その時はシルヴィアが万端に準備を整えていたのだが。

とにかく、四人は練武場に移動した。カレンは貴婦人であるから、さすがに暗がり連れ込んで強引になどと言うことはしないだろうが、もともとヤンは目立つことが嫌いである。人けのないところでもいい雰囲気になっている可能性もあるかもしれない。とにかく四人は、一緒に会場を歩き回ってヤンとカレンを探し始めた。

会場の盛り上がりは最高潮であり、あちこちに討ち死にするほど呑んだ連中が転がっているのだが、護国騎士団の酒の強さは公国一である。こんな様子で朝まで飲み騒ぐのは彼らの普段の状態なので、中央医局の男性職員などはついてはいけない。保安兵団員は対抗意識もあるのでかなりがんばってはいるが、それでも、その数を減らしてきている。

「くっくっ・・・本当にこれが吸血鬼と戦う軍隊かね？」

「その吸血鬼のお前と一緒に酒を飲んでいるっていうのも妙なこと

だがな」

ワイングラス片手に中庭の壁に寄りかかって話をしているのは、ロビー・マルダーと保安兵団のピーター・レイン主任捜査官であった。ロビーは不死鬼となったため、固形物を消化できるほどに消化器系は機能していない。しかし、酒などの液体は通常通りに摂取可能であることがわかったので、今宵のパーティーにも参加していた。

「ところでいいのかい？レインの旦那だって一人者だろ？せつかくこれだけ姉ちゃんたちがいるつてのに。あの、護国騎士団長のかみさん、あんたみたいな寂しい男に女作らせるためにこんなパーティーしかけたんだろに」

「ふんっ！お前を一人にしておけるか。俺はお前の監視だ」

「へえへえ。逃げやしませんよ。逃げたら生きてけねえよ。それに、あのちんちくりんのお嬢ちゃんや、看護婦のお嬢さんに悪いしな。こんなに真剣に他人に何かをしてもらったことはねえし・・・」

「ほう。結構楽しそうな身分じゃないか」

「そこだけな。お嬢ちゃんにはあれで男がいるらしいし、看護婦さんの方は、エッシャー先生に惚れてるぜ。あれは相当」

「ほう。先生も隅に置けんな」

「いや、あれは難しいぜ。エッシャー先生は女に免疫ゼロだな」

「ふっ・・・」

二人は、ヤンとサスキアを着に呑んでいる。

「旦那よ。あの、なんだっけ、あんたの助手」

「レベッカ・ローレンツか？今日付けで捜査官に昇進だ。不死鬼軍事件に関する重要な情報を得たということだな」

「ほう・・・で、あのちょっとお堅いねえちゃんはどこにいったんだ？」

「あの女はな・・・こういう人けが多いところでは、痴漢のおとり捜査をはじめる習性があつてな」

「は？」

「たぶん、その辺を露出度の高い格好で歩いて、寄ってきた男を捕まえては説教を始めているはずだ。ほれっ！」

レインが指差した方角の少しはなれたところを、レベッカ・ローレンツが歩いている。保安兵団の女性用の制服を着ているが、わざわざ胸元を大きく広げ、スカートをベルトで丸めて太ももをだいぶあらわにしている。一人の護国騎士団員の襟首をつかんで引きずっていた。ピーターもロビーも知らないが、それはディック・ファン・ブルームバーゲンであった。実は彼女に裸婦画のモデルをしつこく頼んだかららしいのだが、そこまで二人はわからない。

「ルワーズ公国ってのは、国家の中枢に変人が集まる国なのかね？」
「現場の方はな。だが、あのレベルカも結構重い十字架を背負っている」

「ほう？」

「あいつは五年ほど前に婚約者がいたんだ。新進気鋭の実業家だな。それが事業の失敗を契機にすっかり落ちぶれてしまって、最後には麻薬取引に手を出しちまった」

「いろいろあるな・・・」

「ああ。その婚約者に手錠をかけたのがローレンツ捜査官自身だったのさ。まだ、アメルダム大監獄に収監されている・・・」

ロビーはピーターの顔に同情以外の何かが見て取れたがそこでは何も言わなかった。

シモンは一人で屋内の練武場にいた。パーティを盛り上げようと、最近のこの男に特有の方法で馬鹿をやり、シルヴィアにお灸をすえられた後は、酒も飲まずに一人ここに来ていた。

手には二本の剣が握られていた。右手には刺突用のレイピア、左手には、マンゴーシユとも呼ばれる短剣パリーイング・ダガーである。これは、スペルファなどで決闘用に用いられる武器と剣技であった。

一人稽古だが、シモンには明確に敵の姿が見えている。長身で異常発達しながらも、無駄な部分のないしなやかな筋力を維持している。先日激烈な戦いを演じた不死鬼であった。

不死鬼の剣技は独特だった。常人では扱いきれない重い長剣を振るいながらまったく隙がない。それは不死鬼の持つ絶大な筋力を破壊力ではなく速さに特化して使っているからである。一見大振りに見える攻撃であっても、体制を崩すことなく、それどころか、まるで壁にはじかれたように、半拍も置かずに逆方向から切っ先が跳ね返ってくる。常人の筋肉であれば、腱が千切れるほどの負荷がかかるはずだが、不死鬼ゆえにその動きが可能なのである。

シモンにしても、ヤンにしても、力任せの攻撃を振るう不死鬼であれば、理にかなった武術によって、いくらでもそれを封じる自信があった。地下牢でも丸腰でなければ、あの女の不死鬼をヤンは倒していただろうし、ファン・ダルファー邸においても、あの鎧の不死鬼がいなければそうしていたはずである。

だが、シモンと戦った長身の男だけは違った。長い時間互角と見える打ち合いを演じてはいたが、あれは相手が本気でなかったからだと感じている。そして、本気を出すことを躊躇する理由もわかっていた。

シモンの見る幻影の男は横殴りの強烈な一撃を振るう。シモンはそれを後ろに飛んで交わすが、間一髪いれず、最初の一撃よりもさらに早い攻撃が逆側から繰り出される。それをしゃがみこんで交わすと、今度は切っ先を旋回させて、頭上から剣が振り下ろされてくる。シモンはその剣に対し、絶妙な角度で右手のレイピアを差し出した。シモンの見る幻影では火花を散らしながら、長剣はレイピアの刀身をすべり、シモンの右スレスレを通り過ぎる。それと同時に、パリーイング・ダガーを敵のど元に突き出した。

「駄目だ！」

シモンはもう一度構えなおして、一から同じ攻防を始める。

「ヨハネスにはまだかなわないのかね。隊長代理殿」

突然、入り口近くから声が掛かり、シモンは驚いた。声をかけてきたのはカレルである。片手にワイングラスを持っていた。

「カレル隊長。お休みなられてたのでは？」

「いや、どうも楽しげな夜に自宅で寝ているのはつまらなくてな。先生にも少しだけなら呑んでかまわんと許可をもらったよ」

「そうですか・・・」

少しの間をおいてからカレルが再び話し始める。

「やはり、あの男は、ヨハネス・ファン・ビューレンか・・・」

「・・・はい。顔は見てませんが間違いありません・・・」

シモンはそれ以上何も言わなかった。

「まさか、不死鬼として生きておったとはな。奴に勝つための稽古か？」

「はい。しかし、不死鬼となっていなくても、私が彼にかなうとは・・・」

「いや、奴に勝てるのはお前だけだ。こればかりはエツシャー先生にも任せられない。ファン・バステン將軍がいればまた違うだろうが・・・いや、それでもやはり、お前が切らなければならぬ。余人に任せられると思うな」

「カレル隊長・・・」

カレルには有無をいわせぬ迫力があつた。このようなカレルの姿をヤンは知らない。長年の付き合いがあるシモンであってもそうそうは見たことがなかつた。

「シモンよ。お前はもう、剣士としても、軍将としても一人前だ。先日の強制捜査後の激励は良かったぞ。ちゃんと、部下たちの士気をとらえている」

「いえ、あれはむしろサスキアさんやシルヴィア様のお手柄ですよ。それからカレル隊長の」

「いや、あそこでお前が叫ばねば、私の伝令も、シルヴィア様の配慮も、サスキア殿の言葉でさえ何も役に立ちはしなかつたろう。サスキア殿の言葉に反応した皆の心の動きを捉えたのはお前だ」

「・・・」

シモンは妙に頑固な物言いが気になつた。

「シモンよ・・・私は護国騎士団第三部隊長の座を正式に辞職する。後任はお前だ。エツシャー先生を補佐できる軍将はお前しかない」「なっ？引退されると言うのですか？この時勢に?!」

「いや、まさか楽隠居と言うわけにはいかんよ。しかし、私は年老いた……。戦場では役に立たん……」

シモンは言葉につまった。シモンもヤンもすでに感じていたことではある。護国騎士団一の宿将カレル・パルケレンネはこの日の翌日、護国騎士団長夫人シルヴィアから護国騎士団主任参謀の肩書きを与えられ、対不死鬼軍の第一線から正式に退くこととなった。シモン・コールハースの第三部隊長代理の『代理』の二字は、わずか数日で外されることとなったのである。

パーティーはまだ続けているが、泥酔してしまったり、こっそり二人や複数人のグループで抜け出していた男女も多いので人数は減ってきている。シルヴィアとしては、まずまずの首尾であった。無骨な男どもにもいい加減色気づいてもらわねばならなかったのだから。

その時、人気がなくなったとの見計らって、そろそろと近づいてきた者がいる。シルヴィアでさえほとんど気に留めていなかったが、よく見ればおよそ場違いすぎる人物である。どう見ても、カレルよりも更に老齢、老人と聞いていい背格好であり、服装もみすぼらしく、この会場にはまったくふさわしくない。にもかかわらず、まったくの自然体で目立つこともなく、練武場の演台近くにいるシルヴィアの元に現れたのである。

「どうやら、経過は順調な用じャの。ウィレム殿のお子様は」
「か、カイパー博士！」

老人はヤンとマウリッツの師匠であり、公国全土の医師たちの尊敬

を集めるヨアヒム・カイパーであった。

「ほほほ、驚かせてしまったの。ふむ。ヤンもうまくやっているよ
うだし、そろそろマウリッツもフリッブ王国に向かうころじゃろう」
「博士……いったいどこにいらっしやっただんですか？ああ、みん
なを呼んで参ります」

「いや、あなただけに話をしたくての。みなを呼ぶには及ばんよ」
「でも……」

シルヴィアでさえ、この老人のマイペースには振り回されてしまう。

「マウリッツは東のフリッブ王国に向かったが、わしは西のインテ
グラ王国に向かう」

「インテグラ王国に？なぜです？」

「今回の件は、主犯は誰かなどと考えても余計にわからなくなる。
手段と目的が逆さまなのじゃよ。きっかけはファン・クラッペとい
うヤブ医者じゃが、その萌芽は十年前のわしらの仕事の遣り残しじ
や。しかし、もう、それだけじゃすまないところまで来ておる」

「いったいどういう……」

「なに、そのうちヤンならわかるじゃろう。それでは、シルヴィ
ア殿。みんなによるしくな。それから無理はいかんよ。丈夫なお子
を生みなさい」

飄々とした態度で、近づいてきたときと同じようにいつのまにか人
々にまぎれて博士は消えていった。

騒ぎは中庭の壁際で起こった。ピーターとロビーが二人で飲んでい

たあたりである。

「吸血鬼野郎っ！のんびり酒なんか飲みやがって！貴様なんぞっ・
」

後に続く言葉は理解不能であった。吸血鬼野郎と呼ばれたのはロビ
ーである。酔っ払い相手なので腹も立たないが、少々相手がしつこ
かった。怒りを覚えたのは隣で飲んでいたピーターである。

「なんだ貴様っ！貴様はこの男の医師団のメンバーだろうがっ！患
者に向かって何を言うかっ！」

ピーターの一喝は多くの犯罪者を震え上がらせて自供に追い込んで
きたものである。だが、泥酔した医師には通用しなかった。医師の
名はフレデリック・ファン・ビーヘル。マルガレータをリーダーと
するロビー治療チームのメンバーで、先日の研究報告の際、研究の
内容がヤンとかぶっていた上に、進捗が遅いためにカリスの叱責を
受けた男であった。たまたま近くにはマルガレータ、カリス、サス
キア、ピーテルがいた。

「ファン・ビーヘル研究員！なにをやってるんですかっ！」

マルガレータが強く言うのが迫力が足りない。まだ、年上の男性を叱
責するほどの風格は備わっていないのだ。そもそも、ファン・ビー
ヘルは医学院におけるマルガレータの三つ先輩であった。こうして
立場が逆転することなど誰も予想していなかったのである。

「へんっ！何で俺がこんな小娘の下働きしないとイケないんだ？俺
は医学院で主席だった！中央医局でも誰よりも早く正式な研究員に
なった！」

「ファン・ビーヘル研究員！泥酔しているとは言え、口に気をつけなさい！患者の前で言っていていいことと悪いことがあります！研究員としてだけでなく医師としても失格よ！」

カリスが厳しい口調でたしなめるが、ファン・ビーヘルには届かない。

「あの、ヤン・エッシャーってヤブ医者だってそうだ！俺を馬鹿にしゃがって。何がカイパー派だっ！医学院にも入れない、田舎周りの木っ端医者がでかい顔しゃがってっ！マウリッツ・スタンジエだってそうだ！不死鬼が出てきたら尻尾巻いてにげていっちまったじやねえかっ！」

カリスが怒りを覚えたが、その前にファン・ビーヘルに近づいていた者がいる。

「パーンッ！」

乾いた音が響き渡った。小気味のいい平手打ちの音である。ファン・ビーヘルの頬には、ピーテル・ブルーナのものよりも、更にはつきりとした手形が付いた。ひっぱたいたのはサスキアである。

「あなたは本当に医者ですか？」

「なんだこの・・・」

サスキアのあまりの迫力に言葉続かない。

「あなたはなぜメスを握ったの！なぜつらい勉強を続けたのっ！自分が見えなくなるため？！医者である以上、あなたも患者のために生きていくのよ！ヤン・エッシャーはそのことを一番わかっている。」

だからあなたの上にいる。マルガレータもそう。ロビーさんが生きていくためにできることをなんでもしようとしている。あなたはど
うなの？ロビーさんはあなたの患者でもあるのよっ！」

「サスキア……」

マルガレータは目に涙を浮かべていた。彼女はほとんど酒を飲んでいない。サスキアはつい先ほどまで嘔吐するぐらいに酔っていたのだが、ファン・ビーヘルがヤンの名前を出した瞬間に飛び起きて近づいていったのだ。カリスが再びふらふらし始めたサスキアに近づき、後ろから両手で肩を支えた。

「ファン・ビーヘル研究員。明日から十日間、あなたを謹慎処分とします。今のことだけでなく、これまでのあなたの態度、考え方をじっくり反省なさい。サスキアは一つも間違っていることを言いません。バレンツ主任。交代の要員は出せないけど、サスキアに手伝わせるから、彼の研究を継続なさい」

「は、はいっ！」

こちらもつい先ほどまで酔っ払っていたカリスが毅然とした態度で処分を下した。

「さ、なんだかしらけちゃったけど、夜はまだ長いわよ。呑みなお
しましよ」

「ま、まだ呑むんですか……」

マルガレータが言った瞬間、サスキアはカリスの胸にカクンと倒れ
こんで、寝てしまった。

「あっちゃ……肝心のサスキアがノックアウトだわ……」

「先生……呑ませ過ぎです……」

二人は先ほどのサスキアとカレンがカリスを運んだように、サスキアを自室に運んでいった。

「エリート医師のにちゃんよ・・・」

ファン・ビーヘルに話しかけたのはロビーである。

「ま、あなたのこともわからないでもないぜ。あのお嬢さんたちみたいに、まっすぐに生きられるもんじゃねえわな」

「お、俺の気持ちなどお前にわかるか・・・」

「わかんねえよ。エリートの先生の気持ちなんか。俺は盗人で今は伝染性吸血病患者だ。別にあんたを慰めようと思ったわけじゃないぜ」

何をするつもりだとは言わずに後ろのピーターは黙っていた。

「あんたよ、十日も謹慎したあとだって、たぶん、チームには戻ってこれないだろ？その間に俺の頼む研究をしといてくれないか？」

「はんっ！エッシャー先生にでも頼んだほうがいいだろ！俺はたいした才能もない学歴だけのヤブ医者だ！」

「だからあんたに頼みたいんだ。まともな医者じゃ請合ってくれんからな。」

「どういうことだ?!」

「興奮すんなよ」

ぼそぼそと、ピーターに出さえ聞こえない声でファン・ビーヘルに何かを告げた。

「あ、あんた、それ・・・自分の命を縮めるのか？」

「なに、俺だつてこんなもんでできれば使わずに済ませたいさ。だが、必要な時は来るかもしれない。できるだけ、生きていたいが、必要なことがあればつてことだ。よろしく頼むぜ」

「・・・わかつた・・・どうせ暇だからな・・・」

余人にはわからない会話であつたが、これ以降ファン・ピーヘルは問題を起こすことはなかつた。

騒ぎを聞きつけたヤンは、マルガレータやピーテルと歩いているカリスを見つけた。そろそろマルガレータはピーテルとどこかに行きたいのだが、カリスが離してくれないらしい。ヤンの後ろにはカリンがいる。

「クリステル先生。なにやら騒ぎがあつたようで」

「あ、エツシャー先生。たいしたことはありませんわ。でも、ちょっと考えないといけないかもしれませんね。私も少し配慮が足りませんでした」

明らかに酔つてはいるのだが、仕事の話になると酔いはどこかに跳んでいくらしい。

「まあ、何もかも完璧には行きませんよ。バレンツ主任はよくやつていると思いますし」

「あ、ありがとうございます!」

なぜかピーテルまで頭を下げる。

「カリス!そろそろマルガレータさんとピーテル君を離しておやりなさいな」

シルヴィアが近づいてきた。カイパー博士が来ていたことを口にした。ようか迷ったが、翌朝のことにすることにした。

「あ、義姉上。身重の体に負担ですよ。そろそろお休みになられては？」

「そうね。そろそろそうさせてもらっわ。あら、サスキアさんは？」

ギクリ、としたのはヤンとマルガレータである。カリスはなぜかポーンと手をたたいた。

「エツシャー先生！サスキアはなんだかちよつと飲みすぎてしまったみたいで。私も正直だいぶ酔ってしまいました。普段そんなに呑み慣れてない娘ですから、診てあげていただけないかしら？」

「え、ああ、はい。自室にいますか？参りましょう」

その瞬間、ヤンとカレン以外が無言で連携を始める。

「あ、エツシャー先生、私とピーテルはちよつとどっかにいかせていただきます」

「ど、どっかって？」

「いえ・・・その・・・あの・・・ちよつと二人でしけこみます」

「し、しけこむって、おい・・・」

マルガレータはピーテルを引っ張って本当にどこかに行ってしまった。

「ああ、マウリッツ・・・」

カリスはもはや文字が判別不能のマウリッツの手紙を取り出し、に

おいを嗅ぐようにしてから、恍惚とした表情でどこかに消えた。

重要な役割を負ったのは、最年長のシルヴィアである。これはいたしかたないと自分の仕事をしっかりとする。

「ええと、カレンさんでしたね。私は国務府の非常勤顧問も兼ねております。よろしければ、少しお話をさせていただけないかしら？」

「あ、はい。是非、よろしくお願いいたしますわ。私、アメルダムは初めてなものですから、公国政府機関についても詳しくありませんので、エツシャー先生もシルヴィア様にご相談したらいいだろうとご助言くださって・・・」

「あら、ちょうどいいわね。ほら、ヤンっ！突っ立ってないで、早くサスキアさんの様子を見に行っておやりなさいな」

「は、はあ、行ってまいります。では、カレンさん、楽しんでいてください。」

ヤンだけでなくカレンも鈍い。シルヴィア以外のどう考えてもまずい演技と口実に気づきもせず、一人でサスキアの元へ向かった。

サスキアは眠っているようだった。すぐ隣のマルガレータが使っているベッドに腰掛けて様子を見る。一応、過剰なアルコールの摂取による急性アルコール中毒やショック症状がないかを確認したが、それほどひどい様子はなかった。

突然、サスキアが寝言を言い始める。いや、実はサスキアは酔っ払っていたが目は覚めていた。ただし、決してしらふではない。そのため、普段抑えている感情が抵抗なく出てきたようである。

「ヤン・・・ごめんなさい・・・私・・・あせつちやつて。あなたの役に立ちたいって。でも、今は何もできないから・・・」

「サスキア・・・そんなことない。ロビーのことだつてずいぶんとがんばってくれているじゃないか」

「私ね。ずっとヤンの役に立ちたいって、一緒に患者のこと考えて助けられるようになりたいって、ずっとそう考えてきたのに・・・」

ヤンは何を言っているのかわからなかった。だが、意を決したように言葉を搾り出す。

「サスキア・・・謝るのは私の方だ。その・・・たぶん、私が無神経だから・・・」

「ヤン・・・」

潤んだ瞳をあけてサスキアはヤンを見つめる。

「ロビーの手術の時も、強制捜査から帰った時も、君がいなければ私は何もできなかった。君がそばにいてくれないと・・・」

ふと気づくと、サスキアは小さな寝息を立てて眠っていた。なぜか安心したような、あどけない笑顔を浮かべている。ヤンはめくられていた毛布をサスキアにかけなおしてやり、部屋を出ようとした。

「あ、あら、え、エッシャー先生・・・」

部屋の出口にはマルガレータとカリスが聞き耳を立てていた。後ろにピーテルもいる。ヤンは赤面をした。

「な、何やっているんです？」

「いえ、あ、私は、ほら、サスキアの部屋で寝泊りしているので・・・」

「エッシャー先生！こんなチャンス滅多にないですよ！もつと押し切っちゃっていいんですよ！いつちゃつてくださいよ！どうせ本人だって喜ぶから寝込み襲ったっていいんですよ！姉の私が許しますうっ！」

「ちよ、ちよつとクリステル先生！」

完全に出上がっているカリスの口をマルガレータが塞ぐ。

「ええと・・・じゃ、バレンツさん、サスキアをお願いします。二日酔いになるかもしれないから、お水でも用意しておいてください。クリステル先生も、もう、飲みすぎですよ」

すたすたとヤンは自室に消えていった。

翌朝は大部分の職員は休みを取っていたが、出勤していた者もまともに機能できなかった。護国騎士団本部全体が二日酔い患者の集団と化していたのだ。宿直の者や本部に部屋を借りている者たちでなくとも、宿直室で雑魚寝をしているものも多々いた。彼らを辟易させたのは、保安兵団の主任捜査官ピーター・レインが真夜中に何回も寝言を叫んでいたことである。

「ロビーっ！！！！逮捕だあっ！！！！」

部下であるレベツカによれば、痛飲するたびに必ず起こる現象なのでそうである。

ルウィズ公国小史（前書き）

ここにルウィズ公国成立までの歴史と、その後の「十年前の戦争」と呼ばれている、「ルウィズ公国継承戦」「吸血鬼掃討戦」までの出来事を記す。

ルワーズ公国小史

ルワーズ公国は特殊な成り立ちの国であった。ヨルパ大陸西部において『公』を君主とする国はいくつか存在するが、中でもルワーズの位置づけは特異である。この国はフリップ、インテグラニカ国の複雑な関係から生まれた奇形児であった。

フリップ王国は数百年前、ヨルパ大陸西部を統一した巨大国家フリスカ王国の後継であると称している。その王家はフリスカ王国分裂の際、この地域を継承した第三王子の血を引くと言われているが真実かどうかは定かではない。

成立直後からしばらくの間、フリップ王国の王権はきわめて不安定で、臣下と君主との関係もあいまいであった。そんな折、北方の蛮族ノルム人の侵入を受ける。巨大な船をいくつも連ねて、現在のルワーズ公国の沿岸に上陸した彼らは、勇猛な戦士たちを繰り出し、瞬く間に沿岸地域を占領した。対応に苦慮したフリップ王国は政治に関する知識に欠ける彼らにルワーズの姓と伯爵位を与え、貴族として遇することでそれ以上のフリップ王国内における勢力拡大に歯止めをかけた。これが、ルワーズにおける『伯領時代』の始まりである。

ルワーズの姓を受けたノルムの族長は最初は元々の一族の習慣に従っていたが、次第にフリップの文化に染まっていく。そして、伯爵位を受けてから、百年程度が経過した後、一人の覇気ある若者が現れた。まだ、ノルム風の名を乗ったクアナトと言うルワーズ伯爵家の三男である。

伯爵領は兄たちのために継承できないと考えたクアナトは、先祖が

ルワーズに進入したときと同様、大艦隊を連ねて、ヨルパ大陸の西側に位置する大ブリッツ島へと進軍する。瞬く間に当地の数十の部族を平定したクアナトは、その地に独立した王国を建設した。これがインテグラ王国の始まりである。これが、史上『ノルムコンクエスト』と呼ばれる出来事であり、インテグラ王国の正史では壮大な冒険物語として記載されている。

ところが、クアナトがインテグラ王国を建国して十年足らずで、ルワーズ伯爵領の方で異変が起こった。父親に続き、二人の兄が死去し、クアナトに伯爵領が継承されることになったのである。これにより、インテグラ王国は独立した国家でありながら、その王はフリッツ王国に伯爵位を授けられ、臣下として遇されるという奇妙な状況が始まる。これが、両国の奇形的な関係の始まりであった。

未だフリッツ王国の王権は安定しておらず、インテグラ王国の巨大な領地と人口を背景に、ルワーズ伯爵家はフリッツ国内でも王家に並ぶ権力を持つにいたる。フリッツ王家から姫君を後に貰い受けることで、フリッツ王家の継承権まで主張するようになった時、両国は百年に及ぶ戦争を経験することとなった。世に言うフリッツ・インテグラ百年戦争である。

きっかけは、フリッツ王国側がインテグラ王国とルワーズ伯爵領の完全なる分離と、ルワーズ伯の位を王家の支配下に置くため、フリッツ王家の者の中から新たにルワーズ伯を指名したことによる。

長期に及ぶ大戦により両国は疲弊していった。多くの人命を失い、また、両国の経済は混乱を極める。互いに耐え切れなくなった両国は二つのルワーズ伯爵家を統合し、当地に新しい領主を置くことで妥協する。両国の中間に位置し、独立性の高いこの領主には自由徴税権をはじめとする多くの特権と公爵位を与え、どちらの国にも臣

従すると同時に、どちらの国からも半独立の状態にあった。これが、ルワーズ公国の始まりである。

初代のルワーズ公爵はインテグラ王国側の、つまりノルムを祖先とする従来のルワーズ伯爵家の者が選ばれたが、その後はフリップ王国側のルワーズ伯爵家から選ばれた。それ以来、ルワーズ公爵は一世代ごと交互に両王国から后を受け入れ、常に両王家の血が一定の割合で混ざるといふ状態を強要されることとなる。このような時代がその後数百年続いた。

しかし、こうした三国の微妙な関係にも終止符を打たれる時が来た。現国公ジェローン・ルワーズの父ジョージ・ルワーズはフリップ王家から降下した后との間に長女ファムケが生まれていたが、娘が十歳の時にその母親が死んだ後、愛人としていた臣下のファン・ゴッホ家の娘との間にさらに一男をもうけた。それがジェローン・ルワーズである。

ジョージは後継者にジェローンを指名する。これは、フリップ王家にとってもインテグラ王家にとっても許容できない継承であった。しかし、女性相続を認めないフリップ王家にとっては、ファムケに公国を統治させるわけにも行かず、インテグラ王家にとっては適当な後継者がいなかった。

フリップ王家はジェローンが生まれた二年後にファムケを王族の后として迎えて、四年後に生まれた男子をアルベルト・ルワーズと名づけ、ルワーズ公爵位の継承権を主張する。一方でインテグラ王家はジョージに対し、将来ジェローンがインテグラ王国側の姫を后に迎えることを条件にジェローンの継承を承諾した。

破局はその十年後、ジョージの死とともに訪れる。アルベルトの正

当性を主張するフリッブ王国とジェローンの継承を認めるインテグラ王国がルワーズ公国をめぐって激しく対立を始めたのである。空位の期間が長期化することを避けたいルワーズ公家の廷臣たちは、飯のこととして、十五歳のジェローンを『公国監国』に推戴した。

『監国』とは君主不在の間、臨時に君主に代わって国を統治する者の意である。

これが、フリッブ王家のみならず、インテグラ王家の逆鱗にも触れることになる。まだ十一歳のアルベルトの継承を主張するフリッブ王家はともかく、インテグラ王家を怒らせたのは、まさしく『監国』というあいまいな地位を称したことによる。これは、フリッブ王家が古い時代に用いた称号であり、これを用いることは、いずれフリッブ王家の慣習に従って、ジェローンが退位し、アルベルトに継承させることを意味するように思われたのだ。

こうした玉虫色の選択で戦争を避けようとしたのは、ルワーズ公国において、王家に次ぐ格式を持つファン・ダルファー侯爵家の党首で当時、國務卿の地位にあったテオ・ファン・ダルファーであった。だが、元々テオはフリッブ王家よりの人物であり、それもまた、インテグラ王家の疑惑を生むことに繋がったのである。

しかし、『公国監国ジェローン』が誕生した事実は今更否定するわけにもいかなかった。フリッブ、インテグラ両王家から使者が送られ、ルワーズ公国の宮廷において話し合いが行われる。ルワーズ公国の廷臣と民は固唾を呑んでその様子を伺ったが、大方の予想通り、話し合いは物別れに終わった。インテグラ王家もフリッブ王家も譲るつもりはまったくなかったのである。

両国は軍備を增強し、力でルワーズ公国を我が物にする意図を隠さなかった。ルワーズ公国の廷臣たちは避けがたい戦争において、ど

こちらに味方するかを真剣に話し合ったが一向に答えが出ることはない。ジェローンはまだ十代半ばの子供に過ぎず、廷臣たちの意見をまとめるには若すぎ、それを輔弼すべき國務卿テオ・ファン・ダルファーは優柔不断すぎた。

ルワーズ公国の態度が決まるきっかけは、たった一人、まだ十八歳の少年の一言による。これは歴史には明確には記載されていない出来事であった。少年はヤン・エッシャーと名乗っていたが、公国に古くからある男爵家、ファン・バステン家の次男であった。医師を志望し、名医の呼び声の高いヨアヒム・カイパー博士に師事する彼は、兄で公国最大の軍事力を象徴する護国騎士団の第一部隊長であったウィレム・ファン・バステンに拗ねた様な口調で言った。

「どつちにも味方しなけりや、両王家の血の薄いジェローン殿下の元に、どちらからも独立した新しいルワーズ公国を築けるのに」

ウィレムはこの事を当時密かに交際していたシルヴィア・ファン・フェルメールに話した。シルヴィアはこの時、ジェローンの家庭教師と國務府首席参事官であるベルト・ファン・レオニー伯爵の秘書を兼ねていた。シルヴィアはまずファン・レオニー伯爵にウィレムを通じて知ったヤンのアイデアを伝える。ファン・レオニーは亡くなったジョージ・ルワーズからジェローンの養育を遺言されており、その養育係として自分の秘書で才女の呼び声が高いシルヴィアを推薦していた。シルヴィアから聞いたヤンの提案に理解を示したファン・レオニーは積極的に宮廷工作に乗り出したが、成果は芳しくなかった。

優柔不断と言われる國務卿テオ・ファン・ダルファーはフリップ王家と組すると言う方針を譲らず、元々インテグラ王家よりで武断派の公国元帥フリーゴ・ファン・ドースブルフ伯爵は両王家のどちら

を選ぶにしても、軍を発して立場を明確にすることを主張した。

シルヴィアに相談にしたファン・レオニーは策謀を用いて、二人の実力者の意向を無視することに成功する。両王国からの使者が同じタイミングでルワーズ宮廷へ現れるように細工をし、両者を目の前にして、ジェローン自身に『フリッブ、インテグラ両王家の統一した見解が出るまでルワーズ宮廷は判断を保留する』旨を宣言させたのである。ファン・レオニーはこれを自分の策動の結果と考えていたが、実際にはシルヴィアとジェローン自身が相談して決めたことであった。わずか十五歳のジェローン・ルワーズはこの時点で君主として必要な才覚を十分に備えていたと言える。

翌年、本来当事者であるルワーズ公国軍を抜きにした、ルワーズ公国の覇権をめぐる戦いが公国領ドルテレヒト州の平原で行われた。どちらが勝ったとしてもルワーズ公国は独立を勝ち取ることができた。両軍の規模と実力は均衡しており、勝った方も無事で済むはずがなく、公国自体が意思を持って何かを要求すれば、それを吞ませることは難しくなかった。

ところが、事態は誰も予想しないものとなる。両軍が激突し、凄惨な戦いが断続的に一月ほど続いたところ、双方の軍組織が戦闘によらず崩壊したのである。伝染性吸血病の蔓延であった。何が起きたのかもわからないままに、多くの兵士たちが吸血鬼と化し、戦友たちの血を吸った。血を吸われた兵士もまた高い確率で吸血鬼となり、瞬く間に両軍の何割かが吸血鬼化して軍はその形を失ったのである。ルワーズ公国に進軍した将兵のうち、無事本国に帰ることが出来た者は、双方とも僅か三割程度でしかなかった。

両軍が退いた後、ルワーズ公国は完全なる独立を勝ち取るはずで、実際にこの時点から『ルワーズ独立公国時代』は正史の上でも始ま

るのだが、未来は明るいものには思われなかった。ドルテレヒト州とその周辺には、数万の吸血鬼たちが闊歩し周辺の住民たちを襲い続けた。国務卿ファン・ダルファー侯爵も、公国元帥ファン・ドースブルフ伯爵も、事実上彼らをしのぐ権力を握った国務府首席参事官ファン・レオニー伯爵もこの事態には無力だった。そもそもこの時点では伝染性吸血病は病とはされず、素朴な迷信に従い、呪術的な存在にとらえられ、教会など宗教勢力がしきりに不毛な祈りと、高価だが何の意味もない聖水や聖餅を売り散らかすだけの状態であった。

この事態を解決に導いたのは、ルワーズ公国軍の不参戦を提案したヤン・エツシャーの師、当時すでに医聖と称されていたヨアヒム・カイパー博士である。やはりシルヴィアを通じて、新国公ジエローン・ルワーズに謁見したヨアヒムは吸血鬼がドルテレヒト蝙蝠を病原とする伝染病であると言う病理を明らかにし、対抗策を示して護国騎士団の出勤を提案した。

しかし、すでに半病人となっていたファン・ドースブルフも、当時の護国騎士団長トーマス・ファン・ピケもカイパー博士を信用することはなかった。業を煮やしたのは、護国騎士団第一部隊長ウィレム・ファン・バステンである。彼はファン・ピケ將軍の命令書を偽装し、第一部隊のみならず、ライバルだったピエト・ファン・サツセンを隊長とする第二部隊まで動かし、ドルテレヒト州に進軍した。彼は実弟である若きヤン・エツシャーや、子供のころからの親友であるマウリッツ・スタンジエ、二人の師匠であるヨアヒム・カイパー博士の献策をすべて受け入れ、瞬く間に数万の吸血鬼を数千の部隊で殲滅していった。

森林や山岳部に逃げ込んだ自由意志のある不死鬼の掃討まで含めると、この作戦の完了には二年ほどかかった。実際に掃討作戦を指揮

したのはウィレムであり、その戦術を提案したのはヤンであり、その背景となる伝染性吸血病の病理を明らかにしたのは、ヨアヒム・カイパー博士とマウリッツ・スタンジエの師弟なのだが、記録上は護国騎士団長トーマス・ファン・ピケが裁可をした作戦となっている。

そのため、宮廷内で支持を失い辞任に追い込まれたファン・ドースブルフに代わって、トーマス・ファン・ピケが公国元帥に昇進し、ウィレムは護国騎士団長に収まった。また、テオ・ファン・ダルフアーはフリッツ王国の後ろ盾を失い、やはり、宮廷内での勢力を著しく弱め、國務卿を辞任した。そのため、公国独立の立役者としてベルト・ファン・レオニーが國務卿となつて新生公国政府の首班を勤めることとなつたのである。

本来のこの吸血鬼掃討戦の立役者であつた、カイパー派医術一門はその存在を多くの医療関係者に知られ、ヨルパ大陸最大の医学関連組織と言われる公国中央医局の医局長にカイパー博士が推薦される。カイパー博士はそれを辞退し、一番弟子で吸血鬼掃討戦以前から名医として呼び声の高かつたマウリッツ・スタンジエを代わりに推した。また、軍事面でもその才能を密かに発揮したヤン・エツシャーはその後も数年カイパー博士に師事した後、アメルダムで公職につきことを避けて、かつての吸血鬼掃討戦の舞台に近いドルテレヒト州ケテル村に移住、当地で小さな診療所を開業する。

実際の公国独立第一の立役者であるシルヴィア・ファン・フェルメルは、ウィレム・ファン・バステンに惚れ込み、女性継承者として家督を保持していたファン・フェルメル伯爵家の継承権を従兄弟に譲渡、押掛け女房同然の強引な求婚で、ファン・バステン男爵夫人となつた。

以降八年ほどの後、ルワーズ公国には再び伝染性吸血病の病魔が吹き荒れ、フリップ、インテグラ両王国を巻き込む大事件と発展する。そして、その事件に解決に当たるのは、やはり、十年前のルワーズ公国独立と吸血鬼掃討戦の『本当の立役者たち』なのである。

変化

護国騎士団、保安兵団、公国中央医局合同のパーティの翌日、多くの兵士や職員は休暇を取っていたが、最低限の人員と幹部に関しては出勤していた。また、マルガレータ・バレンツのように重要な仕事についている者は自ら進んで出勤している。ただし、まともに働けているかどうかは、前日の酒量とアルコールへの耐久力によって異なっていた。

「ルドガーさん、牛血粉は準備できましたか？」

「はい。できてます。大丈夫です」

サスキアの声に答えたのは、マルガレータの部下で四十一歳のルドガー・フリースである。彼はもう一人のマルガレータの部下、フレデリック・ファン・ビーヘルと違い、それほど自分の境遇を悪いとは思っていないかった。元々、それほど優秀な研究者であると、自分のことを考えていないらしい。伝染性吸血病対策室でも、マウリッツの言われたとおりに仕事をするだけの男だった。マウリッツが多忙になり、指示が行き届かなくなると、急に何をやっていいのかわからなくなる、そういうタイプの男である。

しかし、謙虚で堅実な彼は研究者としては落第生でも、一作業者としては極めて便利な男で、的確な指示さえ出しておけば、それを遺漏なく実施することができる。今もヨアヒム・カイパー博士の研究成果である牛血を使った伝染性吸血病患者の人工食料、『牛血粉』の配合について、数百パターンの成分比率を試し、動物実験を行って、もつとも望ましい比率を求めると言う、極めて根気のいる作業を数日掛けて終えたところであった。

「はい、じゃあ、昼食は例の方法で、お肉風にしてみました。ロビーさん？牛肉は好きですよね？」

「あ、ああ……」

マルガレータの声に不安げに答える。すでに牛血粉を使った食事は試した。固形物を消化できないので、それを水やワインに溶かして飲んでみたのだが、あまりに生臭く、マルガレータの目指す『味覚も満足させるもの』には程遠いものだった。だが、ロビーはそれほそれで、薬と思えばと考えていたのだが、マルガレータは様々な酒やコーヒーなどに溶かして、相当な量を味見させたのである。しかも、どれもこれも、おいしくないと言うよりは吐き気をもよおすほどまずいものばかりだった。

液体しか飲めないと言うのはつらいと考えたマルガレータは、サスキアと相談して、消化が出来なくても胃や腸の負担にならないよう、ゼラチンなどを使った擬似食品を開発することにした。どうしても本物の肉よりは柔らかいが、脂身に近い食感のものができた。さらに問題ない程度の固形の食品や調味料を使い、だいぶそれらしいものを作れるようになったのである。

マルガレータが調理をしている間に、サスキアはテーブルを用意する。地下牢はすでにアメルダムの大盗賊にして、不死鬼軍の密偵、亡霊ロビーファンタムを捕らえる牢獄ではなく、伝染性吸血病患者ロビー・マルダーの病室であるので、多少は居心地がよくなるようには工夫が加えられていた。灰色の岩肌がそのままのだった壁は白く塗り固められ、鉄格子もはずされている。向かい合わせの牢があった場所がマルガレータ達の研究室となっており、必要なとき意外は錠戸を閉めることでプライバシーも守られるようになっていた。壁に花柄のイラストを書こうとしたマルガレータをロビーが必死に止めたと言っ一幕もあった。

マルガレータは、程よく焼き目を入れた、『牛血粉のステーキ風』を皿に乗せて、テーブルの上に置いた。

「さ、召し上がれ」

「あ、ああ・・・」

恐る恐るロビーはナイフで肉を切り、フォークで口に運ぶ。

「んっ！！んぐっ！！！！」

「ロ、ロビーさんっ！！！！」

「ん、んぐっ！み、水をくれ！水！」

急いでサスキアは水差しからコップに水を注いで差し出す。

「か、辛いぞ！これはちょっと辛すぎだ！」

辛味は味覚ではなく痛覚で感じるものなので、ロビー以外の筋力が異常発達した不死鬼であれば何も感じないのかもしれない。

「うーん・・・やっぱり不死鬼になると少し味覚が変わるのかしら。ロビーさんの場合は痛覚も生きているから、ひよっとすると普通よりも敏感なのかも・・・」

「ほ、本当か？ちゃんとした程よく味付けしているのか？なんか粉っぽかったぞっ！」

ふと、気になったサスキアが、少しだけ切り取って口に入れてみる。牛血粉の料理は別に人間が食べたからと言って害になるものは入っていない。

「う……マルガレータ……こ、これは……ちょっと酷いわ……」
「え？いつもピーテルに作ってあげたら喜んで食べてくれる味付けなんだけど」

「……それは……ピーテル君が優しくて、おいしくないと言えないだけなんじゃ……」

「そんなことないわよ……どれ……んっ！！」

自分で食べてみてマルガレータは思わず吐き出しそうになる。

「な、何これえっ！」

「何って、自分で作ったんじゃない……。ピーテル君に作ってあげたときは味見してないの？」

「だ……だって……すっごいうれしそうに食べてくれるから……たくさん食べてほしいし……これでいいんだと思って……」

マルガレータは半べそをかいている。

「うっ……ごめんなさいピーテル……ずっと我慢してたんだね……」

「俺には謝罪はないものか……」

ロビーはぼやくが口元は緩んでいる。まったくこの娘は見ていて飽きない。

「ええと……マルガレータは、ほら、ロビーさんがもつと自由に昼間も歩けるように、肌のダメージを抑える研究と、フレデリックさんがやっていた筋力の異常発達を抑える薬の研究を続けて。私とルドガーさんで食事の方は考えるから。」

「う……うん……なんか敗北感……ちゃんと料理の勉強しよ

うかしら・・・」

「うん・・・たぶん、その方がピーテル君もうれしいと思うわよ。あとでちゃんと教えてあげるから。ロビーさんの食事は私に作らせで。ね」

今日のサスキアは妙に機嫌がいい。昨日のヤンとの会話をカリスと共に盗み聞きしたマルガレータだが、何がこんなにうれしいのかわからない。ロビーにもルドガーにも聞こえないことを確認して、皿洗いをしているサスキアに小声で話しかける。

「ねえ、昨日のことってちゃんと覚えているんでしょ？酔ってたって言っても」

「え？なんのこと、気持ち悪くはなっただけど、二日酔いも無いし大丈夫よ」

「エツシャー先生と話したことは？」

「え・・・あ、ええ。ちゃんと覚えているわよ」

サスキアは少し頬を赤く染める。

「で、それでそんなに機嫌がいいの？」

「・・・う・・・まあ・・・って言うか・・・その・・・うれしかったから・・・」

「何が？」

「その・・・あのね・・・私が・・・そばに居てくれないと・・・って言うてくれたの・・・は、恥ずかしいじゃないっ！もうっ・・・」

「へ？」

マルガレータはあっけにと取られた・・・

「そ、それだけ？それだけでそんなにうれしそうなの？」

「え？だって・・・ああ、私そばにいてもいいんだって。邪魔じゃないんだって思ったから・・・」

「え・・・は・・・はは・・・や・・・安いオンナ・・・」

「え？」

「いや、それで幸せならいいんだけどね・・・」

突然、研究室と廊下を分けているカーテンが開いた。

「おい・・・おしゃべりばかりして仕事サボっちゃだめよ。バレンツ主任。昨日の研究日誌が出てないわ。パーティだから翌日でもいいと言ったけど、お昼までには出してくれないと」

「あ、クリステル先生。すみません。で、先生は大丈夫ですか？」

と言ってみたものの、明らかにカリスは二日酔いである。

「だ、大丈夫よ・・・」

「お姉さま。少しお酒は気をつけないと、マウリツ様が帰ってきた時にあきれちゃうわよ。お肌も荒れてお化粧のりも良くないみたいだし・・・」

「う・・・ずいぶん上機嫌ね。サスキア。聞こえていたけど・・・」

再びサスキアは頬を赤らめる。

「って、そんなことぐらいで安心して大丈夫？仕事以外の時間はカレンさんがびったりマークするわよ。きつと。あなたも少しは積極的に・・・」

「・・・でも・・・それは・・・私は・・・」

「ああ、やっぱり何にも変わってないわ。この娘・・・」

カリスとマルガレータは二人そろって肩をすくめて首を振った。

その日の午後にもいつもどおり、幹部たちによる会議が開かれた。司令部の創設により、いつでも打ち合わせが可能な状態ではあるのだが、全員がそろって落ち着いて情報を交換するためと、部下たちには聞かせられない話もあるかもしれないということ、司令部とは別の部屋で開かれる。

この日も最初に話題に上がるのはロビー・マルダー氏の治療のことで、そこでまずマルガレータ・バレンツ主任のエピソードで笑うことから始めるのが習慣になりつつあった。

「ロビー氏の食事についてですが、本日の昼食も失敗。ただし、今晚からサスキア・ウテワール特別研究助手が調理を担当するので、たぶん、大丈夫ということですよ。・・・ブルーナ主任主計官、お優しいのはいいですけど、失敗はちゃんと指摘してあげないと本人のためによろしくなくてよ」

「す・・・すみません・・・」

カリスの報告に思わず謝ってしまったピーテル・ブルーナに視線が集まった。全員が笑う。ピーテルは顔を真っ赤にしている。

次にそのピーテル・ブルーナが各州城塞都市への住人収容計画の進捗について述べる。

「フリッ普側国境三州については、すでに、ノールト、ザーン、サーウンダイヴァラントに全住民を収容しました。ただし、ゼーラント州は元々人口も少ないですし、十分な食料もないのでノールトに一度収容された住民は明日中にザーンに移る予定です。第一部隊

の千人が住民たちを護衛します。他の州についても、三日後には全住民の収容が終わる予定です」

「食料に関する取引については？」

念のための確認としてヤンが尋ねる。

「すべての住民の収容が終わった時点で、食料の買取を実施します。すでにスペルファ行きメデイサラ商人の巨大キャラバンがアメルダムに待機しております。ラウラ国からも既に食料を満載した船団がこちらに向かっておりますので、スペルファへのキャラバンの出発と同時に、売る分よりも五割増の量を確保できます」

「まるでマジックだな」

ピーテルが信用取引を駆使して食料を格安で確保する様をそう評したのは、保安兵団のピーター・レイン捜査官である。若干、二日酔いの気があるが、コーヒーの香りで少しは調子を取り戻したようだ。

「それから、ザーンへの予備兵力、これは騎士団長親衛隊と保安兵団の重歩兵部隊が中心の千人ですが、明日には出立の準備が完了します。対吸血鬼用の装備品などの輸送も兼ねておりますが、こちらは明後日に準備が完了しますので、明々後日が出立日となります」

ヤンの指示の元、護国騎士団では国境地域での戦闘に備えた準備が進められており、前線基地となるザーンに向けて様々な支援が検討されている。兄であるウィレムが戦闘に集中できるよう、そうした点はヤンが考えているという形である。もっとも、実務面はほとんどがピーテル・ブルーナの手によって行われていた。

次の報告はシルヴィアであった。

「まず、皆さんにご紹介する方がいらつしやいます。國務府より特別監察官が派遣されました。伝染性吸血病対策基金の適切な運用と、三組織の円滑な連携を監視すると言つ名目での派遣です。さ、自己紹介を・・・」

「カレン・ファン・ハルスです。よろしくお願いいたします」

ほう・・・と言う声が何人かの男性から漏れる。カレンは美しいだけでなく、極めて魅力的な笑みを浮かべ、完璧な礼節を守って優雅に挨拶をして見せた。これほど貴族の令嬢らしい娘は滅多に見ないが、一方でそれほど高くとまった印象も無い。気品を漂わせながら、あくまで慇懃で親しみやすい。カレンはそついう女性であつた。

「既に午前中にはブルーナ主任主計官の経理資料に目を通させていただけました。健全な運用をなされてますし、実に整理されておりましたわ。三組織の連携についても、シルヴィア様のご提案された司令部の創設は実にすばらしいアイデアと思います。こうなると、あまり監察官としてのお仕事はないのですけれど、お手伝いできることがありますしたら何でもさせていただきますので、お声をかけてくださいませ」

カレンはファン・ハルス家の自治領においても、兄たちの代理として領内の村々の役所を監督したり、州卿との折衝を行つたりしたことがある。伝統的な貴族の令嬢としての教育を受けてもいるが、アメルダムの政府機関で働く女性たちと同様に、実務的な能力も備えた女性であつた。

國務卿ファン・レオニー伯爵はそれほどの悪意を持っていたわけではない。これだけの大きな動きなので、國務府がノータッチと言つわけには行かないのだ。監察官を派遣するのは当たり前のことだつた。ただ、経理はともかく、本部内の風紀などについては、言いが

かりをつけようとさえはいくらでもつけれる。しかし、カレンはすっかり昨日のパーティーでこの雰囲気を入ってしまったようで、まったく問題にしていなかった。

結局、カレンは國務府非常勤顧問の肩書きを持つシルヴィアの助手的な位置づけで、各政府機関や有力貴族との折衝を担当することになった。これも、別におかしなことではない。特別監察官とは言え、シルヴィアは國務府においては上司に当たる立場だからだ。シルヴィアが身重であることを考えると、この立場は今後重要性を増していくことが考えられる。

次にヤンがマウリッツ・スタンジエの消息について報告を始めた。

「カレンさんはケテル村よりマウリッツ・スタンジエ医局長の書簡を届けてくださいました。彼はやはりファン・クラッペ医師名義の出張辞令を使い、私の代理としてケテル村にいたようです。そしてケテル村の住民がザーンに収容されるタイミングで、フリッツ王国に渡っています」

「何のためにフリッツ王国に？」

「マウリッツは十年前の戦争の直前まで各国を外遊して各地の医術を学んでいました。フリッツ王国では現国王シャルル・ド・フリッツが王太子だったところに彼のスペルファ熱を治療しています。不死鬼軍は両国の国境沿いに位置していますから、フリッツ王国の協力を得て彼らを追い込もうと言うことでしょう」

スペルファ熱は十数年前にヨルパ大陸の西側全体で猛威を振るった熱病である。ヤンの母親も、ウィレムの母親もこの病で亡くなっている。まだ二十代前半のマウリッツがこの熱病の治療方法を確立し、それによって、師であるカイパー博士にも劣らない名声を確立した

のである。

「なるほど。スタンジエ医局長は単身フリップ王国に乗り込んで隣国の伝染性吸血病の流行も食い止めようと言うのですか。深慮遠謀、医者と言うよりもまるで大軍師と言えますね」

これは、シモンのせりふである。軍将としての評価も高いヤンだけでなく、兄弟子のマウリッツまでこうなると、医者と言う職業が良くわからなくなる。

「医者には国境なんてものはそれほど関係ありません。患者が居ればそこが仕事場ですから。マウリッツはルワーズ公国民だけでなく、フリップ王国の民も助けたいと考えているのです」

「ヨアヒム・カイパー博士もね。博士はインテグラ王国に向かいました」

「えっ!？」

シルヴィアの言葉の意外さに全員が驚く。

「昨日のパーティに密かに紛れ込んでおられたのです。なぜか私のところだけに現れて、その旨を伝えて去ってゆかれました。ヤン、この意味はわかるかしら?」

試すような視線をヤンに向ける。自分にはカイパー博士の意図はまったくわからないが、博士はヤンならわかるだろうと言っていたのだ。

「なるほど・・・博士は不死鬼軍の発生そのものを問題視しているではありませんね。少なくとも現段階で、インテグラ王国は不死鬼軍と直接関係しているとは思われませんから。不死鬼と言う伝染

性吸血病に関する医学的知識が軍事利用されることに危惧を抱いているということでしょう。インテグラ王国にもその兆しがあるのではないでしょうか。我々も問題の本質はそこにあることを意識する必要があります。そう考えれば、ファン・クラツペ医師の存在の意味も明確になる」

「どういうことでしょうか？」

疑問を口にしたのはカリスである。どうも話が飛んでいてよくわからないのだ。

「彼は医者としては倫理観に欠けていますが、研究者として強烈にマウリッツを意識しています。クリステル先生にちょっかいを出してきたことも、屈折した対抗心の現れでしょう。彼は金も名声もそれほど求めてはいないでしょうが、おそらく自分自身がマウリッツ以上の研究者であると確信できることを望んでいるのです。そのために、彼は医者としての倫理観を捨て、吸血鬼の軍事利用と言う禁断の領域に手を出しました。未だ、誰が首謀者かはわかりませんが、不死鬼軍の総帥は彼にそそのかされた人物でしょう。そうして、軍を編成する計画が立ってから、スポンサーを探したのではないかと思えます。目的があつて、不死鬼の軍隊が作られたのではなく、まず、不死鬼の軍隊を作ることが目的で、その力を利用したい相手を見つけて、資金などを得たのではないのでしょうか？」

「カイパー博士も目的と手段が逆さまと言っていたわ」

シルヴィアがすかさず言う。博士に言われたときは意味がわからなかったが。

ヤンがこう確信できたのは、テオ・ファン・ダルファー邸で大量の吸血鬼化死体が発見されたことによる。反乱を起こすことが目的なら、操死鬼ではなく不死鬼か吸血鬼を作つて、国公陛下の暗殺なり、主要政府機関の占拠なり、いくらでも方法があつた。それをせずに、

わざわざ国境地域に軍を編成しようとしているのは、手段と目的が逆だからである。

「やはり。そうなると、今の首謀者、スポンサーや不死鬼軍の司令官を特定して倒したとしても話は終わりません。伝染性吸血病の軍事利用と言う、ヨルパ大陸全土の人々にとっての病魔を根絶しなければ我々の戦いは終わらないと言うことです」

「カイパー博士がインテグラ王国に渡る理由は、既にインテグラ国内でもそうした動きがあるかと？」

「そういうことでしょう。フリップ王国側の不死鬼軍とインテグラ王国の貴族が接触を図っているのかも知れませんが、独自に技術进行研究している可能性もあります。十年前の戦争で被害を受けたインテグラ、フリップ、ルワーズの三国でなら、誰がはじめてもおかしくないことなのです」

そこで、ピーター・レインが口を挟む。話が大きくなり始めたので現実的な問題に戻そうとした。

「しかし、そう言ったところで、現実にも、不死鬼軍を編成した連中とそれを利用しようとしている者は特定しないとイケません」

「ええ。ただ、こう考えると一つはつきりしてることがあります。不死鬼の軍隊などと言う、危険極まりない、そして、非人道的な手段をあえてとるとしたら、それは、大きな軍隊に抵抗しようとする小さな軍隊。つまりテロリストです。こうした異常な軍事力は使わずにすむなら誰も使いたくないものですから。まともにはやっては敵わないから、こういうルール違反を犯そうとするわけです」

「つまり、現実にはそれほどの軍事力を有していませんが、軍事的な野心や目的を持っている者が首謀者と言うことですか・・・」

「そうです。その筋から、保安兵団で捜査を進めていただけませんか？」

「いいでしょう。どこから手を付けるべきか迷っておりましたが、軍事力を持たず、しかし、軍事的な目的、領土的な野心や権力を渴望する人物・・・つまり、没落した貴族や領主が対象となりますな。ルワーズ、フリップ両国における」

「そうです。場合によっては両方の国にいるかもしれない」

「承知しました。保安兵団ではルワーズ国内のすべての貴族の所在や経歴の資料を保管しております。それをあたってみましょう。フリップ王国側については、護国騎士団の方が詳しいかと存じますが・・・」

「そちらは、騎士団長親衛隊の捜査部が担当しましょう」

ピーターに答えたのはカレルである。本日付で護国騎士団主任参謀となった彼が親衛隊捜査部の指揮を執ることとなった。とにかく皆驚いている。カイパー派の医師たちの技術や医術に関する知識が優れていることは知っていたが、今の話は医師の職責を超えた行動に思えてならない。

「カイパー博士のご一門と言うのは、医者と言うよりも、何か別のもののように思えてきましたよ。いや、もちろん悪い意味ではなく、エッシャー先生もスタンジエ医局長も、そしてカイパー博士も、能力も行動も医者を超えております。」

ピーター・レインの言である。シモンやカレルもうなずく。とても医者が考えることとは思えなくなってきたからだ。

「いえ、これは医者としての基本的な倫理観を突き詰めるとたどり着く考え方です。カイパー派に限らず。たとえば、バレンツ主任の研究姿勢などはやはりこの考え方に合致します。患者を助けたいと思うと自然とこういう考えにたどり着きます。何も医術だけが手段じゃないと言うだけです」

「バレンツ主任が？」

ヤンの言う事はわかるのだが、マルガレータが出てくる意味まではわからない。

「はい。最終的に、不死鬼の軍事利用と言う忌避すべき技術が普及しようとしたとして、それを留めるためには何が有効かと言う事です。不死鬼となった者たちが、ごく普通に、健康な人間と同じように、少なくともそれに近い形で生活できればいいのです。不死鬼には自由意志がありますから、自ら進んで戦争の道具となることを選ばなければ、軍事利用などできません。自ら戦争の道具となることを望む者もないわけではないでしょうが、おそらく、不死鬼軍の者であっても、大半は生存するために、または自暴自棄になって、そうした境遇を受け入れているのです。普通に生きることができるとなれば、そのような過酷な生き方をあえて選ぶものは少ないでしょう」

なるほどと、全員がうなずく。マルガレータの研究はロビーの治療をケーススタディにして、人間社会で問題なく不死鬼が生きていくための実証研究をしているとも言える。『生活を楽しめるように』
と言う彼女の視点は最初は驚いたが、決しておかしな考えではなく、突き詰めればそこにたどり着くことなのだ。

「さらにいえば、普通はどんな軍が相手でも、全滅させなくても勝利を得ることはできます。指揮官が居なくなれば撤退しますし、大打撃を与えれば壊走します。降伏という選択肢もある。しかし、帰るべき場所もなく、捕虜になることも出来ないとなれば、全滅するまで戦い続けることでしょう。普通の生活が出来る可能性があるなら、捕虜になることへの抵抗も減るはずです」

全員が言葉を失う。マルガレータの研究にそこまでの意味があるとは思っていなかったのだ。

「なるほど・・・それは戦略的に大きな意味がありますね。まだ、不死鬼軍の根拠地は特定できていませんが、それがわかれば・・・」
「ええ、ロビー・マルダー氏が人間らしい生活をできるようになるなら、そのことを知らせることで、不死鬼軍を分裂させることができるかもしれません。あまりプレッシャーをかけてはいけません。彼女の研究こそ、我々の希望なのです」

「こうなると、彼女の下に人員を増やしたいところではあるのですが・・・」

先日のファン・ビーヘルの事件を思い出しながらカリスが言う。人手は足りないので、要員を付けてやりたいが、一方で若すぎる彼女には部下が増えると重荷になるかもしれない。

「いえ、大変でしょうが大丈夫でしょう。サスキア・ウテワールがいれば大丈夫です」

「！」

皆がビククリしてヤンの顔を見た。

「え・・・何か変なことをいいましたか？」

「い、いえ・・・」

全員が目を逸らす。わけがわからない様子できよろきよろ周囲の様子を見ているのはカレンである。

「マルガレータ主任の責任は重いですし、困難な研究ですが、サスキアが一緒ならきつと大丈夫です。彼女が一緒だと、途中で物事を

投げ出すなんてことは、考えもしなくなります。そういう娘です」
「信頼されているんですね。サスキアさんのことを」

カレンのせりふに他の者全員に妙な緊張感が走る。

「はは。なんとというか、彼女には久々に会って、子供のころと何も変わってないと笑われましたが、変わってないのは彼女もそうでしたよ。彼女にやれると言われると、本当にそんな気がしてくるし、期待を裏切ることなど決して出来ないように思えてくるのです」

微妙な照れ隠しが入っているのか、会話がかみ合っていない気もする。しかし、ヤンのサスキアに対する奇妙な信頼については、皆が理解を示した。ヤンだけでなく、護国騎士団の者はサスキアの力を実感している。どんなに自分たちの気持ちが悪くても、サスキアの一言で勇気が湧いてくる。それゆえに、『女神』『天子』とまて呼ばれるのだ。悪ふざけだけの話ではない。

その日の夜、サスキアとマルガレータが使っている部屋にカリス、ピーテル、シルヴィアが招かれた。サスキアがマルガレータに手ほどきをして、料理を作ってみたのである。ピーテルだけでなく、カリスやシルヴィアまで招かれたのは、量を作りすぎたのと、客観的な意見を聞くためである。男性には言いづらいこともシルヴィアやカリスならすげえと見える。

先にロビーの食事をサスキアが用意して試食させたのだが、初めてロビーの口から及第点が付いた。まだまだ改良の余地はあるが、味付けさえまともなら、それなりに味覚を楽しませるものになってきたのである。

「ふむ、良かったわね。ピーテル君。サスキアさんのおかげで、もう、妙な我慢しなくても大丈夫よ」

「い……いえ……そんなにがまんしていたわけでは……」

「じゃ、おいしかったの？」

「そ……それは……」

「くすつ……だめよ……。やさしいだけじゃ。女を成長させるのは男次第よ」

多少、マウリッツから厳しい仕打ちを受けていると言えるかもしれないカリスが言う。結婚直前に失踪することで、カリスはある意味大きく成長する機会を与えられているのかもしれない。

料理は、絶品とまではいかないが、まあまあおいしいと言えるものにはなっていた。サスキアに言われたとおりにやってみれば、決して難しくなかったのである。ピーテルが甘やかしすぎだったと言う結論にたどり着いたのであった。

「うう……すみません……ごめんねピーテル……」

「ま、こっちの方も努力した方が、後々いろいろいいことがあるわよ。マルガレータさん。いつまでも男が自分を女として興味を持ってくれるとは限らないんだから、料理とかの付録も結構重要なものよ。特に結婚してからはね。考えてるんでしょ」

ピーテルとマルガレータは赤面をしながらうなずいた。落ち着いたら結婚しようと言う二人の計画は本人が口にしなくても、露見していた。そういうことを隠してられるほど、二人とも大人ではないのだ。

「お、奥様……その辺はあとから私にもご指導を……」

「あら、カリスはまだまだラブラブのおつもりじゃなくて？付き合
い始めて半年でしょ？このお二人の方がよっぽどベテランカップル
よ。子供のころからずっとなんだから」

ピーテルとマルガレータは五歳から十三歳まで通う学塾時代からの
幼馴染である。

「あら、それを言ったらサスキアとエツシャー先生だって・・・」
「な、なに言うのよマルガレータ・・・私は・・・」

「また！本当にそんなこと言っていたらカレンさんに持ってかれち
やうわよ！」

「まあまあ、バレンツさん、実は今日、ヤンがみんなの前でこんな
ことを口にしてね」

シルヴィアは、会議の席でヤンがサスキアについて話したことを語
った。

「え・・・ヤンがそんなこと・・・」

恥ずかしいような、うれしいような顔でなにも言えなくなるサスキ
ア。

「いや、そんなに決定的なことを言っていたように思えないんだけ
ど・・・」

マルガレータが言うのを尻目に、サスキアは恥ずかしそうにうつむ
いている。

コンコンッ！

突然のノックにサスキアがびくつと動く。

「あ、え、は、はい？どなたですか？」

「カレン・ファン・ハルスです」

「え？」

物事に動じないシルヴィアでさえ、突然のことに驚く。全員に緊張が走った。

サスキアがドアを開けると幾分思いつめた表情のカレンがそこに立っていた。

「あの、よろしいかしら。サスキアさん」

「え、あ、はい。どうぞ」

「あ、あら、皆さんお揃いで・・・」

「え、ええ、あ、カレンさん、ご夕食は？よろしければ、一緒にいかがですか？マルガレータが料理の練習にたくさん作りましましたから」

「あら、よろしいんですの？それではいただきますわ」

なんとなく、微妙な雰囲気を感じ取ってないわけではないだろうが、カレンは果敢に部屋の中に入ってくる。落ち着きを取り戻したシルヴィアが場の雰囲気を少しでも良くしようと話しかけた。

「カレンさん、もう、ここにはなれたかしら？」

「ええ、皆さんとてもご親切にしてください。私、ずっとケテル村にいたものですから、ザーンぐらいまでしか出てきたことがないんです。都会暮らしは初めてでしたので、不安もあつたんですけど」

「そう。よかったわ」

カレンも既に護国騎士団員の間で人気が集まっていた。気品と親しみやすさを備えた貴族令嬢と言うことで、サスキアとはまた違った趣味の男とたちが、例の『花を愛でる気持ちで見守ると言う精神風土』を發揮して、あくまで遠くから憧れのまなざしが向けている。

「あの・・・実は・・・」

この娘には珍しく言いよどむ。ハキハキと、それでいて気品に満ちた言葉遣いで話すのがこの娘の特徴なのだが、このときだけは口が重い。

「サスキアさんに・・・お尋ねしたいことが・・・」
「！」

部屋全体に言い知れぬ緊張感が走った。

「あの、な、なんででしょうか？」
「私・・・サスキアさんがうらやましくて・・・」
「？」

意外な台詞にみな固唾を呑んでなりゆきを見守る。

「エツシャー先生にあんなに信頼されていて・・・私はこの数年ずっと先生のことをお慕い申し上げてました・・・でも、あんなふうに、先生に言われた事はないんです・・・」

しーん・・・

と、部屋の中が静まり返る。気づくとカレンの目には涙がたまって

「本当は・・・なんとなく・・・わかってました・・・先生のお気持ち・・・誰かはわかりませんでしたし、先生は決して口になさりませんでしたけど、どなたか先生のお心の中にはいらっしやること・・・」

「カレンさん・・・」

声を出したのはマルガレータである。サスキアは何を言っているかわからず、カレンをただ見つめている。

「本当は、サスキアさんにお会いして、ああ、たぶんこの方なんだなって・・・。孤児院で一緒だったのは一、二年ほどだったとうかがいました。私はケテル村で五年以上よくお会いしていましたけど、あなたより大きな存在にはなれて・・・ないのですわ・・・」

カレンの品の良い青い目から、一筋の涙がこぼれていた。

「サスキアさん・・・サスキアさんは先生のこと・・・どう思っただらっしやるのかしら？」

「わ、私は・・・あの・・・その・・・」

シルヴィア、カリス、マルガレータの三人が妙に力んでこぶしを握る。

『ここが正念場でしょうがっ！』

口には出さないが、三人の女性は同じ事を頭の中で叫んだ。意を決したように、サスキアには珍しくはつきりと言う。

「私、子供のころからずっと、エッシャー先生・・・いえ、ヤンと

一緒に患者さんのために働きたいと思って、看護婦になる勉強をしてました」

『はあ？』

やはり口には出さないが、三人が同じ表情をする。

「え・・・あの・・・先生のこと・・・お好きなんじゃない・・・」
「え・・・それは・・・その・・・」

『こりやだめだ・・・』

眉間にしわを寄せて、三人の女性は視線を交わす。ところが・・・

「サスキアさん・・・はつきりした方がよろしくてよ。先生もあいう方だし、お忙しいから余計にどうしてかわからないんですわ。たぶん、エッシャー先生は今回の件が終わったら、ケテル村にお帰りになるでしょう。サスキアさんはスタンジエ先生のお宅でメイドをされていたと伺いましたけど、スタンジエ先生がお姉さまとご結婚された後も続けるのかしら？」

「え・・・それは・・・」

「新婚生活に妹はいらないわ」

カリスがはつきりと言い切る。目が冷たい。

「そしたらどうなさるの？ケテル村に先生とご一緒に行かれるのが一番ではないかしら？先生のお力になりたいと言っなら、一緒に居ないと何もできませんわよ」

幾分口調が強い。やや涙声ではあるが、言葉には力がある。

「ちゃんとお話しておいた方がよろしくてよ。そうすれば、先生はもっと今の大変なお仕事もがんばれます。それこそ一番先生のお役に立てることになると思いますわ。それとも、アメルダムに留まって、また離れ離れになるおつもり？」

「い、いえ……」

「サスキア！カレンさんはとても辛いことを口にしてらっしゃるのよ。とても勇気のいることよ。あなたがそうしてうじうじしていたら、彼女ももつと苦しめることになるのよ。はっきりとおっしゃい」
厳しい口調だが、柔らかい笑みを浮かべてカリスが言う。カレンと言う女性を見直したのだ。なかなか出来ることではない。自分の気持ちを押し殺して、サスキアを後押ししようとしているのだ。

「は……はい。私……ヤンに着いていきたい……」

「よく言った！」

シルヴィアとマルガレータが手を打つ。涙を浮かべたまま、カレンもうなずいた。

「それがよろしくてよ。私も、諦めがつきますわ」

ハンカチを取り出し、涙を拭いてから、シルヴィアに向いて別の話を始める。

「シルヴィア様。私、今回の監察官のお仕事が終わった後もアメルダムに留まりたいと思います。何かの形で、どこかに勤められる様にお取り計らいいただけられないでしょうか？」

「もちろんよ。国務府でも司法府でも女性の職員は不足しているわ。カレンさんは大変優秀な方ですし、今回の件でがんばれば、重要な

お仕事もお願いできるわ」

「ありがとうございます。ふうう……！」

大きなため息をついて、肩の荷が下りたようにすっきりとした顔を全員に向ける。

「すっきりしました。いつまでも、他の方の男性にこだわってはい先に進めませんわね。アメルダムでもっと素敵な方を探すことにしますわ」

「ふむ。護国騎士団も保安兵団もいくらでも他人の手垢がついてない男がたくさんいるわよ。社交界の縁結び担当者と言われる私が、素敵な殿方をご紹介しますわ」

「あら、でも私……体育会系の殿方はちょっと苦手ですの……。汗臭い感じが……」

「あらら……ま、いろんな男がいるわ。汗臭いのも割りとよく思えることもあってよ。主人も相当汗臭いし」

部屋中に笑いが広がる。シルヴィアも実はカレンと同じように汗臭い男は嫌いだっただが、一方で名門貴族のおぼっちゃまたちにも興味が持てず、このまま一生独身でいようかと思っていた時期もあった。汗臭いを通り越して、奇抜な行動の多い豪快なウイレムに惹かれることがあるうとは自分でも思っていなかったのである。

「あの……カレンさん……ありがとうございます……」

「あら、そんなことおっしゃらないで。私自身、すっきりしたかっただんですの。私、田舎では歳の近いお友達もできなくて……。仲良くしてくださいね」

「よし！じゃあ、今日はもう仕事もないし！煮え切らないサスキアがはつきりしたことと、女同士の友情を祝して呑みましょう！料理もまだまだあるし！」

「せ、先生・・・昨日あんなに飲んだばかりじゃないですか・・・」
「男も一人いるんですけど・・・」

やや、居心地が悪く思えてきたピーテル。

結局、まだ仕事を残していたピーテルを抜いて、その日はサスキアとマルガレータの部屋で宴会となった。カリスは二日続けて痛飲したが、なぜか翌日は元気だった。自分とマウリッツの結婚後、サスキアがどうするのかを結構気に病んでいたのである。

一勝一敗

護国騎士団第一部隊長レム・ファン・リートフェルトは緊張していた。

ゼーラント州の州都ノールトには州内の全住民が集まっている。と言っても、そもそもがゼーラント州の人口は極端に少ない。国境地域であるということもあるが、十年前の戦争ではフリップ王国軍の進軍経路であつたため、途中の村々はほとんど焼かれ、略奪の対象となつた。さらに、戦後の伝染性吸血病の流行でも、その被害を甚大に受け、元々少ない人口がさらに半減したのである。

今回場合はさらに、いくつもの村が人為的な伝染性吸血病の流行、もしくは不死鬼軍による血液を目的とした強制移住と見られる失踪により丸ごと無人となっているため、ゼーラント州でノールトに収めていた人数はドルテレヒト州の二十万に比べて遙かに少ない八万程度、一地方都市、それも小規模な方のザーンの人口のどうにか二倍程度でしかなかった。

このノールトの八万の民衆は、不死鬼軍に備えてザーンに移動することになる。ザーンの収容能力ではさらに八万を受け入れることは無理があるが、何割かの民衆はアメルダムなど比較的安全な方面へさらに疎開していくことを希望したため、こうした措置を取れることになったのである。

ノールトは言うなれば不死鬼軍との来るべき戦争の最前線である。わざわざこの城砦都市を空城にするについては、ヤン・エッシャーにある目論見があつた。不死鬼軍は放置していても、いつかは何らかの動きをとらざるを得ない。血液と言う確保しづらい資源を常に

補給しなければならぬ維持することが難しい軍隊だからだ。おそらくはフリッパ王国側の国境地帯では、民衆から血液を提供させる仕組みを用意しているとは思われる。だが、マウリッツ・スタンジエがフリッパ王国に潜入した今となっては、それもいつまでも続けることが出来るとは限らないのだ。フリッパ王国側が血液の供給元になっている村々を開放することに動く可能性が高くなったからだ。

それでも、ヤン・エツシャーがノールトを空城にするのは、不死鬼軍をルワーズ公国側に誘い出すためである。血液の供給元となる人口は多ければ多いほど無理がなくなる。すでに数千乃至一、二万程度には膨らんでいると思われるので、どれだけの数の村をそうした形で利用しているかにもよるが、過剰に血液を抛出させれば不満も高まる。何より、健康的な状態を維持できる限界以上に採血してしまつては、住民からの採血自体ができなくなつてしまう。

一方で、ルワーズ公国側の方が吸血鬼対策が進んでいることも彼らは良くわかつているはずである。おそらくは、統一した意思で動いているわけではないと思われる不死鬼軍の首脳部に亀裂を走らせるための仕掛けでもあるのだ。空城となつた、ノールトを占領するかどうかだけでももめるはずである。

それゆえに、レム・ファン・リートフェルトは緊張していた。完全に空城になつてから、接収しに来るだけならいいが、ついではかりに移動している民衆に襲い掛かれれば、敵は城だけでなく、大量の血液を得ることができるのだ。

日中を選んで移動を始めたわけだが、それでも、皮膚のダメージへの対策はしている可能性があるし、その気になれば、理性や思考のない吸血鬼であれば、大やけどを負つたような状態になつても、進

軍してくる可能性も考えられた。

レムの予想は当たった。ちょうど、移動する民衆の最後尾が城門を出たタイミングで、フリップ公国国境へ向かう街道に砂塵が上がるのが見えた。遠眼鏡を取り出すと、千程度の吸血鬼の群れが見えた。全員、鎧などは着用していない。明らかに雑兵と言った体である。皮膚はだいぶダメージを追ってはいるが、厚手の服を着込んでいるがために、活動に問題が出るほどにはただれているわけではなさそうだった。油を浴びさせている可能性もある。

緊張していたと言っても、レムは備えていないわけではなかった。状況がはっきりして、むしろ落ち着いた態度で迎撃体制を整える。レムは護国騎士団内で『戦う哲学者』の異名を取るほどに思慮深い男だ。

「騎馬隊二百は住民と共にザーンに向かえ！歩兵八百で迎撃する！対吸血鬼密集防御体制を用意！」

騎馬隊は八万の民衆をせかしながら去っていく。民衆と言っても八万の中には元々のノールトの城兵なども含まれているから、戦力としては千人程度が民衆を守ることになる。

八百の迎撃部隊はヤン・エッシャーの発案による特殊な迎撃体制を取った。

三百名が、百人ずつ、三種類の奇妙な盾を構えた。一列目に並んだ兵士たちは、全身を隠すことが出来る大きさの長方形の巨大な盾を構える。それを、左右のものと三分の一程度ずつ重なるよう並べる。

第二列目はもつとも奇妙な盾を持っており、それは巨大な円盤状の

盾だった。それを、第一列の盾の上、小さなくぼみになっている部分に持ち手の部分を載せるように構えた。この盾の持ち手は、縄で出来ており、構えてもこの盾はぶらぶらとゆれる。

第三列目の盾は第一列目の盾の半分程度の大きさで、それを、一列目の盾の上に並べた。高さ三メートルほどの、金属製の壁が出来上がる。

異常な速度で走りよってくる吸血鬼たちは、そんなことはお構いなしに、壁に向かって突撃してくる。壁の十歩ほど手前で先頭の吸血鬼たちは飛び上がり、異常発達した筋力でその豪腕をたたきつけてくる。

「キシャーッ！」

吸血鬼は声帯をうまくコントロールすることが出来ないので、獣のような声しか出せない。

グワシャーッ！！

第二列目の兵士たちが持つ丸い盾がけたたましい音を立てた。わざわざ響きやすい材質の金属で作られた、楽器と言ってもいい盾である。吸血鬼たちは自らの攻撃で発生した大音響で、異常に敏感な聴覚に大きなダメージを受ける。最前列の吸血鬼は半数がそれで昏倒していた。

「弓箭兵！瀉血矢を打て！」

通常の弓矢ではよほどの強弓でもない限り、吸血鬼にダメージを与えることは難しい。だが、マウリッツ・スタンジエの発案によるこ

の矢は、吸血鬼の体に突き刺さると、血液を凝固させずに大量に对外に流出させることができた。矢じりは通常のものより細く、注射針のように穴が開いており、そこから血液が吸い上げられ、噴水のように噴出す。血液を急激に失った吸血鬼は行動不能になる。直前まで全力疾走していたならなおさらだった。

二百の弓箭兵が壁を越えて瀉血矢の雨を降らせた。盾の壁の向こう側では、吸血鬼の大量に吹き上がる。さらに・・・

「突撃兵！吸血鬼どもの首を枯れ！」

残りの三百の突撃兵は手に剣や槍ではなく、長大な棒の先に巨大な鎌が付いたものを持っていた。それを使って、次々と吸血鬼の首を刈り取る。すでにほとんどの吸血鬼は音響攻撃と瀉血矢でダメージを負っており、突撃兵のすることは戦闘というよりも作業でしかなかった。

八百人の歩兵で千五百の吸血鬼を被害ゼロで絶滅させたのである。これは、十年前に僅か二千の護国騎士団第一、第二部隊で最終的には数万の吸血鬼を掃討したことを考えれば、それほど異常な事態ではなかった。理性のない吸血鬼の群れは、戦術さえ誤らなければ決して恐れる必要は無いのである。

吸血鬼たちには細かい戦術を駆使することなどはできない。ただ、血に飢えた状態で戦場に送り込んだだけに過ぎないが、それでも、戦場まで移動させるためには指揮官が必要であった。

第一部隊に全滅させられた吸血兵の部隊を指揮していた不死鬼は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「なぜ、こんな意味の無いことしなければならぬんだ？負けるかわかっていながら仕掛けるなどと……。抱えきれないほどの兵力を抱えるからこういうことになる……」

若い、丁寧に全身に油を塗って皮膚へのダメージを抑えている不死鬼は苛立ちを隠せない。第一部隊が民衆を追って見えなくなったことを確認して、十分に血液を取っておとなしくなった状態の吸血鬼、千人を引き連れて、ノールトに入城していく。

レム・ファン・リートフェルトの上官に当たるウィレム・ファン・バステンは、ザーンからケテル村方面に出撃していた。率いているのは第二部隊、ヘンドレック・ファン・オールトが七百、ウィレムは三百を借り受けて率いている。ケテル村はステーン湖を渡ればすぐにフリップ王国領から直接上陸でき、護国騎士団の前線基地であるザーンに進軍してくるには絶好の拠点となりえる。

一方でウィレムはケテル村に軍を配備するつもりはなかった。ケテル村一つを確保したところで、上陸地点は他にいくらでも考えられるし、ザーンとの連絡が絶たれれば孤立してしまう。むしろ、現在はケテル村に敵軍が上陸するのを待っているような状態なのだ。ただし、何も楽に占領させてやる必要はないので、いろいろと罠を仕掛けておける。また、ケテル村からザーンに向かう街道にも罠を仕掛けて、進軍を遅らせる準備が出来ている。こうした柔軟な戦術を駆使するためにも、地域住民の城砦への収容には大きな意味があったのだ。

「將軍！北方より吸血鬼と思われる軍勢が接近してきます！その数

およそ八百！」

ヘンドレックは勢い込んで叫ぶ。カレル・パレルケレンネに次ぐ軍歴を誇る第二部隊長は、カレル以上の武勲を挙げながら、直情的過ぎ、短気であるために騎士団長や兵団長への昇進を逃していると言われる男である。

すでに夕方となっていた。吸血鬼の行動には問題ない程度の日差ししかない。

「全員騎乗！騎射隊は対吸血鬼鎗矢を用意！」

この対応も、ヤン・エッシャーが作成したマニュアルに従ったものであった。対吸血鬼用鎗矢もマウリッツ・スタンジエの発案によるものである。鏃のすぐ下に取り付けた鎗は通常のものよりもさらに大きい音を出すように作られている。

徒歩ではあるが、なまじの馬よりも速く走る吸血鬼たちが五十メートルまで迫るのを待って、ウィレムが号令する。

「撃て！」

百騎の騎射隊ががいつせいに矢を放つ。百本の矢は吸血鬼を傷つけることはほとんど出来なかったが、それが放つ極めて音程の高い音の本流が吸血鬼たちに降り注がれた。致命的なダメージを与えるほどのものではないが、それによって、進軍速度が一時的に落ちる。

「そらっ！尻撒くって逃げろっ！」

ウィレム・ファン・バステンは公国最強の軍である護国騎士団の騎

士団長であり、將軍の称号を帯び、場合によっては公国元帥代理として国軍府の實質的長となることもありえる。それが、こんな指示を堂々と言う。しかし、護国騎士団の兵士たちは皆それになれてしまっている。

千騎の騎兵隊はザーン方面に向けて一目散に逃げ始めた。一度速度を落とした吸血鬼たちはそれを追い始める。

馬に乗っていたところで吸血鬼の全力疾走から逃れることはできない。筋力の異常発達は腕力だけでなく、脚力も常人とは比べ物にならないほどにする。しかし、物事には常に表と裏がある。筋力が異常発達した吸血鬼は普通の人間ほどにも持久力はない。まして、理性の無い彼らはそれを理解しない。結果が出るまでそれを予測できないのだ。

吸血鬼の攻撃は多くの場合、ターゲットに対して高く跳躍し、上方から襲い掛かる。しかし、今回の場合は全力疾走した跡で、既に跳躍するだけの体力を残していなかった。そして、ウイレムの指揮する騎兵隊が、ある地点を微妙に迂回して走っていることなど気づくはずもなかった。

あと十メートル程度にまで接近してきた吸血鬼たちが、突然転んだ。そして立ち上がることができない。体を起こしたところで、立とうとするとまた転ぶ。転んだ吸血鬼たちの足は膝と足首の中間辺りで切断されていた。

草むらに隠した罫である。丈夫な鋼線を偽装した杭に縛り付けたものがいくつも張られていたのだ。人間の軍隊相手であれば、先頭の兵がこれにかかった時点で進軍を一度停止するし、そもそも、骨まで切断するほどの勢いで突っ込んでくることなど出来ない。吸血鬼

はそうした思考も痛覚もないために、次々に突進し、足を切断されていった。

それが止まったのは、吸血鬼を指揮する不死鬼がその場に到着したことを意味する。どうやら、猛獣を飼いならすかのように、吸血鬼を操る方法があるようだ。指揮官と思われる人物はフルヘルムで顔を隠している。その周囲には鎧を着た幾分おとなしそうに見える吸血鬼の兵たちが見える。

「立てないやつは無視していい！鎧を着込んでいるやつらを殴り倒せ！」

逆進した騎士たちの手には槍や剣ではなく、人間の頭ほどある鉄球が先端に付けられたメイスが握られていた。扱いやすい武器ではないが、馬上から振り落とすだけで、頭蓋が破壊できる。吸血鬼は剣で切りつけても、心臓を貫くか、大動脈を切断でもしない限り致命傷にはならない。しかし、打撃に対しては、頭蓋が破壊されて平気なわけではない。体についても、痛覚は無くとも破壊された骨が再生するわけではない。

「つつこめえええっ！」

ファン・オールトが興奮した様子でメイスを手にした騎士たちを嚇けた。次々と吸血鬼の頭部に鉄球を叩き付ける。頭蓋を破壊された吸血鬼たちが次々と倒れていく。

ウィレムの前には指揮官と思われる人物がいた。間違いなく不死鬼であろう。気になったのは、着込んでいる鎧が護国騎士団の、それもまだザーンにいる部隊には配布されていない新デザインの装備であることだ。数日前にアメルダムからの報告にあった、女性の不死

鬼のこと思いも出だす。ウィレムはあてずっぽうで、話しかけた。

「ご婦人と戦うのは本意ではないが、これはいたしかたありませんな。よろしければ、お名前だけでも承りたいですが」

戦闘中でもこうした口をきくのがこの男の特徴だった。

「・・・イエケリーヌ・エラスムス・・・」

答えが返ってきたのは意外だった。ただ、家名も別に思い当たることのある名前ではなかった。

「では、エラスムス殿。ここは戦場ですので、その作法に従ってお相手いただけますかな・・・」

言い終える前に、イエケリーヌは愛用のフレイルを振るった。フレイルは防御しにくい武器である。剣などで受けることも難しい。場合によっては、巻きつけられて武器を奪われることもある。ウィレムはそれを受けたりはしなかった。鞭のようにたたきつけられてくるフレイルの鉄鎖を巧みな手綱さばきで馬ごと避ける。それと同時に突き出した剣をイエケリーヌは仰け反ってかわした。不死鬼独特の発達した筋力により、明らかに無理のある体制になっても、倒れることはない。

「女性の方から急がれるのは野暮と言うものですよ。男に我慢をさせることを覚えていただきたいものですな」

へらず口をやめないのは余裕があるからではなく、それを演出するためであった。不死鬼との戦闘は十年前の掃討戦で何度かの経験がある。しかし、その時の不死鬼はただ単に、吸血鬼が理性を持って

いたというだけで、高度な戦闘訓練を受けた相手ではなかった。ほとんどの元々雑兵である。イエケリー又と名乗った女の不死鬼は明らかに戦闘訓練を受けていた。

名乗って以降はイエケリー又は何もしゃべらない。それが突然、攻撃の手を止めて、別の方向に顔を向けた。隙はない。顔をこちらに向けたままフレイルを振るってきたので、一度距離をとらざるを得なかった。

「ちっ！しまった！」

イエケリー又の向いた方向を見てウィレムの減らず口はとまった。視線の先ではヘンドリックが苦戦していた。ウィレムがイエケリー又と戦っているうちに、ヘンドリックの部隊はメイスの攻撃で吸血鬼たちを蹂躪していたはずだが、状況を把握し切れてないにもかかわらず勢いによって前進しすぎたのだ。

いつの間にか新手の吸血兵が現れ、ヘンドリックの部隊に横撃を加えていた。その部隊の指揮を取っているのは、重装備の鎧を着込んだ男である。その男だけは騎乗にあった。イエケリー又の攻撃のため、救援に駆けつけることができない。

戦闘の雰囲気興奮したヘンドリックは顔を真っ赤にして騎乗の不死鬼に突撃した。

「貴様は何者か！」

決してヘンドリックは無能ではない。勇猛でいくつもの武勲を挙げたカレルに次ぐ老練の猛将である。だが、老いて思考に柔軟性を欠

きはじめたことも確かであった。頭に血の上った彼には、自軍が不利な状況にあることを承知しながら、適切なタイミングで撤退を選ぶことができなかった。

「ふんっ・・・隊長程度の地位のまま老いさらえたか。ヘンドリックよ」

「き、貴様なぞに呼び捨てされる覚えはないわっ！？何者だ？！」

「死ぬ者が訊いてどうする？」

そう言った瞬間、複数の吸血鬼がヘンドリック本人ではなく、馬に飛びつき、豪腕に任せてその腹を引き裂いた。ヘンドリックは地面に投げ出される。

「短気の上に短慮。平和ボケした騎士団の隊長程度がお前には似合
いだったな」

馬上から、振り下ろされた剣で、ヘンドリックの首は落とされた。

その瞬間から、護国騎士団第二部隊は浮き足立つ。だが、ウィレムは冷静だった。まずはイエケリー又との戦闘を中断しなければなら
ない。ウィレムは左手を鎧の中に入った。取り出したものをイ
エケリー又に投げつける。

「・・・っ！？」

イエケリー又の動きが突然止まった。鎧の隙間から噴水のように血を噴出す。ウィレムが投げたものはレム・ファン・リートフェルトが使った瀉血弓の鏃と同じ構造のものだった。大きな瀉血針に尾翼をつけたような、ダートと呼ばれる投擲用ナイフの形をしている。

この武器は、すぐに抜き取れば、出血は止まる。刺さっている間しか、血を吹き出させることはできない。だが、イエケリーヌがあわててそれを抜いたときにはウイレムはそこにはいなかった。ファン・オールの首を刎ねた直後のもう一人の司令官に一撃を浴びせ、すぐに戦場を突っ切って大声を上げる。

「ひくぞっ！」

一時茫然自失となった兵士たちはウイレム言葉にどうにか反応した。崩れた陣形を整え、ザーン方面に向けて失踪する。戦闘直後で消耗していた吸血鬼たちはそれを追う事はできなかった。

「ゼーラント州ノールト周辺と、ドルテレヒト州ケテル村周辺で吸血鬼との戦闘がありました！」

戦闘があつた翌日の午前、護国騎士団本部の司令部に急報がもたらされた。あえて大声で報告したのはシモンである。

「ノールトでの戦闘では被害はなく、住民のザーン避難も滞りなく行われました。レム・ファン・リートフェルト隊長以下第一部隊千名はザーンを目指して移動中です！」

「ケテル村側は?!」

シルヴィアはいやな予感がしていた。

「罾を仕掛けるためにケテル村とザーンとの間の街道に出ていた、ファン・バステン將軍と第二部隊も吸血鬼の軍勢と遭遇・・・被害は・・・十名が死亡、五名が吸血鬼に噛み付かれ、自らその場で命

を絶ちました。そして・・・」

「まだ何かあるの?」

「ヘンドリック・ファン・オールト隊長が敵の手にかかりました・・・」

司令部が沈黙する。戦闘が始まれば被害が出ることは当然覚悟していた。だが、まださか緒戦で部隊長を失うことになるとは思っていなかったのだ。

「ファン・バステン將軍からの書簡には詳しい戦闘の様子が書かれています」

幹部たち全員がヤンの席の周りにあつまった。ヤンが渡された書簡を読む。

「吸血鬼の戦闘力よりも、指揮官である不死鬼の戦術指揮を見くびっていたかもしれせん。最初はこちら側の罠で相当のダメージを与えることができましたが、この・・・重装備の鎧を着た男、おそらく我々がファン・ダルファー邸で会ったあの男だと思えますが、彼の部隊による横撃は、ちゃんと計算しつくされたものです・・・」
「ウイレムにも少し油断があったかもしれないわ」

沈痛な面持ちでシルヴィアが言う。ファン・オールトは短気な男であったが、シルヴィアにとっても長年の仲間であった。

「しかし、喪に服しているような時間はありませんし、失敗に落ち込んでいる場合でもありません。吸血鬼たちが攻撃を仕掛けてきたと言うことは、いよいよ本格的な戦闘が始まると言うことでしょう。エッシャー先生!敵がこちらの手の内も計算に入れてきていることは確かです。新しいことを考えません」と

長年の戦友の死を知らされながら、まったく動揺していないのは力レルであった。これが本来の武人の姿である。ここで自分が動揺しては、それだけで護国騎士団の士気が低下する。

「おっしゃるとおりです。被害が出たことを嘆いている場合ではありません。二点、兄上からの報告には注目すべき点があります。一つは、敵の女性の不死鬼、彼女が名乗ったイエケリーヌ・エラスムスという名前、レイン捜査官！すぐにこの名前について調査を！」

「はっ！」

「それから、その上官と思われる鎧の男。彼はファン・オールト隊長との会話からすると、護国騎士団の幹部についての知識があるように思われます。過去の軍関係者についても調査を強化してください。特に、行方不明のものや死因に疑問のあるものを」

「はっ！保安兵団の全力を向けまして」

「お願いします。兵力的なダメージは多くありませんが、心配なのは前線の兵士に同様が生まれることです。兄上がいれば大きく崩れるようなことはないと思いますが・・・」

「そこは心配してもしかたないわ。兄の心配までしていたらあなたがもたないわよ」

シルヴィアがあえて言う。他人のことまで背負い込もうとする悪い癖がヤンにはある。ウィレム・ファン・バステンは公国一の軍将でありこの程度のことでは崩れるわけも無い。

「すみません。すこし自惚れてました・・・ん？兄上は明後日の朝ザーンを発つてこちらに向かうと言ってます。どういうことでしょうか・・・」

「ファン・バステン将軍が？」

「レム隊長がノールトから戻られると同時にこちらに向かうと・・・」

何か重要な、書簡には書けない報告があるみたいですが・・・」

「なるほど・・・では、それまでの間に出来ることを進めておきましよう。騎士団長代理、ご指示を」

改まった姿勢でシモンが指示を仰ぐ。ファン・オールト死亡の知らせに衝撃は受けていたが、動揺はなかった。ヤン・エツシャーの明哲さを持ってしても不死鬼軍が強敵あることはわかっていた。改めて戦闘を迎えるにあたって、簡単に勝利を得ていれば、部下たちに悔りが生まれたかもしれない。

シモン自身は一つ秘密を抱えている。知っているのはカレルだけである。これをヤンに話すべきかどうか迷ってはいるが、ウイレムには相談すべきことだった。

「イエケリーヌ・エラスムスなる女性の身元を確認するのが第一です。それから、本日出立の物資と追加の人員は予定通りザーン向かわせます。ファン・リートフェルト隊長の指揮下でザーンを固める必要があります。その後は、あえて出撃することは禁じます。野戦ではやはり吸血鬼に対抗し切れないことがあります。籠城戦ならこちらに分があります。それから・・・」

ここで、一度話をとめ、立ち上がって司令部全体を見渡した。

「全員！心して聞け！ゼーラント州とドルテレヒト州での戦闘は、これからの本格的な不死鬼軍との戦いの幕開けである！緒戦より護国騎士団の部隊長を失うと言う痛手をこうむったが本当の戦いはこれからだ！気を引き締め、各自任務に精励せよ！ファン・オールト隊長と兵士たちの死を無駄にするなっ！」

司令部に席を持つ数百名全員が姿勢を正した。

「全員、戦死者に対し黙禱！」

文武の人員全員が目をつぶり、胸に手を当てた。

「やめ！各自、任務にもどれっ！」

「はっ！」

護国騎士団にある対不死鬼軍対策司令部は軍隊と政府の組織の合同で運営されているが、任務の過酷さを和らげるために様々な形で一見のん気に見えるような演出がなされている。一日二回の休憩時間や合同パーティなど、妙に平和な雰囲気を作り出しているのはシルヴィアである。だが、緊張感を欠いているわけではない。こうした時のヤンの場の締め方は、ウィレム・ファン・バステンと同様で、部下たちの精神にメリハリを付けさせる絶大な効果があった。

たとえ、前線でこうした問題が持ち上がって、いや、だからこそ、休憩時間には意味がある。そう考えているのはシルヴィアで、変に生真面目なところのあるヤンは部下たちには休憩を薦めるもの自分はずっと仕事をしている場合が多い。一方で休憩時間に何をしたいのか良くわからないところもあるようだった。幹部たちとコーヒーなどを口にする、つい、仕事の話を始めちゃうので、最近では遠慮している。

そこにカレンが現れた。なぜか後ろでシルヴィアとカリスがクスクスと笑っている。

「エッシャー先生。こういうときだからこそ、根をつめすぎるのは

よろしくありませんわ。ちゃんと休憩を取られたほうがよろしいかと」

「え、ああ、そうなんですけど……どうも仕事のことを頭から離れなくてね」

「せめて、みんなから見られる司令部の席をたつて、お散歩でもされたらどうですか？」

「そうだね。ああ、それではカレンさんも一緒にいかがですか？」

カリスがヤンから見えないように縦面する。

『おいおい……』

そこですかさずシルヴィアがカレンに話しかける。打ち合わせをしたわけではないが、女性たちはなぜかこういうときは無言の連携を發揮できるのだ。

「カレンさん、國務府との書類のやり取りにちょっと不備があつてね。休憩時間なんだけど、ちょっとお手伝いいただけませんか？あとから、一緒にコーヒーでも飲みましょう」

「あら、そうですね。先生、残念ですけど私は……あ、ロビーさんでもお誘いしたらいかがですか？マルガレータさんの開発した新しいお薬、だいぶ良いものみたいで、昼間の日差しでも短時間ならまったく問題なくなつたとおっしゃってましたわ。殿方同士でお話したいこともおありでしょうし……」

あえて『サスキアを誘え』と言わないのも、照れ屋のヤンを旨く差し向けるための計算である。ロビーと話せと言うのは、多少は仕事の意味も持つから、生真面目なヤンには効果的だった。

「そうですね。一応私が主治医になっていますが、ここ数日はほと

んど話もできていない。ちょっと行つてきます。じゃ、何かあったら呼んでください。義姉上、クリステル先生、お願いしますね」

幹部の休憩時間は交代制になっている。ヤンが席をはずす間は何かあればこの二人が対応するのだ。

他人が聞けば多少不自然な話のだが、ヤンはまったく気づいていない。こういうところは本当に、公国随一の知恵者と呼ばれる男なのか、みんなが疑問に思っている。

地下牢、と言うよりも伝染性吸血病に関する病棟と研究室を兼ねる地下室を尋ねると、相変わらず忙しそうにマルガレータ・バレンツが走り回っていた。

「お疲れ様。バレンツ主任も休憩時間ですよ。ブルーナ主任主計官も忙しいけど、ちょっと根つめすぎだから、二人でおしゃべりでもしてリフレッシュさせてください」

「あ、あら、エツシャー先生。こちらに起こしになるのはここ数日珍しいですね」

マルガレータは応対してから、こっそりと、サスキアの背中を押しした。サスキアは妙に緊張した面持ちである。ただし、やはりヤンは気づいていない。多少、先日のパーティー以来話す機会も無かったこともあり、気まずいような感じもあるようだ。

「ロビー。調子はどうだい？バレンツ主任の新しい油薬は結構効果が高いと聞いたよ。久々に昼間の外の空気でも吸ってみないか？テラスでコーヒーでも・・・」

だが、ロビーも実はマルガレータから話を聞いている。ここで、そのまま乗ってしまったては意味がない。

「ありがたいが・・・今日はちょっとアバラの方の調子が良く無くてね。あんまり動きたくないんだわ」

「そうか。では、ここで少し話でも・・・」

そこで急にルドガー・フリースが口を挟んだ。研究者としては自立性にかける男だが、なぜかこういうときだけは自発的に状況をつかんで行動に移すらしい。

「あ、エツシャー先生、実はロビー氏の筋力異常発達の状況についてデータを取らねばならなくて。ああ、サスキアさんは食事の片付けも終わりましたし、お時間ありますよね。先生のお相手をお願いしてもいいですか？」

「え、あ、は、はい！」

緊張していたせいで、少し調子の外れた声で返事をするサスキア。

「え、エツシャー先生、参りましょう。久しぶりに先生にコーヒーを入れさせてください」

「あ、ああ。そうだね・・・」

さすがに、不自然に感じたようだが、だからといって何がと言うとわからない。

マルガレータはサスキアに向かって親指を立てて見せた。ロビーとルドガーは視線を合わせて、多少いやらしい笑みを浮かべる。二人は連れ立って、護国騎士団長執務室に向かった。中庭に面してテラスがある。

護国騎士団長執務室の隣には、シルヴィアが以前執務室代わりに使っていた応接室がある。そこに、適当な言い訳をして、同行を断つた者が皆そろっていた。マルガレータ、カレン、ロビー、なぜかマルガレータに無理やりつれてこられたピーテル、シルヴィアまでいる。カリスはさすがに休憩時間ではないのでいなかった。

カーテンを締め切り、隣との壁にロビーが何かの道具を取り付けている。

「これは、俺があちこちの屋敷に忍び込むための事前調査に使っていた道具だね。これぐらいの壁なら、向こう側の物音を聞くことができるんだ。こうやって、壁にぴったりこつちを貼り付けて・・・」

逆にヤンたちには聞こえるはずもないのだが、やたらと声を低めて話す。

「よし、大丈夫だ」

全員が壁際により、一つしかない耳当てのようなものに顔を寄せる。聞き取りづらいことはあるが、どうにか会話の内容はわかった。

「な、なんだか、ひ、久しぶりね。こうして二人になるの・・・」

サスキアは言うが、二人で話したことなど、再会して以来一度しかない。それも、例の喧嘩別れをした時だ。壁の向こう側では複数人から忍び笑いが漏れる。二人はテラスには出ておらず、執務室で話をしているようだ。

「あ、ああ、そうだね。ロビーの治療チームでがんばってくれていると聞いたよ。バレンツ主任の仕事はとても責任が重いから大変だろうけど、君がいれば大丈夫だと思ったよ」

「う、うん……」

『いけ！いくのよ！サスキアさん！ここが勝負！』

一番力んでいるカレン。押し倒せだの言わないのはさすがお嬢様で、酒を飲んだカリスであれば、もっと下品なことを口にするだろう。

「あ、あのね……ヤン……」

「ん？」

『おおっ！い、行くか！』

応接室の全員が息を飲んだ。

「こ、今回のお仕事が落ち着いたら、やっぱりケテル村に戻るの？」

『うーん、まあ、流れはまだ悪くないわ。』

シルヴィアがぼそぼそと言う。他の者は皆やたらと頷く。

「そうだね。私にはあんまり都会の生活はあわないらしい。実は今後は公国政府の仕事ももう少し頻繁に手伝ってほしいとはいわれているんだけど、ケテル村に帰るのは構わないってお墨付きももらったからね」

『だめよ！普通よ……普通の会話過ぎるわ……エッシャー先生』

「つたら、まったくサスキアの様子に気づいてないのね・・・」

小声でマルガレータ。

『あんまり遠回しじゃダメですね。私、五年間もそれで手を焼いてきたんですもの・・・』

もう、未練は無いらしいカレン。しかし、逆にサスキアとこのことがはっきりしないのは余計に我慢できないらしい。

「そつえば、君はどうする？カリスさんとマウリッツが結婚した後もメイドを続けるのかい？」

『おおっ！波が来たわよ！波が！ここよ！』

いつに無く興奮しているシルヴィア。

「お、お姉さまには、新婚生活に妹は要らないって言われちゃって」
「・」

『だめだって！もっと押さなきゃ！』

これはマルガレータ。

「そ、そうか・・・マウリッツの屋敷は出ることになるんだね・・・」
「」

『そつじゃねえだろ！エツシャー先生！』

ロビーもすっかりメンバーになじんでしまっている。

「あの……」

「あの……」

二人が同時に言いかける。二人とも顔は真っ赤だが、そこまでは隣室のメンバーにはわからない。

「あ、どうぞ……そっちから……」

これまた二人同時になってしまった。

『あれ、どうなってるのよいったい……』

鼻息の荒いマルガレータ。

「ああ、実はカスペル……私の医生だけど、今回のことが終わったらアメルダムの公国医学院に入れようと思ってね。私のところに居ても、患者は少ないからいい経験はなかなかできない。マウリッツとクリステル先生に頼もうと思っていて……」

『あ……話がそれてきちゃった……』

『いや、まだですわ……これは……』

マルガレータの言葉をカレンが遮る。

「そしたら、診療所は私一人になってしまっんだ……もし……よかったら……」

『おおっ！』

「ヤン、あの・・・私・・・」

「いや、まあ、その・・・都合が悪かったり、他に予定があるならいいんだ」

『おいおい・・・先生・・・』

「ヤン、覚えてる？ロビーさんの手術の後に私が言った事・・・いやだって言われても絶対着いていくんだって・・・」

『きたっ！きたぞっ！！』

「だから・・・ずっと・・・手伝わ・・・せて・・・」

『ようしっ！えらいっ！』

「サスキア・・・そ、それだけじゃないんだ・・・」

『？』

「あの・・・その・・・か、看護婦としてだけでなくてさ・・・」

『こ・・・これは・・・』

「その・・・」

「ヤン・・・私も・・・」

『き・・・き、きましたわ・・・一気にここまで・・・』

カレンはこぶしを握って力んでいる。ちなみになぜかピーテルは後ろの方で鼻血をだしていた。

「け、け・・・けけ・・・」

「？」

「結婚しようっ！」

ゴンッ！

隣室でカんでつんのめったマルガレータが壁に頭をぶつけた。

『マ、マルガレータさん！いいところで！』

『う、ごめんなさい・・・』

『大丈夫よ。ヤンはこんなこと気づかないから・・・』

「うん・・・」

サスキアの目には涙が浮かんでいたが、子供のころと変わらない笑顔だった。

「やったーっ！」

隣室から拍手が聞こえてきた。

「な、なんだ？」

ヤンは隣室に走りこんだ。

「何騒いでいるんです？」

ドアを開けると、壁際でみんなが大騒ぎしていた。

「よ、よかったわあ・・・晩婚化が問題だっ取り組んでいるのに、身内に婚期が遅れている男がいたんだもの・・・」

大げさにハンカチで出てもない涙を拭きながらシルヴィア。

「もう・・・はらはらしっぱなしでしたわ・・・ぐったりしちゃいました」

自分が譲ったことはもう忘れたのかカレンはなぜか放心気味。マルガレータはなぜか鼻血をだして倒れている。ピーテルを快方している。そしてロビーは・・・

「いやあ、お二人さん。よかったよかった。暗い話題だけじゃやってらんないからな」

ヤンとサスキアは赤面したまま立ち尽くしていた。

「いやあ、よかったよかった。これで私の新婚生活も安泰ね」

やたらとうれしそうにカリスが言う。その日の夜、二人の会話を盗聴していた応接室で、シルヴィアとカリスはワイングラスを片手に話していた。

「スタンジエ先生が帰ってきたら、結婚式が続くわねえ。あなたたちと、ヤンたちと、ああ、マルガレータさんとピーテル君もね」

「そのころにはファン・バステン家もにぎやかになってそうね」

「ああ、そういえばウィレムが帰ってくるなら、教えてあげなくちゃね。いいかげん」

暗い話題で落ち込みそうな時期なので、明るい話題は出来るだけ共有したいところなのだが、さすがに、ヤンとサスキアの婚約を発表しろと言うのは二人の承諾を得られそうになかった。だが、マルガレータなどは黙っているはずもないので、どうせ数日のうちにうわさになるだろう。

「難問が一つ片付いたわね」

「護国騎士団長婦人も大変ねえ。他にもかたづけれないといけない無骨な男や行き遅れそうな女がたくさんいることですし」

とにかく、護国騎士団員の既婚率の低さは大問題になっているのだ。保安兵団などと比べても極端で、その理由は、騎士団長たるウィレムが毎晩呑みに連れて行くから、まじめに女性と付き合う時間もないのでなどと、軍務府からいやみを言われることもある。

「ふむ。とりあえず・・・男はいくらでもいるから・・・次はカレンさんね」

「ええ。彼女こそ今回の立役者だわ。彼女がああいつてくれないと、絶対話は進まなかったんだから。だれかいないかしら・・・」

「未婚で年齢が近いとなると・・・護国騎士団でめぼしいのは、シモン君とディック・ファン・ブルームバーゲン・・・」

「ろくなのいないわね・・・」

カリスはちょっと酷いが、何せ『サスキア嬢防衛隊』の前隊長と現隊長である。とてもとてもカレンが気に入ると思えなかった。

「保安兵団だと・・・まあ、少し上だけどピーター・レイン捜査官とか・・・」

「私はあの人は部下のレベッカさんと実は怪しいと思うわ・・・」

「たしかにね……」

「中央医局で思いつくのは、年齢が近いのはフレデリック・ファン・ビーヘルだけど、あんなことした人はねえ……ちよっと器が小さすぎるわ……」

「本当はロビーさんは年齢的にもいいんですけど……」

「元盗賊よ？貴族の令嬢とって言うのは問題がありすぎるし……それに……これから治療が進んでも、伝染性吸血病患者は生殖能力を失うのよね……うーん……どうにかできれば一番いいけど、まだまだそこまでは難しいわ……」

二人は、いろいろと知り合いの男性を吟味してみたが、なかなか結論がでない。それほど真剣に話しているようにも見えないが。

「あ……いつそのこと……」

「誰？」

「カレンさんなら家柄もまあどうにか申し分ないし、ジェローン陛下下つてのはいかがかしら？」

「そ、それは……」

「まあ、陛下は何せ、今の世界中のどの君主よりも慎重に結婚相手を選ばないといけないから大変だけどね」

ジェローン・ルワーズはそろそろ結婚していい歳なのだが、結婚相手が誰かではなく、結婚することそのものが政治的な意味を持つ人物なのだ。誰と結婚しようと、フリップ、インテグラの両王家を刺激することになる。場合によっては戦争の原因になりかねない。十年前の戦争以降、両国においてはルワーズ公国の位置づけはあいまいなままなのである。事実上、完全独立の状態であっても、形式上は両国の廷臣であるからだ。

とにかく、ヤン・エッシャーとサスキア・ウテワールの婚約は、へ

ンドリック・ファン・オールトの死と言う凶報の持つ不吉さを打ち消してしまった。翌日には発表をしたわけでもないのに、護国騎士団本部に勤務する全員が知っていたのである。司令部の机にかわるがわる祝辞を述べにくる部下たちにヤンは赤面したし、『防衛隊』から、寄せ書きと花束を贈られたサスキアはマルガレータの影に隠れてしか行動できなくなってしまった。

実は問題になったのは、『サスキア嬢防衛隊』である。さすがに総司令官の婚約者を、『花を愛でる気持ちで見守ると言う精神風土』とやらを発揮して、デッサン書いて配ったり、『サスキア嬢を称える歌』を歌ったりするのは憚りがありすぎる。しかも、先日のパーティでディック・ファン・ブルームバーゲンがレベッカ・ローレンツ捜査官に逮捕(?)されて以来、なぜかサスキアを書かなくなっていた。

困ったのはシモンである。悪ふざけのネタがなくなったからだ。そこで考えたのが、騎士団内の新興勢力『カレン・ファン・ハルス様親衛隊』との合併である。が、先方の方では、極めて完成度の高いデッサンを書いて提供する、ディック・ファン・ブルームバーゲンのいない防衛隊にはまったく興味が無い。

結局シモンは悪ふざけのネタを失い、せいぜいピーテル・ブルーナをからかうぐらいしか、気晴らしになることもないという状況になってしまった。

正体

フリップ王国の国境地帯。と言っても、フリップ王国は広く、ルワーズ公国の二十倍の面積を持つ広大な領土の中では国境よりと言う程度で、既にケテル村とザーンの間の距離よりも長い道のり彼らは移動していた。

彼らとは、マウリッツ・スタンジエとカスペル・ファン・ハルスの二人である。二人は、最初にたどり着いた無人の村で、一台の馬車を手に入れた。ただし、この村だけでなく、途中で通った村々では人間だけでなく、馬も一頭も残っていなかったため、馬車を引いているのは三頭の驟馬である。

手綱を握っているのはカスペルだった。通常、ルワーズ公国の貴族の子弟は乗馬を習うが馬車の乗り方は知らない。カスペルは貴族の師弟でありながら型破りな若者で、庶民の子供たちと共に遊び、馬車の扱いもファン・ハルス家が経営する運輸業者の御者にせがんで教授されたものだった。

「しかし・・・人がいませんねえ・・・」

「それは予想していたけど、馬すら居なかったのは妙だね」

話し相手がお互いしか居ない二人は、そろそろ話題も尽きかけてきた。最初はヤン・エッシャーの話がいくらかでもあったのだが、そろそろネタもなくなってくる。それでもそれぐらいしか共通の話題と言っつのはあまり無い。

「どうなってますかねえ・・・姉さんとサスキアさん。三角関係になっちゃったのかなあ・・・」

「うーむ、ヤンはそういうことをはつきりするタイプではないからなあ。二人に言い寄られていることにすら気づかない可能性もあるね。まあ、サスキアもあんまり積極的にいける娘ではないけど、だからと言って、カレンさんが押し切れるかと言うと・・・まあ、無理だろうなあ・・・」

二人は、この時には既にヤンとサスキアが婚約したことも、カレンが自ら身を引いたことも知らない。

「カリス・・・怒っているかなあ・・・」

「はは、気になりますか？やっぱり」

「さすがに帰ってみたら、婚約解消とか言われたら・・・」

「へこみますよね」

「残念なような、独身の自由が継続してうれしいような・・・」

「・・・」

マウリッツはある意味では結婚前の最後の独身生活を満喫している状態なのだ。元々女遊びなどには縁の無いタイプだが、結婚自体が自由の敵と言う気もしていたので、カリスに会うまでは一度も考えたことがなかったのだ。ただ、お互い仕事を持つ身であり、仕事上でもパートナーとしてお互い頼りにできる存在であって、滅多にいないほど理想的な女性ではあった。これほど傑出した能力の持つ夫婦と言うのは、ルワーズ公国でも他にはファン・バステン夫妻だけであろう。

「ところで、カスペル君。ひよつとすると、うまくいけばヤンは今回のことが終わったら、サスキアをつれてケテル村に来る可能性がある。そうならなければ、そのときはカレンさんの可能性もあるね」

既に前者で状況は確定しているのだが、二人は知らないのはしかた

ない。

「そうなたら君はする？」

「そうですね．．．新婚夫婦の邪魔はしたくないですね．．．サスキアさんもエッシャー先生とケテル村に来ることにならなかつたら、同じことで困るでしょうね」

「私はかまわないと思ってたんだがね。カリスは新婚生活に妹は要らないと言って、やたらとヤンとの縁談をまとめようと躍起になっていたから．．．」

「どうしましようかね．．．近くに部屋でも借りて診療所に通うか．．．実家には帰りたくないんですよね．．．」

「アメルダムに来ないかい？田舎の診療所にいくら居ても、医者としての経験は十分にはならないし。その気があるなら、公国医学院に推薦してあげよう。うまくいけば、中央医局直轄の診療所かクリステル財団の総合診療所で研修も受けられる。カイパー博士がその気になれば、博士の手ほどきもつけられるし．．．」

「ほ、ほんとうですか？！お、お願いします」

実はこれも、既にヤンの方でも決めていることなのだが。

そんな、それほど楽しくも無い話をしながら二人は馬車にずっと揺られていた。

「よし、そろそろ御者を代わろう」

「いいですよ。疲れてませんし」

「いや、そろそろ君のメス使いの練習の時間だね」

「うっ．．．そうですね．．．」

マウリッツと御者を代わったカスペルは、荷物の中から筒状のものを取り出した。筒の横には小さな穴がいくつか開いており、そこに

糸が通されている。これはヤンがマウリッツの屋敷で研究室に入るときに行ったのと同じことをする、言うなればおもちゃである。

円筒の中にくつつかの糸を通し、他の糸には触れずに一番奥にある意図だけをメスで切る。カスペルは不器用な方ではないが、マウリッツの用意した問題を解くのはかなり苦戦していた。

「くそっ……うーん……こうやって……だめだ……じゃあ、こうして……ああ、切ってしまった……」

「練習練習！実際の手術の時に余計に内臓に傷をつけてしまったは大変だからね」

男同士の大して色気の無い会話はここで中断された。マウリッツは黙々と手綱を操り、カスペルはぶつぶつと言いながら、メスと円筒をいじっている。

突然、馬車の前に数名の男達が現れた。まだ日は高く、男達は薄着である。もうすぐ冬だと言つのにだ。そして、手にはそれぞれに農具や棒などを持っていた。吸血鬼ではありえない。

「降りろ！」

リーダー格と思われる男の声に、マウリッツはのん気に言った。

「ふーむ、野盗には見えないが……カスペル君、とりあえず、言うことを聞いてみよう」

「はい」

二人は言われたとおりに降りた。丸腰のまま。

「さて、どんな御用ですか？」

「用だと！貴様ら医者が妙なことを考えて、うちの子供から血を取ったりするから、具合悪くなっただんだ！」

「そうだっ！うちの上さんはそれで、起き上がれなくなった！」

「娘は弱って風邪を引いただけで死んじまった！」

男達は口々に罵る。

「医者と言うことはわかっているようですが、私はルワーズ公国から来たばかりです」

「うそつけっ！ルワーズからなんて入ってこれるかよ！ノールトの方で戦争があつたつて聞いたぞ！」

「ほう、そうですね。我々はステーン湖を船で渡ってきましたので……」

「うるせえっ！ごちゃごちゃいうな！ぶっ殺してやる！」

興奮して話し合いなど通じそうもない。マウリッツは他に服を持っていないのか、明らかに医者とわかる服装……つまり白衣を着たままで旅をしている。もう冬も近いのでコート代わりのつもりなのかもしれない。

「先生……これはちよつと埒があきませんよ。危なくなつたら馬車に飛び込んでくださいね」

「ええ、私はヤンみたいに武術なんて野蛮なことはしないただの医者だからね」

「野蛮なことはしないって、やたらと武器とか開発しているみたいですけど……おつと！」

突然、先頭の男が干草を集めるのに使うフォークで殴りかかってき

た。その瞬間、マウリッツは身軽に馬車に飛び乗り、カスペルは紙一重でフォークをかわして、左手で柄を掴む。

「ちっ、はなせ！」

「離せと言われて離す人はいませんよね。たぶん」

ドンッ！

カスペルの右手が男の胸を強く押した。思わぬ力で突き飛ばされる。フォークを見てカスペルは柄とフォークの先をつなぐ目釘が取れかけているのに気づいた。手早くそれを抜き、先をはずしてただの棒にする。

「話し合っても無駄みたいなんで、ちょっとだけ痛い目を見てもらいますよ。大丈夫。スタンジエ先生は名医だから、多少の怪我ならすぐに治してくれますから」

「応急処置はしますが、骨折とかされたら無理ですよ」

やたらとのん気な二人の様子が余計に男達を興奮させた。

「コノヤローッ！」

「やっちまえっ！」

それぞれに叫んで襲い掛かってくる。

カスペルは棒を回転させる。回転している棒を左右に振ると、男達の得物は絡め取られ、明後日の方向に飛んでく。槍などの棒状の武器を使う場合の最も基本的な防御法である。

「……っ！」

まだ十代にしか見えない、それもどちらかと言うと華奢な若造の武技に、素人でしかない男達は驚く。

その瞬間、カスペルは男達の中に飛び込んだ。まず、最初にフォークを奪った男のみぞおちに一撃、次に後ろから飛び掛ってきた男に振り向きもせずに棒を突き出し、顎に直撃させて昏倒させる。そのタイミングで左右同時に二人が襲ってきたが、身をかがめて攻撃をかわし、一人の股間に一撃。もう一人の足に棒を絡めて転倒させ、のど元に棒を突きつけた。ほとんど一瞬のことである。

「ヒューッ！なるほど。ヤンがほめるだけはある」

武術にはからつきしのマウリッツでもカスペルの手練はわかった。素人相手とは言え四人を相手に鮮やかなものである。

「さて、おとなしくしてもらえますか？話せばわかってもらえるはずです。私と先生はあなた方に害を加えている連中と敵対している者ですから。が、とりあえず、寝てしまった方々が起きるのを待ちましょうか。話を聞いてもらえますか？」

「う……あ……ああ……」

男はあいまいに頷いたが、既に抵抗の意思は無かった。

「まあ、気付けぐらいなら直ぐだ。怪我をさせずにまとめたところはたいしたものだよ」

マウリッツが馬車から降りてきて、一人一人を確認した。股間を打たれて悶絶している男は、鞆丸がつぶれてないことを確認して、無

事な男に腰の辺りを軽く叩かせる。顎に一撃を喰らった男は昏倒していたが、一時的なものだったので、背中から両肩のあたりにきつく力を入れると気が付いた。みぞおちに一撃を喰らった最初の男は胃液を吐き出していたが、こちらも程なくして、平常に戻る。

「私はマウリッツ・スタンジェ。ルワーズ公国で伝染性吸血病、おそらくあなた方は吸血鬼を何かの呪いか怪物のように考えておいででしょうが、公国では病気として扱います。私はその専門医です」

公国中央医局などと言っても、フリップ王国の一般の住人にわかるはずもない。

「伯爵の・・・手下の医者じゃないのか？」

リーダーの男が言う。

「伯爵とは誰です？」

「アズナブルル辺境伯だ」

「ほう・・・レオンス・ド・アズナブルルは十年前の戦争の責任を取って、所領であったこの辺りを召し上げられたように聞いてますが・・・」

レオンス・ド・アズナブルルは十年前の戦争におけるフリップ王国側の総大将を務めた人物であった。全軍の七割以上を失うと言う大惨事となったため、その責任をとって所領の大半を失ったのである。それ以降、ステーン湖畔からこのあたりまでの地域は、国王の直轄領、と言えば聞こえはいいが、事実上、支配者の居ない放置された無政府状態になっていたのだ。

「ほ、本当に知らないのか・・・一ヶ月以上前に、アズナブルル辺

境伯はここに帰ってきた。国王陛下からこの土地の支配権を返していただいたと言って……」

それに別の男が続ける。

「だが、変なんだ。伯爵の連れてきた兵士と医者みたいな格好をした連中が、最初は五日に一回のぐらい村にやってきて、村人全員から血を取っていった。最初は注射で少しずつだった……」

また別の男が続ける。

「そ、それが……半月ほど経ってから回数が頻繁になって、量も増えた。俺たちは大丈夫だが体の弱い子供や女たちはどんどん具合が悪くなっていった。体が悪いから辞めてくれと言っても聞いてくれないんだ……」

「なるほど……採血を頻繁に続ければ、確かに体がどんどん弱ります。風邪で亡くなったというのは本当にお気の毒ですが、ありえることです」

「先生……でも、どういうことでしょうか……」

カスペルが口を挟む。

「血液を集めるのももちろん吸血鬼を養うため。ペースが上がってきたのは、吸血鬼を増やしすぎたから。おそらく、血に飢えた者を増やして、ルワーズ公国側、ゼーラント州辺りを攻略するつもりだったのではないかな。それが、ヤンの策略でほとんど無人になってしまった。あわてて、フリップ王国側で必要な量を確保しようとしたために、無理をしたというところか……」

「そんな……」

それでは、ヤンのせいみたいじゃないかと思つたのだ。

「いや、カスペル君。物事には常に表と裏がある。そして、ヤンをしていることは別に悪いことではない。ルワーズ公国側の人民を守り、そして、先々吸血鬼の軍を滅ぼすことに繋がる布石なのだから……。ただ、彼らが気の毒なのも確か。やりきれない思いは私にもある……」

男達には二人の会話がほとんどわかつていなかった。どうやら吸血鬼のことも知らないらしい。単に意味もわからず血液を提供させられていたのだ。

「みなさん。残念ながら今すぐに私の力でどうにかできることではありません。できるだけ、お子さんや奥様には栄養のあるものを食べさせて、今は耐えてほしいとしか言えません。ですが、私と彼はこれから王都アキテーヌに向かいます。そして国王陛下のお耳にこのことを入れ、レオンス・ド・アズナブル辺境伯の横暴を訴えます。おそらく、彼は本当に国王陛下からこの土地を返還されたわけではないでしょう。反乱の門で討伐されるよう、必ず説得しますから、それまでどうかお待ちください」

「……先生……すまねえ……俺ら何にも知らないで……襲い掛かっちゃまって……」

男達は啜り泣きを始めた……

「いえ、こちらこそ痛い思いをさせて申し訳ありません。もう、立てますね。こんなことをしたとばれては大変でしょう？ 日のあるうちに帰りなさい。何も無かつたふりをしないと……」

トボトボと男達は帰っていった。

「なんだか・・・本当にやりきれないですね・・・」

「ええ。急ぐ必要がある。これはヤンのせいと言うより、私のせいだ。アキテーヌに早くつけば、ああいう苦しみを少しでも減らすことができる。さあ、カスペル君！急ごうっ！」

二人は馬車に飛び乗り、驟馬を急かしてその場を離れて行った。

ウィレム・ファン・バステンは憂鬱であった。長年自分と共に戦った部下を失ったと言うこともあるが、そのことが護国騎士団本部の仲間たちの心を沈めている可能性を考えてのことだった。護国騎士団の強さとは、『不謹慎な陽気さ』にある。それを作り上げたのはウィレム本人だが、自分が居ない状態でそれを維持できてるかどうか心もとなかったのだ。

護国騎士団本部にたどり着いたウィレムは、中央医局や保安兵団の人員も合流して、大所帯となった本庁に入った。ヤン・エッシャーの居所を通りすがりの医局の研究者と思しき娘に聞く。

「エッシャー先生でしたら、大広間の演壇に執務机を置いてお仕事されてます。ちょうど、大広間に開設されている司令部に行くところですので、ご案内しますね」

答えたのはマルガレータ・バレンツであるが、ウィレムとはお互いに初対面である。もちろん、護国騎士団本部は本来の彼の仕事場で、大広間と言われれば直ぐにたどりつけるが、案内してくれると言うのならついていこうと思ったようだ。

意外なことに、護国騎士団本部の雰囲気は暗くない。戦友の死という凶報があつても、騎士団員の士気は旺盛に見えた。むしろ、何か浮き立っている感じさえする。

「なにか、いいことでもあったのかね？前線では指揮官クラスに死者もでたはずだが・・・」

「はい。そのお知らせが来た時には、みんな一応に沈んでしまつて・・・エッシャー先生の叱咤で心を奮い立たせても、本部全体が悲壮感に包まれてました・・・」

「それが、どうしてこんな感じに？」

「それが・・・実は、ヤン・エッシャー先生がご婚約なさいまして、その知らせ一つで皆さんすっかり元氣を取り戻したんです。私の親友で先生の幼馴染のサスキア・ウテワールと・・・」

「！」

ウィレムは驚き、そして喜色を浮かべた！

「そうか！ヤンの野郎っ！このタイミングでか。あのグズが、こんなに早くなあ！」

マルガレータは総司令官を乱暴な口調であげつらうウィレムに軽い反感を覚えたが、大広間についたので何も言わずにいた。

大広間に入ると、相変わらずかわるがわるヤンの席には祝辞を述べる部下がくる。実際にはほとんどただの冷やかしのだが。

「これはこれは、ヤン・エッシャー殿、ご婚約されたそうで、三十近くになってようやく独身生活に終止符を打たれるのは何より。重畳重畳」

「あ、兄上！」

「え、エツシャー先生のお兄様・・・と言うことは、ウィレム・ファン・バステン將軍!?」

マルガレータは知らずに対応していたことにあせったが、そんなことはウィレムはまったく気にしていない。そこにシモンが現れた。仕事の話をする前に一度馬鹿話をするのもこの騎士団の特徴である。

「ファン・バステン將軍! 無念でございます! 將軍不在の間に結成されたサスキア嬢防衛隊! 僅か数日を持ちまして解散とあいなりました!」

「ふむ。悪ふざけのネタがなくなったのは惜しいが、他にいくらでも見つけようがある! 次を考えよう!」

スパーンツ!

突然、書類の束でウィレムは叩かれた。

「あんたか! こういう馬鹿なことさせているのはっ!」

シルヴィアである。

「あのなあ・・・戦場から帰還した亭主に挨拶より前に突っ込みれるってのはどうだ?」

「あんまり馬鹿なことばかり目の前で言われると、お腹の子供の胎教に悪いわ」

「え?」

「兄上、おめでとついでいます。」

今度は、次々とウィレムに向かって祝辞が述べられた。

「ファン・バステン將軍。おめでとうございます。」

そう述べたのはピーテルである。やや顔を紅潮させている。

「ほう、ブルーナ主任主計官！仕事も相変わらず完璧だが聞いているぞ……」

「え？」

「貴様！我が護国騎士団の伝統を何たるものと心得るか！恋人ができたなら、宴会の席で全員の前で紹介した上に、そこで接吻をかわしてさらに……」

スパパーンツ！！

「やめなさいって！そういうことやるから、騎士団員の既婚率がさがるのよ！」

「いや、これも……伝統で……」

「んな馬鹿な伝統を作ったのはあんたでしょうが！」

「で、誰なんだ？ピーテル・ブルーナ氏のお相手は？」

「あなたをつれてきた、そこのかわいらしいお嬢さんよ」

「えと、マルガレータ・バレンツです。ロビー・マルダー氏の治療チームリーダーをしております。」

マルガレータは自分で名乗り出た。いずれ結婚を考えているのだから、今のうちにピーテルの上司に顔を通しておくのは悪くない。

「ほう……これまたお似合いのお二人だ。では、直ぐ今晚にでも騎士団全員の前で……」

ゴンっ！

今度は椅子で殴られた。

「しつこいつての！いい加減父親になるんだから自覚持ちなさいっ
！」

司令部に笑いが溢れた。この夫婦漫才こそが護国騎士団最大の名物なのである。

「さて、話を始めさせてもらおう」

落ち着いたところで、ウィレムを交えて会議が始まった。

「まず、ファン・バステン將軍、急なご帰還の理由を教えてくださいませますか？」

兄のことだが改まって言う。

「不死鬼の軍將の身元についてだ。俺も気づいたことはあるが、まず、こちら側の調べについて聞きたい。まず、イエケリーヌという女の身元についてだ」

この質問にはピーターが答える。

「保安兵団ピーター・レイン捜査官であります。保安兵団では名前を伺って以降、あらゆる犯罪者の資料、貴族名簿、紳士録をあたりました。イエケリーヌ・エラスムスなる女性については、複数人該当者がおりますが、めぼしいのは一人……」

「何者だ？」

「前公国元帥フーゴー・ファン・ドースブルフ伯爵の私生児、本名イエケリーヌ・ファン・ドースブルフ。エラスムスは母親の姓です。伯がメイドに手をつけて生ませたとか……」
「どこにも似たような話はあるものだな……」

一瞬、ウィレムの言葉にヤンはいやな顔をした。

「しかし、それがどうして不死鬼になったのでしょうか？」

「どうやら、一年ほど前から……父親ともども行方不明です」

「!？」

「私生児ではありますが、ファン・ドースブルフ伯は既に奥方を亡くしておられます。イエケリーヌも伯の屋敷で育っていました。部門の誉れ高い家系ですから、女性とはいえ武術の訓練を受けていたものと思われます」

「ああ、確かに油断できないほどの腕だった」

腕組をして思い出す。ウィレムがこういふほどの腕前と言うのはなかなかいない。男でもめつたにいないのだ。

「そして、一年以上前から伯本人も含め、まったく姿を現していないのです」

「やはりか……」

「やはりとは？」

ヤンが聞き返す。それに答えたのは意外なことにカレルだった。

「確信はありませんでしたが……やはり、あの鎧の男はファン・ドースブルフ伯……」

「そうだ。気づいていたか……」

「確信できないためエツシャー先生にもお話しておりませんでした。」

ただ、声が伯のものに似ているとは感じていたので……」

フリーゴ・ファン・ドースブルフは十年前の戦争当時の公国元帥である。戦後、伝染性吸血病への対策に消極的であったことと、ファン・レオニー伯との政争に破れ、人望を失って退陣した人物である。しかし、もともと武断派の彼は、戦場にあつては勇猛で、戦術や戦略にも長けた有能な軍将だった。ウィレムやカレルなど、十年前から既に護国騎士団の中樞にいた者なら何度も面識はある。

「ファン・ドースブルフ伯は、十年前の戦争で両国軍どちらかへの参戦を主張されていた。そして戦後は……」

「吸血鬼を使って、フリッパ王国に進軍することを主張していた……」

「!?？」

ウィレムに続けたシルヴィアの台詞に他の全員が絶句した。

「一般的にはほとんど知られていないことだけだね。そのために、国境地域での流行をしばらく放置しようとする主張したのです。私と陛下で説得しましたが、掃討作戦を裁可せず、ウィレムが当時のファン・ピケ騎士団長の命令書を偽装して強引に作戦を決行したのです」「つまり……十年前の構想を実現するために、自ら不死鬼となつて、今度はルワーズ公国に仇なすつもりだと……」

青ざめた顔でシモンが言う。

「いや、ルワーズ公国に攻めることが目的ではないと思う。今聞いた伯の人なりからすれば、軍事力と言う手段が目的に摩り替わったタイプだ。医学研究と言う手段を目的化し、医者倫理観から外れる研究に没頭したファン・クラッペと同じように……」

やはり、青ざめた顔でヤンが言う。

「まあ、とにかく、不死鬼軍の将帥についてめぼしは付いたな。あとはもう一人、長身長髪の黒づくめで、シモンとやりあったと言う不死鬼の剣士だが・・・」

「將軍、エツシャー先生・・・一人心当たりがあるのです・・・」
「！」

シモンの台詞にまた全員が驚く。シモンはカレルと視線を合わせて、カレルが頷くのを確認してから話し始める。

「おそらく・・・男の名はヨハネス・ファン・ビューレン。十年前若くして、護国騎士団第一部隊副隊長だった男です」

「よ、ヨハネスがだと・・・しかしやつは・・・」

「ええ、ヨハネスは十年前の吸血鬼掃討戦の時、吸血鬼にのどを食い破られ、吸血鬼ごと断崖絶壁から身を投げて壮絶な戦死を遂げた。

・・・はずでした・・・未熟な私をかばって・・・」

「なぜ奴だと？」

シモンは一度、ため息をつき、顔を上げたから話し始める。

「不死鬼の剣技ですが、異常発達した筋力で単に振り回すだけでなく、通常の人間が使う剣技でもなく、効率的に異常発達した筋力を生かした独自のものでした。ただ、その太刀筋は・・・私自身がヨハネスから教えられたものとよく似ておりました」

「シモンさんは、そのヨハネス・ファン・ビューレンとどのような・・・」

質問したのはカレンである。武略のことには口を出さないようにし

ていたのだが、思わずきいてしまった。

「彼は、公国武塾で私の教官でした。師匠と言っている関係です。そして、私が武塾を出ると同時に、護国騎士団第一部隊、ファン・バステン將軍の部隊に配属され、私も見習いで入隊しました」

「ああ、シモンはよくヨハネスに懐いていたな。ヨハネスは若かったが、当時は間違いなく公国随一の剣士だった」

「吸血鬼掃討戦の中盤、山岳地帯での戦闘時、私はミスを犯しました。十数名の吸血鬼に囲まれ、死を覚悟しました。吸血鬼になるぐらいなら、その場で自殺をしようとしたとき……」

「ヨハネスが飛び込んできたのか……」

ヤンの口調は重い……普段おちゃらけているシモンの過去に驚いている。いや、あの馬鹿騒ぎやおちゃらけが彼のカモフラージュであることは知っていた。元々は堅苦しい人物なのも予想が付く。だが……

「その時のヨハネスの剣技はすさまじいものでした。筋力の異常発達した吸血鬼達を瞬く間に切り伏せます。正確に心臓を貫いていくのです。しかし、後方から攻撃があったからといって、吸血鬼は理性がありませんから、私への攻撃はやめません。私も必死に応戦しましたが、当時の私の力では歯が立たず、私の首筋に一人が噛み付いてきました……」

シモンは泣いてはいない。だが、涙は流していないが、心が泣いていることは誰にでもわかった。それでも、毅然として、顔を上げ、やや硬い表情で話を続ける。

「ヨハネスは私に噛み付こうとしていた吸血鬼の前に自分の腕を差し出し、代わりに噛み付かせ、そのまま吸血鬼を抱えて崖の中に飛

び降りたのです」

「つまり、あなたの命の恩人」

「ええ、彼は・・・私の身代わりに不死鬼となったのでしよう。彼を・・・彼を止めるのは・・・私しかおりません。エッシャー先生とファン・バステン将軍にお約束を賜りたい。ヨハネス・ファン・ビューレンと剣を交えるのは私であると言うことを！」

ヤンより先にファン・バステンがそれに答えた。

「ヨハネスの死、いや、不死鬼となつて生きていたわけだが、それは俺にも責任のあることだ。あいつは、一番優秀な部下だった・・・シモン、戦うのはお前に任せる。決して負けるなよ。あいつを・・・あいつを止めてくれ」

「シモンさん、私はそのヨハネスと言う男はよく知らない。だが、あなたにとつて大切で、そして、借りのある人間であると言うことはわかりました。彼のあの剣技、対抗できるとしたらあなただけでしよう。秘密の特訓はそのためですね？」

「ご存知でしたか・・・」

「ええ。彼と戦えるのはあなたただだ。ただ、それは私事です。あなたは既に護国騎士団第三部隊長。こちらの方もお願いします。おそらく、ヨハネスは既に十年も不死鬼として生きてきています。他にはこれほど長寿の不死鬼はいないかもしれない。ヨハネスのような過酷な生き方をせずとも、不死鬼が生きていけるようにすることが、私たちの仕事です。部隊長としてはこのことも念頭において協力ください」

「はっ！非才なる身全力を持ちまして！」

すさまじい覚悟が表情から読み取れた。だが、それにはやや不吉なおいも感じ取れる。ヤンはそれを見て、声を高めて続けた。

「ただし！死ぬことは許しません！必ず生きて戦い抜くのです！」
ここで一息置いて、立ち上がりさらに声を高めた。

「シモン・コールハース第三部隊長に命じる！第三部隊長として不死鬼軍討伐の第一線に立ち、敵の首領格の一人、ヨハネス・ファン・ビューレン打倒の責任者たることを！そして、必ず生きて、不死鬼達との戦いを後の世に伝える証人たれっ！」

物腰の柔らかいヤンが声を高めると、それは雷鳴のごとく響いた。
シモンは一度立ち上がり、ひざまずいて拜命の姿勢をとる。

「承知・・・いたしました・・・」

「ここまで露骨に指揮権を奪われるとむしろ痛快だな」

ウィレムが言う。厳粛になりすぎた雰囲気を修正しようと試みたのだ。

「いえ、兄上。私は国公陛下から『ファン・バステン將軍不在の間』
と言う条件で護国騎士団長代理の職についております」

「そのことだが・・・そのこともあって俺はこっちに来たんだ。明日、陛下に呼ばれている。お前と、シモン、カレルも一緒だ」

「えっ？こっちにはそんな話は・・・」

「来てないだろうな。あんまりおおっぴらにしたいくない事情があるらしい。たぶん、お前が喜ばない話だろうよ。ヤン」

「また特別辞令ですが・・・数日前に出たばかりなんですがね・・・」

「

翌朝、四人が参内すると、謁見室にはジェローン以外に、トーマス・

ファン・ピケ元帥だけがいた。ただ、ファン・ピケは本来いいるべきジェローンの隣ではなく、自分たちと同じ謁見者側の席にいる。

「多忙な中呼び立ててすまない。国境地帯での戦闘開始については聞いた。ヘンドリック隊長の死、誠に残念だ。彼を特進扱いとし、生前にさかのぼって將軍位を与える。」

「はっ！」

將軍は本来騎士団長および兵団長にあたらえられる称号だが、戦死後に名誉称号として与えられることもある。

「呼び立てしたのは他でもない。不死鬼軍のスポンサーについて、情報が入った」

「えっ？」

「とんでもないところからな。ファン・ピケ！説明せよ！」

国公と言えど、本来公式の場で臣下を呼び捨てにすることはない。ファン・ピケを呼ぶのなら「元帥」、または役職名の「軍務卿」と呼ぶのが正しいのだが、あえてジェローンは呼び捨てにしている。

「は、ははっ！二ヶ月ほど前、ファン・クラツペなる医師が私に接触してまいりました。私の妻が熱病にかかりまして、それを治療したのですが・・・」

「!？」

ヤンたちは驚いた。保安兵団と言えど、本来上官たる公国元帥のことまでは捜査に憚りがあったのだらう。それはわかるが、それにしてもファン・クラツペがファン・ピケと接触していたとは。

「彼の者は私に一つの提案をしてまいりました。ルワーズ公国軍を

増強するために、不死鬼の軍団を編成してはどうかと・・・そうすれば護国騎士団以上の戦闘力を持つ部隊を私の手で編成できるだろうと・・・それを断ると・・・国境の向こうにはルワーズ公国の吸血鬼軍隊をほしがる方が他にいと、ほのめかしておりました」

「なぜ、それをもっと早く報告しなかったのだ？いや、迷っていたのだな？ファン・バステン家に対抗できる切り札になるかもしれないと・・・」

「は・・・」

ウィレムもヤンも言葉が出なかった。

「まあ、最終的には良心が勝り、実際には手をつけなかった。奴らに協力していれば、極刑も免れ得ないところだが、それは許そう。

だが、そのことを黙っていたがために、奴らの策動を許した。その責任の取り方は自分で決めよ」

「こ、公国元帥の称号を返上し、軍務卿の地位を辞任いたしまする・・・」

おそらくは、謁見の前の時点でこのやり取りは決まっていたのだろう。ウィレム自身の手で追求させないためだ。ウィレムやヤンが謁見の間で上司ある軍務卿を弾劾することになどなれば、公国元帥の権威は失墜し、ファン・ピケ自身、死を選ばざるを得なくなるまで追い込まれてしまうかもしれない。

「宮廷書記官！特別辞令を發布する！」

「はっ！」

例によってあわただしく、辞令の書面が用意される。

「トーマス・ファン・ピケ伯爵の軍務卿、公国元帥の辞意を受け入

れる！」

ファン・ピケは頭をさげ、彫像のように動かない。

「護国騎士団長ウィレム・ファン・バステン將軍を臨時の軍務卿代理とし、公国元帥の称号を与える！」

軍務卿の人事については、国公だけで決められるものではない。だが、現役者の辞任と言うことなので、代理を指名する責任は国公にある。いずれ、落ち着いた後に全閣僚の了承をもって正式な軍務卿になることだろう。

「護国騎士団主任参謀カレル・パルケレンネを軍務府首席参事官に任命する！ファン・バステン元帥が不死鬼軍討伐に自ら出陣している間は、軍務府においてその代理を務め、後顧の憂いをなからしめよ！」

めまぐるしい人事の変転に目を回す思いだが、カレルは僅か数日でまた肩書きが変わった。

「護国騎士団長代理ヤン・ファン・バステンについては、本来ウィレム・ファン・バステンの不在の間の臨時代理との扱いであったが、この人事に関連して、当面の間騎士団長代理の職を続けてもらう！これは新たに辞令は必要ない。申し訳ないが、よろしく頼む。ことが終わるまでの間だ。」

後半はヤンの耳元にぼそぼそ言った。ヤンのことは実はよくわかっているジェローンなので、あえてこう言ったのだ。

「ファン・ピケ伯爵は下がっていい！」

「はっ！」

ファン・ピケはむしろさっぱりした様子で下がっていった。ウィレムにいつ公国元帥の職を奪われるかとビクビクする生活からやっと開放されたのである。決して無能ではないが、ウィレムを部下に持つには器量不足だったということだろう。

「さて、国境の向こうでルワーズ公国の吸血鬼軍……どう思う？」
「国境の向こうに居ながら『ルワーズ公国の』という言葉を使う場合には、お一人しかいらつしゃいません」

ヤンは多少躊躇しながらもはつきりと続けた。

「アルベルト・ルワーズ殿かと思われませう」

アルベルト・ルワーズはジェローンの甥にあたる。しかし、現在のルワーズ公国では国公の一族として認めていないため、『殿下』の尊号を使うことができない。

「だろうな……だが、フリップ王国がまたアルベルトを使ってルワーズへの支配権を主張しようなどと言うのは無理がある……奴の独断か……」

「そのあたりは、マウリッツ・スタンジェがそのうち報告をもたらすかと」

「ああ、そこはそれを待つしかないが……この後はどうする？」

本来、ここで発言すべきはウィレムである。今や名実共に公国軍の最高指揮官に就任したのだから当然のことなのだが、あえてウィレムはヤンの言葉をまつた。それだけ、ヤンの知略を信頼しているのだ。自分はヤンのいわれたとおりに動く操り人形でもいいと思つて

いるのだ。

「私が、前線に赴きます。国境地域では、おそらくノールトとケテル村が敵の拠点となることでしょう。しかし、彼らはそこを確保しても肝心の糧食、血液を確保できません。程なく、二箇所からザーンに進軍してくるものと思います」

「あえて、ファン・バステン元帥ではなく、君が行く理由は？」

「公国元帥自らが陣頭に立つ前に、護国騎士団長がまず前線に立つのが筋と言つものです」

「それはそうだが・・・」

実はヤンは兄と兄嫁のことを気遣っているのだ。兄嫁の懐妊中に兄に危険なことなどさせたくないのである。ウイレムはそのことを敏感に感じた。シモンとカレルもだ。そして、ジェローンもやや遅れてその推測にたどり着いた。

「エツシャー殿、あなたはご婚約されたと聞いた。結婚前の花嫁を未亡人にするなどということはあるまいな？」

「え！？な、なぜそれを・・・」

婚約したのはつい昨日。もちろん、宮廷に報告を入れるような話でもない。護国騎士団本部内ではあつという間に広がったが、それがここまでくるとは思われない。

「私の耳は地獄耳さ。その知らせ一つで、凶報に衝撃を受けた護国騎士団の士気が回復したと聞いている。それより、厳しい戦いであることは間違いない。それでもあえて元々軍人でもないあなたが前線にでるのか？」

「はっ！もちろん、死ぬ気などありません。勝つためです。国境地域は兄よりも私の方が詳しいですから。何より、本格的な戦いにな

れば、必ず兵士の中に伝染性吸血病に感染する者が現れます。即座に対応できる体制を作るためには私が前線に出るべきかと」

「戦場で吸血病患者を治療すると言つのか？」

「は！既にロビー・マルダー氏は治療チームリーダー、マルガレータ・バレンツ主任研究員の手により、だいぶ普通の生活を出来るようになってきております。いずれは、健常者と同様に働いて自活することも可能となるはず。前線での被害はまったくなくなしと言つわけにはいきません。しかし、そうして感染した兵士たちを治療することには戦略的な意味もございません」

「敵方の不死鬼達にも通常の生活が出来る可能性があることを知らしめると言うことか・・・前線にあつても、指揮官としてだけでなく、医師としても戦つと・・・」

「はっ！それが、私の戦いでございますれば」

ウイレムも、シモンも、カレルも始めて聞く考えであつた。いわれしてみれば確かにこの方法が一番、不死鬼達の離反を招くための動きに繋がる。軍人であるウイレム以下三名には出てこない考えであつた。

「ケテル村周辺での戦闘において、五名の兵士が感染し、自ら命を絶つた・・・そのようなことはもうさせたくありません」

「わかつた・・・前線はそなたに頼もう。医師たちも連れて行くといい。ファン・バステン元帥！よろしいか？」

「は！」

弟を危険な目にあわせることは気が引ける。しかし、自分には出来ないことをヤンはやろうとしているのである。これは自分の出る幕ではないのかもしれないと思つた。

謁見が終わり、護国騎士団本部の司令部で今回の人事の内容とヤン・エツシャーの出陣が知らされた。蜂の巣をつついたような騒ぎになる。

「え、エツシャー先生！先生は指揮官である前に医師であるはず！何もそんな危険なところに・・・」

「医師であるから、前線に赴くのです。兵士たちとそして、不幸にも不死鬼軍で戦うことになった吸血鬼や不死鬼達のためにです」

「でも、なにかあつたらどうするんです！サスキアは・・・」

猛反対しているのはカリスである。自分の婚約者も危険な目にあっているが、そうは言ってもあくまで医者としての仕事である。ヤンは軍の司令官として戦場に赴くのだ。医者としての義務があると言つても、司令官として、場合によっては部下を守るために自分の命をなげうたなければならない。

「・・・サスキアが・・・サスキアが待っているなら・・・私は必ず帰ってきます！」

多少の照れを見せながらはつきりとヤンは口にした。

「エツシャー先生・・・」

カリスは何も言えなくなった。

「ヤン・・・」

気づくと直ぐ近くにサスキアが立っていた。話を聞きつけてきたの

だ。直ぐ後ろにマルガレータもいる。

「サスキア。大丈夫だ。必ず帰ってくる」

「・・・ヤン・・・待ってるから・・・」

「ああ・・・」

誰も冷やかしたりはしなかった。サスキアの気丈さと、ヤンの決意の強さがに皆感じ入った。

「クリステル先生。中央医局は先生にお願いします。元々吸血病対策室以外は各部署長の判断で動いていますか・・・」

「はい。承知しました。ロビー氏の治療に進展があれば随時連絡します」

「お願いします」

「護国騎士団本部についてはシモン隊長に・・・」

「エッシャー先生！私もザーン参ります！」

シモンが声を張り上げた。

「私の任務は第三部隊長だけではありません。ケテル村を出て以降、あなたの命をお守りすると言う命令に変更はなかったはず」

「しかし、それでは護国騎士団本部は・・・」

「それは俺が見る。軍務府の方はカレルがいるから大丈夫だ。シモン！任せたぞ！」

ウィレムはヤンと自分が同じところにいるわけには行かないことをわかっている。ヤンが前線に出るなら自分は後方に、後方にいるなら自分は前線に出るべきなのだ。一方でシモンのことを信頼していた。ヨハネス・ファン・ビューレンのことも含め、前線に出るべきなのはこの若い二人なのだろう。ヤンの身边を任せてもいいのはこ

と男だと考えた。何より、前線にはヨハネスが現れる可能性もあるのだ。

「第三部隊の半数五百を連れて行け。アメルダムにはそれほど戦力を置いておいても意味がない。だが、それ以上はザーンの負担になるだろう」

「はい。そうさせてもらいます。場合によってはザーンに入城する前に一戦することになるかもしれません。明後日、出立します」

ヤンの言葉に皆、頷かざるを得なかった。本来軍将ではないヤンを矢面に立たせることに、護国騎士団員には多少の抵抗があった。だが、この男が前線に立たねばならない理由も理解している。

「ふう……決めてしまったんならしかたないわね。明日は壮行会をしましょう。さ、さっさと準備を終わらせるのよっ！」

シルヴィアの一声が雰囲気明るくした。涙に濡れた出陣は護国騎士団には似合わない。

出撃前

護国騎士団長代理ヤン・ファン・バステンことヤン・エッシャーが自らの出陣を決めた翌日、昼の間は大急ぎで出陣の準備が行われた。

護国騎士団第三部隊のうち半数の五百人は、シモン・コールハース隊長の下で、対吸血鬼装備を用意する。また、伝染性吸血病対策室の生産部で大量に用意された、筋力の異常発達を抑える薬物『アンステロド』、吸血鬼の段階で脳神経の破壊を抑え理性と思考を残す『不死鬼化剤』、吸血鬼の人口食料『牛血粉』、そしてマルガレータ・バレンツ主任研究員の開発した日光による皮膚の破壊を抑える『ゼリーオイル』も輸送されることとなった。

公国中央医局から選ばれた従軍医師たちは、軍医として経験が豊富な者ばかりである。伝染性吸血病患者の治療経験がある者はカイパー派の医師の三人と、伝染性吸血病対策室に所属する少数しかない。対策室の医師はロビー・マルダーの治療をケーススタディにして、より完全な治療法を模索している最中なので、専門的な治療の知識よりも戦場に慣れた者を選ぶことにしたのである。

総勢、五百五十名。うち五百名が第三部隊の騎士たちで、すべて騎兵。三十名が輸送部隊で、これは保安兵団から要員が選ばれた。そして、残り二十名が従軍医師たちである。

派遣部隊の総司令官はヤン・ファン・バステン護国騎士団長代理であり、第三部隊長シモン・コールハースが副将を務める。僅かな人数ではあるが、間違いなく護国騎士団でも最精鋭の五百人である。五百人の騎士一人一人が精鋭というわけではない。騎士の質で言えば、護国騎士団の各隊は平均化されている。ヤン・ファン・バステ

ンとシモン・コールハースという傑出した二人の指揮官が彼らを最
強足らしめるはずなのだ。

出陣の前夜、護国騎士団本部ではささやかながら壮行会が開かれた。
わずか数日前に、大パーティを催したばかりなので、護国騎士団に
は珍しくつつましい宴会となった。五百人以上の出撃部隊が一箇所
に集まってではなく、一時金が配布され、個別に共にすごしたい者
と過ごす様にとの通達がでた。戦友どおしで街に繰り出す者もいれ
ば、家族との時間を過ごす者もいる。あぶれた連中百名あまりのた
めに、シルヴィアは牡鹿亭を貸しきったが、幹部たちは護国騎士団
本部の応接室で食事を共にすることにした。

「今日の料理の半分は、マルガレータが用意したそうよ。ああ、大
丈夫。ちゃんとサスキアが手ほどきしているから」

「ク、クリステル先生！今日はすごいがんばったんですよっ！」

「・・・塩と砂糖間違えるのだけはやめてほしかったな・・・」

「サスキア！ちよつと婚約したら急に毒舌になったんじゃない？な
に？余裕でもでてきたの？」

「そ、そんなことないわよ・・・」

「まあ、まあ。婚約中の女があんまり不機嫌だと未来のどんな様に
愛想尽かされちゃうわよ」

「お姉さまが言うのはどうかと思いますわ」

「わ、私は先生にそこまで言えない・・・」

カリスはこめかみに青筋を立てているが、それ以上は何もいわなか
った。サスキアは機嫌が良くなると、若干言葉がきつくなる。ただ、
今のは多少意識してのことかもしれない。未来の夫となる男が、医

師とは言え過酷な生き方を選びがちであることはよくわかっていた。戦場に送り出す側の女の務めというものを、シルヴィアを見てサスキアはよく学んでいた。

「いいですね・・・エッシャー先生・・・戦場に向かうにあたって・・・俺も一度ぐらいは女性に見送られたいなあ・・・」

情けない声を出すのはシモンである。『サスキア嬢防衛隊』は解散したが、『カレン・ファン・ハルス様親衛隊』に入隊する気もなく、目下、悪ふざけのネタを持っていない。このまま戦場に向かうので、どうやって戦場で疲れたときにそれを吹き飛ばせばいいのかを少々悩んでいるようだった。と言っても、この男がこうした馬鹿騒ぎをするようになったのは、この半月程度、ヤン・エッシャーと行動を共にするようになってからである。ヤンが妙に生真面目な男なので、代わりに騒いでやっていると言うところだった。

ウィレムはそういうシモンのことをよくわかっている。そして、胸のうちでは賞賛していた。過酷な戦いを目の前にして、周囲を明るくするために自ら馬鹿をやる男こそ、本当の勇者であると、この公国元帥になりたての男は本気で考え、自らも実践しているのだ。

「シモンさんって、そういう女性は過去にもいらっしやらなかったんですか？」

そう、カレンが訊いたのを女性たちは少し驚いた。この上品な娘は汗臭い男は苦手と公言しているし、何よりそういう男が似合わない。シモンなどに興味があるはずもないが、ただの気まぐれなのだろうと皆考えた。だが、落ち着いて考えてみれば、シルヴィアとウィレムの組み合わせも、結婚前にはありえないように見えたことだろう。

「ま、シモン君は長年、自分の恋人は剣って言う・・・変態だったのよ」

「あら、そういう異常性欲というのもあるのですね。世の中にはいろんな殿方がいらっしやること」

「何でも変態になげないでいただきたいのですが・・・」

ヤンと会って以降、すっかり変態と言う二つ名が定着してしまっている。

応接室に集まったのは、ヤン、シモン、ウイレム、シルヴィア、カリス、サスキア、カレン、マルガレータ、ピーテルの九人である。カレルは遠慮したのか、牡鹿亭の方に行っており、保安兵団のピーター・レインとレベッカ・ローレンツはロビーと共に中庭で酒を飲んでるようであった。最近ロビーは機会があれば外の空気にあたるようにしている。ピーターはそれに豆に付き合っただけでやっているのだが、そろそろ『男色ではないのか?』と言ううわさが流れ出したため、レベッカにも付き合わせたらしい。

ささやかな宴は、それほど大騒ぎにはならず、楽しげな笑い声が時おり聞こえてくるぐらいの、アットホームなものであった。最近すっかり酒癖が悪くなったカリスも、痛飲すると暴れだすウイレムも、今日は控えめであった。しいて言うなら、サスキアの酒のペースが若干いつもより速い。気づくと、サスキアはテーブルに突っ伏して眠ってしまった。

「あら・・・珍しいわね。サスキアが・・・エッシャー先生。未来の奥様をお部屋までお連れいただけないかしら? ああ、大丈夫、除いたり隣の部屋で聞き耳立てたりしないから、お好きにしてよるしいわよ・・・ぬふふ・・・」

すっかり人品が下がったと言われるカリスが言う。控えめにしているとは言え、多少なりとも酒が入れば、この女医の発言は若干下品になる。

「カリス・・・婚約者が長期不在だからって欲求不満が表面に出てくるのは見苦しくてよ・・・女として」

「そ、そこまでおっしゃらなくても・・・奥様はいいわねえ。いとしの旦那様が帰ってきてくださって」

「いいえ、これからお腹の中の子を育てないといけないのに、もう一人大きくてきかん坊の子供が帰ってきたので、結構大変ですよ」

「そんなにかわいくないでしょう。義姉上」

ヤンは笑いながら、サスキアを両手で抱えて部屋をでた。

「あの二人・・・あれだけの照れ屋が婚約しただけでずいぶんと・・・」

「逆に人に見られるのが快感になってたりして・・・」

「それでは・・・ロビー氏にお借りしたこれで・・・」

シモンが先日ロビーが使った盗聴器を懐から取り出す。

パシッ！

シルヴィアが扇子で叩いた。ただし、それほど怒っていない。軽くである。

「いい加減、静かに二人にしてあげなさいよ」

「冗談ですよ。これはまた別の機会に・・・」

「おい・・・」

「サスキア・・・ごめん・・・」
「どうして謝るの？」

応接室からサスキアとマルガレータが寝泊りしている寢室は程近い廊下をまっすぐ進んだだけ、三つとなりの部屋である。ヤンはサスキアを抱き上げたまま歩いていた。この二人がこんな形でいることはめったにないのだが、誰も見てはいなかった。

ヤンに抱き上げられ、首にしがみついたまま、サスキアは話していた。実はそれほど酔ってははいない。婚約前には考えられないようなことだが、ヤンと二人になるための芝居だった。

「ヤン・・・わかってるから・・・私はマルガレータとピーテルさんみたいにならずと一緒に居たわけじゃないし、お姉さまとマウリッツ様みたいにお仕事で対等にできるわけじゃないけど・・・ヤンは・・・変わってないから・・・わかってる・・・」

サスキアは泣いている。涙を見せないために首にしがみついているのだ。ヤンが戦場に行くことは、ウイレムやシモンとはまったく意味が違う。ヤンは単に戦闘の指揮を執るだけでなく、戦場で吸血鬼化する者を救おうと考えているのだ。それは、自分の身を守るために敵を倒すのではなく、自分を殺そうとするかも知れない相手を救おうと言っていることである。

「必ず生きて帰ってくるから、プロポーズしたんでしょ？」

「ああ・・・必ず・・・君が待っているなら・・・必ず・・・」

二人はサスキアの部屋に着いていた。ベッドに腰掛けてから二人とも何も言わなかった。ただただ、ずっとお互いを見つめ合っているだけだった。

応接室の方は最高潮だった。ヤンとサスキアがいなくなると、結局いつものドンちゃん騒ぎになっていた。ウィレムはさすがに暴れるまで呑まないが、カリスはマルガレータに絡み始めていた。だが、カリスもシルヴィアもこの部屋の中で起こっている異常には気づいている。

カレンのシモンを見る目がおかしいのだ。楽しげに談笑しているかと思えば、突然ポーっとした表情で見つめていることがある。シルヴィアとカリスは時おりカスペルがよこす手紙にあった言葉を思い出していた。

『姉はとても惚れっぽいので・・・』

そうあった。だからヤンに惚れているようでも、それはたとえ本気であっても、振られたからと言って長く引きずることもないという話だったのだ。

『何もシモン君なんか・・・』

『いや、でも、まあ、悪いことではないのかも・・・』

『問題はシモン君がどうするかよね・・・』

年長の女性二人はぼそぼそと小声で話す。盛り上がっているので、周りには聞こえない。

「あの・・・シモンさん。こんなこと聞いていいのか、わからないのですけれど・・・例のヨハネスと言う方に出くわしたらどうなさるんですか？」

急に場違いな話を始めたのは、当のカレンである。馬鹿話で盛り上がっていたシモンもこの話題になると急に真剣な顔つきになった。

「会えば・・・おそらく戦うしかありません。なぜ彼が不死鬼軍に身を投じたのかはわかりませんが、ドースブルフ伯やそのご令嬢と違い、彼は自然発生した不死鬼です。しかも、それから十年以上生きています。場合によっては始めにファン・クラツペと組んで動き出したのは彼かもしれない。これはエツシャー先生も同意見でした。そうであれば・・・」

「そうであれば？」

「何かよほどの理由があつてやっていることだと思えます。説得は無益でしょう。言葉ではなく、剣でしか、彼とはもう語り合えません」

「あえて・・・そんなお辛い役目を・・・？」

「はい。他の者に譲ることは出来ないことです。私のために彼は不死鬼となった。彼が不死鬼であり続け、戦い続けると言うのなら、終止符を打つのは私の役目です」

シモンも真剣に答えた。他の者が聞いてきたならこれほど真剣に答えただろうか？

「私・・・何も出来ませんが・・・お祈りいたしますわ。貴方が彼に勝つことではなく、戦いがあつても、それがあなたの未来を明るくするものであることを・・・」

「カレンさん・・・」

他の者がいるにもかかわらず、既に二人の世界に入ってしまった。一方で、何か色濃いめいたものとは違う雰囲気は二人の間にはあった。二人は本当に真剣であった。

「実は・・・私・・・十年前に父を亡くしております。伝染性吸血病で・・・」

「！」

部屋にいる全員が驚いた。だが、考えてみれば別におかしな話ではない。ケテル村はドルテレヒト州にある。戦場からは少し離れているが、大量発生した吸血鬼はケテル村周辺まで進出していた時期がある。ファン・ハルス家は東部の名門ではあるが、アメルダムでは必ずしも名は知れていない。カレンの父については、誰も知らなかった。

「父は・・・皆さんのおっしゃる不死鬼でした。屋敷まで侵入してきた吸血鬼と戦い、私の目の前で喉に・・・」

カレンは少し酔ってもいるのかもしれない。先日、サスキアを後押ししたときは、幾分違った涙を流している。涙の色さえ違うように思えた。深い悲しみが溶かし込まれているかのようである。

「父に噛み付いた吸血鬼は兄の剣で心臓を突き刺され、絶命しました。父は、正気を保っていました。でも、どうしていいかわからなかった・・・」

誰も何も言えなかった。カレンの話は現在となっては生々しすぎた。これから同じことがいくつもおこるかもしれないのだ。

「父もわかりませんでした。今のエツシャー先生のような方が近くにいたわけではありませんし、何より、伝染性吸血病が病とも思われていなかったころです。父は自分はのろわれたと言い、血の飢えを感じ始めた時、自らの命を絶ちました……」

「カレンさん……」

「私は、そのヨハネスと言う方がどのような方かは存じません。どうやって十年を生き延びたのか、それもわかりませんが、彼が十年も生きられるなら、本当は……父にも生きてほしかった……でも……もう、取り戻せないことなのもわかっています」

全員がカレンの話を聞き入っていた。カレンがヤンに惚れた理由もこれかもしれない。ヤンは自分を捨ててでも、誰かを救いたいと考える男だ。サスキアがいなければ、今回の出陣はまさしく死を覚悟してのものとなったろう。そして、何よりも戦場で吸血鬼に血を吸われた兵士たちが自殺したことがヤンを最前線に向かわせたのである。

「父は勇敢な人でした。でも、一つだけ……許せないのですわ。自ら命を絶つたことが……生きていてほしかった……そのためなら、私の血を啜ってでも生きていてほしかった……」

カレンはもう顔を上げることはできていなかった。顔にハンカチをあてたまま、テーブルに突っ伏したまま話している。

「シモンさん、あなたの大切な方は……生きておられたのですね……でも、その方と……あなたは……」

「カレンさん……」

シモンは相当呑んでいたのだが、既に酔いを印象付けるものは顔に出てはいない。

「ご理解いただけないかもしれない。私はこれから・・・ヨハネスと殺し合いをするかもしれない。私にとって、彼は兄のような存在でした。それは、私にとって超えねばいけない壁と言うことでもあります。結果はわかりません。どちらか、あるいは両方の死かもしれないし、共に生きる道もあるのかもしれない・・・でも、戦いは避けられないのです。私は・・・彼と戦わなければ、先には進めない・・・」

「殿方のお考えは私にはよくわかりません・・・ただ、貴方が私と同じような・・・いえ・・・私以上の辛い思いを今もされているのだと思つて・・・余計なことを申し上げてしまいました」

カレンは顔を上げて、涙が頬をつたうままに笑顔を見せた。

「いえ。ありがとうございます。今一度、自分の気持ちを確認できました。私は彼と戦います。カレンさんのお父上は、あなたを守るために死をお選びになった・・・それを私は良いとも悪いとも言えません。あなたをこれだけ苦しめている過去なのですから。私には、機会が与えられている。もう一度、過去に向き合う機会です。贅沢なことかもしれませんが・・・」

おちゃらけてごまかしていた、シモンの気持ちをカレンがもつとも敏感に感じていたのだった。それは、自身の過去の体験が、シモンの隠していたものに感応したからであろう。二人の間には、まだ共感と言えるものしかなかったが、それでも、シモンが始めて女性と気持ちを通わせた瞬間だった。

「ロビー・・・何を考えているんだ？」

「なんのことだい？旦那・・・」

夜、そろそろ外で酒を呑むのには寒い季節が近づいている。ロビーとピーターはそれでも外を選んでいた。ロビーは外の風にあたれることが、自分が人間であることを感じさせてくれるという。不死鬼となった自分がどうにか人間らしくいれるのは、ヤンやマルグレータを初めとする多くの人々のおかげではあるが、それでも、時おり妙に不安になるのだ。自分は人間なんだろうかと・・・。

「あの、エリートの若造に何か頼んでいただろ？」

「ああ・・・なに、他人の世話になるだけってのが気が引けるだけさ」

「だから何をしようとしている？」

「ま、何も無いに越したことはないが、もし、俺が世話になっっている連中に何かあるなら、その時は恩返しのお機嫌だと思っただけだ・・・これ以上は何もいっつもりはないね」

「そうか・・・強情な奴だな・・・」

二人の男の会話をレベツカはただ聞いていた。男同士にしかわからないこともあるのだと言うことを、女性捜査官は知っていた。

翌朝、早い時間にザーンへの増援部隊は出発した。既にザーンには二十八万の民衆と、三千の軍勢が収容されている。そこに五百と言う人数は微々たるものかもしれない。だが、この五百が不死鬼との戦争を実際に左右することになるのだった。

ザーン防衛戦

ドルテレヒト州都ザーン。現在のザーンは都市として成立して以来の歴史の中で空前の人口を抱えている。国境二州の全人口を一都市に集めたのだから当然である。ただし、一部はアメルダムや西側のより安全な地域に疎開している。それでも二十五万という人口がこの街に集まったことなど今までは一度もない。州都とはいえ、人口が希薄な東部の国境地帯なのである。

ザーンは州都であるため、地方官として行政に責任を持つ州卿がいる。今はゼーラント州の州卿もザーンにいる。また、城塞都市であるので、都市の行政を執り行う都市卿もいる。さらに、ファン・ハルス家を典型とする地方領主も周辺から集まっていた。

彼らを守るのが護国騎士団第一、第二部隊を中心に、城兵や保安兵団の戦闘部隊、自治領主の私兵などを集めて編成された五千人ほどの軍隊である。彼らは自分たちを称して『ザーン防衛軍』と呼んでいる。様々な組織に所属する者の寄せ集めであるため、そうした固有名詞を要することで、団結を計ろうとしたのだ。

こうしたことをきめ細かく考える点において、護国騎士団の中でもレム・ファン・リートフェルトに並ぶ者はいない。せいぜい、戦士や将帥としては落第生で、経済に関する知識とセンスが抜群、きわめて高い事務処理能力を持つ、主任主計官ピーテル・ブルーナか、つい最近まで護国騎士団長婦人であったシルヴィア・ファン・バステンぐらいであろう。

本来、ザーンには今一人、第二部隊長ヘンドリック・ファン・オールトがファン・リートフェルトと責任を分かち合うはずなのだが、

先日のケテル村での戦闘で戦死している。その結果を一番現実の問題として受け止めることになったのが、レム・ファン・リートフェルトとだった。戦友の死を嘆いている余裕などまったくない。

レム・ファン・リートフェルトはとにかく多忙であった。住民や避難民の管理などは州卿が主に担う仕事である。護国騎士団第一部隊長である彼の仕事は、来るべき吸血鬼との戦に備えることであり、さらに、住民の中から若者を中心として、義勇軍を編成したいと騒ぐ者をなだめることであった。素人の義勇軍が参加して、役に立つほど吸血鬼との戦は簡単ではない。レムはまず始めに、従軍経験の無い者の参加を禁止することで、いきなり高いハードルを示した。

だが、義勇兵志願者はその程度のことではあきらめない。実際には、彼らを説得したり、あるいは編成したりする作業自体が重い負担であり、護国騎士団を中心とするザーン防衛軍の活動を阻害しているとも言える状態なのだ。

そこに救いの手を差し伸べたものがある。義勇軍は、義勇軍として、正規軍とは別に編成し、編成が終わってから、ザーン防衛軍の指揮下に入れば良い、編成の作業は自分がやろうと名乗り出た人物が現れたのだ。ケテル村を中心とするステーン湖畔の国境地域にささやかな自治領を持つ公国東部の名門ファン・ハルス家の当主ジェラルド・ファン・ハルスである。

ジェラルド・ファン・ハルスはカレンとカスペルの兄であり、十年前の吸血鬼掃討戦の際には、ウイレム・ファン・バステンの強引な出撃が始まるまでの間、村の若者たちを組織して、すでに数万の規模に膨らんでいた吸血鬼たちと戦った経験もある。

「軍隊が住民のこうしたわがままによって、手を煩わされるとい

のはあまり意味はありません。事務的な作業は私が担当して、編成作業を請け負います。まあ、簡単なことではありませんので、相応な時間がかかるでしょうが、そうだとしたら、逆に無謀な出撃などさせずに済ませることができる可能性もありますな。この作業自体はそれほどまじめにする気もありませんが、必要なことがあったら他にも言っってください」

ファン・ハルス家は名門で爵位としては伯爵位、ステーン湖の水産物によって巨額の資産を築き上げている。貴族文化そのものが、女性の解放、公職における貴族優遇の減少、能力主義などによって失われていく過程にあるアメルダムの貴族たちと違い、昔ながらの格式を維持し、伝統的な貴族教育を受け、それでいて、気さくで親しみやすい人柄がこの一族の特徴であった。

「ファン・ハルス伯、誠にありがとうございます」

「いえいえ。レム隊長には集中して吸血鬼と戦っていただきたいのです。もちろん、出来ることがあれば、他にも協力はさせていただきます」

「ありがとうございます」

ジェラルドの提案により、とりあえず、レムはケテル村かノールトから吸血鬼軍が到来した時の対策に集中することができた。そして、それは、レムのアイデアによって、ザーンを難攻不落の城にするという結果を生む。攻城／籠城戦は力と力のぶつかり合いというよりは、知恵比べの側面が強い。護国騎士団中、攻城と籠城についてもっとも深く研究しているのもレム・ファン・リートフェルトであった。『戦う哲学者』はまるで『戦う建築士』になって、さまざま仕掛けを考案して、ザーンの城壁を難攻不落のものとする作業に集中していた。

ジェラルドがこうして、ザーン防衛軍の義勇部隊の編成をはじめたのは、アメルダムからヤンを司令官とする増援部隊が出立した前日で、保安兵団と騎士団長親衛隊による大規模な増援部隊が到着した翌日であった。その次の日、ヤンを主将とする部隊が到着する予定の前日、ケテル村方面から吸血鬼軍が現れ、ザーンを包囲しはじめた。

「各隊！予定通りの配置につけっ！アメルダムからの増援部隊も現れる！ファン・バステン將軍の弟君だ！公国一の知恵者がこちらに向かつておるぞ。一日守ればこっちの勝利は確実だ！」

レムは冷静沈着が持ち味の男だが、軍將の素質として、兵士たちの士気を高めることも十分にこなせた。ヤンがいなければウイレムの昇進後、護国騎士団長の座にもっとも近いのがこの男なのである。

義勇兵隊の編成作業は始まったばかりで、まだまだ進んでいないが、護国騎士団第一、第二部隊、親衛隊、保安兵団などの部隊はすでにレムの検討していた基本戦術に従い城壁の各所に配置されている。吸血鬼相手に打って出る必要はまったくなかった。以前ヤンが述べたとおり、吸血鬼の軍隊は野戦ではある程度の力を発揮するが、籠城戦ではそれほど有利にはならない。用兵に融通が利かない吸血鬼では、知恵比べとなる攻城はきわめてやりにくいものなのだ。まして、レム・ファン・リートフェルトにとっては、そのような攻城軍を手玉に取ることなのだ、見戯に等しいことであった。

「ファン・リートフェルト隊長！吸血鬼軍を率いているのは例の女不死鬼と思われます！フレイルを振るう馬上の女が見えました！その数三千！」

「なるほど・・・ファン・バステン將軍はかなりの使い手だったと

おっしやってた。軍将としてはどうかな・・・？」

偵察担当者の報告にレムは考えた。ヘンドリックが殺されたときの状況からすると、女不死鬼イエケリーヌ・エラスムスは、今一人、ウィレムがフーゴー・ファン・ドースブルフではないかと疑っている、鎧の不死鬼の指示で動いている。彼女自身も将才を持ち合わせているのであろうが、さて、どのように吸血鬼を使ってくるものだろうか。

三千の吸血鬼たちは城壁を取り囲んだ。ザーンの城壁で囲まれている領域はきわめて広い。三千程度では完全に取り囲むことなどは不可能で、三方向から千人程度の部隊が攻め込んで来たに過ぎなかった。

「東門！吸血鬼が門扉を破壊しました！」

「そうか、掛かったな。予定通りやってやれ！」

東門にはイエケリーヌがいた。攻城において吸血鬼の有利な点があるとなれば、攻城兵器などがなくても、吸血鬼自身の発達した筋力で、門扉や城壁を破壊できることにある。イエケリーヌは特に体格のよい吸血鬼を選び出し、城壁に向かって走らせた。

本来、ヤンは一人の不死鬼が指揮可能な吸血鬼の数を百人程度と考えていた。そうであれば、このザーン攻囲軍には三十人程度の不死鬼を必要とする。だが、不死鬼の血液を直接投与することにより、確実に不死鬼を生み出すことのできる彼らも、軍将となりえる不死鬼を増やすことには手を焼いていた。不死鬼には自由意志があるので、当然、こちらの言うことを聞いてくれるとは限らない。

自分から志願する者はまずいないのであるから、だまし討ちにして

感染させることになる。そうならば、自分が不死鬼になったことに気付いた者の多くは、その場で自殺を遂げるか、非協力的な態度を取るかのどちらかだった。イエケリーヌの下にも不死鬼の将は二人しかいない。それも軍事面に詳しいわけでもない二人だった。血液を安定供給されて生き残るために仕方なくしたがっているのだ。

ただし、ヤンの予想と違うのは、吸血鬼に言うことを聞かせる方法というのを、ファン・クラッペが研究していたことである。これは吸血鬼にしか効かない催眠術のようなもので、ある種の条件付けを行って、凶暴な状態から、おとなしい状態に移行させ、ある程度従順に師事に従わせることもできた。また、凶暴な状態であっても、彼らを誘導するぐらいのことは出来るようになっていた。

イエケリーヌの発した巨漢の吸血鬼たちは、地響きが聞こえてきそうな勢いで扉に迫り、体当たりを食らわせた。さすがに一度では巨大な扉を破壊することは出来ない。上から瀉血矢やラッパの音が降り注いでいるが、フルプレートの鎧と耳栓がその影響力を低下させていた。

数度の吸血鬼の体当たりにより、東門の扉は破壊された。破壊された扉の向こうに吸血鬼たちが突進する。

吸血鬼たちは血の飢えから、本能の求めるままに人間を求めて扉の無効に殺到した。不死鬼と違い、彼らにはすでに言語を操る能力すらない。獣とまったく変わらない程度の知能しか持ち合わせていないのだ。ファン・クラッペの開発した特殊な催眠術で、ある程度の行動の制御は受け付けるようになったが、それでも戦闘中などに事細かな指示を実行することはできない。

このときも吸血鬼たちは指示を受けてではなく、ただ、前方の扉が破壊されたので、そこに殺到したのである。イエケリーももそれだけで良いと考えていた。

イエケリー又の武技はファン・ドースブルフ伯自らが仕込んだもので、不死鬼となる以前から、かなりの腕前に達していた。軍将として、戦術や戦略なども手ほどきも受けているが、こちらは、武技ほどには上達していない。何より、吸血鬼の軍を率いたことのある者など、他にはいないのである。

突然、突入した大門の辺りで大きな音がなった。すべての吸血鬼は耳栓をつけているが、それでも、周囲にいた吸血鬼は苦痛を感じ、聴覚と平衡感覚を失ってバタバタと倒れている。

レム・ファン・リートフェルト力作の仕掛けであった。

一番に攻め込まれると思われた東門ははじめから門扉の内側で塞がれていたのである。それも、巨大な石を使って、大門が開いたところに、百人ほどが入れる程度の部屋が作られていた。吸血鬼たちは気付かないが、地面には大量の油が足首まで浸るほどにたまっていて。さらに突入直後、天井に開いた小さな穴から大量の小麦粉が投げ込まれ、濛々と煙のように粉が部屋の中に広まったところで、松明が投げ込まれた。油への引火と粉塵爆破が同時に起こる。突入していた吸血鬼たちは四肢がバラバラになり、入り口付近にいて、続いて突入しようとしていた集団も、爆発と大音量でダメージを受けた。

さらに、それに続いて、東門の部屋は突き崩され、土砂と瓦礫によって門はふさがれてしまう。壁や扉なら体当たりで破壊することもできるが、瓦礫の山ではそうはいかない。これ除去するなどという

地道な作業は吸血鬼には出来ないし、操死鬼を使おうとすれば、城壁の上から降り注ぐ瀉血やの雨に抗することができない。

これで、東門は完全にふさがれたことになる。

「ちっ……小細工を……」

周囲には彼女の呟きを理解できる者はいない。自分以外の二人の不死鬼は北門と南門に回っている。一度軍勢をまとめて、西門に回るべきかどうか迷ったが、東門の彼女は城門の突破以外に操死鬼によつてケテル村から運ばれてくる物資の受取と配布を行う役目もあった。ケテル村から近いこの場所を確保しておかなければならない。操死鬼は融通がきかないので、東門に誰もいないからといって他の場所に行くという判断ができないからだ。

いかに吸血鬼を使い、本人は不死鬼として強力な戦闘力を持っているようと、城壁をはさんだ攻防戦にあつては、百戦錬磨のレム・ファン・リートフェルトに対抗できようもなかった。

レム・ファン・リートフェルトの畏はもちろんこれだけではない。北門ではわざと崩れかけたままで、どう見ても簡単に破壊できそうな城壁があつた。城門は裏側に瓦礫が詰まれており、体当たりをしても破壊できない。さして軍勢の指揮の経験がない、北門担当の不死鬼は何の疑問も抱かずに城壁の崩れかけた箇所には吸血兵を集中して送り込んだ。城壁は簡単に破壊される。

東門と同じように、吸血鬼たちは本能の求めるがままにそこに殺到した。そしてやはり手痛い逆撃を喰らう。破壊された城壁の中は空洞になっていた。破壊したのは外側の壁だけである。石の壁と天井

に囲まれた狭い空間に次々と吸血鬼が侵入したのを見計らって、天井から吊り下げられたドラが大音響で鳴り響いた。

耳栓など関係ない。ほとんど密閉された空間で容赦なく鳴り響いたドラの音は耳の穴からだけでなく、頭部の骨を振動させて音を伝えた。鼓膜を破壊することはできなくても、聴覚神経には過剰な刺激が入力され、吸血鬼たちは大混乱に陥る。

そこに大量の土砂が天井に急に開いた穴から流し込まれた。瞬く間に数百名の吸血鬼が生き埋めになる。

南門でも状況は似たようなもので、こちらは門や壁を破壊するのではなく、城壁を吸血に上らせた。吸血鬼の筋力を持つてすれば、石畳の城壁のわずかな突起に指をかけて上ることも難しくはない。城壁の上に吸血鬼たちがたどり着いたときには、そこには誰もいなかった。これを指揮していた不死鬼は何の疑問も抱かずに数百名の吸血鬼を屋根に乗せた。

その瞬間・・・

城壁の上の床が崩れて抜け落ちた。絶妙のタイミングで、城壁に上りきった吸血鬼のほとんどが崩れたところに飲み込まれ、狭い通路いっぱい瓦礫のと共に下にたたきつけられた。前後不覚の吸血鬼の集団の中に大量の瀉血屋が降り注がれる。この部隊の吸血鬼も鎧を着用してはいたものの、すべての吸血兵にいきわたっていなかったため、大量の吸血鬼が瀉血矢によって血液を失った。

最後には首刈り部隊が突入、すべての吸血鬼の頭部を体から切り離れた。中にはこの状況を結局理解することのなかった不死鬼の指揮官も混ざっている。イエケリー又は自分の数少ない持ち駒を失った。

この時点で、レムは戦友ヘンドリック殺害への報復を果たしたのかもしれない。

「ちっ……一度東門から一キロの位置で軍を再編する！」

操死鬼は言葉を理解する。といつても、自由意志はないので、言われたとおりの行動や、誰かの言葉を繰り返すのみである。伝令担当の操死鬼に上記の伝言を携えて、北門の司令官に指示を届けにいかせた。

「油断するな！罨は一回しか使えないものが多い！次はこうはいかないぞっ！」

レムの判断は正しい。このような策略は最初のうちだけで、長続きはしない。緒戦は完勝できたがその分手ごまを失っている状態なのだ。

初日の戦いは、こうして籠城側のほぼ完勝の形で終わった。夕刻から始まり、一晩かけて攻めまくった吸血鬼部隊は昼の日差しの中で戦うことを避けるためだけでなく、戦闘で失った吸血鬼の体力を回復させるために、一時撤退せざるを得なかった。

ヤン・エツシャーとシモン・コールハースが率いる部隊は騎馬を励まし、本来どうにか夕刻にたどり着くところを、まだ日の高いうちに、城壁が見える位置までたどり着いた。すでに先発隊からの報告で、ザーンが吸血鬼軍に包囲されていることもわかっている。近くまで着いたときには、すでに初日の戦いは終わっており、東門から

ケテル村側に一キロの地点で陣取っているのが見えたのである。

「今のうちに西門から入城しますか？」

「いや、それでは、ただか五百の援軍が来ただけの事。敵は我々の派遣を知らないでしょう。このことを最大限に活かせば、五千の援軍に等しい戦力として動けます」

シモンの質問は確認のためであり、ヤンがそのような簡単なことを考えないはずもないことはわかっていた。シモンは知将ヤン・ファン・バステンのことを信用しきっている。

まず、ヤンは部隊をザーンから五キロほど離れた位置にある森の中に布陣した。医師などの非戦闘員と輸送部隊などを入場までの間、隠す目的もある。そこで、部隊の全員に向かって演説を行った。

「聞いてのとおり、すでにザーンは吸血鬼軍により攻撃を受けている！レム・ファン・リートフェルト隊長は籠城戦の名手、決して遅れをとることはないし、おそらくはわれわれの支援がなくてもあの程度の数なら支えられることだろう。吸血鬼の軍は長期に戦線を維持することが難しい。どうせ長くはもたないが、我々は敵に大きな打撃を与え、吸血鬼による軍などがナンセンスであることを思い知らせねばならない！」

五百名の騎士たちが真剣に聞き入る。わずか就任から十数日の護国騎士団長代理はすでに騎士たちの信頼を集めていた。ウィレム同様、型破りな人物ではあるが、その武技と軍略はウィレムにまったく劣る事はなく、対吸血鬼戦においては、間違いなくこの国最高の人材であることを全員が確信していたのである。

「戦闘部隊五百名を二つに分ける！百名は私が、四百名はシモン隊

長が指揮するものとする！私の部隊は私と共に、ケテル村と敵陣との連絡を遮断する！吸血鬼は保存の利かない血液を糧食として確保しなければならぬ。ケテル村からは一日数度の輸送があるものと思われる！これを襲えば、吸血鬼である兵はともかく、不死鬼の司令官たちは動揺する。あせって反転してきたところを、側面からシモン隊長の部隊が攻撃する。レム・ファン・リートフェルト隊長がそれを見れば、必ず打って出てくることであろう！大打撃を与えることで、敵は吸血鬼軍の限界に気づくはずである！心して挑め！我々の戦果が今後を大きく左右するぞっ！」

「オオーッ！」

騎士たちは自分たちの剣や槍、ラッパなどを掲げてヤンの激励に応じた。

「シモン隊長。お願いします。横撃のタイミングが重要です。貴方ならそれを正確に測れるはず」

「はっ！お任せください」

ヤンの部隊百名はおとりの役目もある。吸血鬼に輸送などという作業はさせられないであろうから、輸送部隊は操死鬼のほうである。普通の人間では吸血鬼と一緒に仕事などさせられないし、不死鬼は貴重であろう。ファン・クラッペは不死鬼の血液を直接輸血することで確実に不死鬼にする方法を開発しているが、だからといって、素直に不死鬼の将として戦う者が簡単に現れるわけではない。輸送のために不死鬼を使うことなどは出来ないはずである。

だから、危険な仕事をするのはむしろシモンなのだ。わずか四百で三千の敵に横撃を行うという作戦である。だが、シモンならばそのタイミングと臨機応変の対応を期待できると考えての布陣であった。

ヤンは十年前の吸血鬼掃討戦では、戦術の立案を行ったが、直接兵士の指揮を執ったわけではない。難しい作戦は専門家であるシモンに任せるべきであった。

ケテル村にはフーゴー・ファン・ドースブルフが二千の吸血兵と共に駐屯していた。無人の建物を吸血鬼の宿舎に当てている。活動させては收拾がつかないし、その分だけ血液を余分に必要とするので、薬を使って吸血鬼たちはそのほとんどを寝かしつけている。数名の不死鬼と輸送などの作業に当たる操死鬼だけが起きて活動していた。

「相手の指揮官はファン・リートフェルトか……。イエケリーヌでは荷が重いだろうが、別にザーンを占領できなくとも良い。吸血鬼軍の恐ろしさをやつらに植え付けることが目的だ」

フーゴーは周囲の不死鬼たちに語った。彼の周りにはいる不死鬼たちは吸血鬼軍の部隊長であるが、元々軍人というわけではない。せいぜい、夜盗の首領だの、傭兵だの小規模な戦闘指揮の経験があるかどうかという者たちである。あまりまともな人材とは言えなかった。

「イエケリーヌ様は苦戦されておられるようですが……」

恐る恐る意見を述べたのは、壮年の不死鬼である。夜盗の首領として保安兵団に追われていたのを、フーゴーが見つ付け出し、不死鬼にしたのだ。不死鬼にされたことには最初恨みを抱いていたが、どうせ未来の開けない自分であるので、それを受け入れ、不死鬼として戦うことで運命を切り開こうと考えた。

「ふん、これもいい経験だろう。武技が優れているだけでは、一兵卒としてしか働けないからな。数人でも城壁の内側に侵入を果たせば、住民が吸血鬼化し、ザーンを混乱に陥れることができる。落城まで行かなくてもそれで十分。うまくいってファン・リートフェルトを追い出すことができれば、フリップ国内と同様、住民から採血して吸血鬼軍を維持することに使えるようになる。拠点はノールトとこの村だけでも十分だ。これでファン・クラッペのヤブ医者から自立できる」

不死鬼軍はヤンの予想したとおり、決して一枚岩とは言えない状態だった。不死鬼や吸血鬼、操死鬼についての研究で軍団維持の技術面を支えるファン・クラッペ、軍人であり、吸血兵団を統率するファン・ドースブルフ、フーゴーの言うことは聞かずに独自の動きをする、最古参の不死鬼ヨハネス・ファン・ビューレン、さらには、スポンサーである、レオンス・ド・アズナブルやアルベルト・ルワーズがそれぞれにそれぞれの都合で動いていた。

ファン・クラッペとド・アズナブルは慎重派である。旧アズナブル辺境伯領の領民から採血した血液のみが今は糧食として使えるもので、それを保存したり、輸送したりするための手段はファン・クラッペの手によって考えられた。この二人の発言力が強まることは仕方がない。

痺れを切らしているのはアルベルトで、ルワーズ国公即位が目的の彼は早くルワーズ側国境地域に勢力を広げたいのである。ヨハネス・ファン・ビューレンは何を考えているのかわからなかった。

今回の進軍はほとんどファン・ドースブルフの独断である。軍を維持するための建前上、しかたなくレオンスは血液を提供しているが、成果が上がらなければそれも差し止められる可能性があった。それ

でも、危険な賭けに出た理由は、ファン・クラッペから独立した行動を取れるようになりたいがためであった。ファン・ドースブルフ自身は別にアルベルトに忠誠を誓っているわけではない。彼自身は十年前に果たせなかった、吸血鬼軍の編成そのものが目的なのだ。自分の命令を無視し、詐術的な方法で吸血鬼を討伐したファン・バステン將軍への復讐と、自分の正しさを認めさせることに、執念を燃やしていた。

実は、これはファン・クラッペの動機と酷似している。ファン・クラッペは言うなれば、フレデリック・ファン・ビーヘルと同様、高学歴のエリート医師でありながら、同年代のマウリッツ・スタンジエの方が評価が高いことに逆恨みをしていたのである。彼はその偏執的な情熱を伝染性吸血病の軍事利用という、非人道的な手段そのものに向けていた。

軍の編成とその威力を知らしめることを目的とするファン・ドースブルフト、技術の開発そのものに執着するファン・クラッペとの相克は深まるばかりであった。スポンサーであるアルベルト、レオンの二人もそれぞれの目的があり、幹部の間だけでもまとまりを欠いているというのが、不死鬼軍の現状である。

二日目の戦いはまた夕刻から開始された。今度は二千五百までに減った全軍が一塊になって、南門から攻めかかる。西門以外はすでに門扉は破壊した上で、進入不可能になっており、壁を破壊しても危険が伴うことがわかつている。イエケリーヌが考えたのは、城壁の屋根が崩された箇所から強引に攻めかかることであった。一度罠が発動した箇所ですらに発動可能な罠が仕掛けられているとは考えにくいからだ。

イエケリー又の作戦は功を奏したかに見えた。瀉血矢を浴びせられ、次々と吸血兵が倒れていったが、吸血兵など多少失ったところで痛くもない。中には二十万以上の住民がいるのだから、彼らを吸血鬼化させれば、いくらでも補充が利くのだ。そして、わずか数人でも吸血鬼が市外に侵入すれば、民衆がパニックを起こす。そうなれば、落城させることなどたやすいはずであった。

吸血鬼たちの数名が崩れた壁から内部への侵入を果たした。一瞬後には大量の瀉血矢を浴びて絶命したが、前進が不可能ではない証拠である。

「進めえっ！血の飢え満たせ！中にはお前らの好物がひしめいているぞ！」

イエケリー又は激励するが吸血鬼が相手ではたいした意味もない。

「イエケリー又様！輸送部隊が襲われました！」

生き残った不死鬼の将が遠眼鏡を片手に血相をかいて現われた。彼から遠眼鏡をひったくったイエケリー又はすぐさまそれを構える。ケテル村方面からくる操死鬼湯輸送隊の荷物から煙が上がっていた。

「ちいつ！お前はここに残って攻城戦の指示をつ！私が余剰の千で輸送部隊を迎えにいっくっ！」

イエケリー又は部隊を編成してケテル村方面に駆けていった。

ヤンは武術よりも乗馬に優れた者百名を選び出して自分の部隊を編成した。この部隊の最初の仕事はほとんど戦闘とは言えないものであった。予想通り、操死鬼のみで編成される輸送部隊がケテル村方面から現われたので、これを襲うのである。操死鬼には戦闘などまともにできない。戦いとは単に体力の問題ではなく、臨機応変の判断が常に必要なことであるからだ。操死鬼にはそうした判断ができない。凶暴な吸血鬼ならば、人間の戦い方とは違うものの、獣のように十分危険な存在となれるが、操り人形には無理である。

駿馬にまたがった百の騎馬隊は風のごとき勢いで輸送部隊に迫った。操死鬼は何も出来ないというよりも、無反応である。ヤンを先頭にした部隊は、数十の荷馬車を狙って分散し、勢いをそのままに輸送部隊の中を通って、逆側に抜ける。それと同時に、荷馬車には火がついた。高速で移動中でも消えないように工夫した、特殊なランタンである。

これも予想していたことだが、輸送部隊が運んでいるのは血液だけではない。日中の日差しを浴びても大丈夫なように、吸血鬼たちが肌に塗る油も輸送していた。火は油に燃え移り、瞬く間に荷馬車は全焼する。操死鬼はそれを無関心に眺めていた。彼らには目の前で起こっていることが何かは理解できないし、そもそも何かが起こったことに興味を示さないのだ。

輸送部隊がいた街道を横切って、逆側に抜けた後、再結集した百名の部隊はそのまま方向転換した。ザーン方面に向くと、前方から砂塵が見える。騎乗のイエケリー又と思われる女性を先頭に、その後には無数の吸血鬼が大きく口を開けて迫ってくるのが見えた。だが、これも計算のうちである。

「吸血鬼の足なら騎馬でも逃げ切れるとは限らない！再び街道を横切って、北に向かつて走る！やつらに方向転換をさせるのだ！吸血鬼は足は速いが小回りは利かない！」

乗馬をとめることはなく、こう言いながら自らが北に向かつて走る。乗馬の名手たちはそれにまったく遅れずに従うことができた。

考えたとおり、直進はすさまじい勢いの吸血鬼軍は方向転換で著しくその速度を落とした。足は速いが、高速で移動しながら方向を変えるためには、独特の技術がいる。筋力だけの問題ではなくなるのだ。イエケリーヌの指示でそうした対応を行おうとしても、吸血鬼は言うことを聞かない。数百名の吸血鬼は方向を変えた彼女に従わず、意味もなく直進してから、何が起こったかわからないようにきよきよとした後、やっと彼女を見つけて、遅れて走りよった。また、別の数百名は彼女の方向転換に気づいてはいたが、勢いを保つたまま方向転換することが合わず、転倒してしまい、周囲を混乱させた。

たったこれだけのことで、軍列が乱れるのが吸血鬼の軍隊というものだった。一丸となって移動すること自体に無理があるのだ。ヤンの騎馬隊は何度も方向転換をし、イエケリーヌの軍勢は前後左右に薄く広がってしまった。

そこにシモンの率いる四百の騎馬隊が突然現われたように強襲した。絶妙のタイミングである。ヤンの信頼を裏切ることはない。シモン・コールハースは自分で考えている以上に、剣士としてだけでなく、指揮官としても優れた男であった。理屈によらず、優れた感覚で戦機を測る目を持っているのだ。これはヤンにもない力である。

「吸血鬼たちは散り散りになっている！騎馬の勢いを殺さず、駆け

抜けながら攻撃せよ！」

この指令も的確であった。吸血兵には体力差もある。すでに、ヤンに揺さぶられ、疲れ始めた者もいた。密度が薄く、騎馬隊が猛スピードで通過しても、それに対応することは難しい。

シモンは配下の四百名に三つの武器を持たせていた。一つは瀉血矢で、鞍につけた半弓で撃つ。吸血鬼たちが固まっていた場合は、併走する形でこの武器を使う予定だった。もう一つは以前、ウィレムがイエケリー又に向かつて使った瀉血針のダートで、これなら素手で投げられる。もう一つはメイスで、これを使って戦うのはできるだけ避けたいと考えていた。屋外で、騎馬での戦いであることから、音響攻撃も臭気結界も使えない中で、まともに接近戦を挑むのは被害の大きさを考えると最後の手段であった。

この時、シモンが選んだのは二つ目の武器、ダートである。一人数百本、鞍の前輪に皮袋を結んですぐに取り出せるようにしていた。シモン配下の騎士たちはやじり陣形を取って、吸血鬼の密度の薄い群れの中を駆け抜ける。この横撃はかなり一方的なものであった。

イエケリー又は吸血鬼たちの体力に気を使っていなかった。自分についてきている百名程度にしか目がいつていない。斜め後方からのシモンたちの襲撃にはしばらく気づきすらしなかった。後方にいる吸血鬼はすでにだいぶ体力を失っている。騎馬で駆け抜ける者たちを相手に、襲い掛かることも出来ず、ダートを浴びて、あちこちで血煙を上げていた。

シモン隊が猛スピードで吸血鬼の部隊を駆け抜け、さらに反転して、再度吸血鬼部隊の中を横切る。あつという間に、一人平均二体の吸血鬼にダートを当て、イエケリー又の部隊は二百名程度に減ってし

まった。

「な・・・なんだこれは・・・」

イエケリー又はヤンの部隊しか見ていなかった。右に左に絶妙な夕イミングで揺さぶられ、自分の向いている方向すら見失いそうな状況だった。ヤンの部隊が自軍の右側に回りこもうとしたので、先回りしようと方向転換をした時に、初めて後方部隊が目に入ったのである。そこには血しぶきを上げて力尽きている数百名の吸血鬼の群れがいた。まだ、息のあるもの者もこうなるとどうしようもない。翌朝が来れば、皮膚がぼろぼろになり、何も出来ないうちに死んでしまうことだろう。

仮にイエケリー又が視野の広い十分に経験のつんだ指揮官であったとしても、それほど事態は良くなっていたとは思われない。指揮官の欠点ではなく、吸血鬼の軍隊そのものが持つ欠陥を突かれたのだ。名将と言われる人物でこの状況を予見できていたならば、ヤンの部隊を追跡したりはせずに、守りを固めて、去るに任せたことだろう。高々百名の部隊で、数千吸血鬼をどうにかすることなど出来ないのだから、以後、輸送部隊に不死鬼の指揮官と護衛の吸血鬼を付けるように父であるフーゴーに頼めばいいだけだったのだ。

吸血鬼たちは催眠術と、不死鬼の持つ強さに屈服し、ある程度言うことを聞いている。それは、指揮官の動揺がダイレクトに彼らの動揺につながることを意味する。指揮官が馬の足を止めると、彼らも足を止めた。二百名程度の群れは、その場に立ち尽くす。どうしていいかわからなくなっているのだ。その瞬間、周囲から瀉血矢が雨のごとく降り注いだ。

ヤンの百名、シモンが自軍を百数十名ずつ三つに分け、四方向から

同時に矢が注がれる。しかも、騎馬は足を止めておらず、周囲をグルグルと回っていた。吸血鬼はどうしていいかわからない。人間の軍隊であれば、一箇所に結集し、一団となって、一方向に突破を図るだろうが、吸血鬼にはそんなことは出来ない。何より指揮官のイエケリー又が混乱していたため、そのような指示も出せていなかった。ほとんど全滅である。

イエケリー又自身は愛用のフレイルを頭上でまわし、瀉血矢をすべて叩き落していた。状況はつかめない。とにかく自分の身を守るのに手一杯だったのだ。最強最悪の軍隊を率いていると考えていた彼女は戦慄した。何がこうまで自分を追い詰めるのか。訓練されているとは言え、ただの人間の集まりに、ここまで一方的に吸血鬼軍が追い詰められるとはどういうことか。

イエケリー又は混乱し、冷静な判断力を失った。彼女は一兵士としての戦いしかできなくなっていた。一兵士としてのイエケリー又はきわめて優れた戦士ではある。

フレイルを振り回す彼女を遠巻きに騎士たちが包囲した。

左右からヤン・エツシャーとシモン・コールハースが現われる。

「イエケリー又殿。テオ・ファン・ダルファアの邸宅以来ですね。すでに貴方お一人だ。騎士たちは貴方を狙って瀉血矢を構えている。いかにあなたがフレイルの名手でも、同時に放たれた五百本の矢を全て叩き落すことは不可能。降伏しなさい。悪いようにはしない。中央医局では伝染性吸血病患者が社会生活を営むための研究を進めている。反乱の罪には問われるだろうが、事情あつてのことなら、ある程度酌量の余地もあります」

丁寧な口調でヤンは話しかけた。馬上で短槍を持ってはいるが構え

てはいない。逆側でシモンは油断なく右手に剣と左手にダートを構えている。手綱は握らずに口にくわえていた。この状態でもシモンは馬を自在に操ることができる。

イエケリー又はしばらく茫然自失していたようだった。だが、次の瞬間、弾かれるように行動に移った。

「死ねえっ！」

ヤンに向かって突進する。ヤンは槍を構えていない。これは正しい判断だった。ヤンさえ倒してしまえば、局地的にも逃げおおせる可能性はできる。ヤン・エツシャーの死は間違いなく兵士たちを動揺させるからだ。また、ヤンの殺害にさえ成功すれば、たとえば自分が倒されても、それ以上に護国騎士団に大きなダメージを与えられる。対不死鬼軍の要はヤン・エツシャーなのだ。そのことは、彼がアメルダムに行く前からわかっていたから、道中の襲撃を行ったのだ。吸血鬼を使った襲撃の指揮官も彼女だった。

ヤンが槍を構えずにいた理由はわかっていた。ヤンに襲い掛かれればシモンはダートを放つ。矢をつがえているとは言っていたが、ヤンは接近しすぎであった。五百人が同時に放つことなどできない。彼の身の安全の要はシモンなのだ。

ヤンに向かってイエケリー又が突進した瞬間、もちろん、シモンはダートを放った。三本同時にである。だが、イエケリー又は前方のヤンに向かって出なく、後方でフレイルを旋回させていた。ダートははじかれ、さらに……

ビュンッ！

シモンはとつさに飛んでくるものを剣で払い落そうとしたが、剣があたってもそれに巻きつくように動いて、鉄球がシモンの肩に当たった。致命傷ではないが、一瞬苦痛に動きが止まる。イエケリー又は後方にフレイルを投げて、素手でヤンに突進したのだ。

だが、ヤンもイエケリー又は無反応だったわけではない。槍は構えていなかったが、彼女は素手である。馬上で素手による戦闘というのはいかに不死鬼であって難しい。イエケリー又はすれ違うように馬を横につけて、馬上から飛んでヤンに襲い掛かった。

不死鬼との格闘は圧倒的に不利である。そもそも筋力が大きく違いくすぎるのだ。ヤンは体術を身に付けているが、馬上でそれを発揮することができなのか・・・できた。構えてないとは言え、ヤンは槍を持つている。それを突き出すような余裕はなかったが、前方に横にして、それを差し出した。剣などの攻撃を受けるときの構えである。もちろん、不死鬼の強力な攻撃をまともに受けられるはずはない。イエケリー又は手刀でそれをたたき折ろうとした。右手でそれを行い、左手で顔に掴みかかろうとしたのだ。

何が起こったのか、イエケリー又だけでなく、近くで見ていたシモンにすら理解できなかった。ヤンに襲い掛かり、手刀が槍を叩き折ろうとした瞬間、彼女の体ははじかれるようにヤンの後方に飛んだのである。

だが、勢いがありすぎたのか、それにより、包囲している騎士の近くまで飛んでしまった。そのことだけはイエケリー又にも理解できたらしい。彼女は着地と同時に地を這うような低い姿勢で馬の足の間を走りぬる。

「撃つな！撃たなくていいっ！」

ヤンの指示に瀉血矢をつがえていた騎士たちはそれを下ろす。

「今のはいつたい・・・」

「ああ、彼女には一度降伏することが可能であることを話したので、それでいいですよ。うまくいけば周りの不死鬼にも話すかもしれない。敵の首脳部は動揺することでしょうね。好きで不死鬼軍の指揮官をやっている者ばかりではないでしょうから」

「いえ・・・そのことでなく・・・」

シモンはヤンの意図はわかっていた。一人ぐらい、指揮官が減ったところで、それほど意味はないのだ。不死鬼は敵にとつて貴重だろうが、イエケリー又は一人の兵士としてはともかく、将帥としてはたいした力がないことを露呈していた。だとすれば、生きて帰した方がはるかにこちらに使い道があるのである。総司令官の娘であるということが特に意味を持つのだ。

「あの女を吹き飛ばした技です」

周囲の騎士たちも集まってきた。まるで手品か何かのようにしか見えなかったのだ。

「人間の体の構造と力学の知識を応用しただけのものですよ。はるか東方の国で『ジョウジュツ』とか『アウイキ』とか言う武術があるそうですが、それについては詳しい文献もないのでわかりませんが、その話にヒントを得て、自分なりに考えてみました。敵の打撃を上手に受けて、その力を吸収するのではなく、他の方向に向かわせるのです。それであの女は吹っ飛んだわけですね。あそこまで吹っ飛ぶのは彼女の力が尋常ではないから。さすがに不死鬼だ」

イエケリーヌの怪力などよりも、ヤンの体術と知識の方が尋常ではなかった。改めて、五百の騎士たちはヤンを認めることとなった。

イエケリーヌがヤンたちを追っている間、ザーンの南門に集まっていた千五百の部隊も頑強な抵抗にあっていた。崩れた城壁の上に操死鬼を使って板を載せ、その上を吸血鬼に移動させるという手段が功を奏し、城壁の向こう側に百名ほどの吸血鬼を送ることが出来たのだが、ただ、それだけのことだった。今やザーンはレム・ファン・リートフェルトの手により、城壁周辺の区域はまるで迷宮のようになっていたのである。

二十万以上の人口を抱えながら、城壁周辺の区域は一般市民の立ち入りを禁じ、建物と建物間に、石や土囊で壁を作り、簡単には内側に侵入できなくしていた。それも、単に壁で通路をふさいでいるのではなく、複数の方向に道を分かれさせていた。吸血鬼たちは指揮官がいなければ集団での行動など出来ない。わらわらとそれぞれ好き勝手な方向に動くうちに分散してしまう。そして建物の屋根などに潜んでいた、狙撃手の手によって次々と瀉血矢を浴びせられた。侵入に成功した百名の吸血鬼は瞬く間に全滅する。

だが、不死鬼の指揮官にはそのことはわからない。侵入を食い止める動きがないことを、敵が動揺してなすすべもなく、城壁から引いたのだと判断した。次々と吸血鬼を送り込み、その数が七百に達した時、突然、背後から瀉血矢の雨が降り注いだ。

レム・ファン・リートフェルトが第一部隊の千騎を西門から出撃させ、大きく迂回して南門の部隊の背後に回っていたのである。その構えは先日ノールトで吸血鬼の集団を撃退した、対吸血鬼密集防衛

体制であった。巨大な盾の壁、その背後から瀉血矢の雨が降り注ぐ。指揮官の判断はまずいことの上なかつた。手元に残っている吸血鬼の半数、三百程度をそつちに向けたが、そもそもが三百対千である。ほとんどの吸血鬼は盾の壁にたどり着くことすら出来なかつた。どうにかそれを突破した吸血鬼も先日同様、盾の壁が発する大音響で昏倒してしまふ。

焦った指揮官をさらに動揺させることが起こつた。

南門の城壁からだいぶ西にずれ、南西の角、見張り台があるあたりに、いつの間に巨大な板が出現していた。それは、城壁の一番上から斜めに立てかけられたようになっていた。その上から続々と騎馬隊がすべるように降りてきたのだ。指揮を執っているのは、ジェラルド・ファン・ハルスであつた。レム・ファン・リートフェルトが出陣の直前に依頼したのだ。レムは思慮深い男だが、それは保守的な人間であることを意味するものではない。冷静に考えて正しいと思えば型破りなこともする。護国騎士団らしい人物でもあつた。

ジェラルドの優れた指揮能力と冷静な判断力に気づいたレムは、自分では抱えきれない第二部隊の指揮を頼んだのだ。最初、第二部隊の騎士たちは反発したが、ジェラルド演説で彼に心酔してしまつた。

「みなさん！みなさんは先日のケテル村での戦いで、尊敬するヘンドリック・ファン・オールト隊長を失つたと聞いております！勇猛な彼の弔い合戦は、皆さんが行うべきでしょう！私は十年前伝染性吸血病で父を失っております！私にとってこの病との戦いは父の弔い合戦でもあるのです！私に従えというのではありません！共に戦つていただきたい！」

それほど個性的な言い様ではない。だが、地位の高い者がここまで腰を低くしているのは驚くべきことであった。さらに・・・

「ファン・リートフェルト隊長が背後から襲撃したタイミングで我々は打って出ます！その際は私が先頭に立ちます！もし、私が吸血鬼に攻撃を受け、傷つき戦えなくなったり、噛み付かれて感染しても気にする必要はありません。私に噛み付いて隙のできた吸血鬼を私ごと串刺しにしないで！私は一騎がけをします！私をおとりにして、襲い掛かる敵に横撃を加えるのです！さあっ！戦いましょう！」

この発言にすべての第二部隊の騎士が奮い立った。この一見良家のぼっちゃんに見えなくもない三十そこその男は、気品を備えながら、戦士としての気概を持つ人物であったのだ。この瞬間、護国騎士団一の猛将、ヘンドリック・ファン・オールドが育てた剛勇の騎士たちは、ジェラルド・ファン・ハルスという優雅な男に故人と同じ資質を認めたのである。

ジェラルドの部隊は、事前に用意してあった数百本の長大な角材を、相手が動揺している隙に手際よく城壁に立てかけて並べ、固定した。かなり急な角度ではあるが、護国騎士団の乗馬の技術はきわめて高い。転げ落ちるような勢いでこれを滑り降り、ジェラルドを先頭に吸血鬼たちに向かって殺到した。全員手にはメイスを握り、まずはラッパを信じがたい肺活量で吹き鳴らす。効果は室内や、とどまらず吹いた場合よりも低いだろうが、それでもないよりはましだった。

ジェラルドは一騎がけを宣言していたが、彼の新たな部下たちはそれを許さなかった。副隊長格の騎士が叫ぶ！

「ジェラルド殿に遅れをとるなっ！我々は護国騎士団一の勇猛な部隊だぞっ！指揮官に一騎駆けさせるなど柔弱なやつは一人もいないことを知っていたのだっ！」

すでにジェラルドは士心を得ていた。こうなるとこの第二部隊の戦闘力は五割増しである。特に周到な仕掛けがあるわけでなく、メイスを片手に突入しただけだが、この部隊の勢いに吸血鬼たちは抗することができなかつた。そもそも戦場にあつて吸血鬼たちは、血に酔つた状態になれば、指揮官の指示になしは何もできない。右往左往しているうちに、馬上からメイスを叩きつけられる。指揮官は何も言えなかつた。状況の変化についていけずに判断を下せなかつたのである。

結局彼がとつた手段はやはり最悪のものであつた。自分一人で逃亡を図ろうとしたのだ。

騎馬に乗つて、ケテル村方面に走り出したとき、突然一本の瀉血矢が、彼の首筋に刺さつた。すさまじい勢いで血液が抜き取られる。判断力のない吸血鬼なら、そのまま死ぬところだが、不死鬼なら、すぐにこの矢を抜き取ることができると。動揺しながら抜き取り、矢を捨てたが、かなりの体力を奪われていた。気づくと目の前に短槍を持った男が馬上にいた。

「イエケリー又は逃亡したが、君は逃がさない。死か捕虜となつて我々の不死鬼治療を受けるかだ。どうする？」

「ち、治療だと？」

「ああ、反乱軍に加わり、指揮を執つたことは死に値する重罪だが、故あつてのことだろう？酌量の余地はある。すでに、君らの策略で感染したロビー・マルダーは中央医局の研究員たちの手で、だいぶ

まともな生活をできるようになった。昼でも活動できるし、血液を大量に摂取しなくても生きられる。ちゃんと多少は人間らしい食事も取れるようにもなった」

そう言われると、程なくして、男は泣き出した。

「う．．．うあ．．．うあああ．．．た、助けてくれ．．．お、俺は．．．こんな．．．こんなこと．．．いやだったんだ！あの、イエケリー又って女にそのかさされ、気づいたら不死鬼にされていた．．．ただの．．．ただの．．．スリだった俺に、吸血鬼の指揮官なんてできつかよ．．．生きていくために必要な血をもらう為に．．．」
「ああ．．．お前は不運だったただけだ。私たちの治療を受ける。吸血鬼化して長く時間がたった者はもう無理だが、不死鬼ならまだ何とかなる。」

こうして、不死鬼軍から初めて捕虜が出たのである。

彼が指揮を取っていた部隊は全滅した。吸血鬼化し、理性を失った者はもう助けようがない。死を与え、安らかに眠ることを祈るだけであった。

残念ながらこの戦いではザーン防衛軍にも犠牲者がでた。ヤンとシモンの部隊にはまったく被害はなかったのだが、ファン・リートフェルトの第一部隊では数十名が逃亡する吸血鬼を無理に追ってしまい、逆撃こうむって死亡した。ジェラルドが指揮した第二部隊はまともに突入したため、やはり数十名が死亡。また、十名程度が吸血鬼に噛み付かれた。

その中には、ジェラルドに遅れるをとるなと叫んだ副隊長の姿もあ

る。

「じえ、ジエラルド殿……どうやらここまでのようです……第二部隊をお願いいたします……」

副隊長は自分の剣を心臓に向けてつき立てた。

ジエラルドの剣が直前でそれを弾き飛ばす。

「だめです！私の父は不死鬼となった自分を呪い死を選びましたが、貴方にはそんなことはさせないっ！」

「ジエラルドっ！よく言ってくれた！ここは私に任せてくれっ！」

そう言ったのはヤン・エツシャーである。彼はケテル村にいるころは、ヤンと友人づきあいがあった。弟は弟子入りしているし、妹は無謀にも彼に惚れていた。兄弟三人ともがヤンにほれ込んでいたと言っている。

「さあ、すぐに城内に運ぶんだ！医師団も連れて来ている！私はこういふ事態のためにここに来たのだ！」

再会の挨拶をする暇もなかったが、ヤン、シモン、ジエラルド、レムは負傷者を収容し西門から城内に引き上げた。この戦いは被害は出たものの、完全な勝利であった。

ケテル村奪還

「マニユアルどおりの手はずでいけ！まずは不死鬼化剤だ！血液を大量に失っているから、体調のいい兵士から採血させてもらうんだ！牛血粉を飲ませていては間に合わない！直接動脈に注射しろっ！」

ヤンの鋭い指示が飛ぶ。ザーンに同行した医師たちはこうした状況に場慣れしていた。あわてることなく、指示を着実に実行する。

治療を受けているのは、第二部隊副隊長ヨハン・ノツプラーである。出陣直前にジェラルドの支持を表明し、また、彼の一騎がけを許さず全軍突撃をかけた彼は今回の戦いの功労者であった。吸血鬼化を恐れ自殺を試みたところをジェラルドに止められ、ヤンの治療を受けていた。

「ノツプラー副隊長！聞こえるな？」

「ええ・・・エツシャー先生・・・私は・・・どうなるのですか？」

「すでに不死鬼化には成功した。前例のあることだから心配はいらない。筋力異常発達の抑制は数日後から始める。君の場合は大量の血液を失っているから、それを補給してからの話になる。血管に直接健康な兵士から採血した血を入れたから、しばらく安静にしていれば大丈夫だ。心配するな！これまでどおりとはいかなくても、ちやんと人間らしい生活ができる！」

患者にこうしたことを口にするとき、軍勢を目前に演説するときには普通の柔和な彼とは比べようもない迫力が言葉に込められる。抗いがたい力を持って発せられた言葉に、今までの場合と同様、ヨハン・ノツプラーも奇妙な安心感を覚えた。

今一人、捕虜となった不死鬼軍の部隊長マージン・ゼーリックは護国騎士団ザーン支部の地下牢に幽閉され、ヤンの開発した筋力異常発達を抑制する「アンステロド」を注射されたうえで、経過を観察されることとなった。疲労困憊の彼に早速牛血粉を使った食事が提供されたが、ここにはサスキアはいない。味付けなど十分にはできず、また、ゼラチンを使った擬似食品など手間のかかる調理も不可能なので、ワインなどで牛血粉を煮込んだだけの『牛血粉のシチュー風』ぐらいしか用意できなかった。それでも、マージンはそれを平らげて、涙を流した。少しでも人間らしい食事が出来るようになるとは考えていなかったのである。

「ヤン、鬼神のごとき活躍を聞いているぞ。しかし、大丈夫か？」

「何がだい？」

「体の方だよ。もうずっと働きっぱなしだろ？」

ヤンのことを気遣っているのは、ジェラルドである。二人はケテル村にいる間に親友になった。ケテル村ではジェラルドにタメ口を聞けるのはヤンだけである。逆にジェラルドも雑な口調で話す相手はヤンぐらいのものだった。伝統的な格式を保つこの貴族にとって、ヤンは実に貴重な存在であったのだ。

「ああ、大丈夫だ。まだまだ働けるさ。今の私には無限に力が湧いて出てくる」

「ほう……」

「ずいぶんと照れずにサスキアさんのことを惚気るようになったのですね」

いやらしい笑みを浮かべながらシモンが口を挟んだ。

「！・・・シモン隊長？それはどう言う・・・」

「エッシャー先生はつい先日ご婚約されたのですよ。幼馴染のサスキアさんという女性とです」

「ほほうっ！いやあ、それはおめでとう。これでやっと妹も解放されたな・・・」

「カレンさんが？」

「本当にまったく気づいてないのですね・・・」

あきれたのはシモンであった。

「まったく、あれはちよつと我が妹ながら惨い仕打ちを受けるものだと思いましたよ。五年間も結構露骨なアプローチをされているのにまったく気づかないんですから。この先生は・・・」

「な・・・ジェラルド・・・いったい何のことを・・・？」

「本当にこういうことはエッシャー先生は鈍くらっしゃる・・・」

ジェラルドとシモン、ヤンにとってはすでに二人とも親友である。二人の親友は苦笑いしただけだった。

「ああ、そういえばファン・ハルス伯・・・」

「ジェラルドで結構」

「では、ジェラルドさん、妹さんは特別監察官のお仕事を終えた後も、アメルダムに留まるとおっしゃってました。ファン・バステン夫人が国務府か司法府に席を見つけるように根回しを始めてらっしゃいます」

「ほう、それはありがたい。ファン・バステン夫人にも良しなお伝えいただきたい。いや、シモン隊長もしばらくはザーンですな」

「そうですね。妹さんはすでに護国騎士団本部内でも注目の的です。」

大変優秀な方ですし、何せ護国騎士団では女神とあがめられていたサスキアさんを、騎士団長代理自ら独占してしまった後なので」

「なるほど。妹も朴念仁への適わぬ恋から開放されれば、案外まともな結婚相手も見つけてくるかもしれませぬ。何せ、こと色恋沙汰については思い込みの激しい娘でしてね」

心底ほつとしたような顔をした。何せ最愛の妹が自分の親友に適わぬ慕情を長く抱いていたのだ。兄としても気まずいことはこの上なかつたのである。

「その妹さんから伺いました。お父上を伝染性吸血病で亡くされたことを・・・」

「ええ、しかし、ずいぶん妹の話にお詳しいですね」

「いえ、実は私も・・・縁者が伝染性吸血病で、それも不死鬼となり、どうやら不死鬼軍に参加している様子ですので・・・」

「なるほど、そんな話を聞かされては、情の深い妹は自分の身の上も話してしまうでしょう。そういう娘です。父のことは・・・兄弟の間でも滅多に話題にしません、貴方のその話を聞けば黙っていられたのでしょう。悪くない傾向です」

「何がですか？」

「どんな理由にせよ、異性のことが気になるようになれば、それがうまい具合に惹かれる要因になることはある！シモン隊長、是非頑張ってください」

「は、え、な、何をでしょう・・・」

「何せ妹は二十代の大事な時期の半分を、この朴念仁のために無駄に費やしたのですからね」

シモンといえどもジェラルドの話はわかりにくい。ジェラルドは父の話をあえてしたくないため、シモンとカレンの話をまぜつかえず、ジョークに紛らわせようとしたのだが、悪ふざけは得意でも、

つい最近まで無骨でとっつきにくい武人肌だったシモンのユーモアセンスでは追いつかなかっただらう。

三人ともワインを片手に話している。ただし、蜂蜜を加えたものだ。夕刻の激戦で体力が落ちているので、糖分を補給しつつ、胃や肝臓への負担を軽減するためである。

事後処理を終えてレム・ファン・リートフェルトも席に加わった。ワインを片手に軍議を行うのは護国騎士団の流儀である。

「城の破損部分の修復は二、三日で終わることが出来るでしょう。並行して新しい仕掛けを用意いたします」

「ファン・リートフェルト隊長のアイデアは無限ですな。貴方がいる限りザーンは間違いなく難攻不落の要塞だ」

ジェラルドがそう褒めちぎった。公国一の籠城戦の名手は間違いなくレム・ファン・リートフェルトであろう。

「しかし、相手はフリップ王国国境地域から補給を受けられます。また、今回はケテル村からの出撃でしたが、ノールトにも相当数の吸血軍が駐屯していることがわかっています」

レムはノールトから民衆を誘導する際、吸血鬼の襲撃を撃退したあとも、偵察の者を後方に置き、無尽のノールトに数千吸血鬼が入城したのを確認していた。こうした芸の細かさもこの場で最年長の男の特徴である。

「そうですね。ケテル村かノールトのどちらかは早々に奪還せねばならない。実を言えば吸血鬼の軍隊は大軍になった方がこちらには御しやすい。制御しにくい吸血鬼ですから、その運用は至難の業で

す。今日もあの程度の揺さぶりで、動揺してなすすべもなく敗れていったわけですから」

ヤンは吸血鬼の軍隊などそれほど恐れてはいない。そもそも発想がナンセンスなのだ。理性のない兵士など扱いにくい上に、見た目ほどの戦力にはならない。虎や狼などの猛獣を調教して投入するほうがまだしも使いのある話なのだ。恐れるべきは、不死鬼の集団である。体力絶倫でかつ思考を維持した不死鬼が集団となれば、それは間違いなく最強最悪の軍団となるに違いない。しかし、不死鬼軍といえどまだそれだけの数の不死鬼の兵員を用意することは難しいはずだった。

「明日、朝一で出陣します。ファン・リートフェルト隊長は城の守りを固めて修復を続けてください。私とシモン隊長、ジェラルドで行きます。兵員は今日の戦いでは負担の少なかつた保安兵団と親衛隊を中心とした千人と第三部隊の五百で十分」

「え？で、どこに向けて・・・」

「ケテル村です。明日の正午につくように時間を調整します。イエケリー又はケテル村方面に逃亡しましたが、おそらくそれが原因で、幹部の不死鬼たちには亀裂が走ることでしょう。今がチャンスです」

「しかし・・・兵員の方はともかく先生は・・・このタイミングで・・・」

「このタイミングだからこそです。ケテル村を奪回できれば、これからはノールトだけを考えればよくなります」

驚いているのはファン・リートフェルトでヤンを良く知るジェラルドとシモンは驚かなかつた。ヤンの強さは積極果敢な決断にある。状況をリードし、敵に先んじるチャンスがあればそれを逃さないために多少強引なことは平気でやってのけるのである。その意味ではウィレム・ファン・バステンと同じであるのだが、ウィレム以上に

決断のスピードは速い。

「まず、捕らえているマージン・ゼーリックに話を聞きましょう。彼からケテル村の陣容を知ることが出来るはずです」

そう言って、グラスのワインを飲み干した。全員がそれに倣う。

「調子はどうだい？」

筋力異常発達の抑制剤『アンステロド』を投与されて、数時間たったマージンは元気そうであった。すぐにははっきりとした効果は出ないはずだが……

「先生！聞いてくれよ。さっきのうまいシチュー、本当に久々に人間らしい食事だった」

それほどのものではない。かろうじて『料理』といえなくもないという程度であるのだが、それでも、人血をすする食事しか出来てなかったマージンにとってはご馳走だったのだ。改めて、マルガレータの発想の重大な意味を確認できた。

「それで、うれしくてさ、手が震えて……ちよつとだけスープをこぼしたんだ。膝の上に……そしたら……少しだけ熱かったんだっ！日光で焼けようと、火傷をしようと、剣できりつけられなくても痛みを感じなかったのに……俺……少し人間に戻ったみたいだよ……」

マージンは泣いていた。もう、人間らしい生き方など不可能と諦め

ていたのだ。それがヤンの治療によりわずかではあるが、希望が見えてきたのである。

「そうか。痛覚の鈍化については、神経が破壊されて起こるものと考えていたから、アンステロドを注射しても治らないかも知れないと思っていた。違ったようだな。痛覚が刺激を伝達するのを抑制されるということか」

「ああ、難しいことは良くわからないけど・・・とにかく、先生・・・ありがとう・・・」

これほど真摯で深い感謝を受けることは、医者をしていてもそうそうはない。死なずにすんだという場合よりも、『人としての死を迎えられる』ことの方が人間にとっては重大なことなのかもしれない。つた。

「焦らないことだ。前例となるのはロビー・マルダー氏だが、彼は違って君は不死鬼になってから時間が経っている。まったく同じ経過になるとは限らない。が、少しでも今効果を感じられるなら、間違いなく希望はある。アメルダムの研究チームのリーダーは、まだ若い女性の医師だが不死鬼が人間らしい生活を送れるようにすることを真剣に考えている。食事や昼間の活動もそうだ。中央医局だけでなく、国務府も協力して、社会復帰プログラムの作成にも着手し始めた」

これは、シルヴィアがカレンの協力を得てはじめたことで、プロパガンダとしても大きな意味を持つ。まだ、治療法も完全には確立されていない伝染性吸血病であるから、このようなことは時期尚早であるのだが、それに取り組むことで、公国政府の伝染性吸血病患者への姿勢を明確に示すことが出来るのだ。

「ああ・・・もちろん、スリからも足を洗うよ・・・その社会復帰プログラムとやらでまともな仕事付けるって言うんなら・・・」

ヤンはサスキアの言葉思い出す。出会いのない人生を送ることは人生の病に繋がると。体の病だけでなく、人生の病を治すことも医者役割なのではないか。いや、医者だけでなく、全ての人間が互いの人生を豊かにすることが生まれついで義務であるのかもしれない。犯罪者に身を落とすことは人生の病なのだ。

「君は反逆罪をはじめ、殺人罪、誘拐罪、集団騒乱罪などの多くの罪状で取り調べられることになるが、事情が事情だ。しばらくは、治療もあるし身柄を拘束されることになるが、不死鬼軍との戦いが終われば特赦が出るように国公陛下には書簡を提出しておく。だから、不死鬼軍と戦う我々に協力してくれないか？私は出来ることから、心ならず不死鬼として吸血兵の指揮官となっている君の同僚も助けたい」

マージンはまた泣き出した。

「先生・・・先生は神様だ！俺たちみたいなクズのことをそんなに考えてくれるなんて・・・何でも話すよ・・・」

元々涙もろい男なのかもしれない。少しだけワインを注いでやった。あまり大量に飲むとアンステロドの効果が薄れるかもしれない。それを飲んで落ち着いてから、話し始めた。

「ケテル村にはまだ二千ぐらいの吸血鬼がいるはずだ。それ以外に作業を行わせるための操死鬼もいる。こっちは五百ぐらいだ」

「そいつらを指揮している不死鬼は？」

「みんなが元帥と呼んでいるフーゴー・ファン・ドースブルフと、

その下に五、六人だ。あと、イエケリー又が逃げたんならそれも復命しているだろうけど・・・」

「フーゴーとイエケリー又以外はどんな連中だ？」

「俺と似たようなものさ。イエケリー又に騙されたり、瀕死の状態だったのを不死鬼になつて助かつたやつら。元も似たようなもんで、だいたいは小悪党さ。武人とかそんなのはほとんどいない・・・」

「それは不死鬼軍全体がそうなんだろうか？」

「うーん、全員の顔を見たことあるわけじゃないが・・・ヨハネスつて奴は元々軍人みたいだったな・・・」

その瞬間、シモンの表情が険しくなった。

「ヨハネス・ファン・ビューレンかつ！やつもケテル村にいるのか？」

「い、いや、ヨハネスはフーゴーの部下つてわけじゃない。奴は奴で自分の判断で動いているんだ。俺が出てきたときは、フリップ側に残っていた」

シモンの剣幕にマージンは面を喰らっていた。

「シモンさん。落ち着きましょう。ヨハネス以外には？」

「あとはノールトの方に向かつたエドつて奴は元々傭兵だったらしい。めぼしいのはそれぐらいだ。後はみんな俺と同じようなもので・・・」

「なるほど・・・まあ、そのエドつて奴は今はいい・・・ケテル村ではどんな様子だ？」

「吸血鬼は基本的に眠らせてある。ファン・クラツペつて医者が妙な方法を考え付いて、そいつの作った笛を吹くと腹いっぱい吸血鬼は眠ってしまうんだ。耳がやたらと良くなつた俺たちにも聞こえない不思議な笛の音なんだが、吹くとやたらと犬が吠えるから犬に

は聞こえるんだろう。起こすための曲というか吹き方もあって、それを流すまでは何があっても起きない。その状態で、出撃するまでの間はずっと寝かしつけている」

「寝ている間に攻撃されたときはどうするんだ？」

「起こすための曲を笛で吹けば、すぐに凶暴になる。逆に吹き方しだいで大人しくもなる。普段からいたぶって言うことを聞かせるようにしていたから、それである程度は指示を受け付けるようになるんだ」

ファン・クラツペは医師として倫理観に欠ける男だが、優秀であることは疑いない。軍事利用に必要なこと一つ一つをよく検討して、技術開発を行っていたようだ。

「よし。わかった。ありがとう。これからもいろいろ聞くことはあると思う。戦闘が一段落したら、君はアメルダムに護送される。護国騎士団本部の治療チームが君を担当することになる」

「かわいい女医さんと看護婦さんが面倒を見てくれるぜ。両方ともじきに人妻になるけどな」

「人妻・・・嫌いじゃないですよ」

「おっ、おいつ！」

「ああ、看護婦さんの方は先生の婚約者だからな」

「そりゃ、手を出すわけにいきませんね」

シモンのに答えて冗談を言う余裕が出てきたようだった。いや、こういう和やかな雰囲気を持っていけるのもヤンの才能なのだろう。それほど意識してのことではなく、性格的なものなのだろうが。

部屋に戻ってから、ヤンは再度宣言をする。

「明日朝一に出撃です。昼までにケテル村を強襲します。保安兵団五百は歩兵ですが、これはジェラルド、君に頼む。第三部隊五百をシモン隊長、私は親衛隊の五百を率います。歩兵は後からケテル村につけば問題ありません。私とシモン隊長は全速力でケテル村に向かいます」

吸血鬼との戦いの基本はスピードである。騎馬の機動力を生かして強襲し、不死鬼の判断が追いつかないうちに大ダメージを与える。命令系統の不具合が不死鬼軍の最大の欠点であるからだ。

「わかりました。御武運を」

ファン・リートフェルトは敬礼して見せた。自分の役割というのをよく理解している。リートフェルトは防戦にはあつては、公国一であると言う自負があるが、野戦ではそうも行かない。何より、自分はザーン防衛の責任者として城壁の修復と、新たな罟設置などを急がねばなかった。

翌日早朝、出陣する部隊の兵士たちには前夜には通達が行っていた。出陣前にザーンの広場に兵士たちは整列し、ヤンが訓示を述べる。

「聞けっ！ザーン防衛軍の兵士たちよっ！我々に科された任務は極めて重いっ！公国と不死鬼軍との最前線において過酷な任務を科せられたのが我々だっ！だが、諸君は武人である。このザーンに集められた住民たちを守り、不死鬼軍に勝利する機会を我々は得たのだっ！恐れるなっ！先日の戦いのとおり、個々の吸血鬼は強力でも吸血鬼の軍には欠点がある。私の言うとおりにすれば、決して負けることはないっ！」

「オオーツ！」

千五百の攻撃部隊の兵士だけでなく、広場周辺に集まった民衆からも歓声が上がった。

「ただしっ！死ぬことは許さんっ！生き延びてみせよっ！自分の命と引き換えに敵を倒すなどと言うことは私は認めないっ！絶対に生きてかえるのだっ！」

会場はしーんと静まり返った。ヤンの言葉には戦いを宣言する以上の迫力が籠っていたのだ。

兵士たちは全員手にグラスを握っていた。ジェラルドがファン・ハルス家の倉庫から供給してくれたワインが注がれている。激務の中で急な出陣のため、士気を高揚させる出陣前の景気づけが必要だった。ヤンに代わり、シモンが演台に上って音頭を取る。

「酒の一滴は血の一滴っ！」

「一滴呑むたび一敵屠らんっ！」

全員が一気にワインを飲み干し、すさまじい熱気が広場を満たした。

「がんばって来いよっ！死ぬんじゃねえぞっ！」

「帰ってきたらみんな飲もうやっ！」

一般の市民たちも興奮して、兵士たちを励ます。

兵士たちは、ヤン、シモン、ジェラルドに先導されて、ザーン西門より出陣した。

ヤンとシモンが指揮する合計千の騎馬隊は猛スピードで駆けた。兵士だけでなく軍馬も疲労がたまっていくはずだが、兵士たちの熱気が伝染してか、そんなそぶりを見せない。ただただ、ケテル村へ向けて疾走した。

ケテル村近くの丘の上に達したのはまだ日が昇りきらない時刻であった。予定よりも一時間程度早い。村からは見えない丘の上に布陣し、ヤンとシモンが自ら敵情を観察した。正午にはなっていないが日差しは強い。もう、秋ではあるが、この日は好天であった。そのためか、吸血鬼たちの姿はほとんど見えない。おそらくは操死鬼であると思われる、ゆっくり歩く人影が少し見えた程度だ。

ケテル村にはヤンの診療所がある。そのため、村の地理にはきわめて詳しい。だが、ヤンの作戦は単純なものだった。シモンの指揮する第三部隊の精鋭は乗馬の達者が多い。村人には申し訳ないが、この比類ない機動力を持つ部隊が、村を疾走しながら家々に火を放つ寝かしつけられている吸血鬼は何もできないままほとんどが焼け死ぬだろう。吸血鬼は痛覚を感じないため、自分の身に火がついても気づかないかもしれないのだ。

シモンの部隊はそのままいったん村の中を通過する。遅れてヤンの部隊が突撃し、火を逃れて出てきた吸血鬼を強襲する。主に使う武器は瀉血ダートである。昼間のことで、肌に油を塗りこむ余裕もない。今日の日差しであれば肌はただれ落ちることだろう。動きの鈍い吸血鬼であればこれで十分な戦術である。

「シモンさん、お願いします」

「了解しました。一度抜けた後、反転するタイミングを計ることにいたします」

「注意すべきは数名いるという不死鬼です。降伏する者は殺したくないが、確認する余裕がないこともあるでしょう。瀉血ダートでは彼らを殺すことはできません。自分で引き抜けばいいだけの話ですから。しかし、その分隙はできる。反転するときは瀉血ダートを使う者とメイスを持つ者を二人一組にしてください」

ヤンにしては大雑把な作戦に思えるが、これで十分だった。吸血鬼は攻城戦も苦手だが、守りに入って戦うことはもつと苦手である。組織的な行動が難しいのであるから当たり前であった。

掛け声もなしに、シモンの合図だけで騎馬隊が駆け抜けていく。丘の上から降りる勢いは大岩が転げ落ちるかのようだった。僅か五百の騎兵のかける音が地響きのように思える。

先日、ヤンが輸送部隊に使ったのと同じ投擲用のランタンを使った。一度分散した騎馬隊は次々と家々へこれを投げ込む。人口希薄地帯の村落であるから、建物同士の間には広い空間があり、隣家に燃え移るようなことはあまりないが、あつという間にあらゆる建物に火がついた。勢いをそのままに騎馬隊は村から離れ、逆側に突き抜けて再結集する。

「ちっ！うわさのヤブ医者の小細工かつ！すぐに吸血鬼をおこせっ！この緊急時だ！肌が焼かれようととりあえず外に出すのだっ！」

フーゴーはいらだちながら的確な指示を出した。これしか対応のしようはないのだが。そして、対応の予想がつく攻撃を仕掛けることがヤンの戦術の真髄であった。

フリーゴアの指示により、イエケリー又と二名の不死鬼が操死鬼を使って消火にあたる。全ての建物を鎮火させることは無理と考え、特に多くの吸血鬼が眠る建物に限定して消火活動を行わせた。もちろん、敵軍がさらに殺到してくることも予想できている。こちらはフリーゴア自身が急ぎかき集めた吸血鬼たちで対応する。この緊急時にあって、冷静な対応はヤンの予想を超えていた。しかし、こちらに対応不可能な範囲ではない。

「いくぞっ！フリーゴアを討ち取るっ！」

この時のヤンの声はケテル村の医師ヤン・エッシャーのものではなく、護国騎士団長代理ヤン・ファン・バステンのものであった。武人としてのヤンの姿がそこにある。公国最高の武人と言われるウイレムに劣らぬ気力がそこにみなぎっていた。

フリーゴオもまさか昨日の今日で襲撃を受けるとは考えていなかった。三日でも時間があれば、瀉血ダートを使った攻撃にも対応方法を考えたことであろう。決して無能な男ではない。しかし、相手も疲労困憊していると考えて、油断していたのも確かであった。何より昨晩戻ってきたイエケリー又に対する怒りが、そうした冷静な思考を妨げていたのかもしれない。落城させるとまでは行かなくとも、いくばくかの被害を相手に与えるぐらいは出来ると考えていた。それも適わず、貴重な不死鬼の指揮官を二人も失い、三千の吸血鬼が全滅したのである。思いつく中での最大の損失であった。実の娘で、自ら父に倣い不死鬼となった女をフリーゴアは平手打ちにし、怒気が収まらぬまま、この時を迎えていたのである。

どうにか屋外に脱出した吸血鬼はフリーゴアの周りに円陣を組んだ。この程度の動きは出来るように、犬笛を使った催眠術を工夫していたのだ。これはまだフリーゴア自身にしか出来ないことである。

そこにヤンの部隊が突入する。まともに激突したのではなく、距離をとって騎馬隊は円陣の周囲を回りながらやはり瀉血ダートを投げける。フーゴーは円陣を崩すわけにはいかなかった。円陣にほころびが生じれば、その瞬間そこから騎馬隊が突入してくることは目に見えていた。吸血鬼はとっさに行動を変えることが苦手である。突入してきた騎馬隊に対応するには間に合わない。

だが、いざ、戦いとなればフーゴーも冷静になっていた。円陣のあちこちで血煙が巻き上がる中、その内側より、矢が放たれたのである。

「きゅ、吸血鬼が矢を放つのか？」

騎士たちは僅かに動揺したが、ヤンにはすぐにカラクリがわかった。矢は大量に放たれているが、狙いを定めてのものではない。数人が矢を受けたが、幸いにも致命傷ではなかった。

「おそらく矢を放っているのは操死鬼だっ！周囲を回りながら円陣からの間合いを取れっ！接近、攻撃、離れることを繰り返すのだった！タイミングを計って矢を放つようなことは奴らにはできないっ！」

動揺しかけた騎士たちもすぐに落ち着きを取り戻した。ヤンへの絶大な信頼のなせる業である。ヤンの指揮に従うのは戦闘にならなかつた中央医局の強制捜査に参加した者が半分程度いるだけだが、すでに全員がヤンにウイレムと同様の力を感じていたのである。

フーゴーの円陣はあつという間に赤い円形の血の池変わっていった。そこにシモンの騎馬隊が勢いを付けて突入してくる。円陣に参加できなかつた吸血鬼を次々と瀉血ダートとメイスで倒していく。

「シモン隊長！フリーゴーをお願いします！騎士たちでは荷が重い可能性があるっ！」

「承知っ！」

阿吽の呼吸であった。言葉など要らないくらいで、ヤンが自分に呼びかけた時点でシモンはフリーゴーと思しき鎧の不死鬼に向かって駿馬を駆っている。

それ以外のシモン配下の騎士たちの一部が、フリーゴーの周囲にいた数名の不死鬼に向かった。瀉血ダートとメイスをもった騎士が二人一組で襲い掛かる。ただし、メイスを持つ者は頭蓋を破壊するほどの力では攻撃していない。うまく昏倒させ、生かして捕らえることができれば、マージン同様に救うことができるかもしれないからだ。

シモンは互いに馬上のままフリーゴーと対峙していた。

「フリーゴー・ファン・ドースブルフ元帥！お初にお目にかかる。護国騎士団第三部隊長シモン・コールハースがお相手仕るっ！」

「ふん、青二才がっ！小細工はたいしたものだったが、武技で俺に適うとも思っただかっ！」

シモンはこの時、昨夜同様、右手には愛用の長剣、左手には瀉血ダートを握っていたが、さらにこれ以外に、背中に一本のレイピアと腰にパリーイングダガーを指していた。馬上では使いにくいのが、万が一ヨハネスがいた時のための用意である。

フリーゴーに瀉血ダートを投げてもダメージを与えることは難しい。体にはがっしりとフルプレートと鎧を着込んでいるし、頭部にもフルヘルムを被っている。フリーゴーとわかったのは、その鎧に見覚え

があつたからで、顔を見てのことではない。そもそもファン・ダルファー邸でも臭気攻撃に対応するための例の奇妙なマスクを付けていた。

だが、シモンは正確にフルヘルムの覗き穴を狙ってダートを投げた。フーゴーは頭を振ってこれを交わすが、僅かに体勢を崩す、その瞬間、シモンは剣をフーゴーの頭に向かって投げたっ！

大きな音立てて、剣はフルヘルムに激突し、フーゴーの頭から吹き飛んだ。フーゴー自身もバランスを崩し、落馬する。それを見たシモンは自分を馬から下り、背中のレイピアと腰のパーティーングダガーを抜いて構えた。

「くっ・・・尻の青い餓鬼が・・・味なまねを・・・」

そう言ってこちらを向いたフーゴーを見た瞬間、シモンは絶句した。
・
・

その時、ヤンは昨晚に続いてイエケリー又と対峙していた。徒歩で操死鬼に指示を出していたのを見つけ、自分も馬を下りている。

「くっ！ヤブ医者めっ！」

父親に殴られたことも含め、全てはヤンのせいであった。イエケリー又の目には復讐の炎が燃えていたが、ヤンはまったく動揺していない。

「もう諦めなさい。昨日の戦いでわかった。貴女は一流の武術家で

不死鬼の力を得てその面ではかなり実力だが、戦争は素人だ。貴女の指揮では吸血鬼など野良犬の集団でしかない」

諦めろといいながら、言葉の意図は挑発であった。振り下ろされたフレイルをあえて短槍で受ける。鎖が巻きつき、それをイエケリー又が引き寄せようとした瞬間、ヤンは鎖に巻かれたままの短槍をイエケリー又に向かつて投げた。

鎖が巻かれたままであるから、槍は投擲されたようにまっすぐには飛ばない。斜めになった棒がイエケリー又に叩きつけられただけでダメージにはならなかったが、それを手で振りはらった瞬間、目の前にヤンがいた。ヤンは素手でイエケリー又に接近し、格闘で決着を付けようとしていたのだ。

すでにフレイルで攻撃できる間合いではなかった。イエケリー又は右の拳をヤンに向けて突き出す。ヤンはそれを左に避けて、自分の右手で手首をつかみ、同時に左手の手刀をイエケリー又の喉元にたたきつけた。不死鬼といえど、喉仏が急所であることには変わりない。痛覚は鈍いが呼吸に支障をきたせば苦しむことにはなる。何よりヤンの力は常人並でもイエケリー又が拳を放った力をそのまま利用している。絶妙のタイミングで放たれたカウンターであった。

「うっ・・・!？」

次の瞬間、イエケリー又は背中からのけぞるよう一回転して宙を舞い、頭から地面に叩きつけられていた。ヤンが東方の武術に関するうわさにヒントを得て自ら編み出した体術の応用である。どんなに筋力を付けようと、人間の間接の構造そのものが変わるわけではない。力を入れようと思っても、入らない向きと言うのがある。ヤンはそれを巧妙に利用して、手刀を放つ同時につかんだ手首を捻り、

自分の力によらず、イエケリーヌの反射的な動きを利用して投げたのだ。

「お嬢さん、少しは私の話も聞いていただきましょう。医者の話はちゃんと聞いた方がいい」

シモンを驚愕させ、一瞬の隙を作ったのはファン・ドースブルフの顔であった。顔全体が無残にも赤く焼け爛れていた。不死鬼となつた後、日の光を浴びてのことだろうが、豪胆なシモンと言えど覚悟なしには直視できないほどの容貌だったのだ。

フリーゴはその隙を突いて攻勢に転じる。先ほどのシモンと同様に自らの剣をシモンに向けて投げつけた。

シモンの二剣を用いた剣技は敵の攻撃を自分の刀身で滑らせ、自分は体勢を維持したまま、相手の体勢を崩すものだが、投げつけられた武器に対しては対応できない。豪腕で飛ばされた剣を叩き落すためには両手の力が必要だった。シモンはレイピアとパリーイングダガーを交差させて、剣を叩き落とす。そのうちにフリーゴは馬の上に体を移し、シモンの傍から走り去った。

拾った短槍をイエケリーヌに突きつけていたヤンも、フリーゴの攻撃には意表を疲れた。猛スピードで迫ったフリーゴは馬をさおだたせて、ヤンを馬蹄で踏みつけようとしたのだ。かろうじてかわしたもののイエケリーヌからは離れざるを得なかった。すぐさまイエケリーヌはフリーゴの後ろに飛び乗る。彼女の肩には馬蹄のあとが残っていた。ヤンがかわした馬蹄を代わりに受けてしまったのだ。

「たいした知略と武技だが、次はそうはいかん。今日はお前の勝ちだがな」

捨て台詞を残してフーゴーは去っていった。あえて配下の騎士たちには追わせない。シモンでさえ侮れない相手を一般の騎士ではどうすることも出来ないはずだった。

少しの間を置いて、ジェラルドの歩兵隊が到着する。数名の不死鬼の身柄を拘束し、吸血鬼の死体を焼き払い、まだ火の残っていた建物の消火などの事後処理は彼らの手によって行われた。

「今回はこれぐらいで良いでしょう。少なくとも合計五千の吸血兵がこの二日で全滅しました。不死鬼もフーゴーとイエケリー又以外は戦死か捕虜にしたのですから」

「画竜点睛を欠く点もございましたが・・・」

「いえ、あの二人が生きていれば、不死鬼軍はいつまでも一枚岩にはなれないでしょう。フーゴーは冷静に見えて感情で動く男です。ファン・クラッペのような奴とそりが合うとは思えませんから、生きていた方がこちらにも使い道があります」

シモンにそう答えたヤンはさすがに疲れた様子だった。二日続けるの完勝である。しかも、このケテル村奪還戦では、こちら側には操死鬼の矢による軽傷者以外の被害はなかった。シモンもジェラルドも感心せざるを得ない。この男の頭脳さえあれば、本当に不死鬼軍など恐れる必要はなかった。

しかし、後日、彼にも限界があることに気づく。自分のいない場所で起こることには対応できるはずもなかった。

祝勝会

ケテル村奪還の報はその翌日の朝にはアメルダムにも届いた。さすがのウイレムでも舌を巻く電光石火の作戦であった、公国元帥である兄は弟のことを激賞した。

「たった二日！たった二日で五千の吸血兵が全滅かつ！しかも、こちらの被害は軽微。不死鬼軍の連中がちょっとだけ気の毒に思えてきたぜっ！十年前だってそんなハイペースじゃなかった」

そう言つて、祝杯を挙げるべく、今晚は戦勝パーティだと騒ぐウイレムを尻目に、カリスは大忙しであった。酒豪と酒乱は同じベクトルを向くとは限らないらしい。カリスはマージンをはじめとする数名の不死鬼軍の部隊長や、ノップラー副隊長の受け入れ態勢を作らねばならない。

どう考えても、今のロビー・マルダー治療チームでは人数が足りないため、マルガレータの下に人員を増やすことにしたが、まだ二代半ばの若い娘に多くの部下をつけるのは無理がある。カリスは一計を案じた。公国医学院の学生、それも女性ばかりを彼女の下につけたのである。もちろん、成績優秀な者ばかりで、人物についてもカリス自らが鑑定した娘たちであった。彼女たちの経験不足を補うのは、クリステル財団総合診療所から派遣してもらった女医たちで、こちらは長いこと院長としてカリスを上を頂いていたせいで、若い医師が上に立つことには抵抗がない。

さらに、やはりクリステル財団総合診療所からは十数名の看護婦も派遣された。彼女たちはサスキアの下につくことになる。元々、サスキアは総合診療所の看護婦で、もう少し長くいれば、若くして総

婦長になつていてもおかしくなかつた。これもまた無理のない人事である。

ロビー・マルダーの場合と違い、不死鬼軍の部隊長であつたものについては、反逆罪に問われる身であるので、当面は患者であると同時に囚人である。また、ロビーやノツプラーのように怪我をしていくわけでもなく、荒んだ前歴の持ち主ばかりで一応の警戒は必要であることから、保安兵団から監視の要員も派遣されることとなつた。それと同時に、カレンが率いる社会復帰プログラムの実施チームが希望や身の上を聞き取り、反乱終結後の生活についての準備も始めることとなる。

国公ジェローン・ルワーズはヤンの求めに応じ、心ならず不死鬼軍に加わつた者への特赦を即断した。反乱終結後と言うことで、当面は身柄を拘束されるが、その間に、筋力異常発達やその他の症状を抑える処置を行うので、これはほとんど無罪とする判断である。当然、閣僚の中からは反対意見も出たが、ジェローンは語気を強めて言つてのけた。

「彼らを捕らえたのはヤン・ファン・バステンであり、彼らを常人並みにする方法を考えたのはヤン・エツシャーである。この処置を決められる者は他にいるか？！」

もちろん、ヤン・ファン・バステンとヤン・エツシャーは同一人物である。誰もがヤンの武勲と医師としての実績の巨大さから、これにはまつたく反論できなかつた。護国騎士団、公国中央医局、保安兵団以外の者たちは、この件について何も出来てないのである。かろうじて、國務府の関係者であるシルヴィア・ファン・バステンとカレン・ファン・ハルスが動いているだけで、この二人は完全にヤンの案に賛成であつたから、例えば國務卿ベルト・ファン・レオニ

ーと言えど口を挟む余地はなかった。もつとも、この件については意外なことに、ファン・レオニーは反対意見を述べていない。

社会復帰プログラムについては、何せまったく新しい試みであるから、敏腕のシルヴィアといえども手探り状態である。カレンが考えていた以上に優秀で、細やかな心配りを見せてこの件に対応しているが、それでも、心もとないところはあった。ところが、ファン・レオニーはこの件についてずいぶんと協力的で、経験豊かな人材を供給し、社会復帰プログラムの実施チームは優秀なスタッフで陣容を固めることができたのである。シルヴィアはアメルダムでの行政経験のないカレンが、ファン・レオニーの貸し出したスタッフを使いこなせるかも多少は心配したのだが、彼らはカレンにきわめて従順で、彼女を崇拜すらしていた。カレンの完璧な貴婦人としての教養の高さと、美貌がすべてをよい方向に向かわせたらしい。

アメルダムでの戦勝パーティーは護国騎士団だけの話ではなくなっていた。これは、国家の危機に対する最初の明確な勝利であった。ウイレムやリートフェルトが吸血軍を撃退したとはまったく意味が違う。リートフェルトも千人の吸血鬼を全滅させたが、敵の拠点を制圧したのではなく、ノールトを放棄した際に発生した戦闘であった。

戦勝パーティーはアメルダムの全市民に対してワインが提供され、多くの出店が出る形で、首都全体が会場となって行われた。もちろん、公国政府の首脳たちは宮廷のパーティー会場に集まった。これには、護国騎士団本部で対策に動いている中心人物も招かれた。公国元帥であるウイレムや、閣僚に順ずる参事官、非常勤顧問の職にあるシルヴィアやカリスに加え、特別監察官であり今後の社会復帰プログ

ラムの実施責任者であるカレン、城塞都市への全国民の収容という大事業を計画しやってのけたピーテル・ブルーナや、吸血鬼治療チームの責任者であるマルガレータまで呼ばれたのである。さらに、今回の勝利の立役者である護国騎士団長代理ヤン・ファン・バステンの代理の名目で、その婚約者サスキア・ウテワールまで招かれたが、これはどうも国公ジェローンの好奇心からのものであった。

「いやあ、これはこれは、あの奥手そうなエツシャー先生も意外にやるね。これほど美しい方とご婚約されるとは」

「あら、陛下、たとえ公国の第一人者たる国公陛下と言えど、他人の婚約者に手を出すようなことがあれば、殺されても文句はいえませんが、これほどよ」

「ははは、まあ、何せこれだけの武勲を挙げたヤン・ファン・バステン殿だ。とてもとても手はだせないね」

国公は他国の国王ほどにお高くとまることはない。特にジェローンはかしこまった振る舞いが嫌いであった。出来ることなら、一般市民と同様に街を自由に歩いて、さまざまの人々と交流したいと考えているし、現にしょっちゅう微行に出ている。パーティの席でも、会話は無礼講であった。頭の古い貴族たちは相変わらず堅苦しい口調で話しかけてくるのだが、シルヴィアやウィレムが気軽に話しているのをとがめだてすることはない。すでに、ファン・バステン家が公国政府の実質的な責任者となるであろうことを、閣僚たちは確信していたのである。

ジェローンはきわめて上機嫌であった。実を言えばジェローンは不死鬼軍事件が実際に国家を覆すほどの大事件にはならないことを確信している。それだけ、ヤンやウィレム、シルヴィアなど解決に当たる者たちを信用していると言うのもあるのだが、ヤン自身がひそかに書簡で述べたとおり、実際のところ吸血鬼の軍などナンセンス

であると彼自身が考えていたからであつた。

むしろ、ジェローンはこの事件をきっかけに、公国の旧体制を一掃し、さまざまな意味で、本当の「ルワーズ独立公国」の建国に乗り出すことを考えている。この十年、あいまいなままのフリップ、インテグラ両王国との臣従関係を完全に解消し、女性の社会進出をさらに促進し、貴族中心の政治の世界に平民の力を取り入れて、より自由で闊達な社会を作り上げることが若い君主の夢であつた。

今度はジェローンはカレンに話しかけた。シルヴィアは一瞬何かを期待するような顔をする。シルヴィアとしては、フリップ、インテグラ両王国との関係がはつきりとしたなら、次は国公ジェローンの結婚を考えねばならないと思つている。一国の君主が三十まで独身というのはあまり格好のいい話ではない。まるで、この国の晩婚化という問題を象徴しているかのようなのである。国際的な問題にさえならないのなら、すぐにでも結婚相手を探したいところなのだ。

「あなたが、ファン・ハルス伯の妹君ですね。シルヴィア殿から聞きました。不死鬼の社会復帰プログラムの実施に大変尽力されているとか。優秀な行政手腕もお持ちとのこと。まさしく才色兼備。あなたのような方がアメルダムに来てくれて大変うれしく思います」

ジェローンと言う若者の言葉には過剰な装飾はないが、他人が言えばいやみに聞こえるようなほめ言葉をごく自然にさりと言つてのけるところがある。決して軽薄な男でもない。恋愛については、いろんな事情からあまりおっぴらにはなつてはいないが、年齢相応程度の経験はある。ヤンやシモンなどに比べればはるかにまして、事情さえ許せばとつくに結婚していたことであらう。ただし、カレンに対してはこれだけのほめ言葉を並べながらも、異性として意識してのものではないようであつた。ジェローンは他人の心持につい

て実に勘のいい男であり、カレンの表情から何かを感じ取ったようである。

「お褒め頂いて大変恐縮でございます。非力ながら出来る限りの努力をさせていただきますわ」

まったく臆することなく、完璧な礼節を保って返答するところはさすがであった。

「あなたの兄上にも是非一度お目にかかりたい。機会がありましたら、是非宮廷にお越しください。いろいろとお話をさせていただきますたいのです。ザーンではエッシャー殿の要請に応じて、第二部隊長の代理を臨時に勤めていただいているとか。自治領での行政手腕や水産物の取引での成功も聞いております。そのように文武両道、多彩な才能のお持ちの方には公国の行政にもぜひ参加していただきたいのです」

「兄は国境地帯での田舎暮らしがとても気に入っております、そのあたりがエッシャー先生とよく気があう理由なのですけれど、今回の件が落ち着いたらアメルダムに顔を出すように伝えておきますわ」

「是非、お願いします。まあ、エッシャー殿もそうですが、都会での生活や宮仕えに気が向かない方に無理を言うつもりはありません。非常時だけでもご協力いただければ大変ありがたいのでね」

身分の高い人物とでも、このようにすらすると会話を出来るのは、普段からこういう場に慣れていて、自身も上流階級に属するウィレム、シルヴィア、カレン、カリスぐらいのもので、ピテールや、マルガレータなどは緊張のしっぱなしであった。ジェローンは、不死鬼の社会復帰につながる提案を最初に述べたと言うマルガレータにも強い興味を持っていた。ただし、彼女も婚約中であることは先に

シルヴィアから聞いている。

「バレンツ主任研究員、あなたは本当に大事なことを私たちに気づかせてくれたのだと思います。不死鬼や吸血鬼と言う存在を恐れるだけでなく、公国の民であると言うことを教えてくれた。研究者としても大変優秀だとカリヌ殿から伺っております。今後とも是非がんばってください」

「は、はひ、はいっ！き、きき・・・きよ、恐縮で、で、ごさいます」

「マルガレータさん、そんな緊張しなくていいのよ。陛下と言えど一人の人間。普通にあなたと会話をなさりたいんですから。吸血鬼だって一人の患者と違ってがんばっているじゃないの」

「はは、そうですね。私だって吸血鬼だってちゃんと人間です」

「は、は、はい。よ、よよ、よろしくお願いします」

初めてピーテルがジェローンに会ったときと似たり寄ったりの反応で、ジェローンはこの会場には珍しい年下の二人に微笑した。これほどお似合いな一組と言うのもなかなかないだろうと内心で思った。

そのピーテルは財政府や通商府の関係者に包囲され、今回の城塞都市への住民収容計画について質問攻めにされていた。これほど大規模で強引な計画をまったく混乱させずに短時間で成功させた人物が、わずか二十四歳の、若いというより幼く見える男であると言うことに皆驚きを隠せない。ピーテルの場合は、最初はマルガレータ同様しどろもどろの対応しか出来ないのだが、話が仕事になると見違えるほどハキハキと話し出す。子供のころから天才児と言われるながらも、ずつといじめられっこであった彼である。シルヴィアに見出されて史上最年少の主任主計官に任じられなければ、半人前以下の兵士で一生を終えていたことだろう。

サスキアは必ずしも、こうしたパーティに慣れてはいないが、カリスと一緒に参加したこともあり、また、マウリッツの屋敷ではごくたまにはあるが、パーティが模様され、メイドとして取り仕切ったこともあった。そのため、場慣れしているとまではいえなくとも、マルガレータやピーテルのようにおどおどしてはいないのだが、この日は所在無ざ気につつむいていることが多かった。珍しく着込んでいるドレスもよく似合ってはいるが、色の選択は妙に地味である。

「サスキアさんでしたね。もうじきエツシャー婦人になられると言う。どうかなさいましたか？」

浮かない顔のサスキアを見てジェローンは少し心配になったようである。もちろん、邪な気持ちなど一切ない。

「いえ、陛下、お気になさらないでくださいませ。少し酔ってしまつたようですわ」

「はじめからほとんどお召しになってないようですが？何かお悩みのことでも・・・ああ・・・エツシャー殿のことですか？」

ジェローンはやはりこう言つた事には勘が働く。

「武勲を挙げたと言っても、戦いはまだ終わってませんし、武勲などよりも無事に帰ってきてほしいと願うあなたの気持ちはよくわかります。出世も名誉も望んでいないエツシャー殿にこうしたご苦労をおかけすることは、本当は申し訳ないことです。あなたがそうした憂いを感じることも私の責任です」

「いえ、そ、そんな・・・陛下・・・顔をあげてくださいまし・・・」

ジェローンは本当にヤンには申し訳ないと考えていた。ジェローン

自身は先日の謁見までほとんどヤンに会ったことはない。十年前にもヤンはルワーズ公国の独立と吸血鬼の掃討につながる策を提案し、最大の貢献を成したが、前者はシルヴィアを通じてファン・レオニが、後者はカイパー博士によって宮廷に持ち込まれたものであり、直接の面識はその時はなかった。だが、シルヴィアから話を聞いて、年齢の近いヤンが実は公国最大の英雄であることを彼は知っていたのである。彼に何も報いることができず、しかも、新たな困難に立ち向かわせている自分に引け目を感じていたのだった。

「サスキアさん、あなたの婚約者には私はどのように報いれば良いだろうか・・・？」

ジェローンの真剣な問いかけに、サスキアは憂鬱な気持ちを忘れてしっかりとした口調で答えた。

「ヤンは、いえ、ヤン・エッシャーは子供ころから患者のために全力を尽くす医者でありたいと考えていました。そして、カイパー博士の教えの下、患者とは一人一人の人間のことだけではないと言う考えに辿り着きました。人々の集まりである国家や社会が病み衰えたとき、全力を尽くして回復に向かわせることも自分の義務であると考えています。彼が望むのは自分が手を尽くす必要のない世の中、健康な社会が続くことにあると思います。私などが口にして良いことではないかもしれませんが、陛下が善政を布き、そうした世の中を作り上げることこそ、彼のもっとも望むことであると思いますわ」

ジェローンは珍しく興奮した。サスキアの言葉が胸に響いたのである。

「よくおっしゃってくださいました！エッシャー殿がご苦労される必要

のない、ケテル村でのんびりと診療所を営める世の中を作ることこそ私の義務です」

さらにジェローンは、君主として神に宣誓する姿勢をとって、サスキアに向かって宣言した。

「国公ジェローン・ルワーズはここに宣言する！国公の役割とは国と国民が健康に日々を過ごし、病み衰えることなく生き続けられるように全力を尽くすことにある！私はそのために一生をささげる！」

サスキアは胸を張っていた。君主たるジェローンに人生の目的を再確認させたのである。マルガレータやピーテルなどにはできないことだった。そしてそれはシルヴィアやカリスでさえ驚かせたことである。今や公国最大の英雄として世に出てきたヤン・エツシャーも、この女性あつてのことであろうと思われたのだった。

「陛下！陛下だけではございません。私どもも陛下とともにそうしたルワーズ公国を作ることに全力を尽くしとう存じます！」

多くの閣僚たちがジェローンに跪きながら異口同音にそう述べた。サスキア一人の言葉によって、その場にいたすべての閣僚や高位の貴族たちの心が動かされたようである。

そのとき、一人の貴族が前に進み出た。公国政府の首班、國務卿たるベルト・ファン・レオニーである。

「陛下、陛下にお願いしたい儀がございます」

思いつめた表情であった。何を言い出すのかと閣僚たちが顔を見合わせる。

「申してみよ」

「このファン・レオニー、國務卿の職を辞し、シルヴィア・ファン・バステン殿にその席を譲りとうございます」

「！」

誰もが何も言えなかった。明らかにシルヴィアを敵視し、國務卿の職に執着していた男の言葉とは思えなかったからである。シルヴィアやウィレムでさえ息を呑んだ。まったく予測し得ないことであつた。

「理由を申してみよ」

「このファン・レオニー、十年ほどのあいだ國務卿の職を勤めさせていただきました。しかし、今回の件については、私は足手まといでしかございませんでした。予防することも解決に尽力することもなく、こともあるうか、私の所有する邸宅を不死鬼軍の策謀に利用されております。何より、十年前よりシルヴィア殿の才覚は私を遙かに凌ぐものであることをよく存じております」

「お主の申すこと、間違つてはいないがなぜこのときにそのことを申した？」

「今のそちらの・・・サスキア殿のお言葉にございます。私は大切なことを忘れておりました。國務卿の地位は自分のためにあるものではありません。国家と民のためにあるものでございます。今、この国に必要なのは私ではなく、シルヴィア殿の才覚です。今回の事件だけでなく、シルヴィア殿の力によって、より力強く自由で清新なルワーズ公国を作り上げるためにも、私は退くべき人間であるのだと確信いたしました」

よどみなく、しっかりとした口調であつた。ベルト・ファン・レオニーは決して無能な男ではなく、また、小人物でもなかつた。十年

前のルウィーズ公国継承戦の際、シルヴィアを通して聞いたヤンの策を受け入れた一点においても、そのことは知れようと言うものである。自身が権力の座に着くことで、わずかに歪んだ政治家としての意識がシルヴィアとの対立を招いたが、それでも、この十年の独立公国建国の礎を築いたのはこの男だったのだ。

「宮廷書記官！特別辞令を發布する！」

パーティの席でも宮廷書記官はいつもジェローンの背後に控えている。やはり、あわただしく用紙を取り出し筆を構える。

「國務卿ベルト・ファン・レオニーの辞意を受け入れ、新たに國務府と宮廷府の特別顧問に任じるっ！」

宮廷府はジェローン自ら統率する宮廷の組織である。宮廷書記官に代表されるジェローン直轄の政務官が所属し、各政府組織との連絡役を担う。その顧問はすなわち国公たるジェローン自身の相談役であり、格式は閣僚と同列であった。國務府の顧問はシルヴィアの現職ではあるが宮廷府と兼任であればその発言権は決して小さなものではない。

「國務府と司法府の特別顧問を兼ねるファン・バステン婦人を國務卿に任じるっ！この人事に異論のある閣僚はあるかっ？！」

閣僚の人事については、臨時の代理などの場合を除き、他の全閣僚の承認を要する。ジェローンはこのパーティの場でそれを取り付けようとしたのである。

「いけませんっ！」

閣僚のほとんどは元々シルヴィアを信望している。年長でより高位の爵位を持つものでさえそうであった。何より、ファン・レオニー自身の潔い辞意に皆が感動しており、反対するような雰囲気は一切ない。

「国務府臨時事務官カレン・ファン・ハルスっ！」

カレンの現在の職務は伝染性吸血病対策基金の運用を監察する特別監察官であるが、身分としては臨時の事務官の扱いであった。

「あなたを正式に国務府の参事官に任ずるっ！ファン・バステン婦人を補佐し、婦人が出産のために公務に支障ある場合は、ファン・レオニー特別顧問の助言の下、国務府の運用にあたれっ！」

これは大抜擢であった。アメルダムでの行政経験のない、まだ二十代のカレンを極めて権限の大きい参事官に任じたのである。しかし、これにも反対の声は上がらなかった。まだ、十分な実績を上げているとはいえなく、何よりアメルダムにおける公務の経験は数日しかない。それでも、反対が出なかったのは、このパーティの場における彼女の発言一つ一つに英知が感じられたからであろう。誰も着手したことのない不死鬼の社会復帰プログラムの策定も始まったばかりではあるが、閣僚たちにはすでに到底なしえない成果を挙げているのである。

「ただしっ！これらの人事は不死鬼軍事事件の解決の後に実施されるものとする！ファン・レオニー伯、この件が解決するまでは、シルヴィア殿にはこちらに集中してもらいたい。もう少しの間は勤めてくれまいか？」

「承知いたしました」

ファン・レオニーの態度は悪びれもせず、実に堂々としたものであった。ここ数年、シルヴィアと対立し、権力にしがみつく体を見せていた男が見違えるようである。そしてその表情はつき物が取れたかのように晴れ晴れとしていた。

「ファン・レオニー伯……」

思わずシルヴィアは声をかけた。元々自分の上司であった人物であり、シルヴィアの才覚をはじめに気づいたのもファン・レオニーであった。

「シルヴィア殿……出産と言う大事業を前にして、ご苦労をおかけする。しかし、あなたほどこの国を治めるのにふさわしい人間が、非常勤顧問などと言う職にあるのはやはりおかしい。その才覚を存分に示してほしい。何より、女性の社会進出を推し進める中、その旗手たるあなたが、女性であることや、子供の養育のために政務に携わらないと言うわけにはいかないではないか。政府の最重要職であつても、十分にこなせるようになることが大きな意味を持つことになる」

「ファン・レオニー伯、肝に銘じます。非才なる身、全力をもって国家と民のために尽くします」

誰かが乾杯の音頭を取った。宮廷でのパーティーはこうして公国初の女性國務卿の誕生が予告されると言う珍事をもって終えたのである。

宮廷での戦勝パーティーは二時間程度で終わった。上級の貴族たちが中心パーティーでは食事は豪勢でも量も少なく、会話に口を使わなければならなかった。胃は落ち着かない。一行は牡鹿亭で二次会を

行うことにした。

「やあ、シルヴィア殿。遅かったではないか。先に一杯やらせていただいたよ」

なんと、そこにはジェローンがいた。胃弱の侍従長が心配だと言いながら、ジェローンはほとんど毎日微行に出ている。ヤンとピーテルもいたあの日以来、牡鹿亭はジェローンのお気に入りのお店になってしまっていた。店主も心得たもので目立たないように隅の個室に通すことにしている。実を言えばジェローンの微行はアメルダム市民の間でも有名であり、公けには出来ないものの、国公陛下御用達になることは、店を持つ者すべての夢であった。

「陛下・・・また抜け出してこちらに？」

「私だつて宮廷のパーティの食事などでは胃が落ち着かないのだよ。気取らない食事に混ぜてくれてもいいだろう？」

シルヴィアもあきれている。どこの国にもこれほど身軽な君主はいないのであるだろうか。

「ささ、ウィレム殿もガンガンいきましよう。多少なら暴れてもかまいませんよ。個室ですし」

実を言えば公国元帥就任について一つだけ問題視されたことがあった。護国騎士団のようにルワーズ公国全軍がウィレムの人格的影響を受けて、ことあるごとに街に繰り出して大騒ぎをするようになった。『護国騎士団の方お断り』どころか『軍関係者お断り』の看板を掲げられてしまうかもしれない。仕方なく、ウィレムは遠慮して最近の街の店で飲むことが減っている。

「ああ、カリス殿もさあ呑んで呑んで」

カリスのここ最近の酒乱振りまでジェローンは知っていた。カリスは赤面している。

「ふふ・・・実はこつそり何度か護国騎士団本部にはお邪魔させてもらっているのだよ。先日のパーティにもね。護国騎士団の制服を用意すればどうとでもなる」

全員あきれてもも言えない。ただ、このときのジェローンの発言が後日の重大な事件を示唆するものであったとは、発言した本人でさえ気づかぬことであった。

ジェローンの気楽な態度にシルヴィアやウィレム以外の者も各々挨拶をして、打ち解けた雰囲気になった。若い君主はこういったことが得意である。君主らしからぬ君主として振舞うことができ、一方で、近隣でも名君として名をはせるだけの実績もある。

食事はさすがに量は控えめだが、店主はかなり奮発していた。宮廷のパーティ料理になど負けてたまるかと言うところである。牡鹿亭の料理は格式ばったものではない。フリッツやラウラ風の料理まで取り混ぜ、ルワーズの産するさまざま食材を使ったフルコースが味わえた。酒もワインだけでなく、さまざまな果実酒やビールもある。シルヴィアとピーテルだけは、酒を飲まずに果汁を注文した。

ウィレムはさすがに暴れるまで飲む気はないが、上機嫌であった。ヤンは弟ながら、天才的な軍将であり、実を言えば十年前の吸血鬼掃討戦の功績で護国騎士団長の座についた事にも多少の引け目を感じていたのである。弟が名誉も地位も求めていないことはわかってはいるが、何か手柄を兄が横取りしているような気がしてしまうのだ。

「ウイレム殿のすばらしいところはそこだ。弟気味にまったく嫉妬していない。そして、面倒くさがりの彼のために、平時は軍の管理などと言う地味な仕事をちゃんとこなしておられる。これからもよろしく願います」

「恐れ入ります」

「ただ、全軍が酒飲みになって、街で暴れるようなことだけはないようにしていただきのですがね」

全員が笑い出す。シルヴィアは赤面して、夫の頭を小突いた。

「カリス殿とマルガレータ殿に聞きたい。不死鬼として長く過ごした者はどこまで普通の人間に戻ることができるだろうか？」

これは重大な問いであった。ロビーの場合とは違うはずである。十分に社会生活を営めず、つらい目にあうことがあれば、不死鬼は再び犯罪に手を染めてしまうのではないか。そう考えてのことであった。

「実際に治療を始めてみませんとなんととも言えませんが、エツシャ―先生からの報告によりますと、すでに不死鬼軍の捕虜にアンスレテロドを投与したところ、わずかながら痛覚の鈍化に改善が見られたそうです。筋力が平常に戻るまでには時間がかかるとは思いますが、希望は見えてきております」

「昼間の行動については、新たに開発した粘り気のあるゼリー状の油がかなり便利です。人の手を借りなくとも衣服から露出している部分に塗ることが出来ますし、植物の種子をすりつぶして作ったパウダーをその上に使うことで、べとつきやにおいも抑えることに成功しています。入浴の回数も夏の暑い日をのぞけば一日二回にまで減らせます」

「ほう……そこまで……すばらしい」

カリスに続いてマルガレータが説明したことにジェロームは感心した。マルガレータの心遣いは一部の閣僚たちはそれほど評価しなかったのだが、『人間らしい生活を送れるように』と言う彼女の基本方針は見事に徹底されていた。吸血鬼治療チームはこのわずか月足らずで目覚しい成果を挙げている。カリス・クリステルとマルガレータ・バレンツの医学上の功績は、いずれカイパー派の医師たちに次ぐものになるう。

「食事については、確かサスキア殿が担当されているのでしたね？」
マルガレータはわずかに顔を赤らめた。まさか自分の料理オンチまでジェロームの知られているのか……。

「はい。バレンツ研究員の考案した牛血粉入りのゼラチンを使いまして、牛肉や鶏肉のような食感の擬似食品がすでに生産されております。少々扱いにくいところがありますが、まだ研究が必要です。が、ロビー・マルダー氏からは美味との感想を頂いておりますわ」
「それは、サスキア殿の料理の腕があつてのことかもしれないが、不死鬼が自分でも用意できるような調理法が確立されれば問題なくなりませぬ。これもすばらしいことだ」

今日のジェロームはとにかく女性たちを褒めちぎっている。もちろん、男性についても決してその功績を認めていないわけではないのだが、この不死鬼軍事件においては、女性たちの働きが特に目覚しい。シルヴィアが女性初の國務卿になると言うのはもはや自然の流れであるかのように思われた。

「さて、ファン・バステン元帥、一つ確認したいことがあるのだ」

「なんででしょうか？」

「ヤン殿の軍略により、敵はルワーズ国内の拠点であるケテル村をわずか数日で失った。このあと彼らはどうするつもりであろう？」

話があちこちに飛ぶのは特にジエローンが上機嫌な証拠であろう。

「ヤンほどは戦略眼に自身はございませんが……まず、ノールトを彼らの恒久的な拠点とするための動きをはじめたのではないのでしょうか？ただし、彼らが一枚岩であればそれは可能ですが……」

「なるほど。恒久的な拠点とするためには、補給なしに自足できることが重要になる。少なくとも血液と言う確保の難しい食料を用意できなくてはならない。ヤン殿の考えでは敵は住民を引き連れて戦場を移動するのではないかとのことだった……」

「はい。しかし、まず、ルワーズ公国内の住民はほとんどが城塞都市に收容されてしまいました。あるとすれば フリップ側国境地域の住民を強制的にノールトに住まわせることですが……」

「住民がノールトに移動すれば、今度は住民の食料を用意しなければならぬ。フリップ王国側にいれば住民たちは、自活の手段を持っていてノールトに強制移住したとなれば何もなし……食料ごととザーンに移つてもらったことには大きな意味があつたな。ヤン殿の軍略の奥深さたるや……」

ヤン以外の誰も、城塞都市への全住民の收容と言う強引な計画の意味を正確には理解し損ねていた。実施の責任者であつたピーテルでさえである。結果がでて、その重大さによつてやく気づいたのであつた。

「はい。彼らが一枚岩ならフリップ王国側から血液を供給する住民とその食料を共に輸送すればいいわけですが、フリップ側にいる幹部はおそらくそうしたことを好まないでしょう。ルワーズ側に進出

してきたファン・ドースブルフは窮地に立たされるはず。ましてや、五千もの吸血兵を失ったわけですから・・・」

ヤンにはすでに不死鬼軍の首謀者についてある程度の目星をつけていた。吸血兵を率いているのはファン・ドースブルフであり、技術面でサポートしているのはファン・クラッペである。そしてそのスポンサーとなっているのは、アルベルト・ルワーズであることもほぼ間違いない。しかし、アルベルトはフリップ王家とルワーズ公家の血を引いているものの、独自の領地や財産、兵力はそれほど持つてはいない。吸血鬼や操死鬼だけでは、住民からの採血などの作業には問題があるから、普通の人間の人員が必要である。それを提供でき、吸血鬼の軍に興味を示しそうなフリップ王国側の人物はレオンス・ド・アズナブルル辺境伯しかいないのである。

「ヤンからの報告によれば、ノールトには定期的な血液の補給があるはずで、それをザーンの部隊が交代で補給路の監視を行っているとのこと。吸血鬼たちは眠らせることで必要な血液を大幅に減らすことができますが、出撃するためには相当量が必要です。つまり、彼らはこれから動くに動けない状態になります。」「と言って、手をこまねいているほど間抜けなやつらではあるまい？」

「は。どのみちノールトなど確保していたところでたいした意味はありません。一番近く住民が多くいるのはザーンです。彼らはどうしてもザーンを落城させないと済まなくなります」

「ヤン殿だけでなく、ファン・リートフェルト隊長も大手柄だった彼がいる限り、ザーンは本当に難攻不落に思えるな」

「おっしゃるとおりで。レム・ファン・リートフェルトある限り、吸血兵などにザーンが蹂躪されるなどありえませぬ。攻めあぐねているうちに不死鬼たちが内紛を起こし、自滅してくれると言っのが一番ありがたい流れです」

「それには、まあ、戦略が目的ではないが、中央医局の不死鬼治療と国務府の社会復帰プログラムが生きてくるな。その成果はできるだけ大々的に発表するようにしよう。うまくいけばただでも少ない不死鬼の指揮官が分裂するかもしれない。投降者も現れる可能性がある」

すべて、ヤンの頭脳より発せられたことで、ジェローンを含めここにいる全員も、その着想にそって実務面の補強をしたに過ぎない。ヤン・エツシャーなしにはこれほど一方的に不死鬼軍に対して優位に立つことはできなかったであろう。

ささやかな宴は程なく終了した。ウィレムは暴れ始める直前で自重し、カリスも泣き上戸になる前にサスキアに止められた。珍しく上品な宴会を終えて、一向は護国騎士団本部に戻っていったのである。

「ヤン殿が公国政府が宮廷で要職についてくれるなら一番ありがたいのだがね・・・」

ジェローンの呟きを耳にした者は一人もいなかった。

枢機卿

マウリッツ・スタンジエとカスペル・ファン・ハルスの奇妙な二人連れは旧辺境伯領を出たところで、馬に乗り換えた。辺境伯領内では有人の村に立ち寄ることを避けたのである。驟馬と馬車を売り、最低限の荷物だけを持って、馬購入した。マウリッツは十分な路銀を持っていたし、カスペルもなんだかんだで良家の師弟であるから手元不如意になることなどはない。

カスペルはマウリッツよりも遙かに優秀な騎手であったが、その代わりお世辞にも駿馬とは言いがたい馬に乗っているため、それほどスピードアップにはつながらなかった。二人は徒歩よりわずかに早いと言う程度の時間をかけて、どうにか王都アキテーヌに辿り着いたのである。すでに夕方であったため、近隣でも名高いフリップ王国の宮殿に行くのは翌日のこととした。久々にまともな宿のベッドで眠ることにしたのである。

「スタンジエ先生はこの国の国王陛下に面識がおりなんですよね？」

「ああ、確かに。でも十年以上も前の話だ」

「と言つても、先生が命の恩人なのでしょう？」

「意外と医者顔など覚えてはいないものだよ」

そんなもんかと思いつながらベッドに腰掛けたカスペルは相変わらずメスを片手に、糸の通された筒を弄繰り回している。それでも、以前よりは難しい問題に挑戦しているのだが、ヤンやマウリッツがこの方法で特訓していたころに比べると、上達の速度は遅い。

「さて、カスペル君。私は少し外に出てくる。酒場にも行って情

報収集をしてくるよ」

「あ、私も・・・」

「おいおい、酒場に行くといったらどう？この国では十八を超えないとアルコールを呑んではいけない決まりがあるんだ。特にこのアキテーヌではね。酒場には入れてくれないさ」

「ちえっ・・・」

不本意そうな顔をしながら、またメスと筒をいじり始めた。

マウリッツはアキテーヌの街には今回で三度目である。十年以上前にスペルファ熱の治療法を確立したマウリッツは、すぐにヨルパ大陸西部を一通り旅した。一つは各地の医術を学んで、それをカイパー派の医術に取り入れるため、もう一つはスペルファ熱の治療法を各地に伝導することが目的で、その足跡は病が流行した地域を網羅している。その行き返りにフリッツ王国を通過し、途中でたまたま遊学から帰る途中にスペルファ熱に掛かった当時は王太子のシャルル・ド・フリッツと出会い、治療をしたのである。

言葉にも不自由はない。ルワーズ語は元々フリッツ語から生まれたもので、数百年の歴史の中で訛りが生じたという程度のものであるのだが、マウリッツの場合は発音がフリッツ人にも外国人と気づかれないだけに洗練されていた。これはカスペルも同じで、ヨルパ大陸西部では上流階級の共通語がフリッツ語であるので、子供のころから教え込まれている。まして、ファン・ハルス家はフリッツ王国との国境沿いに自治領を持っているのだから尚更であった。

マウリッツは十年以上前に立ち寄ったことのある居酒屋を探したが、さすがに残ってはいなかった。斜向かいの新しく出来たらしい店に入る。店の中は大入りであった。夕食はすでに済ませてあるので、ルワーズのものよりも遥かに名高いワインとつまみ程度にチーズを

注文する。

情報収集といいながら、マウリッツは別に現地の人々に話しかけようと言うつもりではなかった。面と向かって外国人や旅人と話すことになれば、誰もが話の内容に気を使う。一人で飲みながら、周囲の会話に聞き耳を立てる方がベターであった。

「ラウラとの国境沿いではまた群盗がでたらしいぜ」

「ロシュフォール卿がまた新しい女を作ったらしい・・・今度は何とびつくり、大修道院のあの四重過ぎの院長だつて言うんだから驚きだ・・・」

だいたいはいくらでもない話か関係のない話ばかりだった。それでも、マウリッツはあきらめずに、ワインをおかわりして話を聞き続ける。実を言えばマウリッツは下戸ではないが、あまり酒は強くない。カリスもマウリッツと一緒にいるときはそれほど呑まなかった。別に猫を被っていたわけでもなく、マウリッツがフリップ王国に渡ってから、不安な気持ちをこまかすために呑んでいるのである。その証拠に仕事をしている間はしゃきつとしているが、やることなくないと、マルガレータあたりを巻き込んでからみ酒を始めるのだ。

「ルワーズとの国境付近の方だがよ、どうも国王陛下と宰相閣下はどうにかしたいと思っっているのに、他の奴が出兵に反対していて、何も出来ないんだとよ。おかしい話だよなあ。国王陛下と宰相がどうにかしたいと思っっているのに・・・大きな声では言えねえけど」

言葉とは裏腹に、大声で話しているすっかり出来上がった男の声にマウリッツは反応した。フリップ王国では近年活版印刷の技術が普及し、新聞が発行されるようになった。この男はどうやらその記者らしい。記事のネタを酔って大声で話しているのだからたいした記

者でもないだろう。

「反対しているってのは誰なんだい？」

「我がベルルスコーニ枢機卿さ。悪魔の使いである吸血鬼が跋扈する地域に王国の軍を派遣するなど無意味だと言っんだ。もう、住民はとつくにやられちまっているだろうってね。悪魔に魅入られた土地に出かけるなどか言ったらしいぜ」

「へえ、うわさじゃルワーズの方じゃ吸血鬼は呪いとかじゃなく、病気ってことになっていて、治療法まで研究している医者がいるって聞いたけどな・・・」

「ああ、そういう話が出ているから、枢機卿も必死なんだろうさ。ルワーズの方じゃ十年前の件ですっかり教会の力が弱くなっているらしいからな」

マウリッツは舌打ちこらえた。十年前のルワーズ公国で起こっていたこととまったく同じ話である。それも登場人物まで同じなのだ。現在のフリップ王国の枢機卿ジュリオ・ベルルスコーニは十年前はルワーズ教区の大司教であった。ルワーズで権威を失った後、一度ラウラの聖地に戻り、そこで法王からフリップ王国内の全教区を管轄する枢機卿としてアキテーヌに赴任したのである。十年前のことでもベルルスコーニは懲りていないらしい。

だが、逆に言えば国王と宰相が吸血鬼退治に前向きなのなら、十年前にカイパー博士が行ったのと同様、マウリッツの口舌によって、ベルルスコーニをやり込めてしまえばいいと言う話になる。マウリッツは別に無神論者というわけではないが、医師である以上は神の論理よりもこの世の理屈を優先する。何よりも、神の使いであるはずの聖職者が世俗的な野心をあらわにしているのを見るのは心地のいいものではない。容赦するつもりは一切なかった。

とりあえず、貴重な情報が手に入ったので、マウリッツは宿に帰ることにした。問題は明日、どうやって国王に謁見するかである。ルワーズとフリップは別に敵国になっていているわけではないが、ルワーズ公国の中央医局長と言う肩書きで国王に謁見を申し込むのは少々無理がある。と言って、フリップ王国の宮廷に知己がいるわけでもない。

「とりあえずはあたって砕けるか。だめならそのあとで考えよう・
」

「やっぱりだめでしたね・・・どうします？」

カスペルは少タイライラしていた。身分が高い者や低い者でも権威を傘に来て横柄な態度を取る連中が嫌いなのである。自分自身、ケテル村にあつては、自治領主の弟と言う身分で、その権威を持つ側であるのだが。

「まあ、いきなり行って会わせてくれで会えるような相手ではありませんからね。謁見の便宜をはかってくれそうなり合いはいませんが・・・とりあえず、思いつくことをやってみますか・・・」

マウリッツ・スタンジエの名前はヨルパ大陸西側では医療関係者には有名である。十数年前に猛威を振るつたスペルファ熱の治療法を確立した人物としてであつて、カイパー派自体の知名度はそれほどでもない。ヨアヒム・カイパー博士も知る人ぞ知ると言う程度で、学会で研究成果を発表することを嫌う博士は見た目どおり、単に汚い自称医師の爺さんと言う評価しか受けてないのである。ルワーズ

公国における伝染性吸血病の病理解明と言う功績も、教会勢力の情報操作によってあまり知られていない。国際的にはマウリッツの知名度は師を遥かに上回るのだった。

「この国には公国中央医局のような国営の医療機関はないんだが、国王の侍医はいるだろうからその辺を当たってみよう。この街で一番大きな診療所とか有名な医者を書いて、その人に頼んでみるのがいいかな」

「なるほど。スタンジエ先生は医学の世界では有名ですものね」

「ヤンは今回は医学以外でも有名になるだろうな」

「まあ、有名になったからって、何が変わるってことでもないでしょうけど」

「そのとおり。有名になろうが武勲を立てようが、あいつは田舎に引っ込んで診療所の医者で一生を終わりたいと考えるだろう。私だつてそうなんだがね」

「あれ？スタンジエ先生も田舎暮らしにあこがれているんですか？」

「田舎暮らしにというわけじゃないがね。できれば、医局長なんてご大層な身分を捨てて一町医者になりたいよ。さすがにそうも行かないところにまでできてしまったがね」

実際のところ、マウリッツの場合は一町医者になることなど不可能だった。すべての肩書きを捨てて、辺境の田舎町で診療所を開こうとしたところで、医学会の権威たるマウリッツの下には医師の希望者だの、遠方への往診の希望者だの、専属の医師にと希望する大貴族だのが殺到してしまう。ある意味では公国中央医局長と言う役職についていることで、そうした『有名税』から逃れることが出来ているのだ。

「老後に夫婦でって感じの夢でいいんじゃないですか？」

「なるほど、それは悪くない案だ。カリスが賛成してくれればいい」

がね」

取り留めの会話をしながら、とりあえず、医者看板を掲げている建物を探していたのだが、なかなか見つからない。アメルダムのように歩けばいくらでも医者があると云うものではないらしい。

二人はやっと見つけた診療所で一時間ほど順番待ちをし、その医師に国王の侍医へ紹介してくれそうな医師はいないかと相談したが、返答は芳しいものではなかった。

「今の国王陛下はまだ若くて健康だから侍医なんていませんね」

ルワーズでは考えられないことで、別に健康だったとしても侍医が常に体調に気遣うのが普通である。医療技術というよりも医療に対する関心や認識の深さがそもそも違うらしい。これでは、医学会での名声を利用して謁見しようと言う作戦も実施不能になってしまう。

415

「陛下にお会いしたいと言っても難しいですよ。特に外国の方は。いかに医学会において国際的な名声をお持ちのスタンジェ先生でもです」

この医師もマウリッツのことを知っていた。どうやら、マウリッツのことを尊敬しているようで、いろいろと親切にしてはくれたが、謁見についてはどうしても難しいとのことであった。

「しかたありません。今日はもう宿に帰りましょう」

二人はとぼとぼと宿に向かって帰る道を歩き始めた。だが、道のりの半分も歩かないうちに急に目的地を変えることになる。二人はまったく会話をしていないが、すっかり気心が知れていた。言葉など

なくても、お互いの考えが良くわかったと見えて、マウリッツはカスペルの進む方向に自然についていった。

あえて人気のない路地裏に入り込む。気づくと行き止まりであった。

「さて、どこのどなた様ですか？病人を見てほしいと言う感じじゃなさそうですね」

相変わらずマウリッツのこういふときの言い草はのんきだった。しかし、今回は相手は素人ではない。

「……………」

何も言わず、目の前に現れた男は短剣を抜いて構えた。マウリッツは武術には詳しくないが、少なくとも素人には見えない。

「先生、下がっててください……………」

「大丈夫かい？こっちは素手、相手は素人ではなさそうだが……………」

カスペルの声はわずかに緊張でかすれていた。

「まあ、やるだけやってみます。怪我したらちゃんと治療してくださいね」

「お互い生きていければの話ですが……………」

カスペルもマウリッツも危機に際して真剣に会話をしているのだが、周りにはそう聞こえないのがこのコンビのようだった。

男は短剣を振り回したりはせず、無駄のない動きで突きをカスペルに向けて放った。カスペルはこれを間一髪で交わすが、さらに横な

ぎの一撃がわき腹を狙って放たれる。続く攻撃もどうにかかわし続けていたが、防戦一方で追い詰められていくばかりであった。カスペルはヤンから槍術だけでなく、体術の指導も受けており、こちらもかなりの腕前ではあるのだが、男の剣技はその辺の素人や腕自慢程度のものではない。

カスペルは敵の攻撃を間一髪でかわしながら、対処法を考えた。このままでは先にこちらが疲れて、動きが鈍くなる。そうなれば、これほどの攻撃をかわし続けることは不可能だった。

武器になりそうなものもない。懐に入って格闘でしとめる隙もない。

『万事休すか・・・いや・・・!』

カスペルは騎士や武将になることを目指しているわけではない。ルワーズ公国の貴族であれば、教養の一つとして剣技を修めるのが普通であるが、カスペルはそれもしなかった。武術などヤンに教えられるまではまったく興味を示してなかったのだ。それが、思わぬ才能を発見することにつながったのは、医学と武術の関係性に気づいたからである。

武術とは突き詰めれば、人間の体に関する学問に行きつく。人間の体はどう動くのか、どう動かないのか、どうすれば動かなくなるのか、それはベクトルは違えど医学と同じ領域の知識を必要とするものである。

このときのカスペルのひらめきもまさしくそうした、医学と武術の重なる領域から出てきたものである。

カスペルは男の横なぎの一撃を仰け反って交わした瞬間、バランス

を崩した。ただし、巧妙な演技である。次の瞬間男は一瞬で短剣を逆手に持ち替えて、カスペルの喉元をめがけて、振り下ろした。

「か、カスペル君っ！」

マウリッツはカスペルを連れて来たことを後悔した。道中、何度か彼の武術の冴えを目にして安心してしまっていたのだ。こんなことで、若者を死に追いやってしまうなんて・・・

マウリッツは短剣が振り下ろされた瞬間、目をつぶってしまった。だから、それを開ける一瞬後までは何が起こったのか、まったく気づいていなかった。

「あ、あれ？」

目を開けると、倒れているのは男の方だった。カスペルは腕から血を出しているが大した量ではない。

「いやあ、あぶなかった。こんな戦い方は二度としたくないですよ。思ったよりざっくりいっちゃって・・・先生・・・手当てしてもらえますか？」

カスペルの服の右の袖は肘の辺りで引き裂かれ、傷もその辺りにある。男はカスペルの左手の拳で喉元を打たれて昏倒したようであった。と言うのも、カスペルは固まったように、左手を突き出したままの姿勢でまだいたから

「いったいどうやって・・・？」

「ああ、見てなかったんですか？この男が短剣を逆手に持って振り

下ろして来たときに、右腕を出してそれを受けたんです。うまい事、肘の辺りの腱に引っかかってくれて、捻って短剣を絡め取ったんです。ほら、そこに転がっている。やっぱり、ちよっと痛かったな・
・腱とか神経は損傷していないと思うんですけど・・・」

マウリッツは急いでカスペルの患部を見て、神経に損傷がないかどうかの簡単な検査も行った。

「大丈夫だ。いやあ、大したものだが、これはさすがに大博打だ。

一歩間違えたら一生右腕が使い物にならないところだったぞ・・・」

「死んでしまつたらどうせ使い物になりませんよ」

「そりゃそうだが・・・」

なんと一度胸か。こんなところまで、ヤン・エツシャー似の弟子とは。医術の腕はまだまだと言っても、十七才の若者である。外科の器用さでは、マウリッツやヤンは大陸でも五指に入ることは間違いないから、そもそも比較の対象にならない。カスペルは十分に医師としての素養を持ち合わせながら、これだけの格闘術と胆力を備えている。若いころのヤンそっくりであった。

「うむ、しかし、ちよっとラッキーだったかな・・・少なくともこれで、役人と話ができる。すぐにシャルル陛下まで辿り着くことは出来なくとも、多少は宮廷の中枢に近づけるといいうわけだ」

「いったい誰の差し金でしょう・・・」

「国境地帯なら不死鬼軍の連中とかが考えられるが、ここはアキテ
ー又だ。が、心当たりはあるよ」

「誰です？」

「枢機卿ジュリオ・ベルルスコーニ猥下さ」

「ベルルスコーニって・・・確か十年前までルワーズの大司教じゃ
・・・」

「ほう、若いのに良く知っているね。そのとおり、吸血鬼掃討戦の前は悪魔の仕業だったの、天罰だなど口走って、聖水だの聖餅だのを売りさばいてずいぶんと懐をあつためていた大実業家だな」

辛らつなせりふを吐くマウリッツは心底ベルルスコーニを軽蔑していた。神の使いたるものが刺客を使って、都合の悪い者を殺害しようとするなど言語道断である。

「カイパー博士にやり込められて、一度ラウラに戻った後、この国の枢機卿になつたらしい。街で見かけたかなんかして、やばいと思つたんだらう。さて、少し待っていてくれ、役人を呼んでくる。男が気づきそうになつたら、うまい事昏倒させておいてくれるね？」

「ええ、生かすも殺すもどうとでもなります。こうなつてしまえば」

物騒な会話をのんきな口調で交わしてから、マウリッツは急いで役人を呼びに行った。

「なぜ、この人たちを襲つた？」

「……」

憲兵の質問に男は何も言わない。だんまりを決め込んだようであった。

ルウィズ公国であれば、こうした犯罪の捜査は保安兵団が担うことになる。保安兵団は軍組織で、実際に戦争になれば兵士を供給することになるが、平時は全領土を統括する司法組織である。伝統を重んじるフリップ王国の場合も、似たような組織として、元々軍隊内

の秩序を維持する目的で結成された憲兵隊が平時は都市部の治安維持の任務を負っている。

憲兵は極めて謹厳実直でまじめな男であった。フリップ王国にあまじい印象を持っていないカスペルは、賄賂を要求してきたり横柄な態度を取るのではないかと想像していたのだが、そうしたことは一切しなかった。

「ふうむ・・・何も言うつもりはないか・・・マウリッツ・スタンジエ先生でしたな。なにやら、有名なお医者様とのことですが、お心当たりはございますか？」

外国人であるマウリッツに対しても丁寧な口調を使う。

「心当たりならございますし、それがあたっていけば、こうして彼がしゃべらない理由もわかります。しかし、それをあなたが知ってしまったては、あなた自身に大きなご迷惑をおかけすることになるかもしれない。つまり、この国で大きな権力を持っている人物の差し金である可能性が一番高いです」

「なるほど、お気遣いいただきありがとうございます。しかし、私も別にこの先大した出世を期待しているわけではありませんし、こういうやり口をする人物なら人生を掛けてでも逮捕してやりたいと思うたちでしてね」

マウリッツもカスペルも知らないが、この男はどうもピーター・レイン捜査官と気が会いそうであった。犯罪捜査を行うものは、長く続ける中でこうした正義感を自分の中に育むものらしい。ピーター・レインなどは大貴族の若様の犯罪を暴きだし、危うく殺されかけたことがあるくらいなのだ。

「なるほど・・・では、申し上げます。彼のバックにいるのは枢機卿ジュリオ・ベルルスコーニ猊下でしょう」

「！」

驚いたのは、憲兵ではなくだんまりを決め込んでいた男の方だった。詳しい事情を知っているわけではないだろうが、雇い主が誰かぐらいはわかっていたようで、それを簡単に見破られたことに驚いたのだ。

「アキテーヌには過去二回ほど訪れたことがあります、短期間でしたし、人に恨みを買うようなことをした覚えはありません。しかし、枢機卿猊下は過去にルワーズで大司教を勤められておりました、実を言えば多少の恨みを買っております」

「どのような？」

「この国では吸血鬼のことを呪術的な存在と捉えるのが一般的ですが、ルワーズでは十年前の戦後の騒動の際に、伝染性吸血病という病であることが立証されております。それは私と私の師によって解明されたことです。それにより、ルワーズ公国における教会の権威は失墜しました。もちろん、皆が信仰を捨てたわけではありませんが、教会が政治に口を出すなどと言うことはできなくなりました」

「ほう・・・逆恨みではありますが、猊下があなたを殺してやりたくなると言うのはありえる話ですね。まあ、確かに簡単には手に負えない相手ではありますが、他にもいろいろとやっておられる方です。私もずっとどうにかしてやりたいと思っていたのですよ」

マウリッツはこの憲兵が気に入った。カスペルもである。フリッツ王国では無人の村を転々としたり、不死鬼軍の一味と勘違いされて襲撃されたりとろくな目にあわなかったが、この男との出会いだけは幸運であったかもしれない。

「さて、私の野望はさておいて、スタンジェ先生はどうされたいですか？いや、それ以前にアキテーヌにはどのような御用で？」

「実は、シャルル陛下に謁見し、お話ししたいことがあるのです。と言つても、それほどコネもありませんし、ぶらりと現れた外国人、それも外交官でもなんでもない、医者と会っていただくと言つのは難しいとはわかっているのですが・・・」

「ふむ・・・何かとても重大な話なのですね？枢機卿猊下に狙われることもわかつていながら、アキテーヌにいらっしゃったのは」

「そのとおりです」

「いいでしょう。枢機卿猊下を逮捕すると言つのは簡単ではありませんが、私が先生をシャルル陛下にお引き合わせしましょう」

「えっ!？」

そんなことを一憲兵が出来るはずもない。こういう権力にへつらわないタイプの男が、宮廷にコネがあるとも思われぬ。いったいどういうことか・・・

「とりあえず、今日は宿にお帰りください。明日の夕方お迎えにあげます。明日は非番でしてね」

なんだかよくわからないが、他に伝手があるわけでもないのに、この憲兵を信用することにした。

翌日、宿に迎えに現れた憲兵に連れられ、マウリッツとカスペルはある料理屋に向かった。非番だと言うことで私服で現れた憲兵を見て、マウリッツは何か脳裏に引っかかった。勤務中はチェイン

メールを着込み、ツバのついた兜をかぶっているので、顔立ちはあまりわからなかったが、私服になるとどこかで見た記憶がある。

「失礼ですが、先日憲兵事務所で以外にもどこかでお会いしたことはないでしょうか？」

「はは。お気づきでしたか。憲兵事務所にいらっしやる前の日に、居酒屋で先生を見かけましたよ」

「あっ！あの新聞記者・・・」

「ええ。まあ、どこの司法組織もそうだとは思いますが、居酒屋つて言うのは情報の宝庫ですからね。犯罪捜査を担当するものは、身分を偽ってああいう店で張り込むものです」

マウリッツの頭の中で警告がなり始める。憲兵が情報収集のために居酒屋に行くと言うのなら、マウリッツ同様、静かに酒を飲んで、周りの話に聞き耳を立てているはずだが、この男は大きな声でベルスコーニを批判していた。仕事としてやっていると言うなら、ベルスコーニへの批判に同調した者を監視して、弾圧すると言うようなことも考えられる。

「はは、警戒しておられるようですね」

憲兵も勘がいい。いや、初めからわかって言っている可能性もある。カスペルにはそこまではわからない。初めて訪れた町なので、周囲をきよるきよるしながら好奇心旺盛に憲兵にいろいろと物を尋ねている。

「まあ、先生のお疑いが杞憂であると言うことは、このお店に入ればわかっていただけたと思いますよ」

そんなことを言われても、マウリッツは安心できない。

「はあ・・・」

生返事をしながら、店に入る。店の店主は妙に恐縮した体で憲兵に対応した。憲兵の割には物腰の柔らかく、態度も横柄ではない男に何故これほどまで丁寧な対応をするのかわからない。疑念が晴れないマウリッツは、ついネガティブな想像をしてしまう。

『この男、まじめで謙虚そうに見えて、実は食わせ者なのではないのか・・・影で賄賂を取ったり、都合の悪い者を弾圧したり、あくどい事をして私服を肥やしているのではないか・・・あるいは枢機卿の手先であるとか・・・』

マウリッツ・スタンジエという男はヤン・エツシャー同様、間違いなくルワーズ公国を代表する頭脳を持つ男である。ヤンのように軍略や武術に長けているわけではないが、医術だけでなく、工学や政治学の知識も持ち、多彩な才能を持つと言ったことでも共通する。

ただし、ヤンは好奇心と楽天的で自由な発想がその英知の基礎となっているのに対し、マウリッツの場合はそれとは逆に慎重さとそして悲観的な疑い深さが知恵の源泉となっている。決して性格の悪い男でもないし、悪い印象を与えることは少ないのだが、それは、彼が用心をして、そうしたネガティブな部分を表情や発言にはでないように意識しているからに過ぎない。一方で、疑いを抱いたとしても、それでも、信用に値する相手だとわかったときには、疑念を捨てることには躊躇がなく、思い切りの良さでもヤンといい勝負ではあった。

腫れ物に触るような態度の店主に案内され、一番奥の個室に通されると、そこには先客がいた。フードを目深にかぶり、顔を見せない

ようにしている、雰囲気からすれば若い男のようであった。

席についてからも、しばらく誰もしゃべらない。一度引つ込んだ店主が、店で一番のものと言うワインを注いで周り、カスペルには変わりに果物の果汁を出して下がってから、初めてフードの男が口を開いた。

「お会いできてうれしい。スタンジェ先生、この十年以上あなたへの感謝を忘れたことはありません」

そついいながらフードを下ろした。

「シャルル殿……いえ……陛下……」

そこにいたのは、フリップ王国国王シャルル・ド・フリップその人であった。

「ルワーズ国公のジェローン殿とは違い、王国の宮廷はいたって堅苦しいところで、抜け出してくるのも一苦労です。ジュール・ド・エツフェルの手引きがなければ、こうして街に出ることは難しいので、彼があなたと出会えたことは神の恩寵と言えるでしょう」

「！」

ジュール・ド・エツフェルとはこの国の宰相の地位にある男である。

「ああ、ご存じなかったんですね。あなたを案内してきたその男が、宰相ジュール・ド・エツフェルです」

「無礼はお許しください。名乗ることができなかった事情をご察しただければ……」

「なぜ……あのよう……」

宰相と言う地位にある者が、新聞記者のふりをして、街の酒場で飲み騒いだり、憲兵として犯罪者の取調べをしていると言うのはどういうことか。ここは開明派の優勢なルワーズ公国ではなく、伝統と格式を重んじるフリッツ王国なのである。考えられることではなかった。

「酒場で私がわめいていたとおりです。私も宰相とはいえ、この国では十分に実権を握っているわけではありません。政敵の悪口を口にしてみて、回りの反応をうかがったり、時として、贅意を示した人物を見方に引き込んだりします。憲兵としてお話したことも同じ。ベルルスコー二枢機卿は宗教的権威を振りかざして、政治的な影響力も奮っております。他にも聖職者らしからぬ世俗的野心から、いろいろな悪さをしているのですが、情けないことにどうにも対応できていません。何か力になってくれそうな方を探すためにもあしたことをしているのです」

自嘲気味な言葉を人の悪い笑みを浮かべて言う。器用なことだった。

「それは・・・驚きました。それでは、私が陛下と閣下のお役に立てるとい判断で、こうしたお取り計らいをしていただけたのですね？」

マウリッツは疑い深い人物だが、一度状況がはっきりすると、そこからの頭の回転はヤン以上である。今はこの状況を最大限に利用するのがいいに決まっていた。意外なきっかけから、直接国王を話す機会を得られたのである。先方の期待するものをこちらが用意できれば、確実に力になってくれるに違いない。

「まずは、とにかく命の恩人であるあなたにお会いしたかった。も

ちろん、あなたの方でも私に用があることは承知しておりますし、こちらにもお願いしたいことはあります。ですが、とりあえずは、再会を祝して乾杯といきましょう。さ、そちらのお若い方も・・・残念ながらお酒はお店に迷惑が掛かるので果汁になってしまいますが・・・」

四人は乾杯し、憲兵・・・宰相ジュール・ド・エッフェルが呼び鈴を鳴らすと、料理が運び込まれてきた。フリップ王国の風習としては、こういう場の料理は前菜から始まり、デザートが出てくるまで一枚ずつ皿が出てきては下げられ、頻繁に給仕が行き来することになるのだが、この日はゆっくりと話をするために、すべての皿がいつぱんに運び込まれてきた。庶民が宴会をするときの形である。格式ばった風習の多いフリップ王国の第一人者は、実はジェローンと同様に堅苦しいことが嫌いで、庶民の生活に憧れを抱いているようであった。

食事をしながら、エッフェル卿が話を始める。

「お恥ずかしい話なのですが、居酒屋で私が話したことは全て真実。陛下と私は国境地域の状況をどうにかしたいとは考えているのですが、枢機卿の宗教的権威の前に騎士たちも及び腰なのです。呪われた地に向く気にはなれないと・・・」

「なるほど・・・しかし、枢機卿は大司教時代に同じ状況で、我が師ヨアヒム・カイパーに目の前で吸血鬼が病であることを立証され、ルワーズにおける宗教的権威を失っております」

「はい。ですので、今度はあなたにフリップの宮廷において同じことをしていただきたいのです」

「ふむ・・・」

マウリッツはあごに手を当てて考えた。これは、願ったり適ったり

の申し出ではあるのだが、相手は外国の支配者である。あまりに都合のよすぎる展開には警戒せねばならない。

「スタンジエ先生、私は先生にお命を助けていただいた後も、あなたの動きをずっと見ておりました。傀儡の王ではありませんが、政治権力はふるえなくとも、情報を得る方法を持つことは可能ですので。スタンジエ先生は単にルワーズ王国のために、吸血鬼と戦っておられるわけではないでしょう？カイパー派の考えはもっと広い視野に立ったものである筈」

これはシャルルの言葉である。なるほど、傀儡の王と言いながらかなかの洞察力である。マウリッツはもちろん、ルワーズ公国で公職にあり、国のために働いているが、行動の原理はあくまで医師としてのもので、両国の国境地域の住民たちを助けたかった。血液を過剰に採取されて弱った上に、風邪で子供が亡くなったという村人の話はあまりにもひどい。

「しかし、国王陛下は逆にこの国に対して責任をお持ちのはず。国境地域の国民を守るためと言うのはわかるとしても、一方で、ルワーズ公国で公職にある私が出張ることには問題はないですか？」

「実は・・・今回の吸血鬼の件だけでなく、ルワーズ公国との関係についても、枢機卿と対立している点があるのです」

「ほう・・・」

シャルルの言葉を続けるのはエツフェルだった。

「すでに、私たちとしては、ルワーズ公国との臣従関係を白紙にしたいと考えています。この十年でルワーズ公国は自身の力で大きく発展を遂げました。いまさら、フリップ王国の枠組みのなかに取り込んで、せつかく発展したものを衰退させるだけでしょ。税率

もぐつと安い。フリッパ王国の他の地域にあわせて、高率で搾り取れば、自由の気風の強いルワースでは反乱が起こるでしょうし、ルワースだけに特例を認めれば、他の地域から不満の声があがります」

「それはそうですが・・・」

「さらに、そもそもフリッパ王国がルワース公爵位に固執していたのは、ルワース公爵がフリッパ王国の王室に近い存在とされるからです。インテグラ王国がフリッパ王位の継承権を主張する大義名分となる点に問題があり、歴代の王と宰相は戦争をしても、ルワース公の位を王室の中に収めようとしてきました。ですが、独立したルワース公国が成立した以上、そこにこだわる必要はありません。むしろ、対等の条件で修好を深め、ルワースで育った優れた社会制度や技術をフリッパに取り込んでいく方がはるかに意味のあることです」

「スタンジェ先生、私たちとしては、これを機会にというのは、国境地帯の惨状を考えるとはばかれますが、被害が出てしまった以上、単に目の前の問題を解決するだけでなく、フリッパ、ルワース両国にとって、良い変化をもたらすきっかけにしたいと考えています。ルワース側では、文武の最高幹部人事が刷新されたとか」

マウリッツはアメルダムを出て以来一ヶ月ほどは、宮廷中枢から離れていたのですが、そうした話は知らない。フリッパ宮廷では先に話していたとおり、国王直属の情報機関がそのことをもたらしたのだろう。

「ほほう、いえ、私は一月ほど前にアメルダムを出てきましたので聞いていないのですが・・・」

「公国の至宝と言われるファン・バステン夫妻が文武の頂点に上げられるとか。ウィレム・ファン・バステン将軍が元帥に昇進され、不死鬼軍事件の解決後という留保付きですが、シルヴィア・ファン・バステン殿が國務卿に就任されることが決まったそうです」

「そうですかっ！いや、ファン・バステン將軍は私の親友ですし、ご婦人とも親しくさせていただいておりますので。なるほど・・・」
「フリッツ王国もそれにならない、古い體質を一新して不死鬼軍事件を解決したいと考えております」

これはわからなくもない。ここまで話していて、シャルル国王も、ジュール・ド・エツフェル宰相も実権のないお飾りと言われながら、なかなかの見識を持っていることはわかる。しかし、そうした決して無能とは思われない二人が、名目上の君主と最高政治責任者でありながら、実権を握れていないと言うことが、フリッツ王国の病理なのだろう。

「つまり、まあ、わかる話ですが、そうしたルワーズ公国との柔和策に枢機卿は反対なわけですな。まあ、当然と言えば当然ですが・・・」

おそらく、大つぴらにはジュリオ・ベルルスコーニのルワーズ宮廷での失脚の話はフリッツ王国には正確に伝わっていないのだろう。十年前の戦争後、フリッツ王国はまず出兵で七割の兵を失った衝撃から、軍部が崩壊し、収拾の付かない状態であったし、程なくしてシャルルの父親である当時の国王が亡くなったため、ルワーズの内情などにかまってはいられなかつたのである。後日、シャルル直属の情報機関がその辺の事情を探り当てたのだろう。

「で、私はどうすればいいのでしょうか？お二人に協力すれば、国境地帯の不幸な住民たちを解放できますし、ルワーズ公国に害をなす不死鬼軍を追い詰めることもできる。利害は一致しているとは思いますが。ただ、私はこの国では所詮外国の一医師でしかありません」
「はい。この国はルワーズ公国と違い宗教の権威は絶大です。正攻法では枢機卿を失脚させることはできない。十年前、カイパー博士

がされたように、理屈と実証実験で枢機卿を言い負かしたとしても、それで、一気に形勢逆転とは行かないでしょう……」

苦虫を噛み潰した顔でジュールが言う。

「しかし、実は……逆転のチャンスがありません……」

「ほう……」

「ラウラより法王猊下がフリップにお見えになるのです」
「！」

法王とはラウラ国内にある聖地に住み、教会勢力の頂点にある聖職者である。あらゆる枢機卿や大司教、司教は法王の指名によって、任地に赴くことになっている。と言ってもそれは形式上の話で、教会内の様々な力関係によって、人事が決まっていると言うのが本当のところである。しかし……

「ベルルスコーニに明らかに教義に反する行為があれば、法王猊下はその場で彼を罷免、あるいは破門する権限をお持ちです。法王猊下の前で彼の非を鳴らすのです。それは、この国の政治権力を名目上握っている我々ではできません。教権の独立を侵すことになりませんから」

「外国人の私にそれをせよということですか……しかし、明らかに教義に反する行為とはなんでしょう？一応、吸血鬼を呪術的存在とすることは、教会の教義に反してはいないでしょう。他に何か明確な罪状はあるのでしょうか……」

「確信はありません。しかし、本当なら彼は確実に破門になることをしております」

シャルルが声を低めた。口にするのもはばかられることなのだ。

「不死鬼軍には相当数の医師たちがおります」

「それは間違いないでしょう。おそらくそのトップにいるのは、情けないながら私の元部下、ルワーズ公国中央医局にいたファン・クラッペと言う医師ですが、彼一人で不死鬼軍の行う医学的な処置を全て出来るはずがありません。アキテーヌに来る途中の村でも、医師が採血に立ち会っているとと言う話は聞きました」

「その医師たちですが、ルワーズ公国の医師と言うことはありえませんか？」

「そうですね・・・ファン・クラッペはアメルダムでは嫌われ者でしたし、そもそも吸血鬼に関わる仕事と言うのはほとんどの医師は避けようとしません。治療についてもそうですが、ましてそれを軍事利用する、しかも、反逆になると、ほとんどの医者は及び腰となるでしょう」

「そう、つまり、不死鬼軍の医師たちはフリップ王国の医師なのです。ところがここにもう一つの問題がでてきます」

シャルルの言葉続けたのはジュールである。

「この国の医師の大半は教会の修道士です。ルワーズ公国の医学院のような教育機関はありませんし、カイパー博士のような市井の名医と言うのはいないわけではないですが、極めて数は少ない」

「つまり・・・ベルルスコーニ枢機卿が不死鬼軍に協力して医師を供給していると・・・」

「はい。それをあなたに証明していただきたいのです。法王猊下がアキテーヌに到着する半月後までに・・・」

これは生半な話ではない。吸血鬼を悪魔の使いとする教会で高位にある者が、事もあろうにその吸血鬼を使って国家転覆をたくらむ輩に協力しているのだから、破門どころか異端審問に掛けられて、火あぶりにされてもおかしくない話なのである。それをマウリッツに

証明せよと言うのだ。

「私はただの医者。多少工学や政治学もかじってはいますが、情報
職員でも捜査官でもありませんよ?」

「ですが、我々には先生しか頼る相手がありません。調査をしてい
ただけませんか?」

「・・・」

マウリッツは黙り込んだ・・・そもそも、昨日、刺客に襲われたり
しているのだから、ベルルスコーニには、すでに自分は監視されて
いる可能性もある。いや、間違いなく、こうして国王と宰相に接触
したことも知られているはずだ。

「先生! やりましょう!」

カスペルがはじめてこの店に来てから発言した。

「カスペル君・・・」

「大丈夫です。こんなこと、エツシャー先生がされていることに比
べれば大した危険もありませんよ」

「しかし・・・私はただの医者だ・・・」

「医者だからできることもあるんじゃないですか?」

「?」

カスペルと言う若者は明るく楽天的で、まだまだ子供くさいところ
もあるのだが、どういうわけがヤンに似て、訳知りであった。

「吸血鬼の手術痕です。死体でしたけど、国境地域で一体だけ見た
じゃないですか?」

カスペルとマウリッツは国境地域を抜ける途中、道端で異臭を放っている死体を発見していた。それには腹部に傷があり縫合された痕もあったのだ。さらに吸血鬼であるにも関わらず、首筋などにドルテレヒト蝙蝠や吸血鬼が噛み付いた痕もなかった。マウリッツはその時点で、不死鬼軍が吸血鬼を作る方法をだいたい推測できていた。

「そうか・・・吸血鬼を一体捕獲し、その手術痕から執刀医を判別できれば・・・」

「手術の痕を見るだけで誰がやったかもわかるのですか？」

「医師の手術にはどうしてもそれぞれの癖と言うものができます。他人のまねをしたところで、なかなか矯正はできません。その医師が、教会の修道士であれば・・・」

「まず、その医師が異端審問に掛かることになるでしょう。この国の修道士はベルルスコーニの権威に逆らうことはできませんが、教会の最高権力者たる法王猊下の前で嘘をつくことなど出来るはずもない・・・」

なるほど。それならマウリッツにできることではある。しかし、まだ問題はあある。

「どうやって、吸血鬼か吸血鬼の死体を手に入れるかと言うことですが・・・」

「それは僕の仕事です。僕はエツシャー先生の代理としてスタンジエ先生に着いてきているんですから」

カスペルが胸を張って言う。

「今までお聞きもせず失礼でしたが、このお若い方は・・・？」

「私の弟子、ヤン・エツシャーの医生です。武術の手ほどきもつけておりますが」

「ほほうっ！国境地帯で不死鬼軍相手に活躍しておられるヤン・ファン・バステン殿の！少し前にはたった二日で五千もの吸血鬼の軍を全滅させたと聞いております！」

「本当ですか?!」

カスペルはうれしそうに言う。

「本当です。あなたのお師匠はヨルパ大陸でも屈指の武将でしかも名医のようですね。そのお弟子さんとあらば……」

ジュールが期待をこめた眼でマウリッツを見た。

「ふう……今まで以上に危険な目にありますよ？カスペル君……それでもやりますか？」

「エッシャー先生は一晩で五千もやつけたんです。僕にだって一人ぐらいはどうかできます」

「わかりました。私も同行します。吸血鬼の死体は腐りやすい。すぐに処置しなければ証拠にはできないでしょうから……」

「スタンジエ先生！お願いします！」

一国の国王と宰相が、医者に向かって頭を下げた。

マウリッツとカスペルは翌日、大忙しで準備を行い、再びアメルダムから国境地帯に旅立った。ジューリオ・ベルルスコーニは刺客を送って失敗したものの、これを聞き、マウリッツが身の危険を感じて逃げ去ったのだとたかをくくったようである。権力に目のくらんだ聖職者ほど、ありえるはずもない神の恩寵と言うものを信じたくないようだった。

強襲と嗜虐

突然、ウィレムとシルヴィア、そしてカリスが宮廷に呼ばれた。時刻はすでに夕方。いつもどおり謁見の間に出ると、ジェローンはいつにも増して上機嫌であった。

「カリス殿、良い知らせだ。マウリッツ・スタンジエ医局長から手紙が届いたぞ」

「えっ!？」

これは、フリッツプ国王シャルルが自分の情報機関を使ってルワーズ宮廷に届けさせたものである。シャルルは再び国境地域に旅立つマウリッツに依頼し、フリッツプ王国がルワーズ公爵に対する主従の関係を解消したい旨をジェローンに伝える手紙を書かせたのだ。ついでとばかりに、カリスに対する手紙も一緒に届けてくれた。

「スタンジエ医局長はすでにアキテーヌを訪れ、どうやら、不死鬼軍に協力しているらしいジュリオ・ベルルスコーニ枢機卿を失脚させる活動を始めたようだ。それが成功すれば、フリッツプ王国側の不死鬼軍は有力な後ろ盾を失うし、国境地域の住民避難作戦も決行するとのことだった。そうなれば、奴らはいよいよ血液を確保する方法がなくなり窮地に立たされることになるな」

追い詰められ続ける不死鬼軍もついに軍としての体裁を維持することすら出来なくなる。フリッツプ王国側からの補給が出来なくなれば、ノールトに駐屯する数千の吸血兵はザーンに対して無謀な攻城戦を行うしかなく、そうなれば、レム・ファン・リートフェルトが完膚なきまでに叩きのめしてくれることだろう。

「ついでとばかりに、シャルル陛下は枢機卿さえいなくなれば、ルワーズ公国の独立を正式に認めたいと言ってきている。フリップ王国がルワーズへの宗主権を放棄するとなれば、インテグラ王国にとつても、ルワーズは大した意味のないものとなる。吉報に次ぐ吉報だな」

ジェロームはカリス宛ての手紙を自ら本人に手渡した。カリスはどろろにかギリギリ自制することに成功し、落ち着いて封を切って読んだ。内容にたいしたことはない。カスペルが優秀な護衛であること、アキテーヌのワインはやはり極上の味であったこと、途中の村やアキテーヌでの事件がこと細かに書かれていたが、カリスが一番読みたかったのも、そしておそらくマウリッツが一番書きたかったのも、最後の二行であつたらう。

「カリス。苦勞ばかり掛けて申し訳ない。もう一月もすればルワーズに帰ることができるだろう。それまでの間、中央医局を頼む。ヤンの力になってくれ。君にしか頼めない。帰ったらすぐに結婚しよう」

カリスは泣き出しそうになりながら必死にそれをこらえた。

だが、国境の向こう側の状況がどうあれ、事件が全て解決したわけではない。未だにノールトは占領されたままであり、城塞都市に収容されている住人をいつ自宅に帰してやれるか見通しは立っていないのである。三人が宮廷に来たついでとばかりに主な閣僚も集めて打ち合わせが始まった。議長を務めるのは、もう時期引退が決まっ

ているベルト・ファン・レオニー國務卿である。

「ファン・バステン元帥。住民の避難計画と食料の確保については滞りなく進んでいると聞いております。現状はどうなってますか？」

「主任主計官ピーテル・ブルーナの手により、すでに食料の確保は完了いたしました。予定の三割増しの金額でスペルファへの転売ができ、ラウラからの食料は二割引で購入できましたので、伝染性吸血病対策基金には余剰が出るぐらいです。すでに各都市での配給が始まっており、住民から不満の声もほとんど聞かれません」

「ほう・・・」

集まった閣僚たちから驚きの声があがる。ピーテルの食糧確保の計画は奇術と評され、僅か二十四歳の主任主計官は今や閣僚たちの注目の的であった。どうにかして自分の下で参事官にでも迎えて、その手腕を発揮してもらいたいと考えているのだ。

「では、不死鬼軍の幹部の編成についての捜査はどうなっておりますかな？」

保安兵団長ピエト・ファン・サッセンの報告書をウィレムが読み上げる。

「すでにご存知のとおり、敵軍の幹部で元帥と呼ばれているのは、元公国元帥フーゴ・ファン・ドースブルフ伯爵であることが確定しました。アメルダムで策動していた女の不死鬼は彼の庶子、イエケリーヌ・エラスムス、それ以外に、捕虜となった不死鬼によればファン・ドースブルフ伯の部下ではないようですが、元護国騎士団第一部隊副隊長ヨハネス・ファン・ビューレンや、詳しくはわかりませんが、元傭兵のエドと呼ばれる人物が軍の中枢にあるようです」「資金や血液を提供しているのは？」

「テオ・ファン・ダルファー侯爵につきましてはご存知のとおり、操死鬼となる手術をされ、操り人形として利用されていたようです。一方で、現在実際にスポンサーとして動いているのは、おそらく二名、フリップ王国の辺境伯レオンス・ド・アズナブル卿と、フリップ王国が指名したルワーズ公爵、アルベルト・ルワーズ卿であることがわかっております。これに、スタンジエ医局長の報告を加えると、フリップ宮廷内において、ジュリオ・ベルルスコーニ枢機卿が動いているとのことでした。こちらについては、スタンジエ医局長がフリップ国内において、彼を失脚させる工作に動いております」

「吸血鬼の軍を編成するには医学に詳しい者が必要ときいているが？」

「はい。そうした技術面を担当しているのは、元公国中央医局検死室長ファン・クラッペ医師で、どうやら、彼の下ではジュリオ・ベルルスコーニ配下の修道士で医術の心得のある者が動いているようです」

状況は瞬く間に整理された。すでに、不死鬼軍の全容はほぼ把握できている。そして、その中で人間関係についても、およそ推測が付いていた。こうなれば、いくらでも幹部たちの間に間隙を作る方法が考えられる。今頃ヤンはそうしたことを考えるのに大忙しなところだろう。

「ふむ。元帥の弟君の活躍で、国境地帯から不死鬼軍を殲滅できる日も近そうですね」

皆、先の展望については楽天的であった。不死鬼軍を殲滅することができれば、次はシルヴィア・ファン・バステンが國務卿に就任し、フリップ王国からは完全な独立を果たし、あとはインテグラ王国との関係を明確にできれば、真のルワーズ独立公国の始まりである。この国の未来は確実に明るいものに思われた。

突然、本来部外者の入れないはずの閣議室に一人の書記官が現れた。司法府の制服を着た壮年の人物である。彼は無礼をわびる言葉も言わず、司法卿アントン・ファン・フェルメールに近づき、何事かを耳打ちにした。その瞬間、アントンの表情が急に険しくなる。

「陛下っ！大監獄が何者かに襲撃されましたっ！」

「！」

アメルダム大監獄はその名称とは裏腹にアメルダムの街壁の外に存在する。政治犯や凶悪犯、巨額の麻薬取引の常習者など、死刑乃至終身刑に該当する者ばかりを集めた監獄である。収監している者は千名に及ぶ。近年、ルワーズ公国では死刑廃止が検討されており、未執行のままの死刑囚が増え続けていることから、監獄内はかなり過密な状態になっていた。一つの城砦として使うことも可能な巨大な建造物である。その管理は司法府に任され、獄卒は保安兵団から派遣された兵士たちであった。

大監獄の外壁は地上五メートルの高さがあり、それも、四メートルのところの内側と外側それぞれに分かれてせり出したYの字型をしている。この壁を越えて脱獄または侵入することは不可能であった。ただし、普通の人間にはである。

事件が起こったのは夕刻だが、その始まりはその日の日の出前であ

った。

二人の人物が塀を飛び越えた。人間業とは思われない跳躍力である。これには見張りをしていた保安兵団から派遣された警備兵も気づいていない。何せ塀を飛び越える者などいるはずはないから、見張りはすっかり油断していた。

その二人は、誰にも見つからないまま、大監獄内にある物置に身を潜めていた。囚人たちの朝の点呼が終わり、午前中の運動の時間に彼らは行動を起こした。

運動の時間に外に出て体を動かせるのは、模範囚、少なくとも普通に監獄の生活を送っている者だけである。反抗的な者や凶暴性が改善されない凶悪犯、脱走を図った経験があつたり、看守に対して不服従な者は独房に入れられ、そこから外に出ることは一切許されない。

二人の男、ヨハネス・ファン・ビューレンともう一人の不死鬼は、独房に入れられた一人の男の前に音もなく降り立った。

「バールーフ・グローティウス……迎えに来た。決意は変わらないか？」

問いかけたのは、ヨハネス以外のもう一人の男であつた。

「エドか……ああ……変わらんさ。準備は出来ている」

バールーフと呼ばれた男は三十歳を少し越した程度で、顔は土色、髭は伸び放題であるが、体は意外とがっしりしているし、よく見れば、多少は才走ったところがあるように見える。

バールーフはエドと呼ばれた不死鬼に手渡された、長い針のような物を脇腹に突き刺した。極めて細い針で、それほどの苦痛も感じないものと思われた。が、バールーフはそれを深々と刺したあとで、かき回す様に動かした。

「ぐ……ぐう……」

「苦しいのは少しの間だけだ。すぐになんともなくなる」

見れば独房を監視するはずの看守はすでに絶命していた。二人のうち一人は剣で、もう一人は槍で心臓を一刺しされていたのだ。

「ふう……大丈夫だ。もう痛くない……始めるか……」

三人になった男たちは行動を開始した。次々に凶悪犯たちが不死鬼へと変えられていった。方法は極めて簡単である。小さなヒ首で腹を刺すと同時に、ヨハネスやエド、バールーフが問いかけるのだ。

「このまま死ぬのがいいか？不死鬼の力を得て、再び世にるのがいいか？人であることを捨てることになるが、すでにお前らは人として生きていけまい。不死鬼となり力を得れば何だって出来る。お前たちを捕まえた奴らに復讐したくないか？」

終身刑や死刑執行予定者として、希望を失っている囚人たちは、次々と不死鬼となることを自ら受け入れた。腹に開けられた傷から不死鬼の血液を注入され、イエケリーヌの場合とは違い、本人の意思で不死鬼になった者をヨハネスとエドは急激に増やしていったのである。

不死鬼となることを拒否した者もそのまま死ぬことは許されなかった。不死鬼の血液の代わりに普通の吸血鬼の血液が注入され、理性を失った吸血鬼となる。エドが犬笛を吹き、彼らはその指示のしたがって、運動場に整列した。すでに独房にいた者だけでなく、全ての囚人が吸血鬼か不死鬼となった。監獄内にいた保安兵団の兵士や司法府の事務官たちは全て殺されている。

大監獄の責任者である司法府から派遣された獄長は執務室に吸血鬼が現れた瞬間、どうにか最後の役割を果たした。席の後ろに垂れ下がった紐を引き、アメルダムの監視塔からも確認できる警告用の火矢を打ち上げることに成功したのである。その一瞬後には、吸血鬼たちによって体をバラバラに引き裂かれていた。

ウィレムは、シルヴィアやカリスを残し、単身で駿馬を駆り、大監獄へ向かった。いやな予感がしていた。いや、確信していた。ヤンであれば防げていたかもしれない事態ではなかったか。敵が不利な理由は制御の難しい吸血鬼を軍の主力としてしていることにある。吸血鬼を十分に制御できる数の不死鬼をそろえるか、あるいは不死鬼が主力となりえるだけの数になれば、この点は解決される。そんなことは不可能と考えていたが、終身刑や死刑に処された囚人たちであれば、自ら不死鬼となることを承諾するかもしれない。

が、これはヤンの智謀を過大評価したものであろう。ヤン・エツシヤーと言えどもここまで頭が回るはずはない。仮に、大監獄での事件を事前察知することが出来たとしても、もう一つの作戦までは同時に防ぐことは出来なかったであろう。

アメルダム大監獄はすでに保安兵団の機動部隊千名と護国騎士団の騎士団長親衛隊及び第三部隊からなる千名にによって包囲されていた。護国騎士団を指揮しているのは、先日第三部隊副隊長に任命されたばかりの、ディック・ファン・ブルームバーゲンである。ウィレムは、元々親衛隊捜査部のデッサン担当でしかないディックを高く評価していた。理由は、僅か一晩で百名を越す人数を集め、『サスキア嬢防衛隊』を組織した手腕による。

『危機に際して周囲を明るくするために自ら馬鹿をやれる男こそ本当の勇者である』と言う彼の持論にも合致するがそれだけでなく、馬鹿なことであっても、組織力を発揮できる人間は貴重であると言ふ考えからであった。ディック自身は軍略も武技も大したものではないが、第三部隊では護国騎士団最強の剣士であるシモンが隊長であるので、副隊長には彼にはない能力を持つ者を選んだのである。

だが、それは今回のケースに関しては裏目に出たかもしれない。ディックは大監獄襲撃の報告を受けて、本部にいた騎士のほぼ全員を出勤させてしまったため、護国騎士団本部はから空きとなった。だが、この時点ではウィレムもそのことには気づいていない。むしろ、遅滞なく部隊を編成して大監獄に出勤させたディックの手腕に感心した。もっとも、護国騎士団が本部に残っていたとしても、もう一つの作戦を阻止できたかどうかは怪しいもので、単に被害者の数を増やしただけかもしれない。

突然、大監獄の壁が内側から破壊された。もうもうと土ぼこりが舞い上がった一瞬後から戦闘が始まる。

「キシヤアーツー！」

あまり意味のない叫び声を上げて、穿たれた壁の穴から出てきたの

は数百名に及ぶ吸血鬼たちである。興奮した様子の彼らは次々と壁からひしめき合って出てきた。それに対する構えはすでに出来ている。ディックがすでに用意していたのは、レム・ファン・リートフエルトも得意とする対吸血鬼密集防御体制であった。

吸血鬼の突撃にけたたましい音を立てた金属製の壁の後ろから無数の瀉血矢が放たれる。飛び出してきた吸血鬼は次々と血煙を上げて死んでいった。ウイレムは思わず口笛を吹いた。ディックの意外な戦術指揮能力に対しての賞賛である。瀉血矢の放つタイミングは絶妙であった。

だが、次の瞬間、考えてもいないことが起こった。

穿たれた壁の穴ではなく、その壁の上から無数の人間が密集防御を飛び越えてその裏に現れた。飛び降りた辺りにいた弓箭兵は瞬く間に素手で引き裂かれて死んでいった。僅か一分程度の間、地上には数百人の不死鬼たちが降り立っていた。その間、百名程度の弓箭兵と密集防御を形成していた兵たちが殺されている。ディックの指示で急ぎ、不死鬼たちを遠巻きに困ったが大して意味がないことは本人たちにもわかっていた。

「ヨハネスっ！貴様か！」

ウイレムは珍しく我を忘れて怒っていた。不死鬼たちの先頭に立っていた長身の男こそ、ヨハネス・ファン・ビューレンである。寡黙なヨハネスが珍しく言葉を口にした。エドは幾分驚いた顔をしている。

「ファン・バステン隊長・・・いや、元帥にまで上り詰められたとか」

「貴様！なぜ不死鬼軍などにいる！なぜ、大監獄を襲ったっ！」
「あなたにはおかしな質問をする。不死鬼の軍はこれから私が作るのだ。ドースブルフの考えた吸血鬼の軍など野良犬の集団に過ぎない」

ヨハネスは長剣を握っているが構えてはいない。だが、ウィレムは彼を攻撃することはできなかった。確信がある。自分では絶対にヨハネスには勝てない。ウィレムは三十八歳だが、まだ衰えを感じているわけではない。だが、三十を過ぎた辺りから、成長を自覚することはなかった。十年前、ヨハネスはすでに自分と互角の実力を持つ剣士だったのである。不死鬼となった今では自分がかんうはずもなかった。

「戦おうとしないのは正しい判断だ。私と戦うのはあなたではない。だが、いいのか？」

「何がだっ?!」

苛立ちは隠せない。

「これほどの人数をここに向けていいのか？ドースブルフの鬼子はこのチャンスを見逃さないだろう。まあ、あの愚かな女が考えていることなど本来不要だそうだがな。そこにいるうちの軍師によればだが・・・」

指を刺した先にいるのはエドであった。ウィレムには見覚えのない人物である。

「牛血粉の製法など、こちらから行動を起こして奪わなくても、そのうちヤン・エッシャーが教えに来るでしょうね。公国軍にとってはその方が都合が良いのですから・・・」

エドの言葉にウィレムは戦慄した。まさしくヤンの考えていた戦略である。牛血粉の製法を教えれば、不死鬼軍はフリッツ側とルワーズ側で分裂する。ドースブルフはアズナブル辺境伯の制御を受け付けなくなり、ファン・クラッペの発言力も低下する。そうすれば、マウリッツがフリッツ王国の宮廷を説得して、戦力の薄いフリッツ側国境を攻め落とせばいいだけで、ヤンにコテンパにやられたドースブルフなど恐れる必要もない。それをこの不死鬼軍の軍師を名乗る男は読んでいたのである。

「あなたたちが早く帰れるように、我々もいなくなるとしましょう。ヨハネスさん、急ぎましょう」

不死鬼たちの集団はすでに暗闇となった街道に向かって異常な跳躍力で移動し消えていった。騎馬隊を指揮して追跡しようとしたディックをウィレムは止める。

「だめだっ！今すぐ護国騎士団本部にもどれっ！吸血鬼治療チームが危ないっ！」

ヤン・エツシャーに油断があつたとすれば、不死鬼軍の幹部は一枚岩ではなく、連携に欠くと思ひ込んだことであろう。確かに彼らは決して一枚岩で結束しているとは言いがたい。だが、お互いを利用して、自分の作戦を成功させる形で、結果として連携することは可能であつた。今回の計画はヨハネスが配下の不死鬼を劇的に増やすために大監獄を襲撃することを知つたイエケリー又が考え出したものである。イエケリー又は軍将としての才能がないことをヤンによつて証明されている。だが、それをドースブルフは責めることは出

来なかった。イエケリーヌがヤンに叩きのめされた翌日、ドースブルフ自身もしてやられたからである。

だが、一方でイエケリーヌは作業員としてはほとんど失敗したことはなかった。ヤンが現れる以前には、アメルダムにおいてファン・ダルファー邸を不死鬼の館に変貌させ、そこを拠点に小悪党を集めて不死鬼の指揮官に変えていった。また、ロビー・マルダーを護国騎士団本部に送り込み、吸血鬼化させることにも成功している。ヤンの治療により不死鬼となって生きながらえることはできたが、それは工作そのものの失敗ではなかった。

イエケリーヌが行動を起こした理由は、ヤンやシモン、ジエラルドにより、フリッツ王国国境とノールトを結ぶ街道が封鎖されたことによる。これにより、ノールトの吸血兵は行動に必要な血液を得られず、眠らせたままの状態にせねばならなかった。すでに、ザーンに進軍することも出来なくなっていたのである。そこに、中央医局によって開発された擬似食品で不死鬼が人血なしに生きられるようになったとの発表が入ってきたのだ。

ノールトには多少の血液の備蓄はあったが、もちろん日持ちはしない。何より、ノールトの城主となっている不死鬼の軍師、エド・フレイレが血液を供給することを拒否した。エドはヨハネス同様、十年前に自然発生した不死鬼である。イエケリーヌの詐術によって不死鬼になった者ではなく、ドースブルフは彼に対する命令権は持っていないかった。

最初は協力的で、余分な吸血兵をノールトから撤収するリートフェルトの軍に処分させ、残りの吸血兵でノールトを接収したのだが、ケテル村でドースブルフがヤンに敗れて以来、言うことを聞かなくなった。不死鬼軍においてドースブルフの制御をまったく受け付け

ないヨハネスに接近し、今回の大監獄襲撃の策を練ったのである。

護国騎士団本部は無防備な状態にあった。本来それはそれほどの問題ではない。すでに、アメルダム不死鬼軍の拠点はヤンによって壊滅させられていたのだから。だが、市街戦になるのならともかく、少人数でのテロに対する完全なる防御と言うのは存在しないのである。

大監獄での変事に騎士たちが緊急招集された時には、その日の勤務時間は終了していた。吸血鬼治療チームではまだザーンからの捕虜を受け入れておらず、医師と看護婦の人数だけが過剰な状態で、仕事の割には人数が多く、残業の必要な状態ではなかった。一方で、急激に年下とは言え部下が増えたことで、マルガレータもサスキアも多少神経にこたえたようで、ストレスが溜まっていた。心配したピーテルが二人を中庭に誘って、少し肌寒い中で軽くワインとチーズを楽しむことにしたのである。

「ピーテル君は本当に気が効くわ・・・よかったね。マルガレータ」
「なるほど・・・多少はエッシャー先生の気が利かないところを気にしているのね？」

「ば、馬鹿いわないですよ・・・ヤンは・・・ヤンはあれで良いんだから・・・やさしい・・・」

「患者さんに優しいのと自分に優しくしてくれるのはちょっと違うんじゃないかしら？」

「何をそんなに勝ち誇っているのよ・・・」

ピーテルは何も言えない。同い年の女性二人を前に、ホスト役になってワインを交互に注いでいるだけだった。気は利くが、物慣れな

い若者なのである。

勤務時間も終わり、三人が気づきもしないうちに、警備の騎士たちは招集され、大監獄に向かってしまった。庁舎内には極少数の警備と残業している者しかいない。もっとも、そうでなければ、この事件の被害者の数は一桁多くなっていただろう。

他に誰もいなかった中庭に、急に数名の護国騎士団の制服を着た者たちが現れた。三人とも気づかなかったが、彼らは本部庁舎の屋根の上から飛び降りてきたのである。

「マルガレータ・バレンツ主任研究員ですね？」

「は、はい。そうですが……」

サスキアはおかしなことに気づいた。マルガレータはもはや護国騎士団でも有名人である。騎士団員にとっては、主任主計官。ピーテル・ブルーナの婚約者であり、中央医局の職員にとっては、カリスに認められ過去に例のない研究助手からの主任研究員への出世を遂げた、吸血鬼治療チームのリーダーとして、知らぬ者はいない人物なのだ。保安兵団の兵員にしても、マルガレータを知らないと言うことはありえない。

「マルガレータッ！下がってっ！」

叫んだのはサスキアではない。ピーテルだった。その声に反応したのもマルガレータではなくサスキアであった。サスキアはマルガレータの腕を引っ張って、すばやくピーテルの後ろに下がった。マルガレータはまだ状況を把握できていない。

「ほう……うわさの天才研究員がこんな青臭い小娘だと思ったら、

それを守るナイト様もこんなお子様とはね・・・」

嗜虐的な笑みを浮かべたのはイエケリーヌだった。その目がサスキアを捉え、険しくなる。

「ふんっ！あの子の小娘まで・・・その二人を連れて行けっ！」

後半は自分の背後にいた不死鬼たちへの命令である。だが、不死鬼たちは二人に近づくことができなかった。ピーテルが剣を構えている。もちろん、不死鬼にとってみれば、こんな小柄でどう見ても武術の素養のない男を恐れる必要はない。ただ、その目には気迫がこもっていたので、一瞬狼狽とは言わないものの、ためらいが出ただけである。

「へえ・・・かわいい娘二人の前で格好をつけたいのかい？どれだけががんばれる試してあげよう」

イエケリーヌがフレイルを構えた。

「うわあああっ！」

悲鳴に近い叫び声を上げながらピーテルは体ごと剣を突き出して突っ込んだ。しかし、ピーテルの剣技は護国騎士団の中でも一、二を争う弱さである。一人の兵士としては半人前以下なのだ。

イエケリーヌのフレイルがうなり、ピーテルの左の脛を強く打った。ピーテルは前のめりに転倒する。一撃で左足の骨は砕けた。

「ピーテルっ！」

悲鳴を上げたマルガレータとそれを支えていたサスキアはすでに不死鬼たちに両腕を捕まれ、イエケリーヌの後ろに引っ張られていた。「あら、せっかく格好つけたのにこけちゃったわね」

サディステイックな笑みを浮かべながらフレイルを頭上で回す。その直後にイエケリーヌは意外そうな顔をした。

「へえ、頑張るじゃない・・・」

ピーテルは剣を杖にして立ち上がり、激痛に耐えながら、再び剣を構えた。左足は完全に折れている。右足のみで体重を支えながら戦う意思は目から消えない。

再びイエケリーヌのフレイルが唸る。

「うっ！」

今度は右腕を直撃した。さらにイエケリーヌはフレイルを振るい続ける。

「どこまで頑張れるかしら？」

「マルガレータとサスキアさんをはなせっ！」

「なかなか根性あるじゃない・・・でも、しつこい男は嫌われちゃっわよ」

「ピーテルっ！もういいっ！もういいからっ！やめてーっ！！」

あきらめないピーテルの声と、イエケリーヌの嘲笑と、半狂乱のマルガレータの悲鳴が交錯する。すでにピーテルは両腕両足を破壊されていた。立ち上がれない状態になっても、ひざ立ちになり、折れ

た腕で剣握り、すがり付くようにイエケリーヌに近づこうとした。

「マルガレータっ!」

「ふんっ!」

無情の一撃がピーテルの剣を砕く。すでにピーテルは瀕死の状態だった。それでも、戦う意思は失っていないかった。折れた剣をひざ立ちのままイエケリーヌに向けて突き出そうとする。

「イエケリーヌ様・・・護国騎士団が戻ってきました。そろそろ引き上げませんと・・・」

いつの間にかいなくなっていた不死鬼の一人が戻ってきてそう口にした。

「そう・・・ここまでみたいよ。ピーテル君。よく頑張ったわ。あなた」

再びフレイルが唸る。

「やめてえええっ!」

マルガレータの悲鳴が響き渡った時、ピーテルは護国騎士団本部の中庭に横たわっていた。両腕両足は折れ、最後の―撃はアバラを砕いていた。それでも、まっすぐに伸ばすことも出来ない腕は、折られた剣を離さず、下げられることはなかった。

戦時体制

護国騎士団本部に戻ったウイレムとディックは、庁舎内の様子を確認して立ち尽くした。僅かに残っていた警備要員数十名は全て死体と化していた。事務員や医師たちには死者がいなかったのは、残業している者がいなかったからである。残っていたのは警備兵と本部に寝泊りしているサスキアとマルガレータ、二人を気遣って気晴らしの機会を作っていたピーテルだけだったのだ。

他には誰もいない中庭でピーテルは発見された。折れた右腕に折れた剣を握り、仰向けに倒れている。体中にフレイルで痛めつけられた傷があり、その姿はあまりに無残であった。しかし、それでもなおピーテルは剣を握り締たままで、すさまじいまでの抵抗の意思がそこから感じられたのである。

「ブルーナっ！おいつ！ブルーナっ！」

「げ、元帥……だめでした……僕は……マルガレータとサスキアさんを……」

「馬鹿野郎！無理しやがって……」

その場にいた全員が衝撃を受けていた。ここに戻るまでの間に、吸血鬼治療チームの中心人物である二人の拉致がイエケリーヌの狙いであることはおよそわかっていた。間に合わない可能性のほうが高いことでもある。だが、ピーテル・ブルーナのこの姿だけは誰も想像していなかった。イエケリーヌにピーテルが挑めば叩きのめされることは誰でもわかる。だが、まったく武術の素養がない、泣き虫とまで言われる童顔の主任主計官が最後まで必死の抵抗を示したことが、その惨状からありありと伺えたのである。

「ファン・バステン元帥っ！」

宮廷から急いで戻ってきたらしいカリスがそこにいた。

「クリステル先生っ！ブルーナをっ！ブルーナを助けてくれっ！」

「わかってます。手足には添え木をっ！担架をもつてきてっ！すぐに屋内に運ぶのよっ！」

カリスもすでにおよその事情は知らされていた。サスキアとマルガレータ、自分の妹と親しい部下が拉致されたのである。だが、動揺することなどできなかった。ピーテルの姿がカリスだけでなく、その場にいた全ての人間に、悲嘆にくれるような甘えを許さなかったのである。

「急いでっ！絶対に死なせないっ！ここで彼を救えなかったら、マルガレータに合わせる顔がないっ！」

最近では酒癖の割るがさ目立ちつつも、颯爽とした仕事のできる女医として人気のあるカリスだが、このときの様子には鬼気迫るものがあった。カリス自身は不死鬼軍事件の勃発以来直接診療や治療に参加してはいなかったが、根の部分は医者そのままである。

ピーテルはすでに気を失っていた。だが、それでも、折れた剣を離そうとはしなかった。ディックが指を一つ一つ引き剥がして剣を取り上げたが、手の皮膚に血がにじむほどの強い力で握られていた。

ウィレムは護国騎士団本部をディックに任せて、再び宮廷に参内し

た。宮廷では全ての閣僚がそこに残っていた。なぜか國務府に出ていて難を逃れたカレンまでそこにいる。閣議室の雰囲気はきわめて暗いものだった。ウィレムがここを飛び出してから、四時間程度。その間、閣僚たちはほとんど何もしゃべらず、ただ、矢継ぎ早に入ってくる凶報に青ざめた顔を見合わせるだけであつた。

「ファン・バステン元帥。状況はすでに聞いている」

重々しく口を開いたのはジェローンである。僅か数時間前までは同じ閣議室ではルワーズの明るい未来の展望が話題になっていたのに、事態は急激に悪化した。不死鬼軍はついにその名にふさわしい不死鬼の軍隊を得たのである。僅か数百人とはいえ、吸血鬼ではなく理性ある不死鬼、それも自ら望んだ者たちのそれは、十倍の軍隊をもつてしても侮れない相手であつた。そして、この日の犠牲者の数は、すでに不死鬼軍事事件の勃発からの全被害者の数を上回っている。それも、一方的に襲われたのではなく、警備や戦闘体制にあつた兵士たちが殺されているのだ。

陰気なせりふや雰囲気の似合わないジェローンの表情にも陰りがあった。

「我々は油断していた。ヤン・エッシャーの智謀をまるで公国そのものの力のように考え、彼が不在のアメルダムでの警戒を怠つていたのだ」

「陛下、今は悔やんでいるわけではありません。重傷を負ったピートル・ブルーナ主任主計官は、かなうはずのない不死鬼を相手に、ぼろぼろになつても剣を手放すことはありませんでした。我々も悲嘆にくれているわけではありません」

ウィレムの言葉にうつむいていた閣僚たち全員が顔を上げた。ピー

テルの人物は皆多少は知っている。少なくとも武勇の人ではないことは明らかにわかる。『文弱の騎士』と言う言葉の見本のような若者が見せた意地は、身分の高い者たちにも衝撃を与えていた。

「ブルーナ主任主計官の容態は？」

「今、クリステル医師が必死の治療を……絶対に死なせないとい……」

全員、息を呑んだ。絶対に死なせないとは、死の危険があるときにしか使わない言葉だ。単に尊い命が失われるだけでなく、公国を代表する人材と目されるピーテルが失われるとすれば、国家にとって大きな損害であった。

そのとき、空気の重い閣議室に実務的な風を吹き込んだ者がいる。

「少し、落ちつきましょう。まず、被害について冷静に把握することです」

こう言ったのはベルト・ファン・レオニーである。シルヴィアでさえ動揺を隠せない状況にあって、この引退予定の政治家は動じていなかった。引退を決意することで、若い頃の理想家としての本性を取り戻し、それに長く政権の首班であった経験を加えた、政治家ベルト・ファン・レオニーの完成形がここにあった。

彼の一言で、閣議室は落ち着きを取り戻した。

「大監獄では全ての囚人は吸血鬼か不死鬼に変えられてしまいました。逃走に成功したのは不死鬼のみです。両者の比率は今現場に残された吸血鬼の死体を数えておりますが、おそらく、八百名は不死鬼となって逃走したものと思われます」

単純に一体の不死鬼に対して十名の騎士で戦力的につりあうとするなら、八千人の部隊が必要となる。だが、この計算ですらおぼつかない。不死鬼の中にはヨハネス・ファン・ビューレンのような武術の達人が他にもいるかもしれない。凶悪犯の中にそうした人物が含まれている可能性もある。また、不死鬼の中の軍師、エドと名乗る男の存在が不気味だった。ヤンの智謀をすでに読んでいたのだ。強力な不死鬼の軍隊に彼の智謀が加われば、数的優位などまったく意味を成さないのではないかと思われた。

「監獄内の職員百名あまりが逃走の前に全員殺害されていました。確認はできていませんが、ほぼ確実に全滅です。また不死鬼たちを包囲した際に九十八名の護国騎士団第三部隊の騎士が戦死しております。護国騎士団本部では二十三名が死亡、五名が重傷、そして三名が行方不明です」

「行方不明が三名・・・マルガレータ・バレンツ主任とサスキア・ウテワール婦長以外に誰が？」

「ロビー・マルダー氏の姿が見えません」

「！」

これは閣議の場にも知らされていないことであった。ロビー・マルダーは対不死鬼軍作戦における重要人物である。

「まさか・・・不死鬼軍に戻ったとでも・・・」

「いえ、それはないでしょう・・・牛血粉の効果を知るサンプルとして連れ去られたのかもしれませんが・・・」

ロビーがまともな生活を送れるようになるのなら、不死鬼軍の指揮官たちに翻意を促せると考えられていた。しかし、凶悪犯を中心として、指揮官ではなく兵士が不死鬼で構成される軍相手となると、

この策略の成功はおぼつかない。凶悪犯に特赦を与えると云うのはさすがに司法上難しい話であった。また、ザーンから多くの不死鬼の捕虜と、吸血鬼からの不死鬼化に成功したノツプラー副隊長が移送されてくるので、ロビーの重要性は低下しているかもしれない。そのため、この話題はこれ以上議題に上ることはなかった。

この日の被害は、これまでの不死鬼軍事件で最大のものではなかった。戦場でもこれほどの死者は未だ出たことがなかったのである。

「して、元帥としてはこの事態にどう対応すべきとお考えか？」

「私自ら、ザーンに向かい、護国騎士団長代理と共にノールトを制圧します」

「！」

「おそらく、二人を連れ去ったイエケリーヌも、大監獄から逃亡した不死鬼数百名もノールトに戻るはずですよ」

「し、しかし・・・人質を取られているのでは・・・」

「だからと言って待っていても始まりません。何より、私にはこの事態を解決する智謀はありません。公国軍の全力を持って不死鬼軍に対する必要があります。智謀はヤン・エツシャーにあります。彼の元に最大の戦力を置き、その判断で戦うべきですよ」

公国元帥自らが、自分の弟の判断で全てを決めるべきだと述べたのである。だが、誰もがそれを正しいことと認めざるをえなかった。今回の失敗は、アメルダムとザーン、二箇所に分かれた対策本部の隙を付かれたのだ。ヤンやシモンの軍勢が護国騎士団本部にあれば、または護国騎士団本部にいるサスキアやマルガレータがザーンにいれば、少なくともこの二人が誘拐されることはなかったはずである。ヤンやシモンならイエケリーヌを撃退することも可能だった。いや、ウィレムが護国騎士団本部にいれば、イエケリーヌごときはどうにかできたはずである。だが、前線とアメルダムとの戦力分析によっ

て、不死鬼に対抗できる人材が明らかに足りない状態だったのだ。

被害の大きさと、ウィレムの発案に漂う悲壮感に閣議室に悲観主義の汚水があふれ出し始めたとき、それを一気にろ過する一言が発せされた。

「ファン・バステン元帥！ルワーズ騎士団の召集を許可するっ！」

突然、ジェローンが声を高めて宣言した。一瞬、ほとんどの者はその言葉の意味を理解できないでいる。

「その戦力をもってヤン・ファン・バステン護国騎士団長代理と共にノールトの制圧することを命ずる！護国騎士団本部に残っていた第三部隊及び騎士団長親衛隊も動員せよっ！」

「そ、それでは、アメルダムがから空きになります！」

ほとんど震える声で異を唱えたのはシルヴィアである。

「宮廷騎士団を出勤させる！アメルダムの防御は私自らが指揮を執る！」

これは、不死鬼軍事件を単なる辺境の反乱ではなく、隣国による侵略に匹敵する体制で対応することを意味する。ジェローンは自分の認識を短時間で改めたのである。この事件を契機に公国の政治体制を一新して真の独立公国への道を歩もうと言う考えには変わりはない。だが、そうしたチャンスである前に、公国の存続にかかわる重大な事件であることを思い知ったのである。

ルワーズ騎士団とは、平時には存在しない騎士団である。実際には平時に存在する騎士団は護国騎士団と東西南北に配置された小規模

な地方騎士団、海岸線と海上を担当する海上騎士団、そして、宮廷府に所属し、国公ジェローンが直接指揮をとる宮廷騎士団のみである。ルワーズ騎士団とはこれに加え、実際に外国からの脅威を受けた場合のみに編成される主力騎士団で、武術の経験がある貴族や平民の予備役を招集したものである。戦時動員の基準は騎士団としては最大の一万名であった。

四つの地方騎士団は実際には幾つかの州都の城兵をかき集めて編成されるもので、騎士団の名称はついているものの、まとまった一つの戦力として活動しているものではない。時間をかければ一箇所に戦力を集め、本来の意味での騎士団として編成することも出来るが、住民を収容している地方都市の防御を考えると動かすことは出来ない。

不死鬼軍に対応して動かすことの出来る戦力は護国騎士団と宮廷騎士団、そしてルワーズ騎士団の三つだけであった。

「私もザーンに参りますっ！」

さらに突然声を上げたのはカレンであった。

「か、カレン殿！危険ですっ！」

ウィレムが驚愕し反対する。戦場に女性をあえて連れて行くなどと言うことは考えられるものではなかった。

「ザーンには多くの民衆もおります。その中には女性もいることでしょう。私は武術にも軍略にも素養はありませんが、多くの軍勢を率いていくのならば、補給や編成などの事務処理も多大な負担となるはずです。私にも出来ることが必ずあるはず！お願いします！行

かせてください」

「し……しかし……」

確かに、ルワーズ騎士団と護国騎士団、それに保安兵団からの要員などをあわせれば、二万近くの軍勢となる。これだけの軍勢を支えるのはザーンだけでは難しい。ピーテル・ブルーナが重傷となった今、そうしたことに対応できる人材は護国騎士団内にはいないのだ。カレンは特別監察官の仕事ぶりから、計数にも通じ、ファン・ハルス家の事業を兄ジェラルドと共に成功させた実績もある。

「ファン・バステン元帥……カレン殿に頼もう。躊躇っている時ではない。人手はどう考えても足りない。彼女の力が必要だ」

ジェローンが諭すように言う。彼は覚悟を決めていた。ことが不死鬼の軍隊八百名の誕生となれば、これは完全に戦争であった。臨戦態勢を作らねばならない。すでに今日だけで数百名の被害者が出ているが、もう一桁上になることも覚悟せねばならなかった。

「宮廷書記官！特別辞令を發布するっ！」

いつもどおり、あわただしく書面が用意される。

「国務府臨時事務官カレン・ファン・ハルスを対不死鬼軍連合騎士団特別事務官に任ずる！ウイレム・ファン・バステン元帥の下、全軍の補給と軍政を整えよっ！」

カレンはいずれ国務府の参事官となることが正式に決まっているが、この時点ではまだ臨時事務官の身分である。この特別辞令により『対不死鬼軍連合騎士団』と呼称される軍隊が定義され、彼女のはその事務面を統括する責任者となったのである。

「不死鬼の社会復帰プログラムの実施チームについては、一時的にシルヴィア・ファン・バステンの直轄とする！」

シルヴィアの現在の身分は國務府と司法府の非常勤顧問でしかなく、すでに護国騎士団長夫人ではない。だからと言って、手が空いているわけでもなく、また、妊婦であるので無理はさせられない。他には人がいないための苦肉の策であった。社会復帰プログラムの実施自体が遅れることもいたしかたない。

「司法卿アントン・ファン・フェルメール！社会復帰プログラムには司法府の管轄となる問題も多い！従姉弟殿を補佐せよ！」

司法府の長たる司法卿に司法府の非常勤顧問の補佐をせよと言うのだから、一見おかしい命令ではあるのだが、誰もそのことは口にしない。アントン自身、自分から名乗り出てもそうしたかったことであつた。シルヴィアはすでに次期國務卿に内定しているのだから、この時点で部分的に権力移譲があつたとしても問題にはならないのだ。ファン・レオニーも反対しなかつた。

ジェローンの宣言が終わつたところで、ウィレムが立ち上がった。全員を見渡してから軍務卿として厳かに宣言する。

「ルワーズ騎士団の召集により、不死鬼軍事件は正式に対不死鬼軍戦争となる！ここに公国全土に戦時体制を敷くことを宣言するっ！各府各局の軍務府への協力をお願い申し上げますっ！」

頭を下げたウィレムに対し、閣僚全員がうなずいた。これまで、『不死鬼軍事件』称し、大規模ではあるが一事件として処理され、護国騎士団と保安兵団と言う平時の治安維持に責任を持つ軍隊の担当

であったものが、ルワーズ騎士団の召集によって、正式に戦争と認識されることになる。この宣言はすぐに公国全土に伝書鳩を使って通達された。すでに、各都市では周辺住民の城塞都市への収容を行い、非常事態への対応を取ってはいるが、いよいよ戦争であることが正式に認められることで、全ての国民が震撼することとなる。

「おいつ！エリートセンセイ！おいつ！ファン・ビーヘル先生っ！」

そこは、カリスに十日間の謹慎を言い渡されたフレデリック・ファン・ビーヘルの部屋である。すでに十日の謹慎期間は終わっているのだが、ファン・ビーヘルは休暇届を出して休んでいた。多忙のため気にしてもらえないカリスはそれを受領して、そのまま休ませているのである。戻ってきたところで頭痛の種が増えるだけと考えたのかもしれない。

フレデリックの寝室の外で窓をたたいていたのは失踪したと言われたロビー・マルダーであった。

「っーロ、ロビーっ！」

あわててフレデリックは窓を開けた。すぐにロビーが部屋に舞い降りる。ファン・ビーヘルは爵位は低いが裕福な貴族の若様であり、屋敷は大きい。彼自身はそれほど贅沢な生活を好んでいないように、部屋の中は意外と殺風景であった。寝室は本当に寝るためだけにある部屋で、ベッドとその脇に小さな棚があるだけである。

「ふう……久々の運動は気持ちがいいもんだが……頼んでおい

たものは出来たか？」

「ああ・・・何度か動物実験を繰り返していたところだ。今のところ問題ない。高確率で期待した効果は出ている。エッシャー先生の場合もそうだが、この手の薬については動物実験と人間で試した場合とではあんまり差は出ないようだし・・・」

「すぐにその薬をもらえないか？」

「えっ！おい・・・っていうか、抜け出して来て大丈夫なのか？」

ファン・ビーヘルは若干寝ぼけていたかもしれない。ここ数日徹夜続きで秘密の研究を続けていたのだ。

「知らないんだな・・・マルガレータとサスキア、二人のお嬢ちゃん不死鬼に攫われた。その騒ぎに乗じて出てきたのさ」

「なっ・・・じゃあ、あんたは何をする気なんだっ!？」

「なに、あの二人はな・・・俺を多少なりとも人間らしくするためにはいぶん手を焼いてくれた。それがこんなことになったんだ、手をこまねいているわけにはいかねえさ。使うことになるとは限らないが、いざと言う時のためにあんたの薬がほしいんだ」

「・・・わかった・・・」

ファン・ビーヘルは枕もとの引き出しから錠剤の入ったビンを渡した。

「呑めばすぐに効果が出る。普通の吸血鬼の場合と違って、あんたの場合は体に成分が蓄積しているんだ。エッシャー先生の薬はその効果を抑えているに過ぎない。蓄積され続けた成分は尿になって外に出るが、一定量は体の中に残っているはずだ。この薬を使えば・・・」

「」

「なるほど。やるじゃねえか。エリート医師の面目躍如だな・・・」
「だが、一度使ったらもう戻れんかもしれんっ！動物実験でもこれ

を使ったマウスはアンステロドが効かなくなった・・・それでも・・・いいのか？」

言葉の後半につれて声は小さくなった。ロビーの目には抗いがたい力がこめられていた。にらんでいるわけでもないのだが、彼のすることに反対することはできそうもない。この件については誰の言うことも聞くつもりがないことは確かだった。

「さつき言ったとおりよ。できるだけ使わないようにはするさ」

「ああ・・・そうしてくれ・・・」

「それから・・・俺がいなくなったところで、すぐにザーンから何名もの不死鬼が到着するらしい。ルドガーのおっちゃんだけじゃどうにもなんねえだろうよ。医学院の若い姉ちゃんとか、年増の女医とかが来ているが、伝染性吸血病に詳しい奴が足らん。戻るなら今だぜ・・・おいしい場面で戻るんだな」

「ロビー・・・」

「道はずした人間もよ、タイミング次第じゃヒーローになれることもあるんだぜ。今しかねえだろ？俺もあんたも・・・」

ファン・ビーヘルは最初はバツの悪い表情だったが、ロビーの言葉に意地を張ることをやめた。

「・・・わかった・・・すまない」

「謝る事なんかねえよ。薬、ありがとうな。休みまで取らせて悪かった。じゃ、行くぜ・・・」

ロビーは再び窓から外に出ようとした。飛び降りる瞬間にフレデリックが声をかける。

「ロビー・・・死ぬなよ・・・」

「ああ、できるだけな・・・あばよ・・・」

彼の異名どおり、窓から出た瞬間音もなく忽然といなくなつた。一体どうやったのかはフレデリックにはわからない。これが亡霊ファンタムロビィのアメルダムでの最後の目撃証言となる。

翌朝の護国騎士団本部は奇妙な雰囲気だつた。前日に多くの死者が出ている。ファン・ダルファー邸での戦闘の直後のように意気消沈しているわけでもなく、いつものようにオチャラけた態度で悲嘆をこまかしているわけでもない。皆、黙々と自分の仕事に専念していた。どこか鬼気迫る感じすらある。

イエケリー又は致命的なミスを犯したのである。単にマルガレータとサスキアを攫い、警護兵を殺しただけであれば、あるいは士気は大きく低下し、護国騎士団も中央医局もその機能を果たせなくなつていたかもしれない。だが、最後まで抵抗し続けたピーテル・ブルナーナの痛めつけられた姿が、全ての関係者に強烈な義務感を植え付けていた。

『最後まで自分の役割を果たし続ける』

無言のうちに全員が同じ決意を胸にしていたのである。

軍務府ではなく、護国騎士団本部を拠点にしてルワーズ騎士団の編成は始まっていた。ルワーズ騎士団には普段軍務には関係していない、武術の稽古を受けている貴族の師弟や平民、傭兵などが含まれる。必ずしも精鋭とはいえないが、人数だけが多い。対吸血鬼の戦闘経験のない者ばかりなのも不安ではあるが、ディック・ファン・

ブルームバーゲンの指揮の元、即席でその訓練を実施することになった。編成の実務は軍務府首席参事官であるカレルが担当する。アバラの骨折はまだ完治はしていないが、すでにそんなことを言われる状況ではなかった。

二万人近くに膨らむ対不死鬼軍連合騎士団の補給計画はカレンの手によって立てられている。本来はピーテルの仕事であった。彼の下には数名の主計官がいたが、優秀で若い上司に頼りきりであった彼らにはこれほどの規模の仕事は荷が重い。だが、やはり、自分たちのリーダーであったピーテルのボロボロの姿が彼らを奮い立たせた。カレンの指揮の元、完璧な補給計画を立て始める。さらにカレンはカレルを手伝って、部隊の編成に関わる事務処理にも協力していた。装備品の確保や支給などの手続きをテキパキと進める。カレンの有能さは目を見張るものであった。

「ブルーナ主任が気が付いたわっ！」

大広間に設置された司令部にカリスが駆け込んできた。対不死鬼軍の戦術立案作業を行っていたウイレムは、すぐに立ち上がった。カリスは昨晩から徹夜で大手術を行っていたのである。その後も、ほとんど付きつきりで看病をしていた。ウイレムは容態を気にしながらも、宮廷から帰ってきた後も仕事に追われ、ピーテルの様子を確認することはできていなかった。

「容態は？」

「命に別状はないわ。幸いにも折れた肋骨が内臓を傷つけたりしてなかったから。ただ・・・左足は膝の骨が完全に砕かれています。足を引きずることには・・・」

「・・・そうか・・・」

ピーテルの病室に、カリス、ウイレム、そしてディックが入ってきた。ピーテルは両手両足にギブスがはめられ、身動きが取れない状態になっている。それ以外にも無数の傷を負っていた。

「元帥・・・すみません・・・二人を・・・守りきれませんでした・・・」

ピーテルは力なくそう言った。自分の武術など騎士としては半人前にもなっていないレベルであることは自覚している。それでも、あの状況では自分が戦って血路を開く以外方法が思いつかなかった。結果は予想されていたがそれでも、そうせざる得ない。おそらく公国一の秀才であるピーテルが下した決断はもつとも彼らしからぬものであった。

「馬鹿野郎！最後までお前は戦い続けたじゃないかっ！お前以外の誰がそこまでできるっ！」

珍しく声を荒げて叫んだのはディックであった。ディックはある意味ではピーテルをパシリに使っていたようなところがある。シモンと共に悪巧みや馬鹿騒ぎに巻き込んで、嫌がるピーテルに『サスキア嬢防衛隊』に入隊させ、その片棒を担がせていた。だが、文弱の代表格と思われたピーテルの闘志に最も心を動かされたのはこの元絵師だったのである。

「ああ、ブルーナ、お前は立派に戦った。お前こそ護国騎士団の勇士だ。今は休め。二人は・・・二人は絶対に助けてみせる。それは俺の仕事だ」

ウィレムは力強く言った。ピーテルを安心させるためだけでなく、自分自身に誓いを立てるためであった。

病室を出たウィレムはカリスに話しかける。ディックは病室に残っていた。

「クリステル先生・・・あとはお願いします。貴女はここに残って、伝染性吸血病対策室を指揮していただかなければならない。ここの警備は宮廷騎士団と保安兵団が合同で行うことになりました。彼らに相談できないことがあったら、カレルに話してください。軍務府で都合をつけます」

「わかりました・・・ところで、ファン・バステン元帥」

「は・・・何か？」

「ちゃんと奥様には話してから出陣してくださいね。あまり不安にさせるのは、お腹の子供にもよくありませんわ。たとえば、シルヴィア・ファン・バステンと言えども・・・」

「は、はあ・・・」

ウィレムは気まずい顔をした。正直、シルヴィアと何を話しているのかわからないのだ。ザーンから戻った後も、ほとんど二人にはなっていない。それでかまわないような間柄ではあった。すでに十年近くを夫婦として過ごしてきたのだ。一方で、確かにお腹の子供とは気になるし、あまり心配させるのは本意ではない。かと言って改めて出陣を前に何を話していいのかもわからないのだ。

とりあえず、ずるずると出陣までの間は、シルヴィアに話す機会は引き伸ばされていったのである。

凶報は事件が発生した日のうちに伝書鳩でザーンに通達された。文書の後半はほとんどウィレムがヤンに宛てた謝罪である。ザーン防衛軍の幹部たちは驚愕した。最初に文書を受け取ったリートフェルトはどうヤンに伝えていいのか迷いシモンに相談するが、シモンもどうしていいかわからない。何より、シモン自身が大きな衝撃を受けていた。ヤン以外ではサスキアとマルガレータをよく知るのは彼だけである。ジエラルドにも相談したいところであったが、彼はノールトとフリップ王国とを結ぶ街道を封鎖する作戦を実施中で、ザーンには不在であった。

結局、報告は夜のワインを片手にしながらの定例会議まで引き延ばされたのである。

「え、エツシャー先生・・・アメルダムより急な報告が・・・」

重苦しい口調でそう言ったのは結局リートフェルトであった。

「リートフェルト隊長・・・私は鈍いと言われることはありませんが、さすがに何か悪い報告であることぐらいは今日のお二人の様子を見ていればわかります。そして・・・私にも心当たりはある。ロビー・マルダー治療チームのことではありませんか？」

シモンとリートフェルトは驚いた。そんなことまで予想できていたのか・・・。

「マルガレータ・バレンツ主任研究員とサスキア・ウテワール婦長がイエケリーヌに拉致されました。また、その際、二人を守ろうとして、ピーテル・ブルーナ主任主計官がイエケリーヌと戦い重症を

負ったとのこと。その他、護国騎士団本部では死者と重軽傷者が多数でおります」

「そうですね・・・」

ヤンは驚いた様子も取り乱すこともなかった。

「まさか・・・予想されていたのですか？」

「可能性としては。ただ、護国騎士団本部にイエケリーヌがたやすく侵入できるとは思ってませんでしたので・・・」

「お二人の拉致と前後して、大監獄が不死鬼に襲撃を受けました。ヨハネス・ファン・ビューレンと、エドと名乗る二人の不死鬼により、囚人たちの大半が不死鬼に変えられ、逃走したとのこと。不死鬼化に同意しなかった囚人は吸血鬼に変えられ、獄卒や監獄の職員は全滅、それ以外にも逃亡を阻止するために包囲した護国騎士団の兵員にも百名近くの死者がでております・・・」

「なるほど・・・それで本部がから空きになったところをやられたのですね・・・そのように、不死鬼軍の指揮官が協調して作戦を取ることはないかとかをくくっていました・・・だが・・・」

ここでヤンは少し何かをためらっている様子であった。だが、思い切って言葉を続ける。

「ノールトの城主であると言うエドという不死鬼が、私の考える男であれば、私の想像を超える軍略などいくらでも出てくることでしょう・・・」

「え？知っているのですか？エドと言う男のことを？」

「確信はありませんでしたが、今回の作戦の鮮やかさを考えれば可能性はきわめて高い」

「何者ですか？」

「私と、サスキアの幼馴染。孤児院で一緒だった男です。エド・フ

レイレ。護国騎士団員か傭兵として戦場に立ちたいと子供のころから口にしていました。十年前の戦争の際に、フリップ王国の遠征軍に参加することまでは手紙で知っていました。そして……」

まだ、ヤンには躊躇いがある。なにか後ろめたそうな感じであった。そんなヤンをシモンも始めてみた。

「エドは戦場で不死鬼となりました。フリップ王国軍で伝染吸血病が流行した際に感染したのです。戦友が自分の首筋に噛み付き、その男の首を刎ねた後、自分が周囲と違い理性を保ち続けていることに気づいたエドは、自殺の衝動に耐えながら、戦友たちの血をすすり生き延びたのです」

シモンたちは話の不自然さに気づいた。なぜ、ヤンはここまでの話を知っているのだろうか？本人の口から聞く機会がなければ知りえないことばかりである。

「先生は……そのエドと会ったのですか？」

思わず口にしたのはシモンである。

「ええ……。十年前の吸血鬼掃討戦。私は兄と共にこのあたりまで来ていました。そのとき、彼を発見したのです……。当時は不死鬼を無害化する方法はありませんでした。本来であれば、私は彼を殺さなければならなかった……」

「……殺せなかつたのですね……」

「当時、カイパー博士の研究では牛血粉はできていませんでしたが、人間の血液よりも大量の哺乳類の血液を摂取すれば、それに代えられるということはわかっていました。私は彼にそれを教えて逃がしました。その後の消息はわかりませんが、おそらく、この十年の間

にファン・クラッペに出会ったのでしよう。ファン・クラッペはあくまで医者です。彼に戦略や策略を提案していたのは、エドかもしれない……」

「手ごわい男なのですね？」

「共に時間をすごしたのは子供のころの一、二年だけですが……そのころから、武術と戦略の才能の片鱗は見せていました。私のライバルであったと言ってもいい」

エドと言う男を生かすことで、ヤンはこの不死鬼軍事件の発生を誘発したとも言えた。そして、今まで戦っていたドースブルフやイケリーヌの吸血鬼軍などは、言うなれば二軍でしかなかったと言うことに、他の二人も気づいた。エド・フレイレとヨハネス・ファン・ビューレン、この二人が指揮する八百名の不死鬼の軍隊を相手にいたいどう戦えばいいのか……。

「先生……先生は、その男に勝てますか？」

震える声でそう訊いたのはリートフェルトだった。戦う哲学者と呼ばれる思慮深い男も、この件については、良案が浮かびそうもないヤンの機知だけが頼みなのだ。これはルワーズ公国全体にとってそうなのである。

「やるしかないでしょう。一方で、相手の首脳部にエドがいるのなら、奇妙なことですが、信頼できるところもある」

「と、いいいますと？」

「バレンツ研究員とサスキアの安全です。彼なら二人を虐待したりすることはありません。他の不死鬼、特にイエケリーヌとドースブルフあたりを抑え切れるかどうかが問題ですが、そこには私に思案があります」

リートフェルトとシモンの表情に光が指した。ヤンが「思案がある」と口走るならば、そこに失敗はまずない。たとえ、ヤンに匹敵する知恵者が不死鬼軍にしようと、不敗の知将ヤン・エツシャーと共にある限り、不死鬼軍に対抗することは不可能ではない。

ヤンはやはり二人を驚愕させる作戦を、つい先ほどまでとはまったく違う表情で話し始めた。たとえ、婚約者を人質にとられていようと、ヤンの英知に陰りは現れない。

美食と言つ名の策略

ノールトにあるゼーラント州府近くの教会にマルガレータとサスキアは監禁されていた。今ところそれほど待遇は悪くない。監禁と言つよりも軟禁であろう。教会内は自由に動けるし、食料などはわざわざあるが貯蔵されている。外出が許されないだけであつた。そもそもノールトには二千名ほどの吸血鬼が駐屯しており、ほとんどは眠らされているとはいえ、危険極まりなく外に出ることなどできはしないのである。

「ピーテル・・・ピーテル・・・ピーテルが・・・」

二人が拉致されてから数日経過しているが、マルガレータはほとんど半狂乱の状態であつた。サスキアはずっと彼女をなだめながら逆に冷静に状況を受け入れている。少なくとも自分たちを虐待して何かをしゃべらせようと言つ意図は今のところない。マルガレータを誘拐する理由としては、牛血粉の製法を聞きだすことだと言つことぐらいはサスキアにもわかるが、製法をしゃべつたところで、実際に製造するのは、首謀者の一人であるというファン・クラッペでもない限り、マルガレータの協力なしには不可能であつた。

サスキアとしては、最悪、牛血粉の製法など教えてしまつていいと考えている。その程度のことはヤンの知略があれば問題にならないと信じているのだ。ヤン自信が不死騎軍に牛血粉の製法をリークしようと考えていることまでは知らないが、本当に秘密にするつもりであれば、もつと徹底的に機密保持を図ろうとしたはずである。

「マルガレータ・・・大丈夫・・・ピーテル君は生きているわ。お姉さまがすぐに帰ってきたはずよ。必ずどうにかしてくれる・・・」

サスキアは拉致され、連れ去られる際に、護国騎士団と前後して宮廷の方から向かってくる馬車がいたことに気づいていた。おそらくはカリスが乗っていたに違いないと今は思うのだ。あれほどの危機に際してもサスキアはきわめて冷静であった。

「サスキア……どうしよう……どうしよう……」

「マルガレータ、安心して。ピーテル君はお姉さまがどうにかしてくれる。私たちのことはヤンが考えてくれる。ね。あんまり泣いてちゃだめ。元気出さなくちゃ」

初めて二人が会ったときはこの逆の構図であった。マルガレータは幼い外見とは裏腹にしっかりもので、こと恋愛などに関してはサスキアよりもはるかに大人なのだが、この事態にあってはまったく立場は反対であった。

「ずいぶんとあの先生のことを信用しているのね。婚約者なんだって？」

突然、二人がいる応接間に入ってきたのはイエケリーヌであった。サスキアはさつと身構えたが、マルガレータは震えて彼女の背に隠れてしがみついている。

「ええ。そうです」

「なるほど、未来の旦那様が助けしてくれると信じているわけだ？」

「違います」

「？」

イエケリーヌは意外な返答に怪訝そうな顔をした。

「ヤンであれば、私たちが拉致されたことなどであなたたちに屈したりはしないと信じています。これぐらいのこと、彼にはたいした問題でもありませんわ。あなたたちの思惑を粉々に打ち砕くついでに、私たちを助けることぐらい、簡単なことでしょう」

挑発的な台詞を真剣な表情でサスキアは言つてのけた。マルガレータの顔は引きつっているが、イエケリーヌの表情には雷光がひらめいた。先日ヤンのとげのある言葉に逆上して失敗したばかりであるからどうにか自制する。二人を拉致したときの振る舞いについても、あとからエドとドースブルフにたしなめられていた。無意味に残酷なことを行えば、恨みを買ひ、かえって敵の士気をあおることになるだけであつた。

「見せ付けてくれるわね。あの小さなナイト君といい・・・まあ、いいわ。牛血粉の製法は教える気になつた？」

「だっ・・・誰がっ」

必死に勇気を振り絞つて言い返そうとしたマルガレータをサスキアが止めた。感情的になつた方が負けなのである。こちらが冷静でさえいれば、この短気な女不死鬼に隙を作ることには難しくないと思つた。サスキアは看護婦であり、またメイドであると言っただけで、シルヴィアやカレンのように政治や経済に詳しいわけでもなく、まして軍略や政略のことはわからないが、周囲に公国トップクラスの頭脳が集まる環境にいたので、こうした点ではきわめて思慮深い。なにより、ヤンを心から信頼しているだけでなく、彼の考えを理解したいと努力していたので、『ヤンならどうするか』を考えれば、おのずと適切な状況判断ができた。

「教えないとは申しません。でも、誰が製造されるのですか？牛血粉の製造はきわめて微妙な調節を要する工程が必要です。慣れた医

師でもない限り確実に失敗しますわ。間違えると毒にもなるものです」

「・・・」

イエケリー又は不死鬼である自分を前にしてまったく怖気づかないサスキアにやや苛立ちを感じた。すぐ感情的になるところは父親似であった。だが、これについてもなんとか自制することに成功した。

「なら、あなたたちに作ってもらえないわね」

「そうして差し上げてもかまいませんが、肝心のバレンツ研究員がこの様子ではすぐには無理でしょう。必要な材料と設備を書き出しますから準備はしておいてください。それができて、彼女が落ち着いたら牛血粉を製造しますわ。出来上がったら、私が調理して差し上げます。レシピもお教えますわ。試食した方によれば結構美味と言っていたいております」

「ふんっ！うまがるうがまずがるうが関係ないわ。私はね」

ボタンツという大きな音を立てて、イエケリー又は出て行った。サスキアの態度に我慢できる限界ぎりぎりであったようだ。イエケリー又は不死鬼となる以前から父親に武術かとして育てられた。男児のいないフーゴーはことあるごとに『なぜ女に生まれたっ！』と彼女を責めた。そのため、イエケリー又は女性らしいことなどまともにしたことはほとんどない。看護婦として女性らしさの象徴のようなサスキアがうとましかった。

「イエケリー又殿。勝手に捕虜に会われるのは困りますな。あなたが捕らえた捕虜でもここは私の城です。許可を得てからにしてくださいませ」

部屋を出たところですぐに行き会ったのはエドであった。エドとし

ては、せつかくの人質である二人の女性をイエケリー又が怒りに任せて傷つけはしないか心配だったのだ。牛血粉の製法など盗まなくても、そのうちヤンがリークすると言う読みには自信があり、自分に指揮権があれば、確実に裁可しない作戦であるのだが、実施してしまつた以上はそれを利用しない理由はない。イエケリー又とフーゴ一の親子の短気さと残虐さには反吐がでる思いであつた。

「あら、軍師殿。かわいらしい捕虜のお二人はあなただけのものではなくてよ」

「あなたがまた馬鹿なことをしないか心配なだけです。無用に残虐なことをすれば、敵軍の指揮を上げさせるだけだ。余計なことさえしなければ、今回の護国騎士団本部強襲は大変よい結果をだせたんですがね。二人を守るうとした若い騎士を叩きのめしたりするから護国騎士団本部では兵士や事務員のモチベーションがかえつて上がつてしまつた。それさえなければ、目的はともかく結果には満足できるものだったのですが・・・」

「ちっ・・・」

「多少はあの二人を見習つて女らしくしてみてはいかがですか？不死鬼とは言え、がさつさが目立ちすぎると少々見苦しい」

「このっ・・・！」

イエケリー又は激発し、エドに殴りかかった。不死鬼同士であれば素手で格闘するだけでもどちらかが死ぬ可能性が高い。だが、エドはイエケリー又の拳を軽くよけ、手首を握つて捻り上げた。人間ほどに苦痛は感じないが、動きを封じされた屈辱感は変わらない。前かがみにさせられたままの姿勢のイエケリー又の耳元でエドがささやく。

「ご令嬢。これ以上はドースブルフ殿の立場を悪くするだけだ。お分かりでしょう？お父上の今の立場を。あなたとご自身の失態は致

命的なものだ。これ以上墓穴は掘らないほうがいい……」

手を離れたエドはそのまま後ろも振り向かずにマルガレータとサスキアがいる部屋に入ってしまった。屈辱に歯軋りをさせながら、イエケリー又は教会から出て行く。

「……エド……」

「久しぶりだね。サスキア」

サスキアの目は大きく開かれた。マルガレータは二人の会話を理解できない。なぜ親しげに呼び合うのか。

「なぜこんなところに……まさか……不死鬼に……」

「ヤンから聞いていないのか……」

エドはザーンでヤンが語ったのと同じことをサスキアに話した。十年前、フリップ王国軍に傭兵として参加し、予期せぬ伝染性吸血病の大流行で感染し、不死鬼となったこと。戦友の生き血を吸いながら生きながらえ、掃討戦に参加していたヤンと出会い、逃がされたこと。二人の会話は散文的なものであった。エドは何の感情もこめずに過去を打ち明けたのである。

「なぜ……不死鬼軍なんか……」

「それは、君が知る必要はない。君たちの安全は私が保証しよう。イエケリー又あたりに手出しはさせない。だが、牛血粉の製造については教えてもらいたい」

サスキアは幼馴染から真実を聞きだすことをあきらめた。ヤンと同様にエドのこともよくわかつている。話したくないことはとことん話さない男であると言っことを。サスキアは表情を堅くした。目の

前にいるのは幼馴染のエドではなく、不死鬼軍の軍師なのだ。サスキアにはエドがヤンに負けないほどの知恵を持つ男だと言うことがわかっていた。

「それは先ほどイケリー又さんにお話しました。マルガレータが落ち着いたら協力します。材料と設備をそろえておいてください」

急に、敬語を使い始め、二人の間には見えない壁が出来上がったようにマルガレータには見えた。

「了解した。無理をしてもらう必要はないがね。そのうちヤンが教えてくれることだろう。だが、何もしないよりは君たちを安全にできる」

「配慮には感謝します」

たいした会話もせずエドは部屋から出て行った。

「サスキア・・・」

エドが出て行った後、しばらく二人は無言だったが、マルガレータが先に話しかけた。ピーテルのことから立ち直ったわけではないが、サスキアとエドの様子を見て、自分以上に深刻な状態にサスキアがいるのではないかと思ったのだ。

「さっきの人は・・・」

「エド・フレイレ・・・私とヤンが孤児院にいたときの幼馴染よ・・・」

「どんな人なの？」

サスキアは多少はためらったものの、子供のころの話を始めた。

サスキアとエドは物心ついた時から孤児院にいた。サスキアの両親は商用の旅の途中で事故死している。まだ、二歳の時で両親の顔もよく覚えていない。ウテワール家は中程度の商家であったが、サスキアを置いて旅に出ていた両親が死ぬと、使用人たちは散り散りになっていった。屋敷に誰もいなくなったところで、サスキアの乳母は孤児院に彼女を預けて消えてしまったのである。資産は使用人たちが勝手に持って行ってしまっていた。

エドは赤ん坊のころに親に捨てられている。フレイレという姓も親のものではない。捨てられたときに身に着けていた産着に『エド』と言う名前が縫いこまれており、それを名前にし、姓は字を書けるようになった時に自分でつけたものである。百年戦争の際、傭兵隊長として活躍した人物から取ったものであった。

五歳年上のエドはサスキアにとって兄のような存在であった。だが、エドにとっては妹ではなかったかもしれない。まだ、恋と言うにはあまりにも幼く、淡い感情ではあったが、今のサスキアにはエドが幼友達以上の感情を持って自分に接していただのではないかと思える。色恋沙汰に鈍いサスキアではあるが、それに後からでも気づくことが出来るほど、エドは彼女だけに優しかった。

エドは孤児院ではリーダー格であった。年上の少年たちに孤児院の子供たちがいじめられたと聞けば、大勢が相手であってもそれに立ち向かっていった。本人も怪我をするが、年長の少年たちはボロボロにされる。年の割りに腕っ節がいいというだけでなく、頭も良かった。独学で武術の練習もしていたようだ。年少の孤児たちを誘い、罾を仕掛けた川べりに不良少年たちを誘い込んだこともある。落と

し穴に落ちた少年たちは穴に川の水が流れ込み、溺死の恐怖に小便を漏らしたところで、エドに泣いて許しを請うたのである。

九歳の時、母親を病で失い天涯孤独となったヤンが孤児院に入ってきた。同年輩のヤンにエドは興味を持ち、二人は仲良くなった。年少のサスキアもそれに加わったが、エドとは違う感情をそのころからヤンには持っていた。二人ともやさしく、勇敢で賢い少年であったが、ヤンの方が感情的にはずっと不器用で、何か放っておけない感じがしたのだ。医者を目指していることを知ったサスキアはすぐに、自分は看護婦になろうと決めたのである。

エドとヤンは中が良かった。二人が組めば近所の不良グループなどまったく敵ではなかった。まともに遣り合っても、二人がいれば十人以上の年長の少年たちを相手にしても、まったく遅れをとることはなかったし、作戦を立てて完膚なきまでに叩きのめしたことも数知れずあった。そのうち、孤児院の子供たちに手を出す不良たちはまったくいなくなった。

だが、いつしか、エドはヤンのことを友人としてよりライバルと思うようになっていた。サスキアの存在だけがそうさせたわけではない。少年ながら兵士となって戦場を駆け巡ることを志すエドは、医者を目指しながら自分同様に喧嘩の強く、荒事にも頭の切れるヤンを過剰に意識していた。

ヤンがファン・バステン家に引き取られることが決まったとき、エドはヤンを呼び出した。

エドはファン・バステン家が武門の家柄であると知っていた。ウィレムが活躍した吸血鬼掃討戦の前は父親が保安兵団長であった程度で、爵位の低さからそれほど地名ではなかったが、優れた騎士を

何人も輩出した家系であった。

エドはヤンをなじった。そんな家に生まれながらなぜ医者などを目指すのか。それだけの武術があつてなぜ戦わないのか。エドはライバルを永遠に失うことを恐れていたのだ。だが、ヤンはそんなエドに向かつて語つてみせた。

「戦わないわけじゃないんだ。僕は敵を倒すためじゃなくて、患者を助けるために戦いたいんだ」

サスキアはこの一言を忘れない。これは自分の一生を決めた言葉だった。エドはわざわざ喧嘩をする場所にエドはサスキアを呼んでいたのである。

エドは何も言い返せなかった。決して鈍重な男ではない。ヤンとはまるで兄弟のように、賢く理屈っぽい、物腰の柔らかく、いざとなると大人もしり込みするほどの迫力で怒るところまで同じだった。だが、ヤンのこの物言いには何も言い返せなかった。

二人は結局喧嘩することなくそこから帰った。それ以降、サスキアはどちらとも連絡を取ることはなかった。子供ながら、ヤンが医者を目指すなら大変な勉強をするのだろうと思ひ、邪魔にならないようにと考えたのだ。エドに対しては、自分がクリステル家に引き取られたあと、程なくして孤児院から姿を消したため、連絡を取ることは出来なかったのである。

その間、サスキアは知らないが、ヤンとエドはたまに文通をしていたようだった。

「エドがどうして不死鬼軍にいるのかはわからないけど、さっきの話だと、十年以上不死鬼として生きていたみたい・・・ヤンが動物の血液で生きながらえる方法を教えたからできたことだと思う。人間を襲って血を得ていたならいくら彼でも十年も逃げ続けられるはずはないもの・・・」

「サスキア・・・」

「マルガレータ・・・牛血粉を作って。そんなことでヤンの考えていることの邪魔にはならない。それに・・・」

「彼も、他の不死鬼たちも伝染性吸血病患者にはかわりなっことね・・・」

「ええ・・・敵か味方かっというのは軍の人たちの話。あなたと私は医者と看護婦。私たちの戦いは別にあるわ」

「わかった。やりましょう。おいしい牛血粉料理で不死鬼軍をギャフンと言わせてあげなきゃっ！」

「味付けは私がするわよ・・・」

「うっ・・・信用ないわね・・・」

この話でマルガレータは完全に自分を取り戻した。ピーテルのことは心配しても仕方がない。サスキア同様、カリスのことは心から信頼していた。彼女の腕なら死なせることなどあるうはずもない。

翌日、不死鬼のうち主だった者十数名が二人を軟禁している教会に集められた。ヨハネス、エド、フーゴー、イエケリーヌの他、バールフ・グローティウスなど大監獄で不死鬼となった者数名と、フーゴー配下の吸血兵団の指揮官もいる。

「私たち二人だけでは何百名もいる不死鬼の方々全員分をご用意することはできません。皆さんに試食していただいで、よろしければ、

大量に生産できる体制をお考えいただければと思います。味付けについてレシピをお教えしますわ」

サスキアは愛想がいいとはいえないが、ごく普通に振舞っていた。マルガレータの表情には多少の緊張感はあるものの、サスキアにならって出来るだけ自然な振る舞いをする。とても捕虜のものとは思えなかった。二人の様子にむしろ不死鬼軍の幹部たちは戸惑っている。

二人の手によって不死鬼たちの前に二枚の皿が並べられた。

「スープはたまねぎをすってオニオンスープ風に仕上げました。細かく刻んだうえに、長い時間煮込んでますので、消化能力の弱い不死鬼の皆さんにも胃の負担にはなりません。材料が足りないのです、お肉風の料理は用意できませんでしたが、鱈の魚脂を使ったものを作ってみました。とろとろのゼリー状のものはゼラチンになります。魚肉風の味付けになっています」

見た目にも料理らしく、不死鬼の優れた嗅覚にも心地よい香ばしい香りが食卓に立ち込めていた。

「さあ、お召し上がりください。皆さんは私たちの臨床実験で対象になったロビー・マルダー氏と違って、筋力を抑えるようなことはされてませんから、必要な牛血粉の量はずっと多いことと思います。おなか一杯食べる必要がありますわ。おかわりもご用意いたしました。実用化される場合はここまで手間はかけられないかもしれませんが、簡単なメニューもございますので」

おそろおそろと言った具合に不死鬼たちは料理に手をつけ始めた。監視下において調理されていたので毒などが加えられているはずも

ない。先に吸血鬼を使って毒見もされていた。

全員、無言であった。気づくと、皆ガツガツと食べ始める。半分ほど食べたところでバールーフが感想を述べた。

「うまい・・・鉄くさい人血しか飲んでいいない我々にとっては・・・」

ドースブルフですら貴族の出身にもかかわらず、テーブルマナーなど忘れたかのようにスープを口の中にかっ込んでいく。イエケリー又は無言であった。どこか悔しげである。ヨハネスも無言で落ち着いた雰囲気を持しているが、スプーンを口に運ぶペースはやや速い。

「驚きましたね。栄養を取るための薬のようなものと思ってましたが・・・これはれっきとした料理だ・・・」

そう口にしたのはエドである。牛血粉の料理の完成度にはヤンでさえ驚愕したものである。同じレベルの知性を持つエドにとっても、これは意外なものであった。

エドとヨハネスにとっては十年ぶりに人間らしい料理を口にしたことになる。平静を保っているようであり、おかわりを始めると他の不死鬼たちと先を争い、食卓は戦場と化した。

「みなさん、落ち着いてください。まだまだありますから。ちゃんと並んでくださいね」

異常発達した筋力を持つもの同士が取っ組み合いなど初めては、サスキアとマルガレータは無事ではすまないが、その場を取り仕切っ

ているのは完全にこの二人である。牛血粉料理を目の前にしては、不死鬼など欠食児童の集団かのようにであった。

その場にいた人数の三倍の分を用意していたなべが空になったとき、何人かの不死鬼は目に涙を浮かべていた。吸血兵の指揮官である不死鬼たちである。大監獄から来た者たちに比べ、不死鬼となつてからの期間が長く、納得してそうなたわけではない連中にとっては、この食事は奇跡のようなものに思えたのである。

捕虜であるはずの二人の女性に、何人もの不死鬼たちは頭を下げて感謝の言葉を述べてから教会を去った。ヨハネスは何も言わずに去つたが、ドースブルフ、イエケリーヌ、そしてエドは最後まで残つて、二人に話しかけた。

「驚いたな。これほどのものとは思わなかった」

「サスキアほどの味付けは誰にでもできるものではないかもしれませんが、簡単なレシピもあります。今日のような料理は大人数相手に作るのは大変かもしれませんが」

エドの言葉に答えたのはマルガレータである。完全に落ち着きを取り戻していた。不死鬼たちの反応を見てからは余裕すらある。自分たちのやってきたことは間違っていないと言つたことをここでも確信できたのだつた。

「不死鬼の皆さんであれば、ご自分でお食事を用意することも可能ではありませんか？」

「いや、ほとんどの者は囚人が犯罪者、まともな料理などではしないだろう・・・」

ドースブルフでさえ、二人に真剣に相談する体である。

「イエケリー又っ！この二人に調理法を習えっ！」

「なっ！ち、父上っ！」

「お前が牛血粉の製造法と調理を覚えれば、操死鬼を使って大量に用意できる」

「な、なぜ私がっ?!」

「女だからと言うのではない。だが、我々にとって食事は重要な問題だ。他の指揮官級の不死鬼などには任せられる話ではない。操死鬼を十分に使いこなせる者でないと不可能だからな」

エドは笑いをかみ殺した。まさか本当にこの二人を見習って、女らしいことをイエケリー又にさせることになるうとは。余計な口を挟んでイエケリー又の機嫌を損ねるのも悪いので、何も言わないことにした。

「牛血粉の製造は微妙な工程が幾つかありますが、ちゃんと手順さえ間違えなければ失敗はしませんわ。調理については、普通の料理と変わることはありません。イエケリー又さんはお料理の経験は？」

「あ・・・あるはずもないっ！」

「イエケリー又！捕虜とは言え、これからこの二人に教えを請うのだっ！態度をあらためよっ！」

エドはたまらず噴出してしまった。イエケリー又は赤面しながら睨みつける。

「大丈夫。慣れればなんてことはありません。武術の稽古はずっとされていたのでしょうか？それよりはずっと簡単です」

「うっ・・・ぐっ・・・お、お願い・・・するわ・・・」

だが、ドースブルフとエドはさすがに二人の様子が気になった。何

かをたくらんでいるようにも思えるが、いったいそれが何なのかはまったくわからない。ドースブルフはエドにそつと話しかけた。

「いったいこの二人は何を考えているのだ・・・」

「わかりませんが・・・彼女たちがこうしたところで、戦局に影響があるわけでもありません。別に公国軍の不利益にもならない・・・」

納得しかねるドースブルフは直接二人に聞くことにした。

「なぜ、このように我々に協力的なのだ？」

返答はサスキアからであった。

「牛血粉の製造については、私たちが話さなくてもいずれヤン・エツシャーからリークされることでしょう。それはそちらの・・・エド・フレイレさんもそうお考えのようですし、私もそう思います」

「こんな調理法まで教えてくれるのはなぜだ？」

「別においしい料理を提供したからと言って、戦局には影響しませんわ。どうせならおいしいものを食べさせたいと思っただけです。私もこちらのバレンツ研究員もあなた方と武器を取って戦うようなことはできませんが、せめて皆さんの味覚を屈服させてみたかったのですわ」

三人の不死鬼はポカーンと口をあけて呆けてしまった。

「これはまた・・・すっかりしてやられたようだな・・・これについては完全に白旗をあげるしかない」

ドースブルフは機嫌よさそうに大笑いした。無骨な不死鬼の武人も

さらなる敗北

千名弱の護国騎士団第二部隊はジェラルド・ファン・ハルスに率いられ、ステーン湖北側のフリップ王国国境付近に布陣していた。目的はルワーズ公国内の不死鬼軍の拠点であるゼーラント州州都ノールトとフリップ王国側のレオンス・ド・アズナブルが選挙している辺境伯領との連絡を遮断することである。数日に一回程度の割合で通りかかる操死鬼で編成された輸送部隊を攻撃し、ここ十日ほどはノールトへの人血の補給は行われていない。

もともと、ノールト城内の吸血鬼はほとんど眠らされているため、人血を必要とするのは九百人に満たない不死鬼たちのみである。備蓄されている分もあるだろうし、すでに牛血粉の製造方法を知るマルガレータ・バレンツとサスキア・ウテワールが拉致された報告も受けているので、この作戦の意義は薄れ始めてはいる。牛血粉の製造体制が出来上がれば、眠らせている吸血鬼を含めた三千ほどの部隊でザーンを強襲することだろう。そのため、後数日で帰還することももう決められてはいた。

数度にわたる輸送部隊へ攻撃については、ほとんど危険はなかった。最初の二回程度は操死鬼のみで編成された部隊だったため、一方的な勝利を収めることができたし、その後も一、二名の不死鬼と多くても百体程度の吸血鬼で編成された護衛部隊がいただけであったため、勇猛な第二部隊の戦力を持つてすれば、被害なしに殲滅するとは容易かったのである。その際、不死鬼の指揮官を数名捕虜とし、ザーンに送っている。

その日はこの地方には珍しく大荒れの天気であった。激しい雨が兵

士たちの鎧を叩き、雷鳴が轟いていた。だが、操死鬼にとっては天候など関係ない。第二部隊警戒を怠ることはなかった。ただし、操死鬼が物資を運んでくるであろうフリッブ王国方面に対してのみである。

第二部隊は三分の一の三百名が周辺に広く分散して街道を監視していた。三交代制で残りの部隊は本陣に待機している。輸送部隊が発見されればその規模に応じて本部から迎撃部隊が出立する手はずになっていた。

戦闘は完全な不意打ちであったわけではない。本陣は街道に程近い小高い丘の上に設営されていた。雨のため発見は遅れたが、ノールト側から三百程度の騎馬が接近していることに気づいた騎士はすぐにジェラルドに報告したのである。ほとんどの騎士たちは、それをザーンからの味方部隊であると勘違いした。大監獄での事件は報告されていたが、不死鬼の騎馬部隊などという発想は浮かんでこなかったのである。

「すぐに兵士をかき集めてくださいっ！対吸血鬼密集防御体制で迎え撃ちますっ！」

ジェラルドの判断は早かった。騎士たちは一瞬驚いたものの、ジェラルドを信頼している。状況は把握できていなくともその指示にはすぐに従った。だが、それでも間に合わなかったのである。

本陣のある丘以外は周囲は平坦な土地であり、かなり遠くまで見渡すことができる。雨のために視界が狭いとは言え、発見された時点から程なく密集防御体制は完成され、騎馬隊を迎え撃てるはずであった。ただの密集防御体制ではなく、ヤン・エッシャーが事前に考案して、ジェラルドによって訓練が繰り返されていた、対騎馬用

の体制で、通常の備えに加えて、鉄の壁の隙間から何本もの長槍が斜めに地面に突き刺され、騎馬の突撃を防ぐものである。それを円形に配置して、内部への侵入を防ぎ、瀉血矢による攻撃で迎撃するのである。不死鬼の操る騎馬であるから、壁の直前で全身をやめるか、周囲を回転しながら攻撃する可能性が考えられるが、その状態から内部の弓兵が瀉血矢を放てばいいの。

だが、この戦術の欠点はどうしても準備に多少の時間がかかることであつた。そうであっても、本来なら騎馬が突撃してくる前に円陣を完成させたはずであつたのだが、騎馬隊の速度はジェラルドの予想を大きく上回つた。どうにか、前方の壁が完成した時点で僅か百メートルのところまで接近されていたのである。

「早いつ！早すぎるっ！」

ジェラルドの判断が遅かつたわけでも、騎士たちの反応が鈍かつたわけでもない。これ以上はないスピードで体制を整えようとしても間に合わなかつたのである。

不死鬼の騎馬隊の移動速度は異常であつた。駿馬のみで編成したとしてもこれほどにはならない。馬の移動速度を超えていた。

正面だけ固めた密集防御は気づいたときには、両側から背後に回りこまれていた。さらに、一部の騎馬は三メートルもある長大な槍と盾の壁を悠々と飛び越えみせた。瞬く間に瀉血矢を持った弓兵隊に切り込まれる。両側から回り込んだ騎馬隊はそのままの勢いで円陣を構成中だつた盾兵たちを蹴散らす。数分間に五百名以上の第二部隊の騎士たちが全滅した。

円陣の中心にいたジェラルドは、周囲の騎士たちを叱咤して、交戦

姿勢を崩さなかった。巻き返しは不可能であっても、無様な死に様を見せては、他の部隊の士気まで低下させてしまう。何よりこの部隊の騎士たちは、護国騎士団中最も勇猛な者たちである。ヘンドリック・ファン・オールトの鍛えた男たちが簡単に崩れ立つわけにはいかない。

「弓は捨てるっ！剣を抜いて交戦するのだっ！」

だが、周囲にいた騎士たちは勇敢に交戦しつつも次々と散っていった。誰一人として逃げ出そうとしないのはさすがではあったが、抵抗むなしく次々と切り刻まれていく。不死鬼の側にも被害は出ているが、ごく僅かであった。

ジェラルドは必死に戦った。すでに指揮官としての役割を終えている。自分の周囲には指示に従えるような騎士は残っていないかった。ジェラルドの戦術指揮能力や部下達の士心を得る力はリートフェルトやヤン、シモンにも一目置かれている。一人の騎士としても平凡とは言いがたいレベルではあったが、まともに不死鬼と戦って勝てるかといえはさすがに心もとなかった。まして、武術の経験のある不死鬼であればなおさらである。

ジェラルドはそれでも指揮官と思しき長身の剣士に向かって馬を駆った。

「貴様が頭目かっ！」

ジェラルドは騎乗で用いる長槍を突き出すのではなく、上から振り下ろした。長身の男はプレートアーマーを着込んでいるし、多少傷つけた程度では不死鬼にはダメージにならない。昏倒させることを狙って、切ったり突いたりするよりは、頭部を殴りつけるほうが有

効なはずであった。

攻撃は不死鬼の左側に走りこんだジェラルドの騎馬がすれ違う瞬間であった。長身の男は長大な剣を右手に持っている。左側に回り込めば攻撃は遅れるとの計算からであった。

だが、渾身の一撃は不死鬼の頭部には届かなかった。常人には扱うことも難しいであろう長剣を小枝でも振るかのように振り上げ、片手で重い槍の一撃を受けたのである。異常発達した筋力を持つてなせる技ではあるが、これほどの確にやってのけるのは、武術の技量が伴ってのことではありえない。

長身の不死鬼はすばやく右手で長槍を掴むと、片手で思いっきり振り上げた。槍を放さなかったジェラルドは軽々と持ち上げられ、反対側に放り出される。さらにその直後、不死鬼の左手からジェラルドの槍が放たれた。鎧を貫き、右わき腹傷つけた槍は逆側に飛び出し、地面にジェラルドを縫い付けた。

「悪くない技量と判断力だが不死騎隊を相手にするには役不足だったな。ヤン・エツシャーに伝える。待ったところで状況は好転しないとな。我々は補給の問題は解決したし、内部崩壊ももうありえない」

「たいした自身だな」

必死に虚勢を張って見せはしたものの、声は震えていた。

「シモン・コールハースには、ヨハネスが待っていると伝えよ。楽しみにしていると」

長身の不死鬼、ヨハネス・ファン・ビューレンはそう言うと、周囲

には何も言わずにフリップ王国方面へ騎馬を駆った。何の指示も出されていないにもかかわらず、他の不死鬼たちもそれに従う。

ジェラルドは彼らの駆る馬の異常に気づいていた。目がつぶされ、耳もふさがれているのだ。さらに、馬としてはあまりに筋肉量が過大であった。

「不死鬼化した馬か・・・ヤンに可能性は聞いていたが・・・」

そうつぶやいたジェラルドの周りにはすでにその言葉を聞ける部下は一人も残っていなかった。

「ああ・・・シルヴィア、ということではヤンに頭を下げるついでに不死鬼軍と戦ってくる」

ヤンやサスキアとはまた違った意味で、ウィレムは不器用な口調でシルヴィアに出陣を告げた。もちろん、シルヴィアはそのことを元々知っている。カリスの「出陣前にちゃんと話をして安心させるように」と言われていることなのだが、そんな改まったことは、結婚以来ずっとなかった。

ドンツと、シルヴィアはウィレムの背中を叩いた。

「公国元帥閣下のお子様はあなたに抱かれるのを心待ちにしているわよっ！しっかりとやってらっしゃい。ヤンだけに負担を掛けるのも良くないわ。そんな大軍の指揮なんて気詰まりな仕事は彼には似合わないんだから。その辺は兄の仕事よ」

シルヴィアに不安がないわけではない。だが、武人の妻としての心構えは出来ているし、サスキアやカリスとは違って、元々貴族の出自である。戦となれば何があってもおかしくないことは承知しているし、夫が後る髪を引かれて戦いに集中できないことなどが無いように送り出す責任があると考えている。シルヴィア・ファン・バステンは結婚前からそういう女性であった。

「ああ、ガキのお守りをするために帰ってくるよ」

「ええ、行ってらっしゃい。オムツの替え方ぐらいは覚えておいてほしいわね」

僅かこれだけの会話であった。それで二人には十分なのである。

「ルワーズ騎士団および護国騎士団の精鋭たちよっ！」

護国騎士団本部の屋外練武場総勢二万名に及ぶの兵士が集まっていた。ノールト奪還作戦の主力となるルワーズ騎士団と護国騎士団本部に残っていた第三部隊および騎士団長親衛隊、それに保安兵団やアメルダム周辺の小規模な兵団から供給された予備兵員たちである。ウィレム・ファン・バステンはすでに公国元帥の地位についており、ルワーズ公国全軍に対して責任を負う身である。本来であれば、自ら戦場で陣頭指揮を執ることなど滅多にない地位ではあり、彼自身の出陣が、不死鬼軍事件の重大さを表していた。

「不死鬼軍は今やその何ふさわしい、不死鬼のみによって構成された部隊を手に入れたっ！たとえ、十倍以上の兵力を誇っていても、苦戦は免れ得ないっ！しかし、無謀な戦いを挑むわけではないっ！必ず勝算を持って、不死鬼軍に挑む！そこは私と、我が弟、ヤン・

ファン・バステンが全てをにかけて責任を持つっ！怯むことなく、不死鬼に立ち向かうのだっ！満身創痍となりながら最後まで叩き続けたピーテル・ブルーナ主任主計官の姿を思い起こせ！決して最後まで諦めるなっ！」

二万名以上の全員が、公国元帥に向かって、剣を抜き、自分の顔の前に立てて、誓約の礼を取った。ヤン以上に武人としての名声の高い、新任の公国元帥は全ての武人の尊敬を集める男であった。

ルワーズ騎士団の編成作業は僅か半月で完了していた。カレン・ファン・ハルス、ディック・ファン・ブルームバーゲン、カレル・パルケレンネが中心となって行われたが、カレンのみならずディックの意外な手腕が発揮されたがために、予定の三分の二の日数で作業が終えられたのである。さらに公国中央医局の協力を得て、マウリッツ・スタンジエが以前からひそかに開発を進めていたという、対吸血鬼の新装備も配備された。これ以上は望めない体制を築けていることは間違いないのだが、それも安心とはいえないのが不死鬼との戦いであった。

慣例どおり、全ての兵士たちはワインのグラスを片手に持っていた。乾杯の音頭は総司令官ではなく、その補佐役に当たる人物が行うのもやはり慣例であった。今回はディックがそれを勤める。

「酒の一滴は地の一滴！」

「一滴飲むたび一滴屠らん！」

全員がワインを一气飲みし、足元でグラスを叩き割った。

降りつづけていた雷雨が止んのは、すでに夜半であった。ゼーラント州のフリップ王国国境から程近い街道沿いの小さな小屋にヨハネスはある人物を迎えに来ていた。街道を監視するジェラルド率いる護国騎士団第二部隊を強襲した目的はこの人物をノールトに迎えるためであった。

「ファン・ビューレン卿。ご苦勞であった。そなたのお陰で私はやっと、ルワーズの大地を踏むことができた。感謝している」

若いわりに暗く、落ち着きすぎた声でそう言ったのは、アルベルト・ルワーズであった。物心ついたときにはすでに名目上のルワーズ公爵にフリップ王国から指名されていた人物である。母親はジェローンの異母姉ファムケであり、父親は現フリップ王国国王シャルルド・フリップの兄である。世が世なら、アルベルトはルワーズ公爵のみならず、フリップ国王に即位していた可能性のある人物である。ファムケが嫁いだシャルルの兄は次男であり、シャルルは三男であった。十年前の戦争当時国王であった長男が嫡子なく崩御した際、アルベルトの父はすでに病死しており、成人している一番血縁の近いが王族がシャルルであったための即位であった。

もし、アルベルトの父があと数年生きていれば、シャルルの即位はなく、その後に病死していれば、アルベルトが王位を継承していてもおかしくはなかった。それがこの若者の人格を歪めた人生の始まりである。生まれていたときから与えられていたはずの特権を理不尽に奪われたとずっと思い込んでいたのだ。フリップ王家ではアルベルトを王族として待遇し、形式上は未だにルワーズ公爵位が与えられていた。本来であれば、国王の甥に当たる人物ならもう一つ上の大公位が与えられるのが普通なのだが、大公には領地は与えられない。アルベルトは領地を得られる可能性のあるルワーズ公爵位に固執し、大公位を辞退したのである。

しかし、それも長くは続きそうもない。すでにフリッツ王国の辺境伯領においても、ジュリオ・ベルルスコーニの失脚の可能性についてささやかれていた。まだうわさでしかないが、国王の指示を受けた密偵が辺境伯領に潜伏し、野放し状態で制御下に入っていないかった吸血鬼の集団を捕らえ、それに幾度も襲撃を受けていた村人たちとともにアキテーヌに向かったと言う話が聞こえてきたのだ。

もちろん、これは、マウリッツ・スタンジエとカスペル・ファン・ハルスが行ったことである。生き証人である村人と、吸血鬼の死体があれば、『住民が全て吸血鬼化した呪われた地などに軍を進めるな』というベルルスコーニの論法は通用しなくなる。何より、そのタイミングでラウラの法王猊下がアキテーヌに現れると言うのだから、密偵の才覚次第ではベルルスコーニは失脚どころか破門、場合によっては異端審問にかけられかねない状況であった。

そうなれば、アキテーヌから大軍が辺境伯領に派遣されてくる可能性がある。レオンス・ド・アズナブルは強気ではあるが、彼の知にはまともに制御を受け付けられない吸血鬼が数千ほどいるだけで、それらを指揮できる不死鬼の指揮官はいないのだ。ベルルスコーニがいなくなれば、シャルル国王と宰相ジュール・ド・エツフェルは兼ねてから主張していたルワーズ公国との柔和政策を実行に移すに違いない。そうなれば、アルベルトはすでに名目上のものだけでしかなかったルワーズ公爵位を失うことになる。

アルベルトは、頑なに自分の旧領を守ろうとするレオンスを見捨て、ノールトに向かったのである。

「殿下。ノールトにお迎えできますこと、誠に嬉しく存じます。お疲れとは存じますが、今日中に到着せねばなりません。私どもが護

衛いたしますので・・・」

抑揚のない声でヨハネスはアルベルトを促した。

こうして、ノールトはアルベルト・ルワーズを君主として迎え、
『もう一つのルワーズ公国』の首都となったのである。

そのノールトでは、サスキアの手ほどきを受けたイエケリーヌが初めて作った牛血粉料理が一部の不死鬼たちに振舞われていた。フリーゴ、エド、バルーフの他、希望した十数名が食卓に集まった。噂を効いた不死鬼達が争って試食会への参加を希望し、抽選によって選ばれた者だけがその場にあつた。妙に高まつた期待感がイエケリーヌにプレッシャーを掛ける。

「・・・」

「さあ、みなさん。席についてくださいませ。メニューの半分はイエケリーヌさんがお作りになりました。両が多くて大変なので、半分は私が用意いたしました。イエケリーヌさんが今後調理を担当されるためにも、どんどんお食べになつてご意見をくださいね」

イエケリーヌが無言なので、代わりにサスキアが話し始める。

「イエケリーヌさんが作ったのは、こちらの牛血粉のチキンソテー風とシチューになります。こちらの牛血粉のゼリーは私が作りました。牛血粉の香りや味は抑えて、普通のデザートとして召し上がれるようにしてみましたわ。さ、お食べくださいな」

サスキアの言葉が終わる前にものすごい勢いで不死鬼立ちは料理を口にかきこみ出した。が……

「んっ……んぶっ……！」

「……んなっ……！」

あちこちで嘔吐をこらえる声が聞こえる。

「……だめだこりゃ……」

思わずつぶやいたのはエドである。サスキアの手ほどきがあればこんなことはなかるうと考えていたのだが……。

「い、イエケリー又さん？さっき食べたときはこんな味では……」

サスキアはちゃんと事前に味見をしていた。

「いや……あの……ちょっと味を足してみようかななんて……」

「イエケリー又ッ！なぜ余計なことをするっ！ちゃんとサスキア殿の言う事を聞けっ！」

父親であるドースブルフが怒鳴りつけた。ただし、よく見ると本人はそもそもイエケリー又の作った分には手をつけていない。何故かサスキアの作ったゼリーだけ完食していた。それを見た他の不死鬼たちもゼリーに手を回す。

「で、デザートはお代わりはないのか？」

バールーフが期待感を込めてきく。

「す、すみません。余った材料で作ったものですから・・・」
「そうか・・・」

食卓にため息が漏れた。ガツクリした不死鬼たちはゼリーだけを食べて他はすべて残し、その場を去っていった。

「・・・」

「あの・・・イエケリー又さん。大丈夫。次はみなさんに美味しいと言ってもらえますわ」

「素直に言う事を聞けばいいものを・・・」

イエケリー又は散々にいわれてへこんでしまった。武術では男を相手にしても遅れをとったことは殆どない。不死鬼となる以前からそうであった。だが、料理などまともにも出来そうもないことは父親であるフーゴーもわかっているはずである。これは父親が自分を虐待するために下した命令ではないかとさえ思われた。

サスキアの丁寧でやさしい指導がかえってイエケリー又のプライドに触れたのである。だからといって、サスキアに当り散らして暴力を振るうことなどできなかつた。そんなことをすれば、フーゴーは自分を許さないだろうし、エドには殺される可能性すらあると感じていたのである。

「も、申し訳ありません・・・」

「もうよい。次はちゃんと作れ。凝ったものにする必要はない。それでは、戦闘時の食料にはできません。だがまともに食べられるものでなければ意味はない。そのところもサスキア殿にはお考えいただきたい」

「私は戦闘にご協力するつもりはございません。しかし、どのみち

凝った料理ではたくさんの方にご用意するのは難しいですね。スープや簡単な料理を中心に検討してみましよう。可能ならご自分でも用意できる方がいいでしょうから」

「そんなことまで考えているのか？」

疑問を口にしたのはエドである。

「みなさんのお考えはどうかわかりませんが、私とマルガレータは不死鬼の方でも、ごく普通の日常生活を送れるようになることを目指して研究しております。マルガレータは食事や外出をちゃんと楽しめるような生活を送れるように様々な研究をしているのです。つい、余所行きの凝った料理を作ってしまったましたが、ご自分で自炊できるようになることはそうなると大事なことですから」

またも、不死鬼たちは驚かされた。同時に奇妙な感覚に襲われる。自分たちは彼女たちを人質に取っているのだが、その人質は自分たちの意図とは関係なしに、不死鬼を救うための研究をそのまま続けているのだ。自分たちは彼女たちの所属する勢力と敵対しているはずで、彼女たちは一貫して同じ研究を続けているのに、人質にしてみれば、その研究は自分たち不死鬼のためのものであった。

ドースブルフはこの奇妙な状況に困惑しているが、エドには理解できるところがある。なにせ相手はサスキアなのだ。目の前の事柄にこだわらずに本質のみをついてくるのが子供のころからの彼女の性格であった。それはヤンも同じである。だからこそ、自分はヤンにかなわなかったのだと言うこともわかっていた。

サスキアがこのようなことをすることで、不死鬼軍にダメージを与えようとしているわけではないことも十分にわかった。まさしく、これはヤンとサスキアの共通する思想から来る行動なのだ。

『患者を目の前にしたらその力になること以外は余計なことは考えない』

敵か味方かと言うことまで度返しにして、すべての不死鬼を患者として捉えているのだろう。

『患者……か……』

誰にも聞こえない声でエドは呟いた。十年前、不死鬼となりヤンに発見された時点で、自分はヤンの患者であったのかもしれない。それこそが、エドに不死鬼軍を作らせた原因であった。不死鬼軍編成のアイデアはエドの頭脳から出たものである。自分と同様に自然発生的な不死鬼となったヨハネス・ファン・ビューレンと出会い、ファン・クラツペに接触し、アルベルトやレオンスをスポンサーにして、さらにドースブルフ親子を巻き込んだのもエドであった。それは、自分を殺せなかったヤンに勝つためにしたことである。

だが、ヤンにとっては未だに自分は患者でしかないのであればそもそも戦いとは言えない。今、サスキアは口には出さないが、自分たち全員のことをやはり患者としてしか見ていないことがわかる。

その事自体がエドの心を深く傷つけるのだ。自分はサスキアやヤンを守るナイトになるはずではなかったのか。傭兵を目指していたのは、そうした高潔な戦士となるためであった。それが今は反乱軍で不死鬼と吸血鬼の軍隊を率いている。不死鬼軍の軍師は説明し得ない複雑な感情を抱え続けていたのだった。

結局、もうしばらくの間はイエケリー又はマルガレータの指導の元に操死鬼を使って牛血粉を大量生産する方法を研究することに専念

し、その間にサスキアは不死鬼たちが自分で調理できたり、大鍋で大量に作れるレシピを研究することになった。

不死鬼軍では奇妙なことに、こと食事に関してだけは人質であるマルガレータとサスキアが全権を握られるような状態になっていたのである。

ノールト攻撃作戦

「ヤン、済まない大敗を喫してしまった・・・」

「百戦して百勝とは行かない。犠牲者が出たことは悔やまれるが君の失策ではない。もっと早く撤退してもよかつたんだ。私の判断が遅かつたとも言える」

優雅で端正なジェラルドの顔には疲労と悔恨の陰りが見られた。ザーンの護国騎士団支部には本部と同様の司令部が開設されている。この会話は司令部の中央にあるヤンの席で交わされた。司令部に席を持つザーン防衛軍の幹部たちは全員がヤンの席に集まっていた。

「夕刻にはアメルダムから大規模な増援部隊が到着します。公国元帥自らの出陣です。この戦力を用いて不死騎軍との決戦に挑むことになります。総力戦です」

「攻城戦となりますか？」

問いかけたシモンだが、単純にノールトを包囲しての戦いになるとは思っていない。

「相手にはエド・フレイレが軍師として控えています。私が考える程度のことは彼も考えているでしょう。我々がノールトを兵力に任せて包囲すれば、直前に出撃しどこかに待機していた不死騎兵隊が後方から襲いかかってくることは間違いありません。ルワーズ騎士団は大兵力ではありませんが寄せ集め。後方から攻め込まれて混乱すれば、有利な攻城戦であつたとしても、あつという間に瓦解することでしょう」

「では、どう対処なさいますか？」

「方法は二つです。ノールトの吸血兵の兵力と不死騎隊を分断し、

連携不可能とするか、逆に不死騎兵をノールト城内から外に出さないかです。城内にあつては強力な不死騎といえど、所詮八百程度の兵力でしかありません。ですが・・・」

「相手の軍師もそんなことは百も承知ということですか？」

「ええ・・・ですから、前者の選択肢しかありません。不死騎隊とノールトを別々に相手にするしかないのです。どのみちどんな大兵力を持ってしても、不死騎隊には抗しえませんが。不死騎隊には護国騎士団の精鋭をもってあたり、ノールトの吸血兵はルワーズ騎士団の戦力で相手することになるでしょう」

全員に緊張が走る。吸血兵が守るだけのノールト攻略については、それほど不安を感じてはいない。たとえ寄せ集めのルワーズ騎士団であっても、対吸血鬼装備で固め、戦術を十分に仕込めば恐れることはないからだ。公国元帥ウィレム・ファン・バステンの指揮ならなおさらである。

問題は護国騎士団が不死騎隊に勝てるかどうかであった。

「方法があります。あまり使いたくはありません。ですが、それは私が医者だからです。軍略としては極めて基本的に忠実に考えればいい」

「どういうことですか？」

「最小限の犠牲で最大限の打撃を相手に与える戦術です」

「つまり・・・」

ヤンの苦悩がシモンにはわかった。軍将としては当たり前のことだが、戦闘で被害者が皆無ということはありえない。戦術とは極論すれば、『以下に効率的に味方を殺すか』でしかないのだ。味方の少数の犠牲の上に敵に多大な損害を強いると言う思考が当たり前なのである。しかし、医師であるヤンにとっては、決してとりたくない

手段であることもシモンは理解できた。今までのヤンの戦略は救いようのない吸血鬼は別として、自軍の兵士にも敵の不死鬼にも出来る限り死者を出さないことを考えてのもので、だからこそ空前の大戦果を上げ続けてきたのである。

「エツシャー先生・・・犠牲が出ることはやむを得ません。護国騎士団の騎士たちはこの戦いのために命を賭けることに躊躇しません。自分の生と死が無駄ではないことこそ彼らにとっては重要なのです」「どうか、死を厭わないなどと言う考え方はやめて下さい。ですが、戦術としてはこれしかありません・・・」

ヤンは既存の戦術理論を覆す必勝の腹案を持っていた。少なくとも不死鬼隊を釘付けにし、ノールトの戦力からは確実に分断出来る方法である。

夕刻、ザーンに到着した公国元帥は実弟である護国騎士団長代理に頭を下げた。ヤン不在のアメルダムにおける大監獄襲撃と吸血鬼治療チームの中心人物拉致を防げなかったことに対する謝罪である。

「兄上らしくもない。失敗した時こそ、戯言を言っただけを励ますのがウイレム・ファン・バステンの持ち味ではありませんか？公国元帥になったからと言って、優等生のふりなんか似合いませんよ？」「そういう言い方はないだろう・・・」

ヤンの一言にふてくされたような態度をとったウイレムを見て、皆微笑を浮かべた。こういう時だからこそ、沈んでしまっただけはいけない。それを最もわかっているのがウイレムであった。そうは思っても、ヤンに対しては謝罪しなければならないと考えていたのである。

「大丈夫です。サスキアもバレンツ主任も無事に違いありません。エド・フレイレは無用に残忍なことは決してしませんし、周りにもさせないでしょう」

「・・・どういうことだ？」

ヤンはウィレムに自分とエドとの関係を説明した。この話にもっとも衝撃を受けたのは増援部隊に同行して来たカレンである。シモンにとってのヨハネス同様、ヤンとサスキアにとってのエドも彼女に複雑な思いを抱かせた。カレンだけではなく、兄のジェラルドにとってもそうであるのだが、兄の方は妹よりもずっと自分の気持を整理出来ている。過去のことはどうしようもないのである。それを運命という言葉では片付けたくはないが、済んだことに足を引っ張られては先に進むことはできないのだ。

「それに、サスキアであれば、無理に彼らに抵抗したりもしないでしょう。求められれば牛血粉の製法も教えるでしょうし、あるいはそれ以上、今頃は不死鬼達に料理でも振舞っているかもしれない」

「そんな馬鹿な・・・」

「いえ、サスキアはそういう娘です。私でもそうするでしょう。彼女なら、反乱軍の将兵であっても、伝染性吸病患者にはかわりないと考えるはずですよ。そういうことをしても、私の軍略には影響ないこともわかってはいるはず」

カレンはまぶしい思いで、ヤンを見つめた。これほどの分かり合える相手を持つことは幸せなことだろうと思ったのだ。ヤンにとって、自分はそうなれなかったが、未練はなくともヤンには幸せになつて欲しいと願っている。そして、今や自分にとってもサスキアは大切な友人であった。彼女が無事であるとヤンの口から聞けるのなら、安心していいと思ったのである。

「ですが、と言ってお二人を不死鬼軍に拘束させたままにするわけにはいきますまい？拷問や虐待にあつことはなくとも、戦時中です。人質を無視して戦略はなりたたない」

そう口にしたのは、何故かザーンにまで付いてきたピーター・レインである。レベッカまで来ている。理由はロビー・マルダーの捜索であるのだが、それでザーンにまで出てきている理由がわからない。

「当面はどうしようもありません。タイミングを見て救い出すしかない。私が行きます」

「！」

「駄目だっ！不死鬼軍連合騎士団の実施的な司令官はお前だ。総司令官自らの潜入工作など認められない！」

即座にそう主張したのはウィレムであった。

「総司令官は公国元帥たる兄上でしょう？」

「名目はそうだ。だが俺には不死鬼軍に対向する軍略はない。お前の策だけが頼りだ」

弟の智謀にすべてまかせるといふのだ。他人がいえば無責任この上ない発言と取られるかもしれない。だが、これはヤン・エツシャーとウィレム・ファン・バステンの間での会話である。平時の軍の管理と統率に兄が責任をもち、非常時の軍略は弟にと言う役割分担はすでにすべての軍将達が認めるところであった。

「しかし・・・」

「エツシャー先生、そういう泥臭い仕事は泥臭いことが得意な人間に任せてくれないかね」

「！」

突然、司令部の会議室の窓から声が聞こえた。全員が窓に顔を向ける。会議室は三階にあるのだが、涼しい顔でその窓に取り付いている男がいた。行方不明になっていたはずのロビー・マルダーであった。

「ろ、ロビーっ！」

驚きの声を上げたのはピーターであった。窓のそばにいたレベツカが直ぐに鍵を開ける。会議室に滑り込んだロビーは皮肉な笑顔を浮かべながら話し始めた。

「悪いな。騒ぎに乗じて脱走させてもらっていた。一働きさせてもらいたい。もう、アバラの調子も良くなってきたし、病人とはいえそろそろリハビリさせてもらってもいいだろう？」

「ど、どういっつもりだ？」

「あの二人の嬢ちゃんはずいぶんと俺のためにいろいろと手を焼いしてくれたよ。盗賊だったこの俺にだ。吸血鬼になってからじゃなく、人生の中でないほど、人間らしい気分にしたくれたのさ。許可がなくても俺は行くぜ」

ピーターでさえ何も言えなかった。ロビーが二人に恩義を感じていることはわかる。しかし、それにしてもあまりにも危険な話なのだ。彼を患者と考えているヤンが承諾するはずがない。

「ロビー、君は不死鬼とはいえ筋力は普通の人間と変わりないし、痛覚もそうだ。潜入して、見つければ……」

「先生だって普通の人間じゃねえか」

「そりゃそうだが……」

「先生よ・・・俺はファントム・ロビーだ。俺に忍び込めないとこ
ろなどないぜ。スタンジエ先生の研究室だってな。あんたに捕まっ
たのは初めてのミスだ」

「だが、城内のどこにいるかもわからないんだぞ？」

「二人がいるのは州府庁舎の近くにある小さな教会さ」

「！」

「この数日何をしていたと思う？事前調査は潜入には欠かせないこ
となんだぜ」

ロビーはすでに数度にわたってノールト城内に忍び込んでいたのだ。
城内には普通の人間は極少数しかいない。活動しているのは作業用
の操死鬼と不死鬼だけである。その中でも誰にも見つからずに城塞
都市の中を自由に行き来していたのだから生半なことではなかった。

「ヤン。ロビー氏に頼もう。攻城戦と前後して彼に潜入してもらっ
しかない」

ウィレムはロビーを信頼した。これだけの危険を冒そうというのに、
まったく気負った感じがしない。それほど、この盗賊とは面識はな
いのだが、ウィレムの勘がこの男が信頼にたる男だと告げていた。

「だが、一人では二人の人間を連れ出すのは難しいぞ？二人ともこ
く普通の女性だ」

「ロビーが行くなら私が監視につくのが筋ですな」

そう口にしたのはピーター・レインである。

「エッシャー先生、これでも私はロビーの専従になる前は、麻薬組
織への潜入捜査官だったんですよ」

「しかし、ロビーもそうですが相手は不死鬼ですよ？」

無言でヤンの元に近づいたピーターは突然腰のショートソードを引き抜いた。

「なっ！」

シモンやウイレムでさえ何もできぬ前に、剣を走らせ、気づいたときにはすでに鞘に収めている。

「先生、気丈にふるまってはおられても、やはり婚約者のことが気になるのでしょうか？いつもは剃り残しなんてありませんでしたからな。でも、身だしなみが乱れるのは紳士としてはいかなものですか？」

ヤンの顎の先にわずかに残っていた剃り残しのヒゲが綺麗に剃り落とされていた。皮膚にはまったく傷がついていない。

「髭剃り（シェービング）レイン。私の昔の通り名です。まともに戦えば勝てないかもしれないが、身を守るぐらいはどうにかできますよ。ヨハネス・ファン・ビューレンでも出てこない限り」

身を守るどころではない。これほど正確な剣さばきはシモンやウイレム、いや、ヨハネスでさえ無理であろう。

「そのヨハネスのようなのができたらどうしますか？」

これはシモンである。ピーターの剣技に驚きを隠せない。だが、正確な剣さばきだけで勝てるような相手ではない。シモンもまともにやり合えばピーターに負けるとは思わなかった。ピーターの剣技は速く正確な攻撃が持ち味であろうが、それがわかっていれば、逆に

攻め手を読みやすい。

「レイン主任にはもう一つ通り名があります」

レベッカの言葉にピーターはバツの悪い表情を浮かべた。

「いざとなれば、脱兎トウの如く逃げ去る。その逃げ足の速さから兎トウのピーターと」

「ぷっ！そんな可愛らしいかね？」

ロビーが噴出し、それをきっかけにして全員が爆笑した。

「ヤン、この二人に任せよう。それしかない」

「・・・わかりました・・・ロビー、レイン主任・・・」

突然、ヤンが頭を下げた。二人の方に手を載せた。二人にはヤンの手から震えが伝わってきた。

「どうか・・・どうか・・・サスキアと・・・バレンツ主任をお願いいたします・・・」

全員、言葉がなかった。気丈に振舞っていたのは演技であった。ヤンは今すぐにでも、ノールトに助けに向かいたかったのだ。理性では二人は無事だとはわかっている。信頼はしている。それで、割り切れるものではなかった。

ロビーが軽くヤンの背中を叩く。

「先生よ、たまに周りに頼ってみるのもいいだろ？そうでもしてもらわないと、あんたに助けられっぱなしじゃ俺だって格好つかねえ

さ」

「そうです。先生、保安兵団にも挽回の機会をいただきたい」

保安兵団は大監獄の警備を担っている。管理は司法府の管轄だが大監獄内の治安維持と、万が一の外部からの脱走の手引きなどに大して備えるのは彼らの役割なのだ。それを、すべての囚人が吸血鬼か不死鬼となり、後者は全員脱獄したのである。この汚名を返上するためにピーター・レインは無理を行ってザーンまで出てきたのだ。

「ジェラルドによればヨハネスは我々を待つてしびれを切らしているらしい。急ぐ必要ありませんが、あまり待たせても仕方がない。ルワーズ騎士団の軍勢を長期に維持することも負担になります。明後日、ノールトへ向けて進軍します」

「ああ、先生、それからもう一つ報告がある」

そういったのはロビーである。

「つい三日前のことだ。ノールトの城門に三百ぐらいの騎馬隊がフリップ側から到着している」

「ジェラルドの第二部隊を壊滅させたヨハネスの一団だろう」

「そうなんだろうが、その中に妙な連中が混ざっていてな」

「妙な連中？」

ウィレムが怪訝そうな顔をする。妙な連中といえは不死鬼の軍隊自体妙であることにはかわりないのだが、なにか特別そう思わせる者がいたということか。

「金ピカの馬車にのつた若い男を中心に、妙にお高く止まった連中が数十名いた。たぶん、そのヨハネスつて奴じゃないかと思うが、騎馬隊の指揮官らしき奴がやたらと丁寧な態度で付き添っていたぜ」

「ほう・・・スポンサーのどちらかだな・・・若い男というところ」
顎に手を当てながらウィレムはある人物の名前を思い浮かべた。全員、同じことを考えてた。

「アルベルト・ルワーズか・・・しかし、なぜこの時期に・・・わかるか？ヤン・・・」

「一番可能性が高いのはレオンス・ド・アズナブルと袂を分かったということではないでしょうか？そろそろマウリッツの工作も功を奏していいころです。アキテーヌでベルルスコーニが失脚すれば、辺境伯領にフリッツ王国軍が殺到してくる可能性が高い。レオンスを見限って、アルベルトは本来の目的のためにルワーズにやってきたのではないのでしょうか？」

「本来の目的？」

「名前だけ形式上残されているルワーズ公爵の地位に実質を持たせることです」

これはそれほど意外なことではなかった。アルベルトが不死鬼軍のスポンサーになるとしたらこれしか理由はないのである。だが、財力や血液の供給などについては、レオンスに比べて大して提供できるものはない。スポンサーとしての発言権は決して大きなものではない。彼が最前線にまで出張ってくる理由は何かと尋ねる点に疑問が残る。ウィレムがそう口にするるとヤンは澄ました顔で答えた。

「ドースブルフあたりは一応ルワーズ公国の臣下としての意識を持っているでしょう。反乱を起こすとは言え大義名分が必要です。アルベルトの役割はそこにあります。わざわざ迎えに行ったヨハネスにしてもそうなのでしょう。単に国境地帯で大暴れできればいいと言っただけではありません」

「アルベルトはわかるが、ドーヌブルフやヨハネス、それとエドの目的は一体何だ？」

「それぞれの思惑は微妙に違うところはあるでしょうが、彼らは不死鬼の戦士として戦い続けることを欲していることは共通している。そのためには、大きな戦果を上げて、新しいスポンサーにアピールできるだけの実績を得る必要があります。単に戦場で強かったと言っただけでなく、結果として政治的な意味を持つような・・・」

「それが、アルベルト・ルワーズの国公即位と言うことか・・・」

小首を傾げて言うのはジェラルドである。あまりにもナンセンスな話しに思えるのだ。確かに不死鬼の軍団は強力だが、だからといって、公国全土を平定できるほどのものではない。巨大な軍隊の中で特殊部隊のような位置づけであれば、不死騎隊はかなり強力で使いのあるもので、実際そういう触れ込みで近隣各国に売り込み始めるつもりであろうが、扱いにくい吸血兵と干に満たない不死騎兵で、一国を飲み込むことは不可能である。

「アルベルトの目的はそれほど壮大なものではないかもしれませんが、例えば、ノールトを押さえ、ゼーラント州全域程度の領土に東ルワーズ公国でも建国できれば満足なのかもしれませんし、あるいは全土を支配できると勝手に夢想している可能性もあります」

「後者であれば・・・」

「ええ、いずれ、ヨハネス達に見限られることでしょうかね」

ウィレムは腕組をして考えた。

「どつちがこつちにとって都合がいいかな・・・アルベルトがおとなしくゼーラント州、それも住民の住んでいない地域の領主程度で満足してくれるのと、公国全土に覇を唱えようとするのでは・・・」

「

「そこは・・・どちらであっても、こちらの都合の良い方に差し向ける方法があります」

「どうということだ・・・？」

「つまり、こっちからゼーラント州をくれてやると言ってるのです。ロクに戦果も上がらないうちに。できれば、こちら側がある程度の勝利を収めたあとにです。ヨハネスとエドは困ることでしょうね。スポンサーにアピールするためには戦う必要があります。アルベルトがゼーラント州だけで満足していたとしても、ヨハネスとしては焚きつけて戦争に持っていかざるをえませんし、全土を収めることに色気があれば、程よいところでやめられなくなる」

ヤンの提案は極めて大胆なことであるが、この男が口にするると大したことではないように思えてくる。

「なるほど・・・そうになると奴らはどうする？」

「一番ありそうなのは、アルベルトに戦争を決意させておいて、ある程度勝利したところで・・・」

「アルベルトを殺すか・・・」

「はい。それが一番彼らにとって都合が良いのです。しかし、アルベルトだっておとなしく殺されるつもりはないでしょう。ヨハネス、エド、フーゴー、いずれかを味方につけようとする。可能性が高いのはフーゴーですね。フーゴーが東ルワーズ公国の元帥などと言う地位で満足するはずはありませんから」

全員がうなずく。フーゴーの吸血兵隊とヨハネスの不死騎兵隊が噛み合えば、高確率で不死騎兵隊が勝つだろうが、いくら協力でも千の騎兵隊だけならいくらでも料理のしようがある。吸血兵だけではなく、操死鬼の作業部隊を掌握しているのはフーゴーの方であろうから、万事融通が効かなくなってくる。少なくともノールトに立てこもることは困難になってくるであろう。ヤンの軍略は奇抜なようで

て、極めて合理的なことであつた。

「となると、まずは、目の前の戦いに勝利して、奴らを焦らすことだな。次にできるだけダメージの少ない形で、アルベルトに欲が出てくるように負けてやる」

「はい。その時は気前よくザーンぐらい明け渡してやってもいいのです。ブルーナ主任主計官の立てた計画のおかげでそれぐらいは、資金面でも問題ありません。ザーンにいる二十万の住人をアメルダムに移してしまうことぐらいは可能でしょう」

「そうしておいて、フーゴーと対立したヨハネスとエドが千人弱の不死鬼だけで、ザーンかノールトに立てこもらざるをえなくすれば良いわけだな」

「はい。まずは、目の前の勝利を考えましょう。ノールトを一気に奪還する必要はありません。不死騎兵隊の強さが絶対的なものではないことさえ証明し、人質を取り戻せさえすれば十分です。あとのことと考えると派手な勝利は返つて意味がありません」

納得したように頷いてウイレムを腕を組んだ。たとえ人質を取られていようと、ヤンの智謀に陰りが見られることはない。それを確認していたのである。腹違いの弟に全幅の信頼を置いているウイレムだが、同時にその弟のことを常に気遣っていた。豪胆で粗野な人物と思われがちではあるが、それだけでは軍の中核で役割を果すことは難しい。ウイレム・ファン・バステンは実は誰よりも周囲の心理に敏感な男であつた。

「兄上はルワーズ騎士団を率いて、ノールトを包囲してください。ジェラルドはその補佐を。護国騎士団は第三部隊と騎士団長親衛隊の二千を私とシモン隊長が率います。第一部隊と第二部隊の残存兵力はリートフェルト隊長が指揮し、ザーンを固めてください。状況に応じて、ノールトへの増援をお願いします。リートフェルト隊長

ならその判断もお任せできる」

「じゃあ、俺と旦那は包囲の前にノールトに潜入するでしょう。攻城戦が始まってからでは流石に難しくなるからな」

「ああ、よろしく願います」

ヤンが丁寧に礼を施したので、ロビーは驚いた。ヤンにとっては、ロビーは患者であるが今は頼るべき盟友であった。婚約者の身柄はこの男の働きに掛かっているのだ。

ウィレムが立ち上がり、護国騎士団ザーン支部の司令部全体を見渡して、声を高めて叫ぶ。

「これより！ノールトでの不死鬼軍との本格的な戦闘に入るっ！戦いは心配しなくていいっ！ヤン・ファン・バステンの智謀があれば決して負けることはないっ！各々、護国騎士団長代理の指示の従って奮闘せよっ！」

全員が肅然と襟を質した。

決意

ウィレム・ファン・バステン率いるルワーズ騎士団が出立した日、アメルダムの護国騎士団本部には入れ替わりで、十数名の不死鬼が搬送されてきた。数名はマージン・ゼーリックら不死鬼軍に司令官として参加していた、小悪党たちで彼らは大した怪我もなく元気であった。それ以外の十名程度は護国騎士団第二部隊副隊長ヨハン・ノップラーらザーン防衛戦で伝染性吸血病に感染した騎士たちで、こちらは多くは大量の血液を失い、不死鬼化治療はうけたもののまだ体力は回復していなかった。

ヨハン・ノップラーは驚いていた。ザーンを出立する前日、シモンから護国騎士団本部で吸血鬼治療チームの中心人物二人、護国騎士団長代理兼公国中央医局長代理であるヤンの婚約者サスキア・ウテワールと、吸血鬼治療チームのリーダーでヨハンも既知の護国騎士団主任主計官ピーテル・ブルーナの婚約者マルガレータ・バレンツが拉致されたと聞いていたからだ。さらに、ピーテル・ブルーナ自身が重症を負ったことも耳にしている。

にもかかわらず、吸血鬼治療チームのメンバーの士気は極めて旺盛だった。吸血鬼治療チームだけではない。護国騎士団本部全体が程良い緊張感を保ちつつ、全員が整然と任務についていたのだ。

馬車から担架で病室に運ばれたヨハンは自分の担当の若い看護婦に疑問を口にした。

「サスキア婦長が言っていました。患者を目の前にしたらその力になることだけを考えるって。ご一緒したのは少しの間だけでしたが、素晴らしい看護婦でした。私もあなりたい。バレンツ主任研究員

もそうです。患者のためにできることは何でもする。お二人がいなくなってもみんなそれにならって、目の前の仕事をしっかりとこなそうと思っっているんです」

看護婦の目には静かに強い覚悟が籠められていた。この看護婦だけではない、吸血鬼治療チームのメンバー全員が、マルガレータとサスキアに変わって全力をつくすことをそれぞれに誓っていたのである。

「それに・・・ピーテル・ブルーナ主任主計官はかなうはずのない不死鬼を相手に最後まで戦い続けました。武人の方々はみなそのことに感動して、悲嘆にくれてなどいられないと口々におっしゃっています」

ヨハンはようやく理解できた。アメルダムの護国騎士団本部の幹部たちは、危機にあってもしっかりの自分の仕事をしてみせたのである。どんな状況であっても、士気だけは低下させない、そのために普段から、そして身を犠牲にしても、模範となる行動を取り続けていたのだ。

だが、急激に患者の増えた吸血鬼治療チーム、それもほとんどが新任の者という状態では、いかに士気が高くとも現場は混乱した。ほとんどが女性で構成されるこのチームを取り仕切れるのは、現在唯一正式な研究員であるルドガー・フリースのみである。研究者としては発想力と独創性に欠けるルドガーだが、医師としては地道で胆力の必要とする治療を淡々と進めることができ、長期に渡る不死鬼治療にはふさわしい人物であった。しかし、なにぶん人数が多い。彼を補佐する医師はエリートとは言え医学院の女学生たちであり、対応しきれるものではなかった。

それでも、クリステル財団総合診療所のベテラン女医たちの力を借りて、どうにか治療の体制は作れたのだが、不死鬼治療はほとんどが未知の領域に属する医療行為ばかりである。研究と並行しての治療ということになるのだが、どうしても臨床実験や観察にまでは手が回らない。何よりルドガーは上司の指示なしで研究をすることは向いていなかった。

「重要な時期に休暇をとってご迷惑をおかけいたしました。本日よりの復職のご許可をお願いいたします」

きよとんとした表情でカリスはフレデリック・ファン・ビーヘルを見つめていた。あのむやみにプライドの高い男がここまで殊勝な態度で復帰を願いでくるとは考えていなかったのだ。

「休暇については私が許可したものです。謝罪など必要ありません。知つての通り、吸血鬼治療チームは急激に規模が膨らんだこのタイミングで、本来のリーダーであるバレンツ主任とサスキア・ウテワール婦長が不在となつて、混乱しています。特に不死鬼治療に詳しい医師はルドガー・フリース研究員しかいない状態です。あなたは治療はフリース研究員に任せて研究の方に専念してください。医学院の女学生の中でも特に研究向きの三名をあなたの下に付けます。十数名も患者が来ましたが、それぞれに症状には微妙な違いがありますから、よく観察して治療の方針の検討に協力するように」

「承知いたしました」

きよとちりと居住まいを質して礼をし、フレデリックはカリスの前か

ら去っていった。

「ゆっくり反省して心を入れ替えたのかしら？それとも誰かに説教でもされたのか・・・ま、間違いなくいいことなただけだね」

独り言は意外と大きな声で、少し離れたところで様子を見守っていたシルヴィアにも聞こえていた。

「この場にはいなくとも、サスキアさんとマルガレータさんの話が心に響いたのかもしれないわね。元々悪い人間ではないんだから、ちゃんと力を発揮してくれればいいわね」

シルヴィアはカレンから引き継いだ社会復帰プログラムの資料に再び目を落とし、作業に没頭し始めた。気丈なシルヴィアは強くなってきたつわりに耐えながら仕事をこなしている。カリスは無理はないように注意しているが、それがウイレムが戦場に向かったことへの不安を忘れる唯一の方法であることも分かっていた。

妊娠中故に精神的に不安定になっているのだと自分に言い聞かせているが、今までにないほど、シルヴィアは不安を感じていた。理知的な女性であるシルヴィアは『なんとなく不安に思う』などとは決して口にはしないが、いわゆる女の勘が不吉な胸騒ぎを彼女に感じさせるのであった。

ファン・ビーヘルが復帰した翌日に事件が起きた。

きっかけは馬鹿らしいほど小さなことである。元不死鬼軍の指揮官

であった不死鬼の一人が、戯れに医学生の尻を撫でたことから騒ぎが始まったのだ。思わず叫び声を上げた女子学生だが、気丈な娘で不死鬼をカツと睨みつけて啖呵を切った。

「不用意に医者の体に触れると手元が狂いますよっ！患者が医療ミスの原因を作るといふのはどうですか？」

不死鬼の男は笑った。特に悪気があったわけではない。ケガをしているわけでも、具合がわるいわけでもないのに、病人兼囚人という扱いで暇を持て余しているの、冗談のつもりでしたことである。女子学生の小気味のよい反応にすっかり気に入ってしまったようで、悪い悪いと言いながら口説き始めた。

ここで終わればそれだけのことだったのだが、騒ぎを大きくした者がいた。伝染性吸血病に感染した護国騎士団第二部隊の騎士の一人である。

「貴様っ！不埒な真似をっ！」

騎士は吸血鬼に噛み付かれて伝染性吸血病に感染はしているが、比較的失った血液は少なかったため、騎士たちの中ではもっとも回復が早かった。彼自身も暇を持て余し、不死鬼となってしまうた自分の将来への不安から苛立っていた。

騎士は療養中であるから武器などは手にしていなかった。不死鬼の男に素手で殴りかかる。しかし、同じ不死鬼と言っても、騎士は感染直後に不死鬼化治療を受け、筋力が異常発達する前にアンステロイドの投与も行われている。不死鬼軍の指揮官は数力月前に不死鬼となっているため、アンステロイドを投与してもすぐに常任並みの筋力となったわけではない。殴りかかってきた騎士を力任せに突き飛ば

してしまつた。

騎士は壁に強く頭を打ち付けられた。一瞬意識が飛んだ後は、完全に頭に血が登っていた。

「このっ！」

頭を打ったせいかわらぬが、うまい言葉が継げないが、近くの机の上で消毒されていたメスを握り締め、襲いかかった。

「おやめくださいっ！」

二人の間に飛び出したのはルドガーだった。実質的な吸血鬼治療チームの責任者となつた彼は、研究能力では他者に劣ることを自覚している分、チームの運営については強い責任感を感じていた。そのため、不死鬼同士の喧嘩に身を呈して仲裁に入るといふ危険を犯したのだ。

騎士は完全に我を失っていた。そのままルドガーに斬りつけようとしたのだ。不死鬼軍の指揮官もおめおめと切りつけられてやる気は毛頭ない。武器など持たなくとも以上発達した筋力自体が凶器となる。だが、次の瞬間、騎士はメスを持った腕を掴まれ後ろから羽交い締めにされた。不死鬼軍の指揮官は横つ面を強い力ひっぱたかれていた。

「この馬鹿者がっ！なにをやっているっ！」

騎士に叱責を加えたのはヨハン・ノップレーであった。まだ、血液を失って低下した体力は回復してないが、寝台の上で騒ぎに気づいた瞬間に飛び出してきたのである。

もう一人、不死鬼軍の指揮官を殴ったのはマージン・ゼーリックだった。

「真面目に治療を受けて社会復帰したい奴はちゃんとおとなしくしてるよ。そのつもりのない奴は名乗り出る。まあ、そいつの恩赦は取り消しだろうがな」

他の不死鬼軍出身の者にも聞こえる声であった。

この事件以来、ヨハンとマージンの協力の元、護国騎士団の騎士達と不死鬼軍の指揮官たちとの間では表面上の争いは起きなくなった。だが、両者の間にわだかまりがあることには変わらなかった。

さすがに女性ばかりの吸血鬼治療チームでは動揺が走った。徐々にアンステロドが効いてきているとはいえ、不死鬼たちの筋力は常人のレベルではない。そんな連中に暴れられたら命がいくつあっても足りないのだ。

だが、ルドガーの勇敢な行動には護国騎士団本部内の各所から賞賛の声が上がっていた。無能のレッテルを貼られた中年の男は、どうやら自分の向き不向きというものを遅まきながら理解した様子で、研究者ではなく医師として、治療チームを運営することに集中し始めた。医学院の女学生やクリステル財団総合診療所の女医や看護婦たちも、怯えながらもルドガーの指示の元で自分の仕事をこなすことができた。

その分、フレデリック・ファン・ビーヘルは研究に集中することにした。休暇中のことは誰にもしゃべってはいないが、アンステロド

を無効にする薬の研究は、吸血鬼に対する理解をより深めていたため、ヤン・エッシャーに遅れを取った彼に様々な示唆を与えていた。ファン・ビーヘルは不死鬼たちの精神の不安定さについて考察を加えていた。常人とは違う生霊、人間とは別のものになる感覚からのストレスは確かに計り知れないのだが、一部の不死鬼たちの苛立方は常軌を逸しているように思われたのだ。原因は実はアンステロドの方にあったようで、一部の成分に習慣性があり、アンステロドの効果が弱まる度に、一種の禁断症状を覚えるということを解明した。

「他の病気であれば軽微な副作用と考えて差し支えないのですが、伝染性吸血病の場合はその精神的な不安定さが周囲の人間の危険につながります。そうした習慣性、依存性を抑えるための研究のご許可を頂きたい」

フレデリックはカリスに向かってそう言ってきたのである。

「研究のテーマとしては確かに重要と思います。他の研究と並行になりますから、医学院の学生たちもうまく使って進めてください。でも、かなり困難なものになりそうですね」

「はい。しかし・・・はつきりとしたことはまだ言えませんが、手がかりはありますので」

カリスは不審そうにフレデリックを見やったが、口には出さなかった。

フレデリックは確かに変わっていた。変えたのはロビー・マルダーであろう。元々フレデリック・ファン・ビーヘルは医学院時代は天才と言われていた。そのことが、返って彼の精神を歪め、薄っぺら

なエリート意識を芽生えさせ、慢心を生んだのである。その彼が、ただただ自分の義務を果たすことに全力を傾けるようになった。研究者としての力は実際にはヤン・エッシャーに劣るものではない。わずか数日後にはアンステロドの習慣性を抑える試薬の開発に成功し、二名の不死鬼の同意を得て臨床実験を始めたのである。

「酒の一滴は血の一滴!」

「一滴呑むたび一敵屠らんっ!」

ザーンの城門前に集まった兵士たちがウイレムの掛け声に答えた。ルワーズ騎士団一万人を主力とし、護国騎士団第三部隊と騎士団長親衛隊を中心とした三千の機動部隊、保安兵団及び東方騎士団に所属する、ザーン及びノールトの城兵、それに一部の自治領主の私兵や傭兵を加えて臨時編成された七千の対不死鬼兵団をあわせ、合計二万の兵力が出立するところだった。

ルワーズ騎士団及び対不死鬼兵団はウイレム自信が統率し、それをディック・ファン・ブルームバーゲンとジェラルド・ファン・ハルスが補佐し、人質救出の為にロビー・マルダーとピーター・レインが同行する。

護国騎士団はヤン・エッシャーによって率いられ、シモン・コールハースが副将を務める。そしてなぜかそこには、カレン・ファン・ハルスとレベッカ・ローレンツが同行していた。

決意（後書き）

ずいぶん長らくお待たせいたしました。外伝と並行して話を進めていきますのでよろしくお願ひします。

決戦前夜

「思っていたより容易く侵入できたな・・・」

小声で話しかけてきたのはピーター・レインである。ロビー・マルダーは真面目にやはり小声で答えた。

「元々、警備らしい警備は少数の不死騎だけだ。前に入った時も城内への侵入は難しくはなかったけどな。その警備の不死鬼も前よりずっと少ない。エツシャー先生の予想通り、不死騎隊は事前に場外に出ているんじゃないかな・・・」

「だろうな。いくらなんでも人数が少なすぎる・・・」

「これ以上ないほどトンマな操死鬼だけだからな。まともに見つからない限り危険なことはないさ」

二人はノールトの城壁をロープを使って侵入した。城壁の設計にミスがあり、見張り台などからは見えない位置に侵入可能な経路があるのだ。露骨に目の前にも現れない限り、操死鬼は警告を発したりはしない。潜入工作のエキスパートと言える二人にとって、城内に忍び込むことは拍子抜けするほど簡単なことであった。

ノールトは小なりと言えども一つの都市である。城壁を越えて市内に潜伏してしまえば、いくらでも隠れるところはあった。吸血鬼はほとんど眠らされているし、仮に不死鬼が全員残っていたとしても、市内全域をカバーできるほどの警備の人数は用意できない。

二人は外れの方にある商家の倉庫に潜伏した。半月ほどはそこで潜むことが可能な準備もすでにできている。ここで、戦闘が始まるのを待って、教会からサスキアとマルガレータの二人を救出しようと

言うのである。単に潜伏しているだけなら容易いが、確実に不死鬼が警備をしているであろう、人質のいる教会の様子を伺うのはやはり命がけである。それでも、二人はこの工作に自信を持っていた。何より出発前にヤンはある予測を立てていた。

「エド・フレイレならもう気づいていることでしょう。牛骨粉の製法さえ聞き出せば二人は用済みです。だからと言って二人を殺すようなマネは彼はほしくない。周囲にはそう考える者もいるでしょうが、エドは決してそれをさせないでしょう。護国騎士団本部での事件ですでに理解しているはずです。無用に非道を行えば、その分だけこちらの士気が上がるということは。ですから、実は彼はお二人によって、人質が救出されることを待っているようなものです」

首謀者の一人が人質の救出を待っているというのは信じがたい話であるが、ヤンでさえ一目を置くほどの油断ならぬ男が、こんな甘い警備を放置しているというのは、そんな理由でもなければ納得がいかなかった。

二人は攻城戦が始まるまでの間、交互に教会の様子を観察しに出かけた。周辺の警備の様子と内部の状況がつぶさにわかるほどの情報を彼らは発見されることもなく、手にいれていったのであった。

時は少しだけ遡る。ウィレムの激励で対不死鬼軍連合騎士団がザーンを出発する前日、護国騎士団支部の司令部では複数の男たちが困惑していた。司令部には二名の女性もいる。特別事務官の肩書きで連合騎士団の一員となっているカレン・ファン・ハルスと保安兵団の捜査官レベッカ・ローレンツである。

ヤンもウィレムもカレンはザーンに残し、補給や捕虜が出た場合の
アメルダムへの護送の手続き等、事務面を統括してもらおうと考
えていたのだが、本人が頑なに護国騎士団に同行することを希望し
たのだ。

「カレンさん！護国騎士団は野戦で不死騎隊と戦うことになりす。
軍中であろうと後方にいようと野戦では何がおこるかわかりませ
んっ！非戦闘員の同行など許可できるようなところでは・・・」

当然のごとく反対したヤンだが、言葉の後半は尻すぼみに声が小さ
くなった。カレンの頑なな表情から何かよほど考えてのことである
ことが伺えたからだ。

「何故です？」

聞いたのはシモンだった。なんとなくわかっているのは、カレンの
父親が不死鬼として亡くなったことと関係あるだろうということだ。

「私は非戦闘員としていくではありません。女のすることですか
ら武術とは言い難いかもかもしれませんが、これでも弓術には多少の心
得はあります。元帥閣下にはお話したことがあります、乗馬も得
意です」

「相手は不死鬼です。生半な武術など通用しません」

「護国騎士団の方々であっても、全員がシモンさんのような武術の
達人というわけではないではありませんか？それでも勝てるよう
にエッシャー先生は戦術を練っておられるはずですよ」

「それはそうですが・・・とにかく理由をおっしゃってください。
理由がわからなければそんなことは許可できません。あなたは事務
官として従軍しています。戦闘行為は本来の任務ではありません」

珍しくヤンは困惑していた。カレンとの付き合いは長い。だが知り合ってから五年の間にここまで頑固な様子のカレンを見たことはなかった。

「すでにサスキアさんとマルガレータさんは戦闘に巻き込まれています。ザーンにいても戦闘に無関係で入れるとは限りません」

「理由になってないぞ」

言葉を遮ったのは兄であるジェラルドだった。

「言いたいことははっきり言ったほうがいい。本音を隠すのはお前には似合わない」

ジェラルドにはカレンの考えがすでに分かっていた。カレンはヤンとシモンのことを考えているのだ。それぞれに、エド・フレイレとヨハネス・ファン・ビューレンという親しい人物が敵の中枢にある。ヨハネスは確実に不死騎隊を率いて護国騎士団に当たってくる。何ができるというわけでもないだろうが、放っておけない気持ちになったのだ。

「お兄様は先日のザーンの攻防戦の時に、お父様の敵討ちを口にしたと聞いてますわ」

「お前もそうだというのか？」

違うことなどわかっている。だが、妹の意外な頑固さについてはジェラルドはわかっていた。

「護国騎士団の戦いは総力戦だ。戦場には安全な場所など一切ないぞ」

「覚悟はできてます・・・それに・・・」

カレンはシモンを見た。正面から顔を見上げるようにして言う。

「守ってくださいますよね？」

ジェラルドはすべてを理解した。カレンの目的はシモンにヨハネスを殺させないことなのだ。自分を守るといふ義務感を与えることで、ヨハネスを倒すという考えに固執することを抑えようと考えているのだ。

「シモン隊長！申し訳ない、手間のかかる娘だがあなたにお願いしてもいいだろうか？」

「ジェラルド？」

ヤンは驚いた。すでにジェラルドはカレンが護国騎士団に同行することを認めている。

「こいつのわがままはちょっとやそつとではやめない。時間を使うだけ無駄だ。私としてはシモン隊長が守ってくれるというのであれば、それ以上の安全はないと思う。それでなにかあるならしかたない……」

「仕方ないで済まされる問題では……」

「いや、自分から言い出したことだ。命を掛けるというならそれも本人次第。それがファン・ハルス家の家訓でね」

シモンが一步進み出た。

「ファン・ハルス伯、承知いたしました。妹君をお預かりいたします。必ず無事のお返しいたしますのでご安心ください」

「お願いします」

シモンは別のことを考えていた。カレンは父親のことを考えているのだらうと。父親同様不死鬼となった者達の行く末を知りたいと考えてのことだと思っただ。当たらずとも遠からずなのだが、ことの真相に辿りつけていないのは、本来音が純朴な武人であるが故であるう。

「では、私も護国騎士団の方へ参りたいと存じます」

「レベツカさん？」

「シモン隊長がいついていっていると云っても、軍の指揮を取るために陣頭に立たねばならないはず。カレン様のそばには常に私がいるようにいたします」

レベツカの提案も皆を驚かせた。ただし、ピーターとロビーだけは意外そうな顔をしなかった。

「まあ、彼女であれば別に不死鬼とまともに戦おうと言っわけではないでしょうし、身を守ることぐらいはできますよ。逃げ足の速さは保安兵団でもトップクラス。なにせ私の助手ですから」

ピーターはむしろ勧める側に回ることにした。実際、カレンの護衛役としては最も適任であった。

こうして、二名の女性が、ヤンとシモンの指揮する対不死騎兵部隊に同行することになったのである。

幼馴染（前書き）

また、ずいぶんと間を開けてしまいました。
複数の連載を抱えている状態で再開ですので、
しよっちゅう更新できるわけではありませんが、
できるだけ間を開けないようにしたいと思いますので、
よろしくお願い致します。

幼馴染

ルワーズ騎士団及び対不死鬼軍兵団による一万七千の軍勢は三つのグループにわかれて、城塞都市ノールトを包囲した。

一つ目がディック・ファン・ブルームバーゲン護国騎士団第三部隊副隊長が指揮するルワーズ騎士団のうち傭兵を中心とした精鋭部隊、三千でノールトの北西に陣した。

二つ目が臨時に対不死鬼軍兵団長の称号を帯びたジェラルド・ファン・ハルスが指揮する対不死鬼軍兵団、六千で街の南西に布陣する。最後が本隊で公国元帥ウィレム・ファン・バステンの指揮するルワーズ騎士団主力七千で、フリップ王国への商道を塞ぐ形で東の方向に布陣した。

それぞれ千人単位の部隊を周囲に散会させ、隙間なくとは言えないまでも、十分封鎖しているといえる程度に、兵員が配置されていた。

「よしっ……予定の時刻だっ！投石機を前へっ！」

ウィレムの掛け声によつて、部隊の前面に押し出されてきたのは攻城用の巨大な投石機であった。今回のルワーズ騎士団招集と前後して、ウィレムの発案により大量生産されていたものだ。ただし、打ち出されるのは石ではない。

「発射準備っ！」

投石機には石の代わりに巨大な革袋が装填される。中には干し草

のようなものが入っており、さらに袋の口から火のついた松明が中に突っ込まれた。

「発射っ！」

強力なバネを利用した仕掛けが一気に動き出す。投石機から放たれた袋は空中で燃え上がり、城壁を乗り越えて、ノールト市街に着弾した。着弾する直前、袋は敗れ、中身が周囲にぶちまけられる。

失踪前のマウリッツ・スタンジエが考案した対吸血鬼攻城戦専用の兵器『臭気弾』である。臭気結界の材料を油を塗った革袋に大量に詰め込み、火種と共に投石機で城内に投げ入れる。指揮官である不死鬼達は、対臭気結界用のマスクを着用していることが予想されるが、一般の理性のない吸血鬼たちはそんなものをつけていられないはずがない。三つの部隊が同時にこれを行ったため、ノールト市街には臭気結界の数倍の濃度で煙が立ち込めた。

この兵器の効果は臭気だけではない。煙が視界を奪う。不死鬼や吸血鬼は優れた視覚や嗅覚、聴覚を備えているが、そのうち二つを封じることができる。

あとは聴覚だけであるが、戦場においては、様々な騒音が鳴り続ける。

そもそもが吸血鬼は戦争に向いていないのだ。

この作戦は、吸血鬼たちの動きを封じると同時に、城内を混乱させ、ロビー・マルダーとピーター・レインによる人質救出作戦に協力する目的もあった。ウィレムは臭気弾をケチるつもりは一切ない。野戦ではほとんど使い物にならない兵器なのだ。一定の間隔をおい

て絶やすことなく、三方向から打ち込まれた。ディックもジェラルドも市内をくまなく臭気が覆うよう、計算ずくで投石機の射角調整していた。

「父上っ！吸血鬼は全て倉庫で寝かせました。煙が侵入しないよう目張りしております」

マスクを着けているため、イエケリーヌの声はくぐもって聞き取りづらかった。

「うむ。我々は耐えていればいい。ヨハネスの不死騎兵が反転してくれば、寄せ集めの急造騎士団などすぐに崩れたっわっ！」

「はっ！」

「マスクを装着した操死鬼隊は？」

「指揮官の不死鬼と共に城壁の各所に配備しております」

「よし、今の臭気攻撃に関しては放置していてもかまわぬ。城壁や城門を攻撃してきたときには防戦が必要だ。操死鬼に弓を打たせて時間を稼ぎ、吸血鬼を起こして敵陣を強襲すれば、多少は抑えられよう。こちらは時間さえ稼げればそれでいい」

フーゴーにしてはずいぶんと消極的な作戦ではある。この作戦自体は彼のものではなく、エドの考案したものであった。戦術面に関してはフーゴーもエド・フレイレの力を高く評価していた。自身が行ってやられたヤン・ファン・バステンに対抗しうる軍師がいる以上、吸血兵と不死騎兵を要する彼らに負ける可能性などないと思われるのだ。

だが、そのエド・フレイレは数日前から姿が見えない。元々、神

出鬼没の男ではあるが、ヨハネスに付いて行った様子もなく、何処にいるのかはわからなかった。それが多少は不安とは言えなくもない。

「ファン・ドースブルフ卿・・・大丈夫なのか？」

不安そうにビクビクしながら問いかけたのは、彼の主君に当たる人物であった。

「アルベルト殿下・・・何も心配ありません。ファン・ビューレン將軍がルワーズ騎士団の背後を強襲します。奇襲を受ければ、そのような急造部隊、簡単に崩れ立ちましよう」
「そうか・・・うむ。安心したぞ・・・」

とても安心したようには見えない様子であった。アルベルトは肥大した自尊心と被害者意識を持ち、なにより小心な人物であった。

「始まったようだな・・・」
「旦那・・・そろそろ行くぜ・・・」

時刻はまだ昼間である。だが、吸血鬼相手の潜入工作となれば、昼間の方が有利なのは当たり前であった。さらに、今はルワーズ騎士団による臭気弾攻撃により、吸血鬼は眠らされ、煙幕の役割も果たしている。

隠れ家に使っていた倉庫にいた二人は、予め検討した計画の通り行動を開始する。すでに何度もサスキア達の軟禁されている教会

には侵入を果たしていた。亡霊ロビーならではの芸当であったろう。

呆れたピーター・レインは言ったものである。

「お前さんの手口がわかれば、今後の仕事に役立つかと思ったが、他の誰にもできそうもないから役に立たんな・・・」

「そりゃあ、そうだろうな。俺だけを追っていたあんたは、他の奴らを捕まえられなくなってるんじゃないか？」

「ふんっ！ 貴様の模倣犯はいくらでもいるが、手口がずさんだからすぐに区別がつく。そっちの方はちよろいもんだ」

二人は街中に張り巡らされた地下水路を利用して移動している。

これは、ロビーがアメルダム護国騎士団本部を脱出した際、地方行政局の書庫に忍び込んで盗んだノールトに関する資料から知り得たものである。ノールトは小さな地方都市であるが、意外と歴史は長く、驚くほど古い時代に上下水道の設備を整えていた。このような情報はエド・フレイレと言えど持ち得てはいないだろうと思われる。

「ゴホッ・・・ゴホッ・・・さ、サスキア・・・これなんだろう・・・」

「ゴホッ・・・多分、攻城戦が始まったんだと思う・・・煙も匂いもずつと濃いけど、これって臭気結界と同じ匂いよね・・・」

サスキアとマルグレータは相変わらず、州府庁舎近くの小さな教会に軟禁されていた。吸血鬼を寝かせている倉庫などの建物と違い、

この教会には目張りがされていないため、室内まで濃い煙が立ち込めてきたのである。

「これって、私たちにとってはいいことなのかな？ 私たちって一応人質よね・・・」

少し煙に慣れたのか、どうにか咳が落ち着いてきたマルガレータは不安そうにサスキアに訊いた。

「うーん、戦闘が始まったからって、私たちを殺したりする理由はないわ・・・そこはエドを信用していいと思う・・・」

「でも、戦闘が本格化したら吸血鬼たちがこのあたりでも暴れるかも・・・」

「それはないとは言えないけど・・・この臭気だつてずっと続くわけじゃないだろうし・・・」

「ああ・・・短い人生だったな・・・最後に大きい仕事のできたのはいいけど・・・ピーテルに・・・会いたい・・・」

マルガレータの言葉の前半はため息混じりであったが、後半は涙声になっていた。

「マルガレータ・・・大丈夫。ヤンが何も考えていないはずはないわ・・・」

「そのとおりさ・・・」
「えっ!?!?」

いつの間にか、二人の前にはエド・フレイレが立っていた。ここ数日は牛骨粉料理の試食会にも参加していなかった男が静かに佇んでいた。

「君たち二人を迎えにこの街に潜入してきた者がいる。人質の救出作戦を行っているのだろう。攻城戦の混乱に乗じて、君等を救出するつもりだ……」

「では……場所を移すのですか？それとも……」

サスキアの声は冷たかった。『エドを信用してもいい』と言っていた割にはサスキアの視線と声は冷たい。サスキアは嘘を言っていないわけではない。エドが無用に自分たちを傷つけることなど、ありえないと思っている。だが、彼に対する感情は単純ならざるもので、サスキアにも整理が付かず、そのためにこのような反応となってしまう。

だが、エド自身はサスキアの様子など気に留めていない。

「二人に対する我々の用はすでに済んでいる。ここには普通の人間の食料も十分にはないから、彼らと一緒にお帰りいただく」

マルガレータはわけがわからないとサスキアに視線を向けたが、サスキアは驚かなかった。牛骨粉の製法などはともかくとして、エドには特に自分たちを人質として利用するつもりはなかったのだ。サスキアは知らないが、実際に人質として利用しようなどと考えていたのはイエケリー又ぐらいのもので、根が古い武人の体質であるフーゴーなどはそんな作戦は絶対裁可しないし、ヨハネスもそのような作戦は好まない。

そもそもが彼らの目的は吸血鬼や不死鬼の軍隊のデモンストレーションであって、人質を盾にして戦闘に勝ったところで目的は達成できないのである。

「ついてきてくれ。侵入者のところまで案内する」

「そうですね・・・」

「おかげで牛血粉の生産は可能になったし、君が作るものには及ぶべくもないが、この先は多少は人間らしい料理を口にできる。感謝する」

「いえ、私たちは医師と看護師。その役割を果たしただけです」
「そうか・・・」

一瞬、エドの顔に浮かんだ表情は、友達に裏切られて傷付いた幼い子供の泣き顔のようであった。だが、サスキアはその泣き顔をあえて無視した。彼の案内に従い二人は教会の敷地内から地下水道へとつながる入り口を降りていった。

ロビーは地下水路に自分とピーター以外の何者かの気配に気づいた。ほとんど遅れることなくピーターも気づく。二人は無言で同時に身構えた。地下水路には逃げ道など存在しない。操死鬼ならともかく、吸血鬼や不死鬼が相手では戦って勝てるとは限らないが、今から引き返すことなどできなかつた。

「そう構える必要はない。君たちの目的の人物を連れてきた。安心して連れ帰ってくれ」

自分には不要なはずのランタンをかざしてエドが現れた。

「・・・あなたは？」

「不死鬼軍軍師エド・フレイレ・・・」

ロビーとピーターはエドと名乗った男の後ろにサスキアとマルガレータがいることも確認した。だが、罠である可能性は否定出来ない

い。二人共臨戦態勢は崩さなかった。

「エツシャー先生が言っていたな。エド・フレイレは人質を救出する者が現れるのを待っているよ……」

「ああ、そのとおりだ。奴は昔から気が合う……」

「冗談とも取れない口調だった。」

「二人共大切に預っていた。私としては幼馴染とも旧交を暖めることができたし、不死鬼たちは徐々に人間らしい料理を口にできて感謝している。今は北門のあたりは戦闘もないし、警備も手薄だ。君たちなら容易に脱出できるだろう……」

エドに促され、サスキアとマルガレータはロビーとピーターの元に歩み寄った。

「ろ、ロビーさん……」

「ああ、エツシャー先生に頼んで出しゃばらせてもらった。あの、ちんちくりんの坊主も足は引きずることになったが、命には別状はないそうだ」

マルガレータの顔がぱつと明るくなった。マルガレータが一番知りたいであろうことをすぐに教えてやったのだ。

「そうか……君がロビー・マルダー、通称亡霊ロビーか……」

「そうさ。吸血鬼のなりそこねのこそ泥さ……」

「私には君のようになることはできそうもない。だが、吸血鬼が人間らしく生きれるというのなら、君がそうなることを私も祈ろう……」

「あんだだって、望めば今からでもそうなれるんじゃないか？」

ロビーは油断なく身構えたままそう言った。眼前の不死鬼にはそれほど危険性は感じられない。ヤン同様、武人としての芯の強さと高い知性は感じられるが、どこか儂げな印象を受けていた。

「ああ、私がそう望んでいないだけだ」

「……………」

五人のいる空間に沈黙が流れた。

程なくして声を発したのはまたエドだった。

「サスキア、君の料理はうまかった。ヤンにあつたらよろしく伝えてくれ」

奇妙な話であつた。戦っている当の本人によく伝えてくれというのであるから。だが、サスキアには理解できていた。大人になつても不本意にも不死鬼として生きていても、エド・フレイレは殆ど変わっていないのだ。ヤンとサスキアの幼馴染のエドは、ヤンとは違った意味で不器用な少年だった。

「エド……………一つだけ言っておきたいことがあるの……………」

「何だい？」

思いつめたサスキアの声に、なぜか全員が緊張していた。皆知っている。サスキアの言葉は時として公国の重臣のみならず国公自身をも看過することがあるのだ。目の前にいる幼馴染であるエドという男にも、何らか変化をもたらすことがあるかもしれない。

「あなたは……………あなたはヤンに勝てない」

大きな声ではない。だが、強い意志はこもっていた。戦争をやめるとか、昔のように戻りたいということではなく、厳しい言葉突きつけたのは彼女でなければ意外なことであつたらう。

「ああ、君がそう信じていることは知っている」

「信じているのではなく、知っているわ。あなたは決してヤンに勝てない」

「それもわかっている。俺には誰もいないが、ヤンには君がついているからな」

「私だけではないわ。ヤンにはウィレム様も、シルヴィア様も、マウリッツ様も、護国騎士団の皆さんや公国中央医局のみなさん、他にもいるんな方々がついている。ヤンの言葉に耳を傾け、ヤンと共に戦おうという人たちが・・・」

「ああ、私の不死鬼軍とは違う。だが、私はヤンと戦う。戦うからには勝つ。誰が奴に味方しようと、私は勝つつもりだ」

エドの言葉には多少は自重の陰りが見られた。だが、サスキアの言葉と同様、強い意志がこめられており、サスキアの言葉で翻意することなどありえそうもなかった。他の者の予想とは違い、サスキア自身も自分の言葉でエドを説得しようとしていたわけではなかった。

「サスキア・・・悪いが君は私の看護婦ではないし、ヤンも私にとつて医師ではない。君たちがそう思うのは勝手だが」

「憎い仇敵だとも言うの？」

エドはサスキアの言葉には答えなかった。代わりに、淋しげな笑顔を浮かべてから、背中を向けて元きた道を歩き始めた。これが、幼馴染との別れの儀式であつた。

幼馴染（後書き）

ノールトでの攻防戦はこれからが本番です。

次回辺りには久々に本格的な戦闘シーンも出てきます。

並行連載中の、「ヴェスタラ戦記」「Kらぼ」「ルワーズ公国異才伝」「不死騎外伝」「琴似物語」もよろしくお願い致します。

感想、ご評価をよろしくお願いいたします。

無情の三日月

ヤンとシモンが統率する護国騎士団は奇妙な陣形で行軍していた。

陣形の全体的な形は三日月型で、決して行軍に向いているような形ではない。三日月型の一端の先頭にヤンが、もう一旦にはシモンが立ち、それぞれ半数ずつを統率している。カレンとレベッタはシモンが統率する側の、先頭からやや後方の軍中にあつた。五名の騎士が二人の護衛についているが、いずれも戦闘能力よりも乗馬に優れた騎士たちで、いざという時に二人を連れて戦線を離れるための護衛である。と言っても、相手は不死鬼の馬であるから、どんな駿馬に乗っていようと追跡されれば逃亡が成功する可能性は低い。

さらに奇妙なことは、兵士の配置が極めて疎であることだ。二千の人数に対して、三日月の大きさは極めて広く、隙間が多かつた。さらに、三騎ずつが一塊に集まっており、馬には二人ずつがまたがっていた。それぞれに騎手と、三騎中一騎には連発式の機械弓を持った射手が、それ以外の二騎には、ボーラと呼ばれる狩猟用の道具を持った者が乗っている。ボーラは金属製で両端に分銅の付いた鋼製の鎖である。これを振り回して遠心力を使い、獲物の足に向かって投げ、絡ませて転倒させることで獲物をとらえるのであつた。

この作戦は、公国中央医局の伝染性吸血病対策室の内、生物学者を中心とするチームの研究成果が生かされていた。不死鬼の馬はこのチームの担当者によって創りだされたものである。カリス・クリステルの指示により、自ら生み出した悪しき研究成果への対応方法への研究を言い渡された彼らは、不死鬼馬の持つ決定的な弱点を見出したのである。

護国騎士団の役割は不死騎兵隊が攻城作戦中のルワーズ騎士団を背後から襲いかかる前に発見し、それを迎撃することにある。必ずしも敵を殲滅する必要はない。ルワーズ騎士団への被害を抑え、『大勝利させないこと』が作戦の目的であった。派手に勝利する必要は今回はないのである。

不死騎兵隊が攻城軍の三つの分隊のうち、どれを狙うのかは明白である。公国元帥自ら統率する本隊七千さえ叩けば、ノールトを守りきれぬのだ。そして、千騎身未満の不死騎兵隊が七千の軍隊を撃退したとなれば、大きな戦果であり、新たなスポンサーを得るためのデモンストレーションとしても十分なものとなる。

だから、ヤンはウイレムが布陣した地点の後方数十キロの地点に布陣し、いつでも全力で騎馬隊が書けられるよう、低速で移動しながら、不死騎兵隊が現れるのを待っているのである。

「北北東の方向で合図！」

斥候の一人と思われる騎士が頭上に高々と火矢を打ち上げたのを見た伝令将校が大声で告げた。この日は晴天とまでは行かなくても、薄く雲に覆われた程度で視界は良好。ジェラルドの第二部隊がヨハネスに強襲を受けたときに比べれば遥かに条件は良かった。

「北北東に向い方向転換せよ！」

「北北東に向い方向転換っ！」

ヤンの叫び声を聞いた小隊長クラスの上官達が大声で復唱する。この方向転換は陣形を維持して旋回するのではなく、ヤンとシモンだけが走り、止まった地点を三日月の端点にするように、その場で陣形が変化して方向転換をなした。

「いよいよだっ！ 厳しい訓練の成果を見せよっ！」

「オーっ！」

ヤンの声に全軍が答える。が、傍から見ている者がいれば奇妙に思ったことであろう。陣形は先程の三日月の方向を変えただけのものだが、よく見れば個別の騎馬の向いている方向は、砂塵が上がった北北東ではなく、南南西。敵に尻を見せる形になっていた。ただし、馬の後輪に乗っている射手やボーラの使い手は、騎手と背中合わせに、馬の後方に向かって跨っていた。そのまま、敵とは逆の方向にゆっくりと進む。

「私が数えるのにあわせて、徐々に行軍速度を上げよっ！ 練習のとおりだっ！ 焦る必要はないっ！」

ヤンは北北東に見えた砂塵との距離を図りながら、大声で数え上げる。

「一ッ！」

馬の歩法が並足からだく足で変わる。

「二ッ！」

今度はだくあしから駆け足に変わった。

「三っ！」

全速力となった。まだ、砂塵との距離は半キロメートルほどあるが、全速力になってからも、彼我の距離はどんどん縮み続ける。

不死騎兵隊は矢じり陣形で高速移動をしていた。不死鬼の移動速度は護国騎士団の駿馬の比ではない。それでも、最大の速力ではなかった。不死鬼の馬を全速力で走らせては、人間以上に長続きしない。抑え気味に走らせても、十分速いから、騎手たちは馬が本気では知らないよう、必死に制御していた。

先頭にいるのはバールフ・グローティウスである。長大な槍をしごき、兜こそ被っていないが体は重厚なプレートアーマーをまとっていた。

「敵の布陣は密度が薄いつ！密集陣形のまま中央突破つ！一気に切り裂くつ！」

不死騎兵隊の士気は極めて高かった。その理由にはサスキアとマルガレータが関係している。

牛骨粉料理の製造体制はまだ完成していない。牛骨粉自体は備蓄できるほどの製造体制が出来上がっているが、料理については、未だ数十名程度分しか一回に提供出来ていない。そのことをバールフが逆利用することにしたのである。

不死騎達にとっては、金銭の恩賞などは意味を成さない。金銭によつては何も得られないのが彼らの境遇である。生殖能力を失った彼

らには性欲も感じることはない。だが、食欲については、牛血粉料理によって満たすことができるようになったのである。

バルーフは手柄を立てたものが優先的に、調理された牛骨粉にありつけるようにするルールを設けたのだ。それが当たらなければ、水やワインに牛骨粉を溶かし込んだり、煮込んだだけのものにはかありつけない。人血のみをすすするよりはマシだが、すでにほとんどの不死騎はサスキアの牛骨粉料理を食べたことがある。彼らが唯一満たすことのできる生理的欲求が士気を向上させた主な要因であった。

バルーフを先頭に不死騎兵隊が護国騎士団の移動する三日月型陣に突入していく。このあたりはかなり広大な平野で、遮蔽物は殆ど無い。不死騎兵隊の速力は騎馬の常識を超えたものではあるが、護国騎士団の騎馬隊は自らも移動している。相対的な位置関係の変化で言えば、どうにか戦術理論の常識の範囲内の速度となった。

不死騎兵隊は小細工なしに三日月の中心を貫くべく直進してくる。月の両端を結ぶ直線を超えた瞬間、護国騎士団の攻撃が一斉に始まった。

ビュンッ

豪雨のような風切音とともに無数のポォラが不死騎兵の軍勢に向かって放たれた。護国騎士団のポォラは通常のものより長めだが、ザーンでの訓練により、かなりの距離をある程度性格に投げることができるようになっていた。三日月型陣形の全体から放たれたポォラは様々な角度から、騎兵を強襲する。

上空から落ちてきたボーラは、馬の首や不死騎の胴体や、腕、武器に絡みついた。一人の不死騎の胴体に絡みついたただけであれば、その異常筋力により鎖ごと引きちぎることができたが、騎馬隊は密集陣形をとっていた。一端は馬の首に、もう一端が別の馬に乗る不死騎の腕などに絡んだり、時にはボーラ同士が絡みついて、やはり、両端で別々の騎馬に絡みついたりする。

不死騎兵の正面に位置する者は低い段度で、騎馬の足元に向かってボーラを放っていた。多くは馬の前足に絡みつく。

不死騎兵隊は大混乱に陥った。理性を残しながら異常な筋力を維持する不死騎、はやり異常発達した筋力を誇り、視覚や聴覚を奪われることで、機会のごとく旗手の指示に従う不死騎馬。それが互いにその異常な筋力をもって足を引つ張り合う形となったのである。

二つの前足にボーラが絡まった不死騎馬はいとも簡単に両足が折れた。不意に武器や腕に絡みつかれその逆端が隣の不死騎馬の首に絡まってしまった不死鬼はバランスを崩して落馬する。

問題はその後であった。

不死騎馬の走力は通常の馬とは比較とならない。旗手の指示に的確に従うことができるが、逆に言えば、旗手が的確に操ることをできなければ、これほど危険な乗り物はなかった。不死鬼の身体能力は常人では及ぶべくもないものだが、反射神経や判断力はまちまちである。ほとんどの不死鬼は元々兵士などではなく、十分な乗馬の訓練など受けてはいないし、そもそも不死騎馬を駆ったことがあるものなどいないのだ。

突然、前方の騎馬が転倒したを見て、後続の不死鬼はそれに反応することができなかつた。高速で移動する不死騎馬がそのままの勢いで、転倒したり旗手を失って身動きが取れなくなつた不死騎馬に突っ込む。わずか一瞬のことで、不死騎兵隊はその三分の一が落馬し、負傷した。

さらにそこに機械弓の乱射が襲う。連発式の機械弓はマウリッツ・スタンジエの考案によるものだが、同時に三発の弓を一瞬の間を置いて、連続十回まで放つことができる。一度、撃ちきつたあとには、再装填に三十秒程度必要となるが、これ一台で普通の弓手数数十人分の働きができる。もちろん、矢は対吸血鬼用の瀉血矢や対吸血鬼鎗矢である。

ボーラの襲撃の直後に大量に注がれた瀉血矢により、主に不死騎馬の体から大量の血液が放出された。不死鬼自身は鎧をまとつており、よほど当たり所の悪かつた者以外は直接ダメージを受けていない。だが、精神的なダメージは著しかった。自分たちは不死鬼の血液を得ることで、無敵の超人になつた思い込んでいたのである。だが、実際にはただの人間の軍隊に言いように手玉に取られたのだ。

半数ほどが、この惨事巻き込まれたところで、後続部隊はどうにか絶望的な突撃を押しとどめることができた。

一方で、先頭にいた不死騎ではただ一人、バールーフ・グローティウスだけは無事であつた。彼は不死騎馬の扱いに熟達し、ボーラが飛んできた瞬間、馬体ごとそれらをかまし、長大な槍を頭上で回転させて、瀉血矢の雨も防ぎきつて見せた。

だが、先頭に近い位置にいた者で、無事だつたのは彼だけであつた。気付けば護国騎士団の騎馬はそのままノールトの方向に向かつて走

り去っていた。不死騎馬の走力を持つてすれば、追いつくことは可能であるが、その前に、混乱を収拾し、部隊を再編しないことは身動きが取れなかった。

ヤン・エツシャーの見事な戦術にしてやられたのである。

【お知らせ】「不死騎」をお読みいただいていた皆様へ

作者の槇原です。

本来、小説の本文として書くことはよくない事だと思っ
ているので、

このお話をお気に入りに登録いただいている方々には他に
ご連絡する方法がないため、
こちらにてご報告させていただきます。

半年以上の長い間、執筆が滞っていたこの作品、「不死騎」
について、

このほど、一から書き直しをすることにいたしました。

このサイトで小説を書き始めて、節操なく未完の連載ばかり
増やしていった私ですが、

この「不死騎」ほど気に入っているお話は他にありません。

他の連載すべてをやめてもこのお話だけは続けたいと考
えていたのですが、

後半から急激に執筆が進まなくなり、お話のノリもいま
いちという感じになっておりました。

このお話は私の中ではもっともお気に入り
のキャラクターが多く、
彼ら彼女らが作者の意図を超えて暴れまわるとい
う現象を始めて経験した作品でもあり
ます。

しかしながら、作者の力不足、特にその無
計画さから、
せっかく用意していた伏線があつとい
う間に使い果たし、

主要キャラクターが地域的に二分してしまつたために、ノリのよい会話や色恋沙汰といった要素がなくなつておりました。

そこで、舞台設定と基本的な趣旨はそのままに、プロットから書き直すということにいたしました。

こちらのほうは未完終了ということになりますが、すでに、書直し版「不死騎」戦医ヤン・エツシャー」として、新規連載を始めておりますので、よろしければそちらの方を続けてご愛読いただければ幸いです。

<http://ncode.syosetu.com/n9285v/>

舞台設定やほとんどのキャラクターは共通のものですが、話の展開や一部伝染性吸血病などの設定については変更がございません。

構想では少なくとも途中までは全体としては似たような経過をたどる予定でしたが、すでに、主要キャラクターたちが私の手を離れて暴れてくれますので、

どうなるかは今後のお楽しみです。

なお、関連作品「ルワーズ公国異才伝」不死騎外伝」(<http://ncode.syosetu.com/n62131/>)につきましては、

新連載にとつても外伝として、設定に矛盾のないようにしたいと考えております。

また、外伝の方も時々更新する予定です。(すでに続編のお話は書きかけております)

同時連載が多すぎて、作品ごとの執筆ペースが落ちたことも、反省しております。

他の作品は連載終了にするつもりはありませんが、寝かせることになりました。

ただし、「ヴェスタラ戦記」(<http://ncode.syosetu.com/n5636n/>)につきましては、

連載ペースは遅いですが続けていく予定です。

このような形になってしまい誠にもうしわけありません。今後とも、よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0774k/>

不死騎

2011年8月24日12時05分発行